姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第10集

和久遺跡

第9次発掘調査報告書

ツカザキ病院新館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１２

姫路市教育委員会

遺跡遠景（北東から）

遺跡遠景（南西から）

巻頭図版2　調査区近景

調査区近景（北東から）

調査区近景（南西から）

調査区全景（北西から）

調査区空中写真（上が北）

SH9　イチマル土坑（北西から）

SH5　イチマル土坑（北東から）

巻頭図版6　SR1出土

SR1出土地元産と思われる庄内式甕

SR1出土外来系土器

序

兵庫県姫路市の南西部に位置する和久遺跡では、平成12年から13年にかけて行った発掘調査で弥生時代の後半から古墳時代の初めにかけての100棟あまりの竪穴住居が見つかりました。その後も継続して調査を行なっており、今では姫路市を代表する遺跡の一つとなっています。

本書は、その和久遺跡で平成23年7月から12月にかけて実施した発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査では、20棟ほどの竪穴住居やムラのわきを流れていた川跡などが見つかり、多数の土器も出土しました。これらは、地域の歴史をより豊かなものにするとともに、学問的にも大変意義のあるものであると考えています。

最後になりましたが、今回の発掘調査事業の実施にあたり多大なご協力を賜りました特定医療法人三栄会ツカザキ病院、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

平成25年 3月

姫路市教育委員会

教育長　中杉　隆夫

例言

1．本書は、姫路市網干区和久に所在する和久遺跡（県遺跡番号020338）第９次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、ツカザキ病院（姫路市網干区和久70-３、71-４、35-２、36-２）の新館建設に伴い、同院と協定を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優・黒田祐介が担当した。
3．発掘調査と報告書作成の費用は、特定医療法人三栄会ツカザキ病院の負担による。
4．発掘調査は、平成23年 ７月12日から同年12月24日にかけて実施した。調査面積は、1347㎡である。
5．本書の執筆は、第１・２・５章を福井が、第３章を福井・黒田が、第４章第１節を立命館大学青木哲也が、同章第２節を兵庫県立考古博物館（当時）岡本一秀が、同章第３節を兵庫県立大学防災教育センター森永速男・環境人間学部構井未来・大学院環境人間学研究科井口博夫がそれぞれ行い、編集は福井が行った。
6．出土した土器の接合・復元は、覚野郁子・香山玲子・清水聖子・田中章子・玉越綾子・寺本祐子・藤村由紀・三輪悠代が、土器の実測は、黒岩紀子・香山・田中・玉越・寺本・三輪・福井が、石器の実測は黒田が行った。９次調査出土遺物、および遺構図のトレースは香山・田中・玉越・寺本・野村知子・三輪が行い、１次調査の全体図については株式会社地域文化財研究所に委託した。
7．遺構写真は福井・黒田が、遺物写真は福井が撮影した。
8．本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは、すべて当センターで保管している。
9．発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助・ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

（敬称略）

特定医療法人三栄会ツカザキ病院　　栄進工業株式会社　　安西工業株式会社　　篠宮正　　米田克彦

凡例

1．発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅴ系を基準とし、数値はｍ単位で表示している。
2．本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3．本書で使用した地形図は、国土地理院発行の20万分の１地勢図（姫路市）、２万５千分の１地形図（網干）、および姫路市基本地形図を使用した。
4．遺構の略称は、以下のように呼称している。
SH：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SK：土坑、ST：墓、SP：柱穴、SD：溝、SR：旧河道
5．遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
6．土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003年『新版　標準土色帳　25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7．土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめている。ただし、直線文などのように、文様の延長がある程度予想できるものについては、復元して図化しているものもある。また、拓本を用いた破片の実測図は、右から外面の拓本、断面図の順に配列している。
8．遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。観察表の表記基準は、以下のとおりである。
①法量は、残存率が１/４未満の部位に関しては、（　）を付けて復元した数値を示している。
②色調を併記している場合は、外面、内面の順で表示した。
9．遺物番号は基本的に通し番号とする。ただし、石器には頭にＳを、金属器及び関連遺物にはＭを付している。
10．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

本文目次

序
例言
凡例

第１章　調査の経緯 …… **1**
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　確認調査 …… 1
第３節　本発掘調査（第９次調査）…… 2
第４節　整理作業 …… 2

第２章　遺跡の概要 …… **3**
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3
第３節　既往の調査 …… 4

第３章　調査の成果 …… **8**
第１節　調査概要 …… 8
第２節　遺構 …… 8

第４章　自然科学的分析 …… **33**
第１節　和久遺跡の地形環境 …… 33
第２節　和久遺跡ＳＲ１出土坩堝の成分分析 …… 40
第３節　和久遺跡における被熱遺構探査と考古地磁気年代 … 42

第５章　まとめ …… **50**
第１節　古墳時代初頭の土器 …… 50
第２節　集落の変遷 …… 50
第３節　おわりに …… 55

引用参考文献
土器観察表

巻頭図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景（北東から）
　　遺跡遠景（南西から）
巻頭図版２　調査区近景（北東から）
　　調査区近景（南西から）
巻頭図版３　調査区全景（北西から）
巻頭図版４　調査区空中写真（上が北）
巻頭図版５　SH９イチマル土坑（北西から）
　　SH５イチマル土坑（北東から）
巻頭図版６　SR１出土　地元産と思われる庄内式甕
　　SR１出土　外来系土器

挿図目次

挿図 1　確認調査位置図（S＝1：1,000）…… 1
挿図 2　本調査位置図（S＝1：1,000）…… 2
挿図 3　調査区基本土層図（S＝1：40）…… 8
挿図 4　調査区周辺の地形分類図（S＝1：35,000）…… 34
挿図 5　調査区付近における微地形の分布（S＝1：6,000）…… 35
挿図 6　調査区付近の堆積物（S＝1：10）…… 36
挿図 7　遺構検出面からのトレンチ断面図…… 38
挿図 8　No１分析箇所の写真と蛍光X線特性分析スペクトル…… 41
挿図 9　No２分析箇所の写真と蛍光X線特性分析スペクトル…… 41
挿図10　No３分析箇所の写真と蛍光X線特性分析スペクトル…… 41
挿図11　３種類の土壌で行われた加熱分析結果 …… 43
挿図12　和久遺跡で採取したすべての土壌の加熱前の帯磁率と残留磁化強度…… 44
挿図13　加熱実験結果-パターンA …… 45
挿図14　加熱実験結果-パターンB …… 46
挿図15　加熱実験結果-パターンC …… 46
挿図16　表面帯磁率を測定した範囲（南南東から）…… 47
挿図17　表面帯磁率分布…… 47
挿図18　SH２の土壌試料から求めた平均残留磁化方向 …… 48
挿図19　１・９次調査区全体図（S＝1：300）…… 51・52
挿図20　遺構の変遷…… 54

表目次

表 1　竪穴住居規模等一覧 …… 22
表 2　坩堝（M２）付着物の成分分析結果 … 40
表 3　磁気測定結果のまとめ …… 49
土器観察表　1 …… 60
土器観察表　2 …… 62
土器観察表　3 …… 64
土器観察表　4 …… 66
土器観察表　5 …… 68
土器観察表　6 …… 70
土器観察表　7 …… 72
土器観察表　8 …… 74
土器観察表　9 …… 76
土器観察表　10…… 78
土器観察表　11…… 80
土器観察表　12…… 82
土器観察表　13…… 84

図版目次

図版１　遺跡
和久遺跡の位置（S＝１：200,000）
図版２　遺跡
関連する周辺の遺跡（S＝１：25,000）
図版３　遺跡
和久遺跡における既往の調査
（S＝１：3,000）
図版４　遺構
調査区全体図（S＝１：250）
図版５　遺構
SH１　平・断面図(S＝１：50)
図版６　遺構
１　SH１-１平・断面図（S＝１：60）
２　SH１-１中央土坑平・断面図
（S＝１：30）
図版７　遺構
１　SH１-２平・断面図（S＝１：60）
２　SH１-２中央土坑平・断面図
（S＝１：30）
図版８　遺構
１　SH２平・断面図（S＝１：60）
２　SH２床面土器出土状況図
（S＝１：60）
図版９　遺構
１　SH３平・断面図（S＝１：60）
２　SH３-SK１断面図（S＝１：20）
図版10　遺構
１　SH４平・断面図（S＝１：60）
２　SH４-SK１断面図（１：20）
図版11　遺構
１　SH５平・断面図（S＝１：60）
２　SH５イチマル土坑平・断面図
（S＝１：30）
図版12　遺構
SH５イチマル土坑完掘状況図
（S＝１：30）
図版13　遺構
SH６平・断面図（S＝１：40）
図版14　遺構
１　SH６-１平・断面図（S＝１：60）
２　SH６-２平・断面図（S＝１：60）
炉断面図（S＝１：30）
図版15　遺構
１　SH６-３平・断面図（S＝1：60）
イチマル土坑　断面図（S＝1：20）
２　SH６-３下部構造平・断面図
（S＝1：60）
図版16　遺構
１　SH７平・断面図（S＝１：60）
２　SH８-１平・断面図（S＝１：60）
図版17　遺構
１　SH８-１炭・焼土検出状況図
（S＝１：60）
２　SH８-１炭化材・草本類検出状況図
（S＝１：60）
３　SH８-１炭化材検出状況図
（S＝１：60）
図版18　遺構
１　SH８-２平・断面図（S＝１：50）
２　SH８-２イチマル土坑平・断面図
（S＝１：30）
図版19　遺構
１　SH９平・断面図（S＝１：60）
２　SH９イチマル土坑平・断面図
（S＝１：30）
図版20　遺構
SH10・20平・断面図（S＝１：60）
図版21　遺構
SH20平・断面図（S＝１：60）
図版22　遺構
１　SH20床面断面図（S＝１：60）
２　SH20イチマル土坑平・断面図
（S＝１：40）

図版23　遺構
SH20ベッド状遺構構築以前平・断面図
（S＝1：60）
図版24　遺構
1　SH11平・断面図（S＝1：60）
2　SH12平・断面図（S＝1：60）
図版25　遺構
1　SH13平・断面図（S＝1：60）
2　SH13イチマル土坑　平・断面図
（S＝1：30）
図版26　遺構
1　SH14平・断面図（S＝1：60）
2　SH18平・断面図（S＝1：60）
図版27　遺構
SH12・13・15・16・17平・断面図
（S＝1：60）
図版28　遺構
1　SH19平面図（S＝1：60）
2　SB1平・断面図（S＝1：60）
図版29　遺構
1　SK6平・断面図（S＝1：20）
2　SK6土器出土状況図（S＝1：30）
図版30　遺構
1　ST1平・断面図（S＝1：20）
2　ST2平・断面図（S＝1：20）
図版31　遺構
1　ST3平・断面図（S＝1：20）
2　ST4平・断面図（S＝1：20）
図版32　遺構
1　ST5平・断面図（S＝1：20）
2　ST6平・断面図（S＝1：20）
図版33　遺構
1　SP25平・断面図（S＝1：20）
2　SP82平・断面図（S＝1：20）
3　SP97平・断面図（S＝1：20）
図版34　遺構
1　SD1遺物出土状況図（S＝1：20）
2　SD1断面図（S＝1：40）
図版35　遺構
SR1断面図（S＝1：50）
図版36　遺構
SR1土器出土状況図（S＝1：20）
図版37　遺構
SR1・SD1取り付き付近平面図
（S＝1：40）
図版38　遺物
1　SH1-1出土土器（1～18）
2　SH1-2出土土器（19～37）
図版39　遺物
SH2出土土器①（38～60）
図版40　遺物
1　SH2出土土器②（61～66）
2　SH3出土土器①（67～90）
図版41　遺物
1　SH3出土土器②（91～99）
2　SH5出土土器（100～114）
3　SH6-1出土土器①（115～122）
図版42　遺物
1　SH6-1出土土器②（123～150）
2　SH6-2出土土器（151～164）
図版43　遺物
1　SH8-1出土土器（165～174）
2　SH8-2出土土器（175～180）
3　SH9出土土器①（181～191）
図版44　遺物
1　SH9出土土器②（192～199）
2　SH10出土土器（200～203）
3　SH20出土土器（204～220）
図版45　遺物
1　SH20出土土器（221～226）
2　SH11出土土器（227～230）
3　SH12出土土器（231～233）
4　SH13出土土器（234～239）
5　SH14出土土器（240～242）
図版46　遺物
SK6出土土器①（243～251）

図版47　遺物
1　SK６出土土器②（252～255）
2　ピット出土土器（256～260）
3　ST１出土土器（261・262）
図版48　遺物
SD１出土土器①（263～290）
図版49　遺物
SD１出土土器②（291～320）
図版50　遺物
SD１出土土器③（321～351）
図版51　遺物
1　SD１出土土器④（352～366）
2　Ⅴ層出土土器（367～371）
図版52　遺物
SR１　２層出土土器（372～391）
図版53　遺物
SR１　３層出土土器①（392～408）
図版54　遺物
SR１　３層出土土器②（409～426）
図版55　遺物
SR１　３層出土土器③（427～444）
図版56　遺物
SR１　３層出土土器④（445～466）
図版57　遺物
SR１　３層出土土器⑤（467～486）
図版58　遺物
SR１　５層出土土器①（487～507）
図版59　遺物
SR１　５層出土土器②（508～523）
図版60　遺物
その他の遺物

写真図版目次

写真図版１　遺構
1　SH１-１全景（北から）
2　SH１-２全景（北から）
写真図版２　遺構
1　SH１-２燃焼施設（南から）
2　SH１-２埋土内粘土塊検出状況（北から）
3　SH１-２-SP３礎板出土状況（南東から）
4　SH１-２-SP４礎板出土状況（西から）
写真図版３　遺構
1　SH２全景（北から）
2　SH２中央焼土坑検出状況（北西から）
3　SH２床面土器（38～41・43）出土状況（南東から）
写真図版４　遺構
1　SH３全景（北から）
2　SH３床面被熱状況（北西から）
3　SH３-SP３土層断面
4　SH３-SK１土層断面
5　SH３-SK１土器（92～95・97）出土状況（南西から）
写真図版５　遺構
1　SH４全景（北から）
2　SH４中央焼土坑検出状況（南東から）
3　SH４-SK１土層断面
4　SH４-SK１全景（北西から）
写真図版６　遺構
1　SH５全景（北から）
2　SH５イチマル土坑（北東から）
写真図版７　遺構
1　SH５イチマル土坑（北から）
2　SH５マル土坑土層断面
3　同（部分）
4　SH５マル土坑底付近堆積状況（西から）
5　SH５-SP１土層断面

写真図版８　遺構

1　SH５イチマル土坑土手除去後全景（北東から）

2　SH５イチマル土坑土手除去後全景（北から）

3　SH５イチマル土坑土手土層断面

4　SH６-１全景（北東から）

写真図版９　遺構

1　SH６-１土器（118）出土状況（東から）

2　SH６-１土器（121）出土状況（西から）

3　SH６-２全景（北から）

写真図版10　遺構

1　SH６-２・３東西土層断面（東半）

2　同（部分）

3　SH６-２土器（115の一部）出土状況（西から）

4　SH６-２中央焼土坑検出状況（北東から）

写真図版11

1　SH６-３全景（北から）

2　SH６-３マル土坑土層断面

3　SH６-３イチマル土坑全景（北から）

写真図版12　遺構

1　SH６-３イチ土坑土層断面

2　SH６-３イチ土坑検出状況（南から）

3　SH６-３下部構造全景（北から）

写真図版13　遺構

1　SH７全景（北西から）

2　SH７土層断面

写真図版14　遺構

1　SH８-１炭・焼土検出状況（西から）

2　同詳細（南東から）

3　イネ科の可能性がある繊維材（東から）

4　板状の炭化材とイネ科の可能性がある繊維材（東から）

写真図版15　遺構

1　SH８-１炭化材出土状況（西から）

2　SH８-１炭化材出土状況（南東から）

3　同詳細（南東から）

写真図版16　遺構

1　SH８-１全景（西から）

2　SH８-１西半土層断面

3　SH８-１-SP１土層断面

4　SH８-１台石（S２）出土状況（南東から）

写真図版17　遺構

1　SH８-２全景（東から）

2　SH８-２イチマル土坑全景（南東から）

写真図版18　遺構

1　SH８-２イチマル土坑土手盛土と貼床土層断面

2　SH９全景（北から）

3　SH９イチマル土坑全景（北から）

写真図版19　遺構

1　SH９イチマル土坑土層断面

2　SH９床面被熱状況（南西から）

3　SH10全景（北から）

4　SH10・20土層断面（部分）

写真図版20　遺構

1　SH20全景（北から）

2　SH20イチマル土坑（北東から）

写真図版21　遺構

1　SH20ベッド状遺構北辺土層断面

2　SH20ベッド状遺構盛土内土器（224・225）出土状況（西から）

3　SH11全景（北東から）

4　SH11土層断面

写真図版22　遺構

1　SH12全景（北から）

2　SH12･13周壁溝検出状況（南から）

3　SH12周壁溝西辺（北から）

写真図版23　遺構

1　SH13全景（北から）

2　SH13イチマル土坑全景（北西から）

3　SH13-SP４土層断面

写真図版24　遺構

1　SH14全景（北東から）

2　SH15全景（北から）

写真図版25　遺構

1　SH16全景（北から）

2　SH18全景（北東から）

写真図版26　遺構

1　SH19全景（北東から）

2　SB１全景（北西から）

写真図版27　遺構

1　SK６土器（243～255）出土状況（南から）

2　同部分（北から）

3　ST１検出状況（東から）

4　ST１全景（北東から）

写真図版28　遺構

1　ST２全景（東から）

2　ST３全景（東から）

3　ST４小口溝検出状況（北から）

4　ST４全景（北から）

5　ST５全景（東から）

6　ST６全景（東から）

写真図版29　遺構

1　SP25土器（256・257）出土状況（西から）

2　SP82土器（259）出土状況（南東から）

3　SD１土器出土状況（南東から）

写真図版30　遺構

1　SD１土器（285・338）出土状況（北から）

2　SD１土器（343・344）出土状況（北から）

3　SD１土器（295・297～299）出土状況（北から）

4　SD１全景（北西から）

写真図版31　遺構

1　SD１のSR１への取り付き部分（南東から）

2　同部分（南東から）

3　同部分（東から）

写真図版32　遺構

1　SR１全景（北東から）

2　SR１土層断面

写真図版33　遺構

1　SR１杭群検出状況（北西から）

2　SR１杭･矢板検出状況（南西から）

3　SR１矢板１・２・３打ち込み状況（南西から）

4　SR１矢板２打ち込み状況（南西から）

写真図版34　遺構

1　SR１　７～12層土器溜まり検出状況（東から）

2　SR１土器（374・377）出土状況

3　SR１土器（375）出土状況

4　SR１土器（388）出土状況

5　SR１土器（426）出土状況

写真図版35　遺構ほか

1　調査区西壁土層断面（北から約４ｍの地点）

2　調査区断割り土層断面（東端）

3　調査区断割り土層断面（東半）

4　調査区断割り土層断面（西半）

5　現地指導状況（立命館大学　青木哲也先生）

6　現地説明会状況（平成23年12月10日開催）

写真図版36　遺物　3～6・8・10
写真図版37　遺物　19～22・25・26
写真図版38　遺物　27・32～37
写真図版39　遺物　29・43・48・55・59・61
写真図版40　遺物　63・66・70・71・77・78・80
写真図版41　遺物　79・82・86・90・92
写真図版42　遺物　94・95・100・103・112
写真図版43　遺物　108・117～119・121
写真図版44　遺物　122・123・134・135・137
写真図版45　遺物　136・138・144・146・147・150・151
写真図版46　遺物　151・155・156・158～161
写真図版47　遺物　170・174・176～180
写真図版48　遺物　184～187・189・190
写真図版49　遺物　193・196・198・199・201・204
写真図版50　遺物　203・205・207・209・211・214
写真図版51　遺物　212・217・218・223～225
写真図版52　遺物　226・228～231・234・245
写真図版53　遺物　251・243・244
写真図版54　遺物　248・250・256・257
写真図版55　遺物　259・260・264・270・276・277
写真図版56　遺物　278～280・284・285・287
写真図版57　遺物　288・290・293～295・297
写真図版58　遺物　296・298～301・304・305
写真図版59　遺物　310・311・314・316～318
写真図版60　遺物　327・330・332
写真図版61　遺物　333・335・339
写真図版62　遺物　343・344・348・349・351・355
写真図版63　遺物　356～358・361・363～365
写真図版64　遺物　366・367・374～377
写真図版65　遺物　378～380・385・388・390・391
写真図版66　遺物　392・397～399
写真図版67　遺物　400・403・404・406・408
写真図版68　遺物　409・411～415・417・419
写真図版69　遺物　418・420～424
写真図版70　遺物　426・437・439・442・443
写真図版71　遺物　440・444・446・447・450・455
写真図版72　遺物　451～453・456・457・463・466
写真図版73　遺物　464・467・468・470・476・477
写真図版74　遺物　472・478・479～482・484
写真図版75　遺物　483・485～489・492
写真図版76　遺物　498・499・501・502・506
写真図版77　遺物　504・506～508
写真図版78　遺物　509・510・512～514・520
写真図版79　遺物　519・522・523・S１～S７
写真図版80　遺物　M１・M２・SH１-２　SP４出土砥石・SH14出土磨製石包丁・SD１出土打製石包丁

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

病棟建設　今回の調査は、医療法人三栄会ツカザキ病院新館建設に伴うものである。平成22（2010）年に姫路市網干区和久70-３外において、新たに病棟を建設する計画（対象面積約1400㎡）が持ち上がり、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。その結果、まずは確認調査によって包蔵地の内容を把握することとなり、同法人から役務提供を受ける形で調査を行った。

第２節　確認調査

概　　要　今回、和久遺跡の本発掘調査の契機となった確認調査（第８次調査）の概要は以下のとおりである。

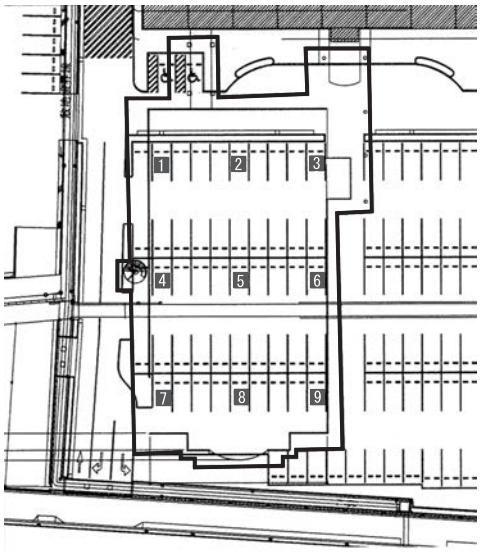
遺跡調査番号　20100266

調査期間　平成23（2011）年３月15日～同年３月19日

調査員　姫路市埋蔵文化財センター　福井優

調査内容　調査対象地に２ｍ×２ｍの調査区を９箇所設定した（挿図１）。調査を開始したところ、ほとんどの調査区で安定した地山を確認することができた。その地山は北から南へ緩やかに傾斜しており、比高差は約30cｍであった。これは、現在の病棟建設に伴う調査（第１次調査）で確認した微高地の南側斜面にあたると考えられる。

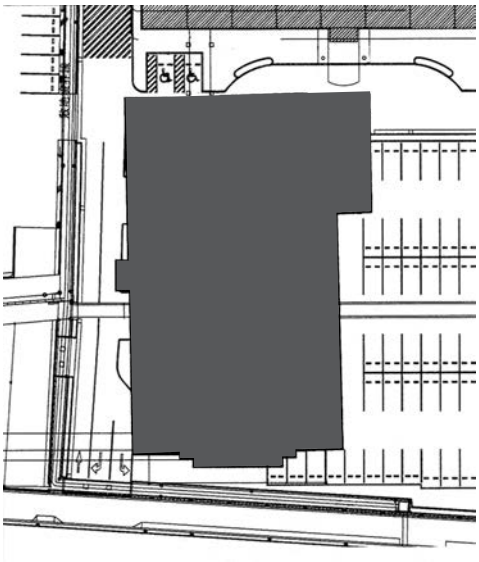
また、２・３・７区では遺構を検出した。調査区が狭小なために規模や性格は不明であるが、特に３区は調査区よりも大きな遺構内にあり、従前の調査成果から竪穴住居跡の可能性が高い。出土遺物から古墳時代初頭に比定できる。一方、低位部である７～９区でも水成堆積層と考えられる砂層から主に古墳時代初頭の遺物が出土した。集落の縁辺部を流れる旧河道の可能性がある。以上より、今回の調査対象地全域に遺構密度がかなり高い集落遺跡が広がっていることが明らかになった。



挿図1　確認調査位置図（S=1：1,000）

第３節　本発掘調査（第９次調査）

本発掘調査に際して、姫路市と医療法人三栄会ツカザキ病院との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は、基礎等の工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とした。調査面積は1347㎡である（挿図２）。また、造成土と耕作土・床土、および中世以降の耕作土と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。特に竪穴住居の床面付近の埋土をフルイにかけることで微細な遺物の発見に努めた。



挿図2　本調査位置図（S=1：1,000）

調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局	教 育 長	中杉　隆夫
	教育次長	林　　尚秀
生涯学習部	部　　長	小林　直樹
文化財課（埋蔵文化財担当）	課　　長	福永　明彦
	係　　長	大谷　輝彦（調整）
	技術主任	中川　　猛（調整）
姫路市埋蔵文化財センター	館　　長	秋枝　　芳
	係　　長	岸本　幸男
	主 事 補	嶋田　　祐（庶務）
		（平成25年１月１日～主事）
	係　　長	森　　恒裕（調整）
	技術主任	小柴　治子
		南　　憲和
		福井　　優（調査）
	技　　師	堀本　裕二
	技 術 員	黒田　祐介（調査）
		（平成23年10月 １日～技師補）

第４節　整理作業

出土遺物の整理作業は、平成24年度に姫路市埋蔵文化財センターで行った。整理作業は、現地調査に引き続き福井・黒田が担当し、以下の臨時職員の補助を得た。

覚野 郁子、黒岩 紀子、香山 玲子、清水 聖子、田中 章子、玉越 綾子、寺本 祐子、野村 知子、藤村 由紀、三輪 悠代

また、今回の調査の出土遺物について、篠宮正氏からご教示を賜った。

第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

姫　路　市　和久遺跡は、兵庫県姫路市網干区和久に所在する（図版１）。姫路市は、近畿地方の西部、兵庫県の南西部に位置する、県内第二位の商工業と人口を擁する播磨地域の中核となる都市である。市域は広大な播磨平野を中心に、北は中国山地、南は瀬戸内海の島嶼部にかけて広がる。平成18年３月27日に、いわゆる平成の大合併により、飾磨郡家島町、同夢前町、神崎郡香寺町、宍粟郡安富町を併せて現在の姿となった。平成25年１月現在、市域面積は534.43㎢、人口は536,323人※である。市域は、北側を宍粟市･神崎郡神河町に、東側を神崎郡福崎町･同市川町・加西市・加古川市・高砂市に、そして西側をたつの市・揖保郡太子町とそれぞれ接している。

姫路市は、古代以降、山陽道を中心とした陸海交通の要衝にあたり、近世には姫路城の城下町として繁栄してきた。近代以降は軍都として姿を変え、そのため、第二次世界大戦末期には米軍による空襲を受け、市街地の大半は焼失するという壊滅的な被害を受けた。戦後は、播磨の中核として復興し、平成８年４月全国で初めて中核市に移行し、現在に至っている。

※姫路市の推計人口（平成25年１月１日現在）

http://www.city.himeji.lg.jp/toukei/hmj/hmj13/hmj1301%20.pdf

網　干　区　網干の名称は、養老四年（720年）に魚吹八幡神社での祭礼に網を干して放生会とし、それが網干祭と呼ばれるようになったことに由来しているという（橋本1956,p85）。また、現在使用されている網干区という地名は、東京都の特別区や政令指定都市の区とは異なるものである。これは1946年３月のいわゆるラモート合併によって姫路市と当時の揖保郡網干町が合併した時の地名の名残である。姫路市には網干区以外にも、飾磨区・広畑区・大津区・勝原区・余部区のように「区」のつく地名がある（姫路百年編集委員会1990,p128）。

なお、地勢についてはここではふれず、第４章第１節で詳しくふれることにする。

第２節　歴史的環境

ここでは和久遺跡と関連のある主な周辺遺跡について概観することにする（図版２）。

弥生時代前期　弥生時代前期後半から始まる遺跡は丁・柳ヶ瀬遺跡（８）があるが数は少ない。

弥生時代中期　中期に入ると遺跡数も増加し、中期中葉から後葉にかけてはさらに増加する。和久遺跡周辺では、平野部に所在する遺跡として、川島遺跡（３）・檀特山遺跡（７）・中筋遺跡（17）・亀田遺跡・山田遺跡が、高地性集落として檀特山山頂遺跡（４）が挙げられる。また、川島遺跡では円形周溝墓１基と方形周溝墓４基が確認されている。このほかには、大津茂川床遺跡（２）での鹿や独立棟持柱を持つ掘立柱建物が描かれた中期中葉の広口壺（中溝1980）や、中筋遺跡での中期中葉の大量の在地の土器群に伴う北陸の小松式の甕（山本・山本2010）の出土も注目される。

その中期後半から後期にかけては川島遺跡・立岡遺跡・亀田遺跡が継続するようであるが、いずれの遺跡でも後期初頭の一時期に関しては欠落している。それらの一群の土器について

は、出土する遺跡が比較的限定的であることから、それが様式としての存続期間が短いのか、地域的な偏差によるものなのかについては今後の課題といわざるを得ない。墳墓としては、常全日蓮寺遺跡で４基の土器棺が検出されている。

古墳時代初頭　そして、後期後半から古墳時代初頭にかけては、川島遺跡、丁･柳ヶ瀬遺跡、鵤遺跡（13)、鵤石田遺跡（14)、蓮常寺北遺跡（16)、沖代遺跡（19）と急増する。さらに、丁･柳ヶ瀬遺跡、鵤遺跡、鵤石田遺跡、上構遺跡、上太田茶屋ノ前遺跡では地元産と思われる庄内式の甕が出土しており、特に鵤遺跡ではその保有率が約３割と非常に高いことが、当該地域の大きな特徴といえる。一方、川島遺跡においてはほぼ同時期の土器は大量に出土したが、庄内式の甕を保有しない代わりに、讃岐系の甕を主体とするなど、狭い地域内でも主体となる甕の保有形態に偏差がみられることは興味深い。

墳丘墓／前期古墳　和久遺跡が立地する揖龍平野には太子山、立岡山、檀特山などの侵食残丘が点在しており、その丘陵上には比較的多くの墳丘墓が築かれているという（渡辺2009,ｐ７）。そのなかで、内容がある程度明らかになっているものは、黒岡山墳丘墓（A)、山戸４号墳（E）である。黒岡山墳丘墓は１辺約15mの長方形の墳丘を有するようで、東辺では２段積みの列石を検出している。南斜面で採集された大型の複合口縁壺は庄内式併行期の範疇に収まるものである。主体部と思われる遺構が３基検出されている（上田1973、松本1989)。山戸４号墳は墳形こそ不明であるが、1.3×1.9mの竪穴式石槨（石槨１）と隣接する石槨様の石組み（石槨２）が検出されている。このうち石槨１からは鉢を蓋に持つ讃岐産の大型壺棺が出土している。庄内式併行期でも後半に位置づけられる（上田・田尾・三宮1960、中溝1973)。

また、定型化した前方後円墳としては、瓢塚古墳、檀特山１号墳、檀特山３号墳が挙げられる。檀特山１号墳は全長52mで主軸は東西方向を向く。後円部で壺棺が検出されている。庄内式併行期でも後半に位置づけられよう。檀特山３号墳は全長35mで主軸は南北方向を向く。前方部は低く長く伸びるようで、古い形状を呈している（岸本道昭2001、松本2010)。

第３節　既往の調査

既往の調査　和久遺跡の発掘調査歴は比較的新しく、その存在が注目されたのは、平成12（2000）年に行った第１次調査である。ここでは、これまで行ってきた調査概要についてふれておきたい（図版３)。

試掘調査　調査期間　平成12（2000）年10月18日～平成12（2000）年 10月27日

調査面積　64㎡

周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であったが、建設工事の計画に伴い試掘調査を行った。16箇所設定した調査区のうち15箇所で遺構を確認し、またその半数以上の調査区で竪穴住居跡を検出した。この結果を受け、和久遺跡が当初想定されていたよりも範囲が広がることが明らかになった（小柴2003, p12)。

第１次調査　調査期間　平成12（2000）年12月12日～平成13（2001）年 ５月31日

調査面積　2640㎡

先の試掘調査の結果を受け、工事の影響を受ける範囲で調査を行った（挿図19)。検出した遺構は、弥生時代中期後葉の土坑25基、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡約

100棟、土坑約80基、柱穴約1800基、溝約10条と、奈良時代以降の掘立柱建物跡や溝である（小柴2003a,pp４-５・2003b・2010b,pp202-217ほか）。このうち、100棟余りの住居跡の複雑な重複関係や出土した土器の年代観によって、住居跡の平面形の変遷や播磨特有の燃焼施設である１〇型中央土坑の実態に迫れたことは最大の成果といえる（小柴2003c･2010aほか）。また、大量に出土した地元産の土器に加えて、讃岐・阿波・山陰・河内といった遠隔地からの搬入土器も少なからずみられた。そして、ガラス製勾玉・小玉、碧玉製管玉といった交易品も出土しており、他地域との活発な交流をうかがわせる。

以上より、和久遺跡は姫路市のみならず播磨を代表する遺跡の一つであることが明らかになり、以後注目を集めることになる。また、この調査成果を受けて、遺跡の広がりを把握する必要性が高まり、４次にわたる範囲確認のための試掘確認調査を実施することとなった。

第２次調査　調　査　期　間　平成13（2001）年 ４月26日～平成13（2001）年 ４月27日
調　査　面　積　76㎡

１次調査の調査区から北へ約150mの地点で調査を行った。耕土直下で地山が検出できる箇所もあり、土坑やピット、溝などを確認した。このうち、北東-南西方向に走行する溝は、幅約1.6m、深さ約１ｍの断面Ｖ字を呈し、上層から弥生時代後期の土器が多数出土した（大谷2003,ｐ６）。

試掘確認　遺跡調査番号　20030070

１次　調　査　期　間　平成16（2004）年 ２月13日～平成16（2004）年 ３月26日
調　査　面　積　632㎡

１次調査で明らかになった和久遺跡の範囲確認のために４ヶ年計画で試掘確認調査を実施することになり、今回がその第１次調査である。45箇所の調査区を設定した。調査対象範囲の北西端に設定した調査区で検出した古墳時代の土坑からは、土師器とともに滑石製有孔円盤が出土したことから、遺跡の範囲は北西側へ大きく広がることが明らかになった。そして、１次調査の調査区の東側と南側のトレンチでは地形の傾斜と低湿地状の堆積がみられ、かつて調査した集落が立地する微高地が南～南西方向に傾斜していることがわかった。また、その地形の落ちよりもさらに南東側に設定した調査区では、畦畔状の遺構や竪穴住居跡が確認できたことから南東側に別の集落域が存在する可能性が極めて高くなった。

第３次調査　調　査　期　間　平成16（2004）年 ４月 １日～平成16（2004）年 ６月15日
調　査　面　積　596㎡

１次調査の調査区の北西側で調査を行った。竪穴住居跡４棟、溝15条、土坑15基、ピット123基を検出した。このうち、時期の明らかなものは、弥生時代後期の溝２条と土坑２基、古墳時代初頭の竪穴住居跡１棟である。溝からは讃岐産の甕が出土している。

第４次調査　遺跡調査番号　20040062
調　査　期　間　平成16（2004）年12月 ９日
調　査　面　積　４㎡

１次調査の調査区の北側に隣接する地点で調査を行った。遺構の密度は低かったものの、試掘確認調査の１次調査で確認した古墳時代初頭の溝の埋土と類似する土層を確認している。

試掘確認　遺跡調査番号　20040089

２次　調査期間　平成17（2005）年 2月10日～平成17（2005）年 3月25日

調査面積　200㎡

範囲確認の試掘確認調査の２年目である。３箇所の調査区を設定した。１次調査の北西側に設定した調査区では地形が西側へと傾斜しており、１次調査で確認した微高地の北西側の落ちを確認することができた。また、試掘確認１次で検出した畦畔状遺構付近に設定したトレンチではその続きを確認するとともに、５棟の住居跡を検出した。いずれも弥生時代後期のものである。

以上より、１次調査とは別に南東側にも集落域が存在することは明らかであり、和久遺跡の南東側への広がりはほぼ確実なものになった。

第5次調査　遺跡調査番号　20050077

調査期間　平成17（2005）年 9月16日

調査面積　65㎡

狭小な調査区であったが、弥生時代前期と思われる土坑を１基確認した。

第6次調査　遺跡調査番号　20050078

調査期間　平成17（2005）年10月25日

調査面積　65㎡

３次調査と同じ敷地内で調査を行った。平安時代のピット14基、弥生時代の土坑２基、平安時代と思われる落ち込みを確認した。いずれからも土器の小片が出土している。

試掘確認　遺跡調査番号　20050099

３次　調査期間　平成18（2006）年 2月 9日～平成18（2006）年 3月24日

調査面積　250㎡

範囲確認を目的とした試掘確認調査の３年目である。調査対象範囲の北西端に設定した調査区では弥生時代前期の土坑、古墳時代と思われる掘立柱建物跡を確認した。また、１次調査の西側の調査区では、南北方向の溝を検出した。土層の堆積状況の観察と大量に出土した土器相からこの溝は弥生時代後期半ばに人為的に埋め戻された可能性がある。この溝以西では地形の傾斜がみられ、微高地の西側縁辺部にあたると考えられる。

以上より、和久遺跡の存続時期が、従前考えられていたよりも長期に及ぶことがわかった。また、１次調査の微高地の西端を確認することができた。

試掘確認　遺跡調査番号　20060146

４次　調査期間　平成19（2007）年 2月 8日～平成19（2007）年 3月19日

調査面積　150㎡

主に、１次調査の北西側にある地形の高まりの性格を把握するために調査を行った。その結果、この高まりは人為的なものであることがわかり、盛土からは弥生土器が出土したが、性格についてはなお不明である。

第7次調査　遺跡調査番号　20090223

調査期間　平成21（2009）年12月 7日～平成21（2009）年12月 9日

調査面積　42㎡

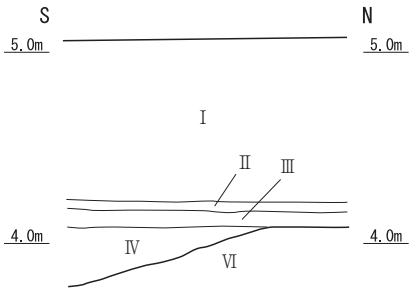
調査区全体で低湿地状の堆積を確認した。遺物は弥生土器の細片が出土したにとどまる。旧地形が東から西へ傾斜していることがわかった。

以上、平成16（2004）年に始まった試掘確認調査によって、和久遺跡は従前考えられていたよりも広範に広がることが明らかになったため、周知の埋蔵文化財包蔵地の変更の報告を兵庫県教育委員会文化財室（当時）に行った。

第３章　調査の成果

第１節　調査概要

基本土層　調査地の現況は造成された駐車場で、標高は約5.1mである。挿図３は、調査区西壁の北端付近の柱状図である。層名は、造成土をⅠ層とし、現在の耕土をⅡ層、旧耕土をⅢ層とし、地山と考えられる褐色粘土層、および黄褐色粘土層をⅥ層とした。また、部分的ではあるが、調査区のほぼ中央付近にのみ部分的に堆積する砂質土層をⅤ層とし、Ⅴ・Ⅵ層を切り込む遺構群をⅣ層とした。



挿図3　調査区基本土層図（S=1：40）

Ⅰ層　造成土

Ⅱ層　現在の耕作土。調査地周辺で現在も利用されている。

Ⅲ層　旧耕土。灰黄色系の粘質土で、上層は土壌化している。中世以降の遺物をわずかに含む。

Ⅳ層　遺構埋土。

Ⅴ層　褐灰色砂質土層。粗砂主体でしまりはややあり。堆積状況から洪水砂と思われる。367から371といった弥生時代中期後半の土器が出土している。また、SH３やSD１のように本土層を切り込む遺構もみられることから、少なくとも古墳時代初頭以前に堆積していたことは明らかである。

Ⅵ層　灰黄褐色粘土、および黄褐色シルト・粘土層。これまで行ってきた付近での調査成果から地山と考えられる。黄褐色粘土層は、調査区の北から南へかけて緩やかに傾斜しており、比高差は約30cmあった。その上部に灰黄褐色粘土が厚さ約20cmで堆積している。部分的に断割りを行ったものの、遺物は出土しなかった。

検出遺構　今回検出した主な遺構は、弥生時代中期の竪穴住居跡１棟･土坑３基、後期の住居跡１棟、古墳時代初頭の住居跡19棟・ピット101基・溝１条、弥生時代中期から古墳時代初頭の旧河道１条、帰属時期が不明な掘立柱建物跡１棟である。

第２節　遺構

竪穴住居跡

SH１-１（図版５・６・38-１～18・60-S１）

検出状況　調査区の北西側で検出した。SH１-２を拡張して構築され、SK６を切る。

形状・規模　長軸5.1m、短軸4.7mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約15cm、床面の標高は約3.9mを測る。埋土には地山などのブロック状の塊は含まれなかった。

屋内施設　４基の主柱穴と中央焼土坑を確認した。SP１は径25cm・深さ22cm・SP２は径35cm・深さ35cm、SP３は径25cm・深さ24cm、SP４は径46cm・深さ36cmをそれぞれ測る。このうちSP２・４では柱痕を検出し、さらにSP２では柱のあたりと思われる径約10cmのくぼみ

を確認している。主柱穴間距離は約2.1mである。

床面の中央では、径約60cm・深さ10cmの浅い中央焼土坑を検出した。土坑の南側には高さ３cm程度の低い盛土があり、盛土周辺には厚さ約１cmの炭層が広がっていた。小柴分類のＣ３にあたると思われる[註1]。また、その埋土には炭化粒・灰・焼土が多数みられた。

註１　和久遺跡の竪穴住居、特に燃焼施設については小柴治子氏により先鞭がつけられている（小柴2003）。そこでは、第１次調査の成果をもとに燃焼施設の形態分類やその変遷過程がまとめられている。以下、燃焼施設の類型について述べる際には、小柴氏の成果に依る。

出土遺物　台石（S１）は床面に据えられた状態で出土した。また、床面から遊離して、甕（１～10）、高杯（12～14）、小型器台（15）、鉢（16）、有孔鉢（17・18）が出土している。甕の底部は数個体分が出土しており、平底（４）、輪台技法による上底状（５）、小さい平底（７・８）、丸底（９）とバリエーションに富む。また、赤褐色系の胎土に角閃石粒を含む小片や、にぶい黄橙色系の胎土に角閃石粒を含む壺の肩部の破片といった外来系の一群も伴出している。その壺の内面にはオサエが残る。

時　　期　庄内式併行期の中でもやや新相を呈する。

ＳＨ１-２（図版５・７・39-19～37）

検出状況　ほぼ同一位置で重複するＳＨ１-１に切られ、ＳＫ６を切る。

形状・規模　長軸4.8m・短軸4.5mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは約10cm、床面の標高は約3.8mである。埋土の９層は径５cm以下の灰黄褐色地山をブロック状に多く含むことから、人為的に埋め戻された土層であると考えられる。10層は地山ブロックこそみられないが、径５mm以下の炭化粒を多く含む。これらと本住居を切るＳＨ１-１との位置関係を勘案すると、少なくとも９層はＳＨ１-２の埋戻し土であると同時に、ＳＨ１-１構築に伴う貼床でもある可能性が高いといえる[註1]。10層に関しても９層と色調や堆積状況が類似することから、同様の性格を想定できよう。なお、９層からは白色粘土塊が出土している。

屋内施設　主柱穴４基とイチマル土坑[註2]に類する土坑を検出した。いずれもＳＨ１-１の主柱穴や中央土坑と重複しており、削平を受けている。ＳＰ１は径27cm・深さ45cm、ＳＰ２は径39cm・深さ23cm、ＳＰ３は長辺50cm・短辺30cm・深さ22cm、ＳＰ４は径40cm・深さ23cmをそれぞれ測る。柱穴間距離は約2.2mである。

床面中央で確認した土坑は、ＳＨ１-１の中央土坑に一部切られているが、径約40cmの平面円形を呈する。深さは27cmを測り、底部はやや北側に偏る。西側に幅約20cm・長さ約40cmの浅い溝を伴い、それを挟むように弧状の土手がめぐっている。土手の高さは部分的に５cmのところもあるが、概ね３cm程度である。盛土によって構築されたものと思われるが、下層との境界は極めて不明瞭であった。土手は、南東側で部分的に途切れているが、そこには、住居の軸方向とはややずれるように幅約20cm・長さ約60cmの平面長楕円形に炭化粒が薄く広がっていた。明確なくぼみはみられなかったが、イチ土坑に類するものとすると、この土坑と炭の広がりは、小柴分類のＢ５類にあたると思われる。なお、中央土坑の埋土は灰や径５mm以下の炭化粒を含み、南側から流れ込んだようにみえることも、これを補強していると考えられる。

なお、ＳＨ１-２の床面を構成する16層は黄褐色地山をブロック状に多く含むことから、床

面構築にあたり地山を約10cm掘り下げて盛土していると考えられる。その目的については、除湿などが想定されている。ここでは明確な答えを示すことができないが、少なくとも床面の構築に伴う何らかの作業の痕跡と捉えることはできよう。

出土遺物　床面からごくわずかに遊離した状態で、小型器台（32）・小型鉢（33）が近接して検出された。それ以外には直口壺（19）・甕（21～28）、高杯（29～31）、小型鉢（34）が、床面から遊離して出土した。ここでも、甕の底部にバリエーションがみられる。28にような小さな平底のものもあるが、輪台技法によるものもある。また、高杯（29・30）のように胎土が比較的精良で、稜線がしっかりしたものもみられる。これらとともに、外来系と考えられる橙色・赤褐色系を呈する胎土を有する小片もごく少量ながら伴出している。また、SP４の堀方からは横方向の沈線状ミガキを施す小型器台（36）・製塩土器と思われる脚台部（37）・砥石（写真図版80）も出土している。さらに、SP２を除く３基の柱穴からは礎板が出土した（写真図版２-３・４）。このうちSP３出土の礎板には仕口の欠き込みと思われる加工痕が残存する。また、SP４出土の礎板にも切り込みがみられる。

註１　９・10層出土遺物の位置付けについては慎重を期さなければならない。つまり、SH１-２廃絶時の遺物か、SH１-１構築時の遺物かということである。ここでは、浜田晋介氏が想定された三角堆積土（浜田2008）のような自然堆積層がみられないことから、SH１-２廃棄後さほど時間を経ずにSH１-１を構築したと考えている。

註２　イチマル土坑とは、弥生時代中期から後期にかけて、現在の兵庫県南西部を中心に分布する竪穴住居の燃焼施設の名称である。この遺構については1983年に始まる研究の蓄積があり、本来ならば「１〇型中央土坑」の名称を使用すべきであるが、記述の煩雑さを避けるためにここでは「イチマル土坑」と呼称し、「１土坑」を「イチ土坑」、「〇土坑」を「マル土坑」と呼び替えることを予め断っておく。なお、一連の研究史については山崎敏昭氏の整理が詳しい（山崎2009）。

時　　期　SH１－１に比べるとわずかに古相を呈する。

SH２（図版８、39、40-61～66）

検出状況　調査区北側で検出した。SH１・20に近接する。

形状・規模　長軸4.8m・短軸4.3mの平面長方形を呈する。上面はかなり削平を受けているようで、検出面からの深さは15cm程度しかなかった。床面の標高は約3.9mである。

屋内施設　柱穴、ベッド状遺構の可能性のある高まり、周壁溝、中央焼土坑、住居内土坑を確認している。柱穴のうち主柱穴となるのはP１～５・７・８で、径は概ね30cm、深さは20cm～50cmである。主柱穴間距離は約2.2mである。その周囲には高さ約５cmの地山の高まりがあり、ベッド状遺構のようにめぐっている。その内側には部分的ではあるが、周壁溝もめぐっている。典型的なベッド状遺構は盛土で構成されていることを考えると、この高まりはベッド状遺構の基底部にあたる可能性がある。

床面の中央で検出した中央焼土坑は土手を持ち、東側に住居内土坑SK１を伴うことから小柴分類C１にあたる。炭層の厚みは約１cmであった。第４章第３節で詳述する被熱探査を行なっている[註1]。

住居内土坑SK１は長軸1.1m・短軸0.7mの平面楕円形で、深さは20cmを測る。この土坑の西端には、ピット状の落ち込みを伴う。本土坑からは直口壺（61）・甕（62）・鉢（63～66）が出土している。

註１　被熱探査については、兵庫県立大学防災教育センター森永速男先生に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った（第４章第３節）。記して感謝する。

出土遺物　床面からは広口壺（38）・甕（39～43）が出土した。特に北西側の一群は、数個体分が折り重なっており、取り上げ時に個体の識別が困難なほどであり、廃棄における同時期性は高いといえる。39・42は右上がりのやや細いタタキが特徴で、内面のケズリも勘案すると、庄内式甕の影響下にある在地の甕と位置づけられよう。43はタタキこそやや粗いが底部に同様の傾向がみられる。また、床面から遊離した状態で、広口壺（45･46）、直口壺（47）、甕（49～55）、高杯（56～58）、器台（59）、鉢（60）が出土している。これらとともに、讃岐系の広口壺口縁部（48）や、讃岐もしくは河内産と思われる茶褐色系の胎土の小片といった外来系のものもみられた。

住居内土坑ＳＫ１から出土した直口壺（61）や鉢（63～66）は、在地の胎土によるものであると思われるが、いずれも比較的精良である。

時　　期　庄内式併行期の中でもやや新相に位置付けられる。

ＳＨ３（図版９・40-67～90・41-91～99）

検出状況　調査区の中央付近で検出した。第１節でみたＶ層を掘り込み、ＳＢ１を切る。東端は後世の削平を受けている。

形状・規模　一辺5.9mの平面方形を呈する。検出面からの深さは５～12cmと浅い。床面の標高は約3.9mである。

屋内施設　柱穴、周壁溝、ベッド状遺構の可能性のある高まり、住居内土坑を検出した。主柱穴となるのはＳＰ１～４である。ＳＰ１は径45cm・深さ60cm、ＳＰ２は径43cm・深さ68cm、ＳＰ３は径37cm・深さ43cm、ＳＰ４は径38cm・深さ60cmをそれぞれ測る。このうちＳＰ１・２・４では柱状の痕跡が明確に残る。主柱穴間距離は約2.6mである。その周囲には高さ約５cmの地山の高まりがめぐっている。ＳＨ２同様ベッド状遺構の可能性が高い。その内側、西辺と南辺の一部で周壁溝を検出した。幅10cm・深さ５cmで、断面Ｕ字を呈する。さらにその外側の北辺・東辺にも幅15～20cm・深さ約５cmを測る周壁溝がめぐっていた。

床面の東半には被熱による赤色化、硬化がみられる箇所があり、そこで、おそらく１個体分と思われる図化不能な土器片も出土している。ベッド状遺構の可能性のある高まり上の南西角付近で、浅いたわみを２基検出している。住居東端では住居内土坑ＳＫ１を検出している。長辺80cm・短編65cmの平面楕円形で深さは40cm、甕（91～97）、高杯（98）、鉢（99）が出土した。明確な中央焼土坑はなかったものの、床面の被熱痕跡と住居内土坑の組み合わせから、小柴分類のＣ２の亜種にあたると思われる。

出土遺物　床面からは先にふれた図化不能な土器片が出土したほかは、床面から遊離した状態、もしくはＳＫ１から出土している。なかでも甕（74）や高杯（98）などはやや新相を呈しているように思われる。また、ＳＫ１出土の甕のなかには、92・94・95のように庄内式の甕と共通する属性を有するものもみられる。そして、ごく少量ではあるが、讃岐もしくは河内産と思われる茶褐色系の胎土の小片も伴出している。

時　　期　庄内式併行期の中でも新相を呈する。

ＳＨ４（図版10）

検出状況　調査区北東側で検出した。SH10・SH20を切る。南側に平行しない周壁溝が２本残存している（SH４-２・４-３）ことから、少なくとも２回の建替えがあったと考えられる。周壁溝や中央焼土坑との位置関係から、中央焼土坑はSH４-１に、SP１～４はSH４-２に帰属するとした方がしっくりくるが、同一面で検出したために、直接の切り合い関係はわからない。床面で、SH10の埋土のラインが検出できた。

形状・規模　長辺4.0m・短辺3.7mの平面方形を呈する。埋土はほとんど残存しておらず、遺構検出時に既に床面の遺構がみえていた。床面の標高は約3.9mである。

屋内施設　柱穴と周壁溝、中央焼土坑、住居内土坑を確認した。柱穴は10基検出した。そのうち主柱となるものはSP１～４で、径約45cm・深さ約30cmを測る。柱穴間距離は約2.3mである。中央焼土坑には土手がなく、壁際に住居内土坑SK１を伴うことから小柴分類Ｃ２類にあたる。住居内土坑SK１は長軸0.9m・短軸40cmの平面楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。底面は、SH10の炭面をわずかに掘り込む。

出土遺物　床面から遊離した状態で、図化困難な小片が出土した。なかには、讃岐もしくは河内産と思われる茶褐色系の胎土の小片もみられた。住居内土坑SK１からは小片に混じって、阿波系と思われるの広口壺口縁部の極小片も出土している。

時　　期　中央焼土坑と壁際住居内土坑の組み合わせから庄内式併行期のうちの新相に位置づけられる。

ＳＨ５（図版11・41-100～114・60-Ｓ３～５）

検出状況　調査区北半のほぼ中央で検出した。SH６とともにSH９を切る。

形状・規模　１辺1.1～3.3mの不整な平面六角形を呈し、検出面からの深さは約５cmで、床面の標高は約3.9mである。

屋内施設　柱穴、小穴、周壁溝、イチマル土坑を検出した。柱穴SP１は、南西に１基のみ確認できた。径約40cm・深さ約30cmであった。それ以外にも床面での遺構検出時には、SP１と類似する土層の円形の輪郭がみえていたものの、いずれも深さが２～３cmと非常に浅く、SP１のように明確な掘方をもつものは確認できなかった。また、径６cm前後の小穴も多数確認している。これも検出時には灰褐色砂質土の円形の輪郭がみえたもので、いずれも深さが２cmに満たないものばかりであった。

住居の中央で検出したイチマル土坑は、平面隅丸長方形のイチ土坑を南側に、上部方形・下部円形の二段掘りの平面形をもつマル土坑を北側に配置することで構成されている。加えて、周囲に盛土による土手をめぐらしていることから小柴分類のＢ４にあたる。ここで、それぞれ土坑についてもう少し詳しくみておくことにする。まず、イチ土坑は土層断面の観察によると、厚さ５mm程度の炭層が９層下面と８層上面に堆積しており、使用面が２面であったと想定できる（図版11-２）。仮に前者を古段階、後者を新段階とすると、古段階は長軸1.1m・短軸0.5～0.6m深さ５cm、新段階は長軸1.05m・短軸0.5～0.6m・深さ約５cmをそれぞれ測る[註1]。また、平面形については、いずれもやや不整な隅丸長方形を呈する。次に、マル土坑についてみておくと、上部10cmを長辺0.7m・短辺60cmの長方形に掘りくぼめ、その下部に径40cm・深さ35cmの円筒形のしっかりとした土坑を掘り込んでいる。埋土の特に２～４層

には炭化粒や灰を多く含み、イチ土坑から流れ込んだような堆積状況をみせている。最下層の６層には草本類と思われる炭化物が多く含まれていた（写真図版７-４）。このイチマル土坑は、既述のようにイチ土坑・マル土坑を囲う土手がめぐらされている。この土手は、検出当初は地山と酷似しており、分層が困難であった。そこで、断割りを入れることで、その構造の把握に努めた。すると、一旦床面を２～３cm程度掘り下げて浅いたわみを形成し、その後に盛土を行い、土手を成形していることが明らかになった[註2]。本住居のイチ土坑については第４章第３節で詳述する被熱探査を行なっている[註3]。

出土遺物　床面から遊離した状態で、広口壺（100～102）、甕（104～108）、高杯（109）、鉢（110）が、イチ土坑から甕（111）が、マル土坑からは高杯（112）、鉢（113・114）がそれぞれ出土している。なかでも、床面から遊離した状態で３点の碧玉製管玉（S３～５）が出土した点は注目される。S３は調査時に、S４・５はフルイにかけた排土から出土した。S３は径６mm、長さ1.2cmとずんぐりとした形状を呈する。碧玉であることに違いはないが、あまり類例のない石材である[註4]。S４は径３mm、残存長８mmである。いわゆる未定C群に比定される。S５は復元径５mm、残存長8.5mmを測る。緑色凝灰岩製である。山陰からの搬入品ではあるが、本来は弥生時代前期から中期にかけてよくみられるものであるという。遺構の時期とはやや開きがあるように思われる。

時　　期　概ね庄内式併行期のの範疇に収まるものと考えられる。

註１　ただ、古段階については、新段階の構築作業時に既に旧状を失っている可能性があるため、その法量の数値はあくまで最小値である。

註２　ただし、作業工程上、土手の成形とマル土坑の掘削の前後関係については今のところ判断出来るだけの材料が揃っていない。

註３　被熱探査については、兵庫県立大学防災教育センター森永速男先生に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った（第４章第３節）。記して感謝する。

註４　今回の調査で出土した管玉（S３～S８）については、米田克彦氏のご教示をもとに福井が文章化した。誤記や誤解があればすべて筆者の責である。

SH６-１（図版13・14-１・41-115～122・42-123～150・60-S６・７）

検出状況　調査区北半のほぼ中央で検出した。SH５とともにSH９を切る。

形状・規模　長軸3.95m・短軸3.75mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは15～20cm、床面の標高は3.9mである。

屋内施設　主柱穴や周壁溝などは検出できなかった。６層上面で比較的安定した面をなしている点、その面直上で数個体の土器が出土した点から、少なくとも一定期間開放されていた面であった蓋然性が高いと判断し、床面であると認識するに至った。

本遺構の埋土の２層には黄褐色地山のブロックが多く含まれていることから埋戻し土である可能性は高いが、部分的にみられる４層はその堆積状況から三角堆積土（浜田2008,p29）の可能性がある。その性格についてはより一層の検討が必要であるが、本遺構の埋没過程において自然堆積の可能性も多分に考慮する必要がある。また、燃焼施設についても確認することができなかったことから、小柴分類のDにあたると思われる。

出土遺物　床面から広口壺（115）、甕（116・117）、小型器台（119）、鉢（120・121）、有孔鉢（122）

が、床面から遊離した状態で広口壺（123・126）、直口壺（127・128）、甕（130～135）、高杯（136・137）、器台（138）、小型器台（139・142）、鉢（143～145・147～149）が出土している。また、前者の土器群の中にほぼ完形に復元できる甕（118）がみられるが、器形や細部の特徴、そして、胎土の色調から阿波系の土器であると考えることができる[註1]。後者の土器群の中に阿波系の広口壺（125）や但馬・丹波系の可能性がある鉢（146）、讃岐産の鉢、もしくは製塩土器（150）、図化困難な讃岐産の甕の肩部付近の小片といった外来系の土器群が一定量含まれている。これらとともに、碧玉製管玉が２点（Ｓ６・７）出土している[註2]。Ｓ６は径４mm・残存長1.2cmで、比熱によると考えられる貝殻状を呈する破裂痕とみられる剥離がみられる。Ｓ７は径3.5mm・長さ1.5cmである。玉谷、もしくは女代南Ｂ群に比定できる。石針による両面穿孔である。

時　　期　庄内式併行期の中でも新相を呈する。

註１　118は本文に記した特徴を有するものの、胎土中に結晶片岩粒を含まない点は注意を要する。例えば、在地の粘土を用いている一方、器形や製作技法については故地のものを保持していると考えると、川島遺跡（揖保郡太子町）20溝出土資料（石野1971）にみられるように搬入品が在地化している現象が想定できる。本資料に関しては、器壁の色調が橙色系を呈しており、仮に在地の粘土を使用しているとすると、前者よりもより強い意図を感じる。今後はこのような視点での観察とともに、蛍光Ｘ線分析などの方法もあわせていく必要がある。

註２　今回の調査で出土した管玉（Ｓ３～Ｓ８）については、米田克彦氏のご教示をもとに福井が文章化した。誤記や誤解があればすべて筆者の責である。

ＳＨ６-２（図版14-２・42-151～164）

検出状況　本住居とほぼ同一位置で重複するＳＨ６-１に切られ、ＳＨ９を切る。

形状・規模　長辺3.85m・短辺3.7mの平面隅丸方形を呈する。ＳＨ６-１の床面からの深さは、10～18cmで、床面の標高は3.7mである。埋土の６～８層は黄褐色地山をブロック状に含むことから、人為的に埋め戻されたことは明らかである。また、ＳＨ６-１はＳＨ６-２とほとんど位置を変えることなく構築されている。これらの点から、６～８層はＳＨ６-２の埋戻し土でもあるが、ＳＨ６-１構築時の貼床という性格を併せもつ土層の可能性が高いと考えられる。

屋内施設　ＳＨ６-１同様、主柱穴はなく、中央焼土坑と部分的な周壁溝を確認したにとどまる。柱穴については本住居の床面を掘り下げる際に、改めて精査を行ったものの検出できなかったことから、掘方を伴う柱ではなかったのではないかと考えている[註1]。また、中央付近には長辺0.7m・短辺0.5m・深さ３～５cmの平面楕円形の浅いくぼみがあり、その周囲一面に炭が広がっていた。そのくぼみの底面には厚さ１cmにも満たない薄い炭層があり、その上に灰が堆積し、さらにその上面には再び薄い炭層がみられた。小柴分類のＣ３にあたる。周壁溝は幅約５cm、深さ約３cmで、主に北辺でみられた。

出土遺物　床面からは複合口縁壺（151）が出土したが、数ヶ所に点在していた破片が接合したものである。また、床面から遊離した状態で、複合口縁壺（152）、直口壺（153）、甕（154～161）、鉢（162・163）、土器を転用した円盤（164）が出土した。後者のなかには、褐色系、もしくは赤褐色系を呈する土器の小片も伴出している。

時　　期　中央焼土坑と出土遺物の様相から概ね庄内式併行期の新相に収まると思われる。

註１　ＳＨ６-２のように柱穴を伴わない竪穴住居跡は、和久遺跡第１次調査でも少なからず確認されている（小柴

2010)。ただ、なかには全体を調査していないものもあるため、なお検討を要する事例といえる。

SH６-３（図版15）

検出状況　本住居とほぼ同一位置で重複するSH６-２に切られ、SH９を切る。

形状・規模　一辺約3.6mの平面隅丸方形を呈する。SH６-２の床面からの深さは約10cmで、床面の標高は3.6mである。

屋内施設　SH６-１・２同様、主柱穴はなかった。床面の中央には、やや不定形な形状を呈するイチマル土坑がみられた。イチ土坑は、幅50cm・長さ70cmのやや不定形な溝状を呈する。その底面は厚さ約２cmの炭層で覆われており、その上では炭層と灰層が１cmにも満たない厚さで互層状に堆積していた。また、灰層のなかには、完全に燃焼していない草本類もみられた。マル土坑は径約50cm・深さ25cmを測り、埋土の下半には炭化粒や灰を含む。このイチマル土坑は、イチ土坑･マル土坑の一般的な配置の傾向とは異なり、イチ土坑が北側に位置する。これらイチ土坑･マル土坑については、第４章第３節で詳述する被熱探査を行なっている[註1]。

本住居では住居構築にあたり、床面を部分的に掘りくぼめていることが明らかになった。その平面形は不定形で、深いところでは、約30cmも掘り下げていた。本住居とは別の遺構の可能性もあるが、ここでは、床面の構築に伴う何らかの作業の痕跡と考えておきたい。

出土遺物　遺物は出土しなかったが、SH６-１・２と類似する平面形を有することから両者とさほど

時　　期　時期差はないものと考えられる。

註１　被熱探査については、兵庫県立大学防災教育センター森永速男先生に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った（第４章第３節）。記して感謝する。

SH７（図版16-１）

検出状況　調査区北半東端で検出した。大半は調査区外に広がっている。

形状・規模　隅丸方形を呈する。大半が調査区外に広がっているために基本的な規模については不明である。検出面からの深さは10～15cmで、床面の標高は3.9mである。

屋内施設　周壁溝を確認した。幅は15cm、深さは２～４cmを測る。部分的に深くなるところがあり、底面は一定ではない。

出土遺物　遺物が出土しなかったために、時期については不明といわざるをえない。

SH８-１（図版16-２・17・43-165～170・60-S２）

検出状況　調査区北東隅に位置し、SH８-２を拡張して構築している。SH14を切る。

形状・規模　遺構の北半は調査区外に広がっており、南辺のみが完存していた。その南辺は3.7mを測り、平面隅丸方形を呈する。床面の標高は3.9mである。

掘り下げを行ったところ、埋土は大きく２層に分層できた。両層はともに暗オリーブ色系を呈しているが、２層は径１cm以下の焼土塊や炭化粒が、３層には同大の特に焼土塊が極めて多く、部分的ではあるが面的な広がりをみせるほど濃密に出土した（a面）。この段階ではまだ、柱穴などの屋内施設はみえていない。それら焼土塊や炭化粒を取り除くと、炭化材の頭がみえはじめ、それとほぼ同レベルで一定の方向を向く草本類と思われる繊維材（写真図版14-３）や面的な広がりを持つ焼土塊や炭化粒を検出した（b面）。そして、繊維材や焼土塊などを取り除くと、先ほど頭がみえていた炭化材が床面に接する状態で放射状に出土した（c面、写真図版15）。

以上の状況から、本住居は焼失住居であることは明らかである。また、土葺き屋根の竪穴住居については、浅川滋男氏などにより既にその存在が明らかにされている（岡垣・今城・木村2008、浅川2008）。

屋内施設　柱穴４基と浅いくぼみを検出した。このうちSP１・４は主柱穴であると思われるが、SP２・３はその位置から補助的なものである可能性が高い。SP１の掘方径18cmで、柱痕径11cm、深さ15cmであった。浅いくぼみについては、土層断面の観察では床面から掘り込まれていると判断したが、結果的にはSH８-２のイチ土坑の上部であった。SH８-１構築時の貼床の盛土の可能性も残しておきたい。

出土遺物　広口壺（165）、甕（170～172）、高杯（173）、鉢（174）を図化したが、出土遺物は小片がそのほとんどを占める。また、ごく少量ではあるものの、褐色系、もしくは赤褐色系を呈する在地の胎土ではない土器の小片も伴出している。そして、床面に据えられた状態で台石（S２）が出土している。

時　　期　概ね庄内式併行期の範疇に収まる。

SH８-２（図版18・43-175～180）

検出状況　本住居を拡張するSH８-１に切られ、SH14を切る。

形状・規模　本住居の北半は調査区外に広がっており、全体像は明らかではないが、3.5mを測る南辺のみが完存する。平面形はSH８-１と同じ隅丸方形である。検出面からの深さは約10cmで、床面の標高は3.8mである。

屋内施設　柱穴を５基とイチマル土坑を検出した。柱穴のうちSP１・２・７は主柱穴であると考えられる。径は20～40cmとばらつきがあるが、深さはいずれも10cmにも満たないくぼみ状を呈する。完掘後に断割りを入れて確認したが、それ以上深くはならなかった。

床面の中央付近で検出したイチマル土坑は、幅65cm・長さ1.4mを測る平面隅丸長楕円形を呈するイチ土坑と、上部方形（１辺55cm）・下部円形（径約30cm）、深さ34cmの２段の掘方をもつマル土坑によって構成されている。そして、その東半分を盛土による土手によって囲んでいる。小柴分類のＢ４類にあたる。イチ土坑内ほぼ全域に薄く炭層が広がっている。マル土坑の埋土は、イチ土坑側から流れ込んだような状況を呈しており、焼土塊や炭化粒はみられないが、径３cm以下の円礫をやや多く含む。周囲をめぐる土手の盛土は、地山起源と思われる黄褐色系の粘質土によって構成されており、一見すると検出が困難であったが、下面に炭層が広がっていたことや、調査の進展に従って下面との乾燥の進行具合に差が出たことなどで、ようやく認識できた。第４章第３節で詳述するが、イチ土坑・マル土坑ともに被熱探査を行なっている[註1]。

以上、柱穴やイチマル土坑についてみてきたが、住居内での平面的な位置関係をみると、やや不均衡な印象を受ける。今認識している周囲に本来はベッド状遺構がめぐっていた可能性もあるが、既に削平を受けているようで、不明といわざるをえない。

出土遺物　広口壺（175・176）、甕（178）、高杯（179）、有孔鉢（180）とともに赤褐色系を呈する胎土の小片もみられるが、総じて出土量は少ない。

時　　期　遺物はいずれも小片で時期の判断は困難であるが、おおむね庄内式併行期の範疇に入るものと考えられる。

註１　被熱探査については、兵庫県立大学防災教育センター森永速男先生に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った（第４章第３節）。記して感謝する。

ＳＨ９（図版19・43-181～191・44-192～199）

検出状況　調査区のほぼ中央で検出した。ＳＨ５・６に切られる。

形状・規模　平面形が不整な円形である。遺構は全体的に後世の削平をかなり受けており、深さは５ｃｍほどしかなかった。

屋内施設　しっかりと掘り込まれた柱穴はＳＰ１のみで、他は浅いたわみ状を呈していた。住居のほぼ中央にイチマル土坑とその北側に住居内土坑ＳＫ１を検出した。イチ土坑は長辺1.7m、短辺0.4mの浅い長楕円形を呈し、炭や焼土塊が少量出土した。マル土坑も同じく長楕円形を呈し、長辺1.2m・短編0.4mを測る。マル土坑の埋土はイチ土坑から流れ込んだような状況を呈している。埋土からは、径２ｃｍ大を主体に、少量の４ｃｍ大の焼土塊などが出土している。以上の様相からは小柴分類Ｂ２にあたる。

出土遺物　床面から遊離した状態で、広口壺（181･182）、無頸壺（184）、甕（186～193）、高杯（194）、水差し（196）、有孔土製円盤（195）やサヌカイトの砕片（127.7ｇ）が出土した。マル土坑からは広口壺（197）や脚台（198）、サヌカイトの砕片（15.9ｇ）、ＳＫ１からは広口壺（199）がそれぞれ出土した。

時　　期　出土遺物とイチマル土坑の形状から弥生時代中期後半に位置づけられる。

ＳＨ10（図版20・45-200～203）

検出状況　調査区の北東側に位置し、SH20を切り、ＳＨ４に切られる。

形状・規模　一辺5.5mの方形を呈する。東辺のみに高さ10cmほどの高まりがある。検出面からの深さは約10cmで、床面の標高は3.8mである。埋土に径３ｃｍ以下の黄褐色地山ブロックを少量ながら含むことから、埋戻し土であると考えられる。

屋内施設　柱穴は確認していないが、床面の中央付近で炭層の広がりを２箇所検出した。１箇所目は長辺95cm・短辺55cm、２箇所目は長辺1.4m・短辺70cm以上の不定形な長方形、もしくは楕円形の平面形を呈する。床面は平坦ではなく、柱穴も検出できなかったが、炭層の広がる比較的安定した土層上面を床面と判断した。

出土遺物　出土遺物のうちで図化可能なものは高杯（200～203）のみであり、ほかは小片が占めていた。このうち202は讃岐産と思われる胎土を有する。これ以外にも、在地の胎土とは明らかに異なるにぶい黄橙色のキメの細かい胎土をもつ小片も少量ながら出土している。

時　　期　庄内式併行期の中でも新相にあたると考えられる。

ＳＨ20（図版21～23・44-204～220・45-221～226）

検出状況　調査区北東側で、ＳＨ４・10に切られ、SH21を切る。

形状・規模　長辺6.9m・短辺6.0mを測る平面方形を呈する。SH10床面からの深さは約15cmで、床面の標高は3.6mである。最終埋土である２層はブロックこそ含まないものの、３・３’層は粗砂主体である。特に３’層は黄褐色地山を径２ｃｍ以下のブロック状に多く含むことから埋戻し土であると考えると、SH10構築にあたり、SH20の南側に堆積しているＶ層を利用した可能性もある。

屋内施設　柱穴、イチマル土坑、ベッド状遺構を検出した。５基の柱穴はその位置関係からすべてが

主柱穴であると考えられるが、SP２と対になる柱穴はなかった。いずれも径は約30cmで、深さはSP２が約40cmを測る以外は約30cmであった。

イチマル土坑は、幅55cm・長さ120cmの長楕円形を呈するイチ土坑と径約70cm・深さ約20cmのマル土坑からなる。これら両土坑の西側を除く辺には盛土による土手が伴っており、小柴分類のＢ４類にあたる。土手の高さは約２cmである。イチ土坑とマル土坑は幅約20cmの小溝でつながっている。そのイチ土坑には炭層が2～3cmの厚みで堆積しており、先述の小溝に流れ込んだような状況をみせている。マル土坑の埋土には炭化粒や灰を多く含んでおり、底面付近からは直口壺（221）や甕（222）が出土している。第４章第３節で詳述するが、イチ土坑・マル土坑ともに被熱探査を行なっている[註1]。

ベッド状遺構は盛土によるもので、四周をめぐっている。幅は西辺のみが約80cmなのに対し、他の三辺は約1.2mである。高さは概ね20cm前後で、北東隅のみがやや高く、約25cmを測る。ベッド状遺構の下端には、幅約８cm、深さ１～５cmの断面Ｕ字状の溝がめぐっており、おそらくはベッド状遺構の盛土の崩落を防ぐための壁押さえの板材を嵌め込むためのものと考えられる。盛土は水平に堆積しており、特に北辺では積み上げのより細かな単位が観察できた。その盛土を掘り下げた北東隅の一角では浅い炭層が広がっており、そのすぐそばでは直口壺（223）、細頸壺（224）、甕（225・226）が比較的まとまって出土した。

註１　被熱探査については、兵庫県立大学防災教育センター森永速男先生に依頼し、分析結果についての玉稿を賜った（第４章第３節）。記して感謝する。

出土遺物　床面から遊離した状態で、壺（204～206）、甕（208～211）、高杯（212～217）、鉢（207・220）、蓋（218）が出土している。マル土坑からは、完形に復元できる直口壺（221）や甕（222）が、ベッド状遺構の盛土内からは直口壺（223）、細頸壺（224）、甕（225・226）がそれぞれ出土している。また、住居埋土からはにぶい橙褐色系を呈しキメの細かい胎土の小片が、マル土坑埋土からは褐色系・赤褐色系の胎土の小片が出土するなど、図化は困難ではあるが、明らかに外来系である破片が一定量出土している。

時　　期　弥生時代後期後半に帰属する。

ＳＨ11（図版24-１・45-227～230）

検出状況　調査区西側で、ＳＨ６に切られる。

形状・規模　面積の大半をＳＨ６によって削平されており、北側の一辺（2.2m）のみが完存している。

屋内施設　床面がほとんど残存していないために内部構造などの詳細は不明である。

出土遺物　図化可能なものは広口壺（227）、甕（228）、鉢（229・230）のみで、非常に少ない。

時　　期　出土した遺物はいずれも弥生時代後期後半のものである。

ＳＨ12（図版24-２・45-231～233）

検出状況　調査区南西部で検出した。SH13を切る。

形状・規模　平面形が方形を呈する。床面は削平により、完全に失われていた。完存する周壁溝西辺は約４ｍを測る。一方、東西幅は正確な数値を知ることはできないが、単純にＰ１・Ｐ８の中心で折り返した場合約4.8mとなる。以上から復元した周壁溝内の面積は19.2㎡である。また本来の床面の標高は削平のため不明である。現状の標高は約3.75mであるが、周壁溝が５cm程度の深さを保っていることから、それほど大きく削平されているとは考えにくい。

屋内施設　柱穴と周壁溝を確認した。柱穴は８基を確認している。そのうち主柱穴はSP１・SP３・SP４・SP８・SP９・SP10の計６基である。掘方の平面形は円形を基本としている。SP１は掘方径15cm、検出面からの深さ約0.55mを測る。SP３は掘方径20cm、検出面から最深部の深さ約35cmを測る。SP４は掘方径30cm、検出面からの深さ約0.7mを測る。SP８は掘方径15cm、検出面からの深さ約30cmを測る。SP９は掘方径25cm、検出面からの深さ約40cmを測る。SP10は掘方径30cm、検出面からの深さ約0.7mを測る。根石として長軸20cm・短軸10cm・厚さ５cmの河原石を利用していた。SP10からは遺物が出土している。その他にSP６・７がある。SP６は掘方長軸25cm・短軸15cmの歪な形をしている。検出面からの深さは５cmである。SP７は掘方径30cmで検出面からの深さは10cmである。これらは主柱穴として挙げたものと比べて浅く、本建物の中軸線上に位置している点、周壁溝際にある点から、梯子など出入口に関連する可能性が考えられる。特にSP６は梯子の接地点である可能性がある。周壁溝は先述の通り西半のみ残存していた。幅10cm・検出面からの深さ５cmを測り、断面はゆるやかなＵ字形を呈する。また底には径５cm・深さ３cmの杭痕跡状の凹みが認められた。この窪みは北辺では確認していない。燃焼施設は削平によって失われたとみられ、痕跡も残っていなかった。このことから本建物の燃焼施設はイチマル土坑のような深い掘方をもつものでなかったと考えられる。

出土遺物　図化可能なものは、鉢（231・233）と高杯（232）のみと非常に少ない。

時　　期　庄内式併行期の範疇に収まる。

SH13（図版25・45-234～239）

検出状況　調査区南西部で検出した。SH12に切られ、SH15・SH16を切る。

形状・規模　遺構埋土は５cmも残っておらず、南半の埋土は後世の削平のため完全に失われていた。周壁溝から一辺約4.5mを測る方形の竪穴建物であることがわかる。周壁溝内の面積は約20㎡である。床面の標高は約3.8mである。

屋内施設　柱穴と周壁溝、イチマル土坑を確認した。柱穴は４基確認した。SP１は掘方径約50cm、検出面から最深部までの深さは30cmを測る。根石として長軸約27cm・短軸約21cm・厚さ13cmの河原石を利用していた。SP２は掘方径約50cm、検出面から最深部までの深さは35cmを測る。SP３は掘方径約40cm、検出面から最深部までの深さは45cmを測る。SP４は掘方径約60cm、検出面から最深部までの深さは65cmを測る。３cm前後の円礫を根固石として利用している状況を確認した。柱穴間距離は２m前後である。周壁溝は東辺の一部を除いて完存していた。幅15cm、検出面からの深さは５cmを測る。断面はゆるやかなＵ字形を呈する。燃焼施設としてイチマル土坑を確認した。建物のやや南寄りに設けられている。イチ土坑は長軸1.25m、短軸65cmを測る。検出面からの深さは５cmで、一部さらに５cmほど落ち込む箇所がある。炭は掘方底に薄く広がっており、確認した炭の膜は１面のみである。また中央で太さ３cmの炭化材が地山に突き立っていた。一方、マル土坑は長軸60cm、短軸40cmのやや歪な隅丸方形を呈する。深さは30cmを測り、底には径５cm、深さ５cmの杭状の痕跡が認められた。これらイチマル土坑には土手は伴わない。

出土遺物　マル土坑からは広口壺（234）、高杯（235）が、イチ土坑からは広口壺（236）、高杯（238）、小型器台（239）がそれぞれ出土している。

時　　期　　庄内式併行期の範疇に収まる。

ＳＨ14（図版26-１・45-240～242）

検出状況　　調査区北東隅に位置し、ＳＨ８に切られる。

形状・規模　　今回検出した大部分をＳＨ８に切られ、北半は調査区外に広がっているために、全景が不明であるが、残存している南辺は2.5mを測る。平面形は隅丸方形と推定できる。検出面からの深さは約20cmである。埋土１・２は５cm以下の円礫を少量含むが、地山などをブロック状で含むことはない。ただ、３層はしまりも強く黄褐色地山をブロック状に含むことから、貼床、もしくはベッド状遺構の盛土である可能性もある。

屋内施設　　柱穴を２基確認したが、その位置から主柱穴ではない可能性がある。径は15cmと25cmで、深さは５cm程度と非常に浅い。

出土遺物　　甕（241）が出土した。また、阿波の影響を受けている甕（240）や、弥生時代中期の広口壺（242）、磨製石庖丁（写真図版60）なども伴出している。

時　　期　　様々な時期の遺物が混在しているが、もっとも新しいのは240で庄内式併行期の範疇に収まる。

ＳＨ15（図版27）

検出状況　　調査区南西部で検出した。SH13に切られ、SH16を切る遺構である。

形状・規模　　床面は後世の削平によって完全に失われていた。平面形は方形を呈し、周壁溝は南北約３m、東西約3.3mを測る。周壁溝内の面積は10㎡である。本来高床部が伴っていた可能性があるが、現状では不明である。床面の標高は削平のため不明である。現状の標高は約４mであるが、周壁溝がほぼ完存していることから、それほど大きく削平されているとは考えにくい。

屋内施設　　柱穴と周壁溝、イチマル土坑を確認した。柱穴は４基確認した。SP１は掘方楕円形、長軸60cm・短軸30cmを測る。検出面から最深部までの深さは40cmである。SP２は掘方円形で径60cmを測る。検出面から最深部までの深さは30cmである。SP３は掘方楕円形で長軸55cm・短軸40cmを測る。検出面から最深部までの深さは15cmである。SP４の掘方は歪で、径約60cmを測る。検出面から最深部までの深さは約60cmである。底では木材が横位で検出された。この木材は断面Ｌ字形で、幅約10cmを測る。礎板の可能性もある。周壁溝は南辺以外完存していた。幅約10cm、検出面からの深さ５cmを測る。断面はゆるやかなＵ字形を呈する。イチマル土坑のうち、イチ土坑はSH13の周壁溝とピットに切られており、残りは良くなかった。東西85cm・南北60cm（復元値）を測る。南東方向に歪に延びているようにみえるが、溝状の施設が付属していた可能性がある。埋土には炭が多く含まれ、掘方下面では炭が薄く堆積していた。一方、マル土坑は長軸65cm・短軸50cmで、南側が張り出した部分が一段深く掘りくぼめられている。検出面からの深さは20cm、一段深い部分は30cmを測る。北半部には杭状の痕跡が４箇所認められた。これらの深さは約５cmである。埋土には炭が含まれていた。

出土遺物　　時期を判断できる遺物は出土していない。

ＳＨ16（図版27）

検出状況　　調査区南西部で検出した。SH13・SH15に切られる。

形状・規模　周壁溝の一部が残存しているのみであった。この周壁溝が直線的にのびているため方形の竪穴住居であることは間違いない。本来の規模は不明であるが、周壁溝の残存状況から南北約3.1m以上、東西約3.6m以上の規模を有していたと考えられる。そのため床面積も不明であるが、少なくとも11㎡以上である。

屋内施設　周壁溝を確認した。周壁溝は二重みられ、北側のものは北辺のみ残存している。幅５cm、検出面からの深さ３cmを測る。南側のものは北辺と東辺が残存している。幅約10cmで東半はより広がる。検出面からの深さは５cm以下である。これら２本の周壁溝は北側のものが南側のものを切る。本住居に伴う柱穴、燃焼施設は確認していない。

出土遺物　時期を判断できる遺物は出土していない。

SH17（図版27）

検出状況　調査区南西部で検出した。ST１を切る。

形状・規模　周壁溝の一部のみ残存していたため本来の規模は不明である。ただし残存する周壁溝が直線的であることから方形の竪穴住居であると考えられる。

屋内施設　周壁溝を確認した。幅10cm、検出面からの深さ３cmを測る。柱穴、燃焼施設は確認していない。

出土遺物　時期を判断できる遺物は出土していない。

SH18（図版26-２）

検出状況　調査区中央東端、SH３の東側に位置する。

形状・規模　後世の削平により、規模は不明である。炭化材の検出により辛うじて認識できた。屋内施設などもなく、積極的に住居と断定する材料に乏しいが、SH３と平行するような浅い落ち込みがあったために、現場での判断を優先したい。また、遺構の底面に接して炭化材が出土したことから焼失住居の可能性も指摘しておく。

出土遺物　時期を判断できる遺物は出土していない。

SH19（図版28-１）

検出状況　調査区北東隅に位置し、SH10・20に切られる。

形状・規模　径約８mの平面円形を呈する。全体の２割程度しか残存しておらず、詳細は不明といわざるをえない。床面は既に削平を受けており、埋土はなかった。

屋内施設　周壁溝を検出した。幅20cm・深さ４cmであった。また、平面形が15～30cmの円形の落ち込みを５基検出したが、いずれも約７cmと浅かった。

出土遺物　時期を判断できる遺物は出土していないが、周壁溝が円弧状を呈することから、今回検出した住居の中でも古い時期の可能性がある。

SH21（図版20）

検出状況　調査区北東側に位置する。SH20に切られる。

形状・規模　円弧状の落ちが検出できたのみである。そこから推定すると、径約８mに復元できる。屋内施設や出土遺物もほとんどなく、詳細は不明と言わざるをえないが、現場での認識を優先して、住居の可能性を指摘するにとどめておく。

遺構番号	形　態	規模			燃焼施設	出土遺物	時　期	備　考
		長軸	短軸	床面積				
SH1-1	隅丸方形	5.1	4.7	24	C	土器	庄内式併行期後半	
SH1-2	隅丸方形	4.8	4.5	21.6	B5	土器・砥石	庄内式併行期前半	
SH2	方形	4.8	4.3	20.6	C1	土器	庄内式併行期後半	
SH3	方形	5.5	5.3	29.2	D?	土器	庄内式併行期後半	
SH4	方形？	4	3.7	14.8	C2	土器	-	
SH5	六角形	4.8	4.6	22.1	B4	土器・管玉	庄内式併行期	
SH6-1	隅丸方形	3.8	3.7	14.1	D	土器・管玉	庄内式併行期後半	
SH6-2	隅丸方形	3.7	3.7	13.7	C3？	土器	庄内式併行期後半	
SH6-3	隅丸方形	3.6	3.6	13	B2?	土器	-	
SH7	隅丸方形	-	-		-	土器	-	
SH8-1	隅丸方形	3.7	-		D	土器	庄内式併行期	焼失住居
SH8-2	隅丸方形	3.5	-		B4	土器	庄内式併行期	
SH9	不整円形	6.4	5.5	35.2	B2	土器	弥生時代中期後半	
SH10	隅丸方形	5.5	5.5	30.3	C3？	土器	庄内式併行期後半	
SH20	方形	6.9	6	41.4	B4	土器	弥生時代後期後半	ベッド状遺構
SH11	隅丸方形	2.4	-		-	土器	庄内式併行期	
SH12	方形	4.2	-		D	土器	庄内式併行期	
SH13	方形	4.8	4.7	22.6	B5?	土器	庄内式併行期	
SH14	不整方形	-	-		-	土器	弥生時代中期？	
SH15	方形	3.2	-		B2?	土器	-	
SH16	方形	-	-		-	土器	-	
SH17	方形？	-	-		-	土器	-	
SH18	長方形？	-	-		-	土器	-	
SH19	円形？	-	-		-	土器	-	

表１　竪穴住居規模等一覧

土　　坑　土坑は７基検出した。このうち、SK５～７からは弥生時代中期後半の土器が出土した。ここでは、最も豊富な遺物が出土したSK６についてふれておく。

SK６（図版29・46・47-252～255）

検出状況　調査区北西端付近で検出した。SH１に切られる。

形状・規模　直径約２ｍの不整な円形を呈する土坑である。全体の約１/３はSH１による削平を受けている。深さは25cmで、西側の肩のみ２段掘りになっている。遺物の大半は底面から遊離した状態で出土した。埋土に地山などのブロックは混じらないが、自然に埋没したものではないと考えられる。

出土遺物　広口壺（243～249）は当地に通有な器種であるが、特に243は胴部が強く張る。243には板状工具の小口の圧痕文が、244には二枚貝の腹縁の圧痕文がそれぞれみられる。247は、前二者と比べてやや小型である。249は古相を呈するもので、混入の可能性が高い。直口壺（250）は本土坑中ではやや新相を呈する。このほかに、無頸壺（251）、甕（252～254）、脚台（255）が出土している。

時　　期　やや古相を呈するものもみられるが、中期後半（Ⅳ-２）に廃棄されたと考えられる。

ピ　ッ　ト　今回の調査では、100基あまりのピットを確認した。このうち有機的なつながりを認識できたのは後述するSB１のみであった。大半のピットは、互いに脈絡がないようにみえることから、柱穴でないものも多く含まれていると考えられる。本来ならば、それぞれについて個別に考察すべきであるが、ここでは比較的大きな遺物が出土したものの紹介にとどめる。

SP25（図版33-１、図版47-256・257）

検出状況　調査区北半で検出した。SH５の北東側に近接している。

形状・規模　長軸36cm・短軸28cmの平面楕円形を呈し、深さは65cmを測る。ただ、土器の底面のレベルで、ピットの径が大きく変わっている点や、ごくわずかではあるが１層が２層を切っているようにも見える箇所があった点から、本来、１・２層は別の遺構であった可能性も否定

出来ない。また、正位置に置かれた甕（257）の上に、鉢（256）は倒立して被せてあったことから土器棺であろう。棺内からは遺物は出土しなかった。

出土遺物　蓋と考えられる鉢（256）は一定しない口縁部を有し、片口に見える箇所もある。内面は比較的入念に磨かれている。一方、身の可能性が高い甕（257）は、口縁部や底部の形状、調整技法や全体的な器形から、当該地域に通有なものというよりは、他地域、おそらく阿波地域の影響を受けていると考えるべきであろう。

時　　期　庄内式併行期の中でも古相を呈する。

SP46

検出状況　調査区南西側で検出した。SH15を切る。

形状・規模　径約20cmの平面円形を呈し、深さは37cmを測る。

出土遺物　鉢（258）の口縁部は歪で、一定しない。外面には粗いナデ・オサエが、内面には反時計回り方向のピッチの短いハケメが残り、つくりは総じて粗い。

時　　期　庄内併行期の範疇に収まると考えられる。

SP82（図版33-２・図版47-259）

検出状況　調査区北端で検出した。SH２の北側程近い地点に位置する。

形状・規模　短軸35cm、長軸は復元長45cm、深さは40cmを測る。土器はピットの北側で出土した。そのため、その存在に気付いたのが、土層断面確認のための半截後であったため、平面形についての正確な記録を取ることができなかったが、楕円形を呈していたものと記憶している。

出土遺物　甕（259）の口縁部は緩やかな「く」の字状を呈する。外面の右上がりタタキは粗い。

時　　期　庄内併行期の中でも古相を呈すると思われる。

SP97（図版33-３・図版47-260）

検出状況　調査区北東側で検出した。SH10・20の東側に位置する。

形状・規模　長軸74cm・短軸47cmの楕円形を呈し、深さは42cmを測る。土器は北東隅に、肩に接するようにして出土した。

出土遺物　甕（260）の口縁端部は上方に摘み出されている。器壁は厚く、外面には左上がりタタキを縦方向のハケメが消す。

時　　期　庄内式併行期の中でもやや古相を呈すると思われる。

木 棺 墓　主に調査区南西側６基検出した。残存状況はあまりよくないために、木棺墓と即断はできなかった。しかし、長方形様の平面形を呈すること、遺溝の床面に木棺材を嵌めたと思われる小溝を検出したことを重視し、木棺墓である可能性が高いと判断した。

ST１（図版30-１・47-261・262・60-S８）

検出状況　調査区南東側で検出した。SH17とSP29に切られる。

形状・規模　長辺1.6m・短辺0.7mの長方形を呈する。平面形や埋土の堆積状況、底面で木棺の小口穴を考えられる落ちを検出したため、木棺墓の可能性が高いと判断した。埋土のうち１層には褐灰色・黄褐色地山のブロックはなかったものの、３層ではその地山ブロックがみられることから埋戻し土の可能性がある。

出土遺物　甕（261）の小片や、高杯（262）、管玉（Ｓ８）が出土している[註1]。管玉（Ｓ８）は、硬質な石材を使用し、石針による両面穿孔である。

註１　今回の調査で出土した管玉（Ｓ３～Ｓ８）については、米田克彦氏のご教示をもとに福井が文章化した。誤記や誤解があればすべて筆者の責である。

時　　期　高杯がやや古層を呈するが、概ね弥生時代中期後葉のものと考えられる。

ＳＴ２（図版30-２）

検出状況　調査区南半で検出した。

形状・規模　長辺2.0m・短編0.8mの長方形を呈し、長軸方向はＳＴ１・ＳＲ１に近い。深さは10cm程度とかなり浅い。本遺構はほぼ中央に長辺1.5m、短辺0.5mの３～４cm程の浅い掘り込みがみられ、底面は比較的平らで安定している。また、土層断面の２層のような堆積が部分的に確認できたことから、本遺構も木棺墓である可能性を指摘しておきたい。

出土遺物　図化困難な極小片が少量出土している。

時　　期　ＳＴ１とほぼ同じ方向を指向している点や埋土の類似性からほぼ同時期のものと捉えることができよう。

ＳＴ３（図版30-１）

検出状況　調査区南半で検出した。ＳＲ１の右岸肩にごく近く、ＳＴ１・２とほぼ同方向、ほぼ等間隔に並ぶ。

形状・規模　長軸1.3m・短軸0.65mのやや不整な長方形を呈する。ＳＴ１・２よりも一回り以上小型である。北東側の小口部分と北側長辺に部分的ではあるが、幅８cm・深さ２cmの小溝を確認している。木棺材を嵌め込んだ溝の可能性がある。また、土層断面の３層は地山ブロックを含んでおり、既にみたＳＴ１・２の埋戻し土と考えられる土層にも近い。以上の点から、本遺構に関しても、木棺墓の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物　ＳＴ２同様、図化困難な極小片が少量出土している。

時　　期　ＳＴ２同様、ＳＴ１とほぼ同時期のものと考えられる。

ＳＴ４（図版31-２）

検出状況　調査区南半で検出した。長軸方向は、ＳＴ１から３やＳＲ１に直行する。

形状・規模　長軸1.4m・短軸0.6mの隅丸長方形を呈する。ＳＴ１～３よりも残りは良いが、それでも深さは20cm程度である。本遺構の南半小口部分にも幅５～８cm、深さ６～８cmのコの字状を呈する小溝が検出された（写真図版28-３）。堆積状況や埋土は、ＳＴ１～３に近く、一連の木棺墓と考えられる。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　期　直接的に時期を示すものはないが、遺構の状況～ＳＴ１から３と関連を持っている可能性はある。

ＳＴ５（図版32-１）

検出状況　調査区南西隅で、ＳＴ６とともに検出した。ＳＴ１～３とはやや向きを異にするものの、ＳＲ１や後述するＳＴ６とはほぼ平行している。

形状・規模　長辺0.7m・短辺0.4mの隅丸長方形を呈し、深さは10cmにも満たない。残存状況はあまり良くないものの、両小口部分には幅10～20cm、深さ約２cmの窪みがみられ、小口穴の残骸

ではないかと考えている。調査時には土坑として認識していたが、ＳＴ１～４の付近で出土したことも勘案して木棺墓の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　期　直接的に時期を示すものはないが、遺構の状況からＳＴ１～４と関連を持っている可能性は大いにある。

ＳＴ６（図版32-２）

検出状況　調査区南西隅で、ＳＴ５とともに検出した。長軸方向はＳＴ６とほぼ平行している。

形状・規模　長辺80ｃｍ・短辺0.55ｍの不整楕円形を呈し、深さは５ｃｍを測る。上方はかなりの削平を受けているようであるが、底部付近は比較的残りがよい。両小口部分で、ＳＴ５よりも明瞭な小溝を検出した。特に南西側の小溝は断面形もしっかりとしており、木棺墓の小口溝の可能性が高いといえる。小口溝間は35ｃｍと非常に狭いことから小児棺の可能性も合わせて指摘しておく。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　期　ＳＴ５同様、直接的に時期を示すものはないが、ＳＴ１から５と一連の遺構である可能性は高いといえる。

溝

ＳＤ１（図版34・48・49・50・51-352-366・60-Ｓ９・Ｍ１）

検出状況　調査区のほぼ中央で検出した。北西から南東方向に走行して、ＳＲ１に取り付く。

形状・規模　幅1.6ｍで断面形は幅広いＵ字の底部から緩やかに広がっている。底面のレベルは、北西端で標高3.72ｍ、中央付近で3.66ｍ、ＳＲ１との取り付き部分で3.3ｍを測り、北西・南東端の比高差は約40ｃｍある。このことから、ＳＤ１は旧河道であるＳＲ１からの取水のためではなく、むしろ集落からの排水路として機能していたと考えられる。埋土の堆積状況からは溝浚えのような営為はうかがえなかった。

出土遺物　コンテナ（天昇電気工業製テンバコP18、約18㍑）に約50箱の出土量であった。そのなかで図化したのは、古式土師器を中心とした104個体（263～366）と銅鏃（Ｍ１）である。

263～290は壺である。263は頸部に数段の櫛描直線文を有する。弥生時代中期前葉に比定できる。264は頸部内面に特徴的な櫛描文を施し、色調も在地のものと比べるとやや違和感を覚える。管見の限りでは当該地に類例はみない。265～274は中期後葉のものである。265～269などは播磨に通有な広口壺である[註1]。270には板状工具による斜位の圧痕文がみられる。272は短頸壺の口縁部で、端部には斜位の圧痕文と３個一対の円形浮文がある。273は直口壺で刻目が微細に残る突帯を有する。274は大型の受口壺で外面に斜位の圧痕文がみえる。275～284は後期のもので、長頸壺の口頸部のうち、275はやや古層を、281～283は新相を呈する。284～290は概ね庄内式併行期の範疇に収まる。284の胎土は明赤褐色の比較的精良なものであることから、搬入品の可能性が高い。285は複合口縁壺の口頸部で口縁部外面と頸部上半には横方向の沈線状ミガキを施す。287は右上がりの粗いタタキを施す。290は胎土の色調から、搬入品の可能性がある。

291～318は甕である。291・292は小片であるが、その形状から後期のものと考えられる。

293～304は概ね庄内式併行期のもので、293は上下に摘み出す口縁端部を、294は上方のみに摘み出す口縁端部をそれぞれ有する。295～299は庄内式甕である。胎土の色調と含有する鉱物粒から、いわゆる播磨産の庄内式甕と考えられる。いずれも小片のために全体像は不明であるが、口縁部の形態や口縁端部の製作技法などにバリエーションが認められる。胴部外面のタタキはいずれも細密で、平行、もしくはわずかに左上がりの方向に行われている。一方、内面には横方向のケズリと外面のタタキに伴うオサエが残る。297は他と比して大型で、口縁端部に擬凹線が１条みえる。300は肩が張らない器形を呈する。その器形と胎土から在地のものではない可能性がある。301・302は口縁端部を上方に拡張するタイプで、302の胎土はやや異質な印象を受ける。303は甕、または鉢と思われるもので、302同様、やや異質な胎土を有する。304は外面右上がりタタキをハケメで消している。305は胴部上半にヘラ描き波状文を施す布留式の甕である。306～318は底部である。底部の断面観察が可能な個体のほとんどが輪台技法（都出1974）によるものである。その底部外面には沈線を引くもの（311）や製作時に敷いていた木の葉の葉脈痕が残るもの（311）、タタキを行うもの（312・313・316）がみられる。319・320は甕、もしくは鉢の底部と思われる。

321～336は高杯である。321～324は中期後半のもので、321の杯部は椀形を呈する。322・323は脚裾部に透し孔を穿つが、322の三角形透し孔は未貫通である。325は後期の有稜高杯の杯部である。326・327は有段高杯で、後者は刻目を施す。326～328は概ね庄内式併行期にあたる。329～336は脚部で、器形として緩やかに広がるもの、柱状を成すものがある。その製作技法は中空、中実に分けられ、内面に軸芯痕を残すものもある。また、杯部の製作方法が明らかなものでは、窪ませた脚頂部に粘土を充填し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形するものが多い。329･330は後期後半、それ以外は庄内式併行期のものである。

337～344は器台である。338は底部の粘土円盤の剥離痕跡がみえる。339～342は小型器台で、庄内式に入って出現する新出の器種である。343・344は鼓形器台で、両者は直接接合しないものの、重なって出土している（図版34-１）ことから本来は同一個体である可能性が高い。それぞれ口縁部、裾部界はヘラ描き沈線文を引くことによって区分している。345～349は鉢である。345～347は小型、348・349は大型に分けられる。

350・351は有孔鉢である。いずれも焼成前に穿孔されている。

352～361は器形や胎土などから搬入品と考えられる一群である。352・353は鋭く屈曲する口縁部を有し、褐色系の胎土に石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含むことが特徴で、前者は讃岐、後者は少なくとも四国北東部産と考えられる。354・355は高杯で、いずれも四国北東部と考えられる。357は複合口縁甕の口縁部で、山陰にその系譜がたどれるが、製作地については胎土分析を行っていない以上、保留とし、山陰系と位置づけるにとどめたい。358・359は生駒西麓で製作されたと考えられる広口壺である。同様の資料は、後述するＳＲ１でも出土している。ここで、興味深いのは391のように器形や製作技法は故地のものと峻別しがたいが、胎土が明らかに異なり、遺跡周辺で製作された可能性が極めて高い個体が存在している点である。これは、太子町川島遺跡20溝でみられたＢ類土器の様相とも類似し、遠隔地からの搬入品が在地化する現象としてすでに評価されている（石野1971）[註2]。

註１　市之郷第Ⅲ類（今里1943）、壺形土器Ａ（山本1971）、播磨型壷（森岡1985）、播磨型装飾壺（友久1990）、壺Ａ・

播磨系広口壺（岸本1995a）、装飾壺（篠宮1996）などと呼称されている一群である。

註２　今回の出土土器の製作地の同定は、肉眼観察によるものである。観察表にも記載している～産としたものは、明らかに胎土が在地のものではないもの、～系としたものについては製作地こそ不明であるが、少なくとも技術的系譜が当該地以外に求められることを分類基準とした。ただ、讃岐・四国北東部産としたものと河内産としたものの峻別は非常に困難で、器形や製作技法を加味して判断した。

362～366は手捏ね土器である。いずれも鉢形である。ただ、362・363のように比較的精緻なものの一方で、365のように不精美な器形で、調整痕をほとんどそのまま残すような粗いものもあり、両者を一括りにはしがたい。366は土製勾玉である。

これら土器・土製品以外にも、サヌカイト製打製石庖丁（写真図版80）、性格不明の石製品（Ｓ９）や銅鏃（Ｍ１）なども出土している。打製石庖丁は長軸12.4cm、短軸4.9cm、重さは104.8gを測る。腹面側には自然面を残す。性格不明の石製品（Ｓ９）は、残存長辺5.5cm、同短辺2.7cm、厚さ1.4cmを測る。周囲は全て欠落しており、生きている面を残さない。プライマリーな面が残存しているのは、長辺に平行して突線状に盛り上がりがある面とその裏面のみである。仮に前者をＡ面、後者をＢ面と呼ぶことにする。まず、Ａ面についてみてみると、その突線状盛り上がりは、削り出したり研ぎ出したりしたとは考えにくい。また、その付け根部分には極めて小さな気泡状の空洞がみえる。一方、Ｂ面は僅かに湾曲しており、その表面は極めて平滑である。詳細にみると、その表面には細かな不定方向の擦痕が残存しているが（写真図版79）、その上端の稜線は、丸みを帯びており、石材を擦った痕跡であるとは考えにく。本資料については、管見の限りでは類例を知らない。銅鏃（Ｍ１）は残存長2.0cm、残存幅0.9cm、厚み４mmを測る。残存状況はあまりよくなく、緑青がみえる。鏃身の中央と茎がやや隆起しており側面からみると、両者の区別が付かない。また、関の部分にはバリが残っており、鋳放しのままである可能性が高いことから、弥生時代の銅鏃を分類した髙田氏の１類銅鏃に当たる（髙田2001）。

時　　期　庄内式併行期の中でも新相を呈するものが多く出土している。

旧河道

ＳＲ１（図版35～37・52～59・60-Ｍ２）

検出状況　調査区南東側で検出した。北東から南西方向に流下する自然流路である。

形状・規模　幅5.5m、深さ70cm、断面逆台形を呈する。河道という性格上、複数の不連続面が認められ、堆積状況は極めて複雑であった。出土遺物については、可能な限り層位毎の取り上げに努めたが、特に層位の境界では帰属層の判断が困難なものもあり、そういった意味では厳密な分別ができなかったものもある。そこで、各土層を類似する堆積状況をもとに最大公約数的に５層に大別し、可能な限り層位別に取り上げた。まずは、各土層の性格についてみていくことにする[註1]。

堆積状況　１層　ＳＲ１埋没後の地形の窪地に広がる湿地状堆積。古代以降の遺物を少量含む。SH12・13・15～17、ＳＴ１～６など調査区南半の遺構は本土層に覆われていた。

２層　１層と同じく湿地状堆積。色調などにより細分可能。古墳時代初頭の土器を中心にコンテナ（天昇電気工業製テンバコP18、約18㍑）に17箱分出土した。それに加えて、青

銅が付着した坩堝（Ｍ２）が出土したことは注目すべき事例といえる[註2]。それらのうち図化したのは372～391である。

３層　洪水による砂礫層。本土層の堆積により河床が約35cｍも上昇した。これに伴い、SD１の取り付き部分の一部も埋没した。出土遺物は、弥生時代中期後半のものを一部に含みながらも、中心となるのは古墳時代初頭のものである。また、局所的に土器溜まり状に出土したものもあったが、時期が混在していた（図版36）。土器の出土量は、本河道中で最も多く、コンテナに43箱分であった。うち図化したのは、392～486の95個体である。ただ、出土した弥生土器は、水流による摩滅をほとんど受けていないものが多く、また、比較的大きな破片が多かったことから、本調査区北東側に弥生時代中期の集落が存在している可能性が極めて高いといえる。

４層　本来的には３層の一部とするべきであろうが、粗砂が主体で細かなレンズ状堆積がみられたことから、独立させた。本層は最初期の埋土で、水流の下刻によって形成された大小の起伏に、部分的に堆積している。遺物も比較的多く、コンテナに10箱分が出土した。うち、487～523の37個体を図化した。

５層　本河道北側の肩部に部分的にみられた土層で、均質なシルトでしまりも強いことから地山の一部の可能性もある。遺物が出土しなかったこともこれを傍証しているのかもしれない。

註１　SR１の土層については、立命館大学 青木哲也氏に現地で観察していただき、ご教示を得た。

註２　坩堝の付着金属については、兵庫県立考古博物館（当時）　岡本一秀氏に分析を依頼し、報告文を頂いている（第４章　第２節参照）。

矢　　板　SD１とSR１の取り付き部分において、３層を掘り下げたところ、矢板と杭群を検出した。矢板は、いずれもSD１と直交する向きで20cｍ程度の間隔で４枚並んでいる。

杭　　群　杭群は２つあり、１つはSD１と矢板群との間に、もう一つはSR１の南側に位置している（図版36）。今、前者を杭群１、後者を杭群２とする。杭群１は、SD１の取り付き部分に抜き跡も含めて無作為に打ち込まれているようにみえる。４枚の矢板とあわせて考えてみても、SD１からの流れを堰き止める、もしくは緩和する以外に、その機能については不明といわざるをえない。また、杭群２は、列をなしているようにはみえるものの、水利を目的としているとは考えにくい。ただ、杭群２は流路の南側の一段高いところに構築されており、同じ段の12mほど下流の地点にもまばらな杭列がみられる（図版４）。ここでは、この河道の浅瀬で、例えば貯木場のような遺構を形成していた可能性を指摘しておくにとどめておく。

これまでみてきたように、SR１には水辺の遺構があり、また、大量の土器も出土していることから、当時の和久遺跡に居住していた人々の生活と密接な関連を有する河道であったことは間違いない。

出土遺物　出土した土器は、コンテナ（天昇電気工業製テンバコP18、約18ﾘｯﾄﾙ）に約100箱分であった。そのうち図化したものは、古式土師器を中心とする152個体（372～523）と青銅の坩堝（Ｍ２）である。また、SR１からは、既述のSD１とは異なり、割合こそ大きくはないが、弥生時代中期後半の土器も伴出している。いずれも残存状況はよく、ごく付近からの流入と考えられる。

372～391は２層出土である。

372～376は壺で、372～374は広口壺、375は直口壺、376は複合口縁壺である。375の胴部には削りを切るミガキが残る。376の口縁端面には粗い櫛描波状文と、渦巻状浮文の剥離痕跡がみえる。

377～379は甕で、377は、今回の調査では珍しくほぼ全体のわかる資料である。やや縦長の卵倒形の胴部に右上がりのたたきが残る。378・379は底部で、前者は平底、後者は尖り底である。

380～382は高杯である。380は中期のもので、ヘラ描きの鋸歯文がみえる。381・382は中実の脚部で、裾部に円孔が穿たれている。

383～386は器台である。383は、上下に摘み出す口縁端面に櫛描き波状文や円弧文がみえる。図面の正面では、３段の櫛描き波状文が頂部をややずらして描かれているのに対し、直線文と波状文が組み合わされている部分もある。また、後者には、微かではあるが、弧帯文をモチーフにしたように思える箇所もみえる。中期後半に比定できよう。384～386は小型器台で、庄内式併行期のものである。いずれも中空で、受部の底部はない。

387・388は鉢である。両者とも椀形を呈しているが、底部の形態が異なる。

389は有孔鉢である。左上がりのタタキがわずかに残る。

390・391は外来系土器である。390は阿波に、391は河内にその技術的系譜が求められると考えれれるが、胎土は在地のものの可能性が極めて高い。既に、ＳＤ１の註２でもふれたが、搬入品であるはずのものが在地化している興味深い例である。

392～486は３層出土である。

392～408は壺である。392は大型の広口壺であまり例をみない。比較的離れた地点で出土したものが接合している。393も同様のタイプではあるが、法量は小さい。いずれも中期前半に位置づけられる。394は無頸壺の胴部上半である。微細ではあるが、刻目のある突帯、櫛描直線文や波状文が残る。櫛描文のピッチは比較的短いようで、施文具の静止痕がみえる。中期前葉に位置づけられる。396は短頸壺で直立する口縁部が特徴で、後期中葉に比定できる。397・398は広口壺で、397の肩部に不精美な櫛描波状文が微細に残る。398は短い頸部から肩部にかけて右上がりタタキがみえる。399～406は複合口縁壺である。399・400は有文、401から404は無文である。前者のうち399には櫛描文と渦巻状浮文が、400には板状工具の圧痕文と櫛描波状文が施されている。頸部についてみてみると、405・406はともにほぼ直立しているのに対し、403・404は外反している。そして、後二者でも403は短く、404は長い頸部を持つ。今ふれた複合口縁壺はいずれも小片のため、断片的な情報しか持ち合わせてはいないが、口縁部の形態と頸部の形状から細分の可能性を含んでいる。407・408は底部である。397～408は庄内式併行期に収まるが、406の外面には横位の沈線状ミガキがみられることから、やや新相を呈すると考えられる。

409～426は甕である。409は逆Ｌ字形の口縁部を有する瀬戸内型甕である。410～414は弥生時代のもので、410・411は中期後半、それ以外は後期である。410は「く」の字形に外反する口縁部に、内側に立ち上がる端部を有する。411の内面に縦方向のケズリがみられる。412・413は口縁部の形態はやや異なるが、内面のケズリが器壁をこそぎ取るようにしている

が、器壁はさほど薄くない点で共通する。後期の中でも古相を呈する。414は右上がりのタタキの後に粗いハケメで平滑化している。在地の胎土ではない可能性がある。前二者よりも新しい様相を呈する。415～417は庄内式併行期に収まる。415・416は口縁部を叩き出しの後に、413は直口に、414は「く」の字形に折り曲げ、端部を上方へ摘み出している。417は416と似た形態ではあるが、比較的丁寧いに仕上げている。418～422は底部である。断面観察が可能なものについてはいずれも輪台技法によることがわかる。421は細密な右上がりタタキを縦方向にナデ消している。底部には葉脈痕が残る。422は小さな平底を呈するが、器壁は厚く、つくりも粗い。胎土は在地のものであるが、器面の発色に在地のもの比してやや違和感を覚える。423～426は布留式の甕と共通の属性を有する一群である。球形に近い器形を呈し、外面はハケメで仕上げている。口縁部は、緩やかに内湾したり、直線的に伸びたりしており、その端部にも内側に摘み出すもの（423）、丸く収めるもの（424）、上方に面を有するもの（426）、内傾する面をもつもの（425）とバリエーションが見て取れる。426はわずかに平滑にみえる丸底を呈する。

427～444は高杯である。427・428は水平口縁を有するもので、前者は屈曲部分に張り出しや突帯を持たない古いタイプで中期前半に、後者は口縁端部がやや垂下するタイプで中期後半にそれぞれ位置づけられる。429・430は椀形の杯部を有するもので、429は外面に刻目のある突帯と棒状浮文を貼り付けていることから中期前半に、430は凹線文に刻目を入れていることから同後半のものといえる。431はヘラ描き斜格子文、直線文、鋸歯文を施す。432は未貫通の三角形透し穴を穿つ。433は杯底部の粘土円盤の剥離痕がみえる。434～444は庄内式併行期のものである。434～436は有稜の杯部を、437・438は有段の杯部を、439は小型の椀形の杯部をそれぞれ有する。仕上げは縦方向のミガキ、もしくはナデであるが、436と439には横位沈線状ミガキがみられ、439はより細密である。440～444は脚部で、いずれも中空であるが、柱状を呈するもの（440・444）とやや広がるもの（441・442）に分かれる。破面の観察などで製作工程が復元できるものは、窪ませた脚頂部に粘土を充填することで杯底部を成形（440･442）し、脚頂部側面に粘土を接合することで杯部を成形（441･442）している。また、小片ではあるが、443は脚裾部に擬凹線文を３条めぐらしている。444は強く折り曲げて裾部としている。調整は概して粗く、前四者よりも相対的に新しいと思われる。

445～457は器台である。445のみが弥生時代後期、他は概ね庄内式併行期に当たる。445は口縁部と脚裾部がラッパ状に開く形状を呈し、胴部には２段一対の円孔を三対残す。446・447は但馬・丹波にその系譜を求めることができるもので、446の外面は胴部以外、内面は受部に細密な横位沈線状ミガキを施すのに対し、447にはそれらがみられない。449～457は小形器台とされている一群で、布留式に成立する小型精製器種を構成するものである。ここでは、浅い受部に柱状の脚部をもつもの（449～452）と円錐形に広がる脚部をもつもの（453～457）に大別でき、口縁部や脚裾部などの属性レベルでの細別が可能である。胎土は450と456･457のみが比較的精良で、それ以外はこれまでみてきた器種とさほど変わりはない。

458～465は鉢である。458は脚台部で、断面三角形突帯と棒状浮文を貼り付ける。内面に鉢底部の粘土円盤の剥離痕跡が残る。中期後半に比定できる。459も同じく脚台部であるが、器壁が厚くしっかりとした造りである。460は大型のタイプにつく把手である。後期後半に

わずかにみられる。461～465は概ね庄内式併行期に収まる。461も大型の部類に入る。庄内式併行期のなかでも後半か、もしくは布留式に入っている可能性もある。462～464はは当該期によくみられる形態で、鉢の深浅や脚台の有無で分類可能である。465は鉢としたが管見の限りでは、類例は見当たらない。類似する例としては美乃利遺跡（加古川市）SD84例が挙げられる（山田1997）[註1]。

註１　類例の検索を木製品にまで広げると、権現遺跡（姫路市）溝３出土例（福井2010,p187）や青谷上寺地遺跡（鳥取県）の平成12年度調査の７区Ｊ層（濃茶色植物腐植土層）出土例（湯村編2002,p332）などのような、編み籠の底部の可能性も指摘できよう。

466は有孔鉢である。後期後半以降、継続して存在する器種である。外面右上がりのタタキを縦方向にナデ消している。

467～482は、外来系の土器のなかでも、器形や胎土などの特徴から、搬入された可能性が極めて高いと判断した一群である。467･469･473は阿波、468･470～472･474･475は四国北東部、476は讃岐、477･478は吉備、479･480は山陰、481は丹波・但馬、482は河内にそれぞれ系譜が求められる。467は器形から東阿波型土器（菅原1987,p136）の広口壺と思われるが、にぶい黄褐色を呈する胎土には、角閃石粒や雲母粒は含まれるが結晶片岩粒はみられない。468は胴部最大径付近を境に縦方向のミガキを施している。469は大型の広口壺の頸肩部である。471･472は甕、473～475は高杯である。476は土製支脚の上半である。筒状を呈する胴部に上下に僅かに肥厚する口縁部を有する。口縁端部に刻目を施す。これに類する支脚は讃岐西部、丸亀平野西部や観音寺平野に分布の中心をもつ（大久保1990,p384・p391）。下川津Ⅳ～Ⅵ式にかけてみられるようで、弥生時代後期後半から庄内式併行期にあたる。管見の限りでは播磨での類例は知らない。477は上東式に通有な長頸壺の頸部下半で、左下がりの刺突文がみえる。478は酒津式の甕の口縁部で、端面には擬凹線文をめぐらす。479･480は複合口縁壺で、前者には羽状文を施す。481は鉢で、外面２次調整の沈線状ミガキがみられる。482は広口壺の口縁部で、端面に３条の沈線と竹管文をもつ円形浮文を施す。

483は蓋である。

484は把手で、外面の中心にしっかりとしたヘラ描き沈線を引き、その両側に対向する斜線文を施すことで、綾杉状のモチーフを構成している。

485は完形の土製品で、一見すると器種は不明のため、図化にあたってはこの土製品の坐りのよさを優先した。大まかな特徴は、径5.6cm、厚さ1.4cmの底面がわずかに丸みを帯びる円盤部に高さ1.6cmの円錐形をした摘み状の突起が付く。底面は比較的平滑であるが、摘みの付く上半はオサエがそのまま残っている。管見の限りでは類例は知らない。底面が平滑なことからその面を使用面であると仮定すると、土器の内面にしっくりと合うことに気付く。これまでみてきたように、SR１からは外面にタタキを有する甕が多く出土していることを勘案すると、器壁のタタキ締めに伴う内面の当て具の可能性も指摘できよう。ただ、当該期の甕の内面の最終調整はケズリかハケメで終わることが多いため、この無文の当て具の痕跡が残ることは少ない。また、特に胴部上半から肩部にかけては、外面のタタキに伴うと考えられるユビオサエが残ることも多いことから、なお再考の余地を残す。

486は土錘である。径３cm、長さ6.2cmで、穿孔径は1.8cmを測る。

487～523は５層出土である。

487～493は壺である。487は中期後半の広口壺で、口縁部端面には板状工具による圧痕文を施し、頸部下端には指頭圧痕文突帯をめぐらす。口縁部内面には比較的丁寧なミガキがみえる。488は大型の短頸壺で、487同様、指頭圧痕文突帯をめぐらす。489は短頸壺で、前二者同様の突帯がみられる。490は直口壺で、口縁端部を内側に拡張している。491は底部で、わずかに上げ底状を呈する。492は後期の広口壺で、口縁部端面と同位置の内面に３個一対と思われる竹管文を施す。493は扁球な胴部にしっかりとした突帯をめぐらしている。類例は少なく、北山遺跡（たつの市）において、庄内式併行期の円形周溝墓１の周溝（溝４）と確認調査の20区からの出土例（岸本編2001）が知られているのみである。

494～517は甕である。494は大型で、「く」の字形に屈曲する口縁部と上方へ拡張する端部が特徴である。495は494と比すると小型で、口縁端部はわずかに摘み出すにとどまる。496～498は底部で、製作工程を復元できる497は輪台技法による。498は右上がりのタタキを縦方向にナデ消している。498以外は中期後半に位置づけられる。498は、後期後半の要素を残してはいるものの、庄内式併行期まで下る可能性もある。499～514は庄内式の甕である。外面のタタキはいずれも細密で、大きく右上がりのもの（499・500）と平行、もしくは左上がりのもの（502・504・505）に大別される。口縁端部は丸く収めるもの（499・503）とわずかに上方に摘み出すことで端面を形成し、擬凹線文をめぐらすもの（501･502･505）がある。いずれも口縁部内面にはハケメが残る。500については、口縁部の接合痕がみえる。器形がわかるものについては、球形を呈するもの（499）と肩部がやや張り、おそらく卵倒形を呈するもの（504）がある。507は小片ではあるが、外面に左上がりの細密なタタキを有する点、内面は肩部付近にあるユビオサエによって口縁部屈曲部分の稜線が甘くなっている点、にぶい黄褐色～褐色系を呈する胎土に角閃石粒や雲母粒を多く含む点から庄内大和型甕と判断できる。508から514は胴部である。焼成は比較的堅緻で、外面にはススが厚く付着している。514は比熱による破裂痕がみえる。515～517は布留式甕と共通する属性を有する一群で、内湾する口縁部、上方に面をもつ口縁端部、あまり張らない肩部などが特徴である。

518～520は鉢である。518は脚台部で、断面三角形突帯と三角形透かし孔がみえる。519は有台の小型品である。一方、520は大型である。

521は有孔鉢である。同時期の甕、もしくは鉢と器形を共有しており、底部の孔は焼成前で、内面の調整よりも先に穿孔されている。

522は手焙り形土器で、浅い鉢部や覆部との接合部分に断面台形の突帯をめぐらしており、下段には突帯の剥離痕跡がみえる。

523は外来系の甕で、吉備にその系譜が求められるものである。直立する口縁端面に櫛歯状の工具による６条の擬凹線文を施す。胎土は在地のものと比してもさほど違和感を覚えない。

時　　期　以上みてきた遺物は、弥生時代中期のものから庄内式併行期、布留式のものも含む。しかし、相対的な出土量の割合についてみてみると、庄内式併行期のものが圧倒的に多い。そして、既に埋土の項でも述べたように、旧河道SR１は庄内式併行期の間に河床の上昇が始まり、最終的に古代・中世に埋没したと考えられる。

第４章　自然科学的分析

第１節　和久遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形と堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が可能である。このため、地形環境を細かいオーダーで復原でき、また堆積物に含まれる遺物を通してそれらの時期を明確にすることができる。同時に調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、和久遺跡における地形環境を明らかにしたい。調査では、当該遺跡付近の地形を分類するとともに、調査区における堆積物の観察とボーリング資料の検討を実施した。地形分類では、まず２万分の１空中写真を判読することによって調査区周辺の地形面を区分し、ついで5,000分の１空中写真の判読と現地踏査にもとづいて調査区付近における微地形の分類を試みた。他方、堆積物に関しては、ボーリング資料によって沖積層を分析し、調査区では遺構検出面より上位と下位のものを観察した。とくに遺構検出面以深の堆積物については、同面から掘削したトレンチ断面で観察を行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境を考察した。

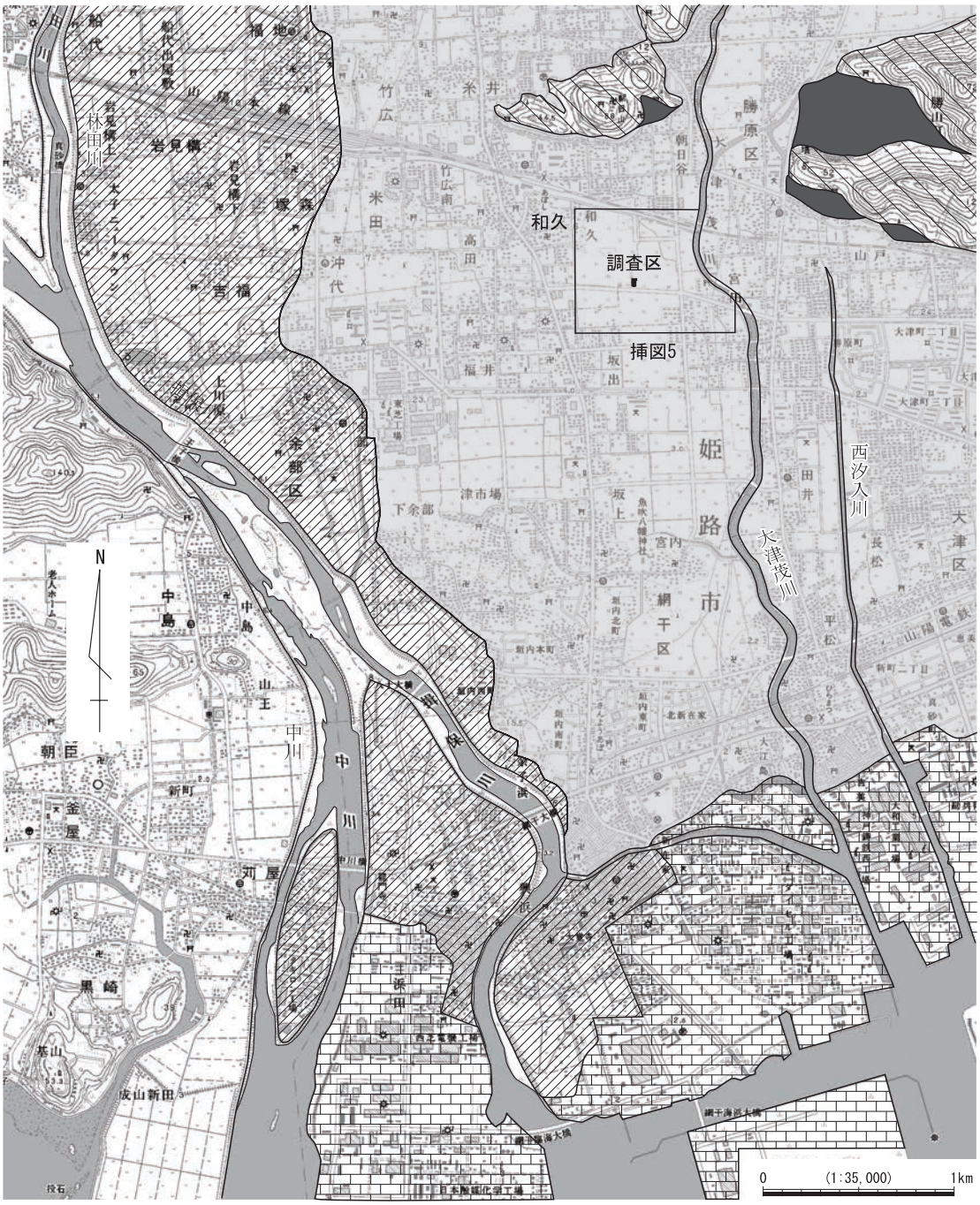
２．調査区付近の地形分布

⑴　調査区周辺の地形について

本遺跡の調査区は瀬戸内海に面する播磨平野の西部に位置する。そこには沖積低地が広がり、調査区の約３ｋｍ西を揖保川が南東へ、また約300ｍ東には小規模な大津茂川が南へ流れる。沖積低地の周辺には、丘陵と更新世段丘がみられず、北と西に山地が分布する。山地は80～180ｍの標高を有し、調査区の約750ｍ北方ならびに揖保川の西岸に認められる。調査区の約4.3ｋｍ南には、瀬戸内海が広がり、海岸付近には江戸時代以降の干拓地や近年の埋立地が存在する。

調査区周辺の沖積低地は完新世段丘、現氾濫原および支流性扇状地に分けられる（第１図）。完新世段丘は、広範囲に発達し、現氾濫原と比高数十ｃｍ～１ｍの崖で接する。段丘面は比較的平坦で、条里型土地割（条里地割）が認められる。現氾濫原は、洪水時に冠水しやすい最も低い地形面である。これは、揖保川とその支流である林田川に沿って認められ、小規模な大津茂川沿いにはみられない。この地形面における現地表の起伏は完新世段丘と比べてやや大きい。支流性扇状地は、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、山麓に点々と分布する。調査区北方の山麓では、面積が小さく地表傾斜の急な支流性扇状地が完新世段丘と

傾斜変換線で接している。このような地形面のうち、調査区は完新世段丘に位置する。

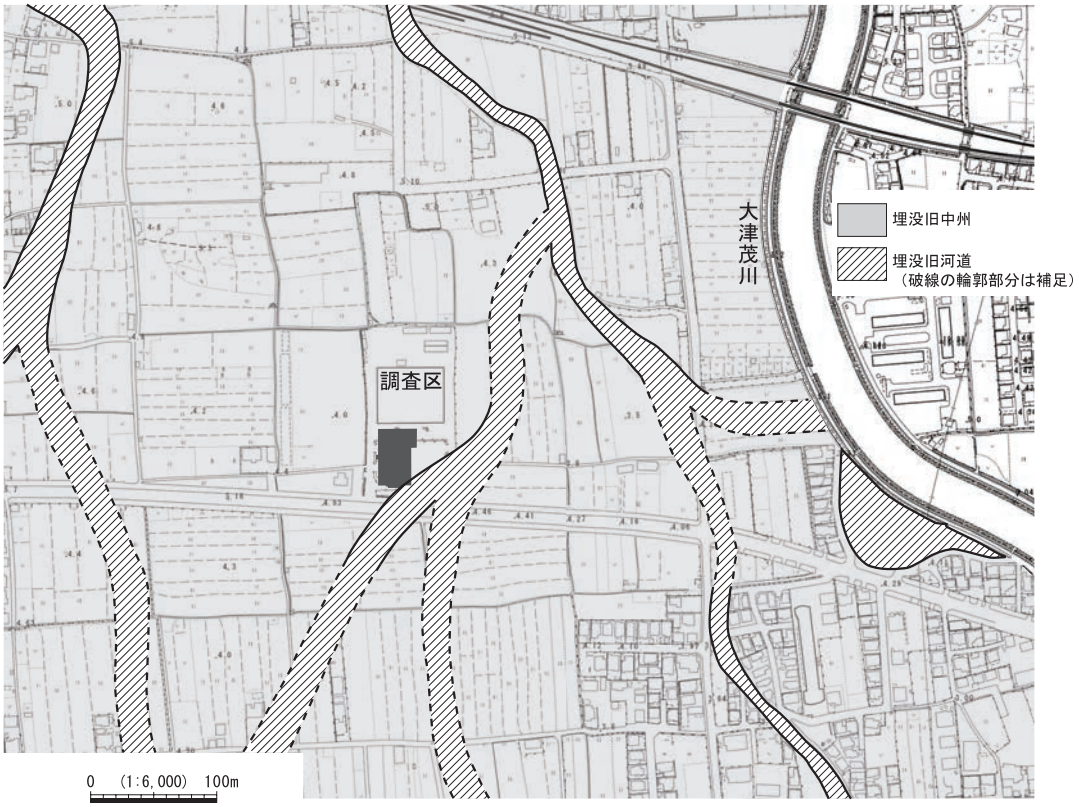


挿図4　調査区周辺の地形分類図（S=1：35,000）

⑵　調査区付近の微地形について

調査区付近では、扇状地が地下に発達し、その微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態でみられる（挿図５）。これらのうち、埋没旧中州は７ヶ所前後で認められる。旧中州は扇状地に分布する微高地に相当し、それらが埋没している地点の現地表は旧河道の埋没地点より50ｃｍ前後高い。埋没旧中州の多くは、長さ300～400m、幅200m程度であり、おおむね南北に長く延びる。調査区はこれらよりやや大規模な埋没旧中州の南東端に位置し、それは調査区南東部を除く範囲に広がる。調査区では、このような埋没旧中州上から弥生時代中期後半、弥生時代後期後半および古墳時代初頭（庄内式併行期）の遺構が検出されている。弥生時代中期後半の遺構は主として数棟の竪穴住居跡と数基の木棺墓跡で、弥生時代後期後半のそれは竪穴住居跡である。また、古墳時代初頭の主な遺構としては、竪穴住居跡が約10棟と北西－南東方向に延びる溝跡が１条みられる。この溝跡は埋没旧中州上の傾斜に沿って延びる。

一方、調査区付近における埋没旧河道は数本認められる。これらが分布する現地表は多くの場合旧中州の埋没地点よりやや低い。大津茂川西岸の局所的な旧河道は同河川の、また調査区より西のそれは揖保川の流路跡に該当し、調査区の東に分布する旧河道はどちらのものか判然としない。調査区南東部では、そのうちの１本が北東から南西へ通過する。この埋没旧河道上では、古墳時代初頭までに形成された流路跡が検出されている。これは旧河道とほぼ同じ方向に延びる小規模なもので、およそ６ｍの幅と約70ｃｍの深さをもつ。流路の形成は弥生時代中期後半ころまで遡る可能性があり、またこれに埋没旧中州上で検出された古墳時代初頭の溝跡がつながっている。



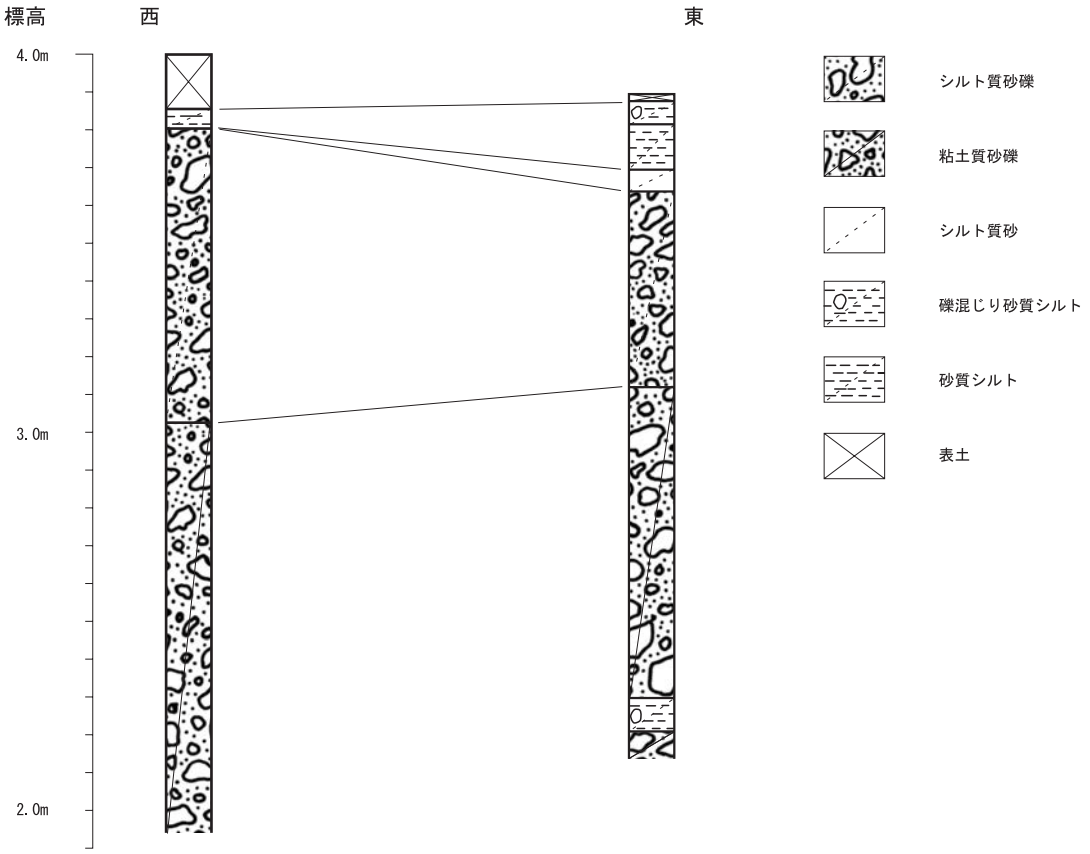
挿図5　調査区付近における微地形の分布（S=1:6,000）

３．調査区における堆積物の特徴

⑴　調査区付近の埋没段丘堆積物と沖積層

調査区付近のボーリング資料によると、現地表下およそ20mまでの堆積物は下位から灰茶色の粘土混じり砂礫、茶灰色のシルト混じり砂礫、暗灰色や青灰色を呈する細粒堆積物、および表土である（挿図６）。これらのうち、灰茶色の粘土混じり砂礫は更新世段丘の堆積物と考えられる。Ｎ値は50前後あるいはそれ以上で、堆積物中には風化した礫が含まれる。この堆積物は現地表下およそ８ｍ以深にみられ、厚さは10m以上である。間には、よく締まった礫混じり砂質シルトが85cｍの厚さでレンズ状に挟まれる。このような堆積物からなる段丘は、最終氷期極相期に向かう海面低下期に段丘化したものである。調査区付近には、こうした更新世段丘が埋没している。

その上位に位置する茶灰色のシルト混じり砂礫と細粒堆積物は沖積層に該当する。茶灰色のシルト混じり砂礫はＮ値30前後で、径約15cｍの亜角礫～亜円礫が含まれる。この堆積物は５～８ｍの厚さで認められ、完新世とくに縄文海進頂期以降に形成された扇状地の堆積物と考えられる。また、その上にのる細粒堆積物は、扇状地を被覆するもので、シルト混じり砂や砂質シルトなどに細分される。Ｎ値は10以下と軟弱で、厚さは2.5m以下で薄い。



挿図6　調査区付近の堆積物（S=1:20）

⑵　調査区における堆積物について

調査区における遺構検出面以深の堆積物は、大きくみて褐灰色の砂礫とその上位に位置する細粒堆積物に分けられる（挿図７）。これらはいずれも洪水堆積物である。褐灰色の砂礫（同図の堆積物20）は扇状地の旧中州堆積物に相当する。礫は、径３～７cｍの亜角礫～亜円礫を主体とし、最大で径14cｍを測る。これは、

遺構検出面から深さ1.3～1.4m以深に堆積し、遺構検出面から掘削したトレンチ底のほぼ全域で確認される。この砂礫はボーリング資料に記載される茶灰色シルト混じり砂礫の最上部にあたり、調査区周辺の広範囲に分布すると思われる。

砂礫の上にみられる細粒堆積物は13の堆積物に細分される。これらのうち、下部にみられる堆積物（同図の堆積物15～19）は灰色や褐灰色の砂を中心とするものである。上位の堆積物ほど砂が細かく、最上位には灰色のシルト質砂（同図の堆積物15）が認められる。間には灰色の砂質シルト（同図の堆積物16）がレンズ状に挟まれ、全体の厚さは40～50cmである。

中部から上部にかけては、黄灰白色や暗褐灰色などの砂質シルトとシルト（同図の堆積物２～７・14）が観察される。これらは約１mの厚さで認められ、扇状地を覆う。中でも、灰色の砂質シルト（同図の堆積物14）、暗灰色のシルト（同図の堆積物７）、暗褐灰色のシルト（同図の堆積物６）、暗灰白色の砂質シルト（同図の堆積物４）、ならびに黒褐色のシルト（同図の堆積物２）は旧表土に該当する。これらは、５度前後の洪水によって堆積し、それぞれの堆積後に上部またはすべてが土壌化したものである。とくに黒褐色のシルト（同図の堆積物２）は、土壌化が著しく、長期間にわたる表土であったと考えられる。

灰色砂質シルト（同図の堆積物14）の上面からは旧河道が切り込む。この埋没旧河道は、調査区南東部を北東から南西へ延びるもので、８m以上の幅と90cm以上の深さをもつ。トレンチ断面では、この旧河道を埋積する堆積物の北西半部が観察され、それは灰色を呈する砂礫と砂（シルト質砂）の互層（同図の堆積物８～13）である。砂礫と砂（シルト質砂）はそれぞれ３層ずつ認められ、それらのうち最下位の砂礫（同図の堆積物13）が主に径２～５cmの亜角礫～亜円礫、また上位の２つ（同図の堆積物９・11）がそれより細かい径１～４cm程度の亜角礫～亜円礫からなる。互層の各堆積物は、最上位のシルト質砂を除いて南東から北西へ傾斜する。これは、砂礫と砂の堆積に伴って流路の幅が狭くなり、河川が小規模化していったことを示す。

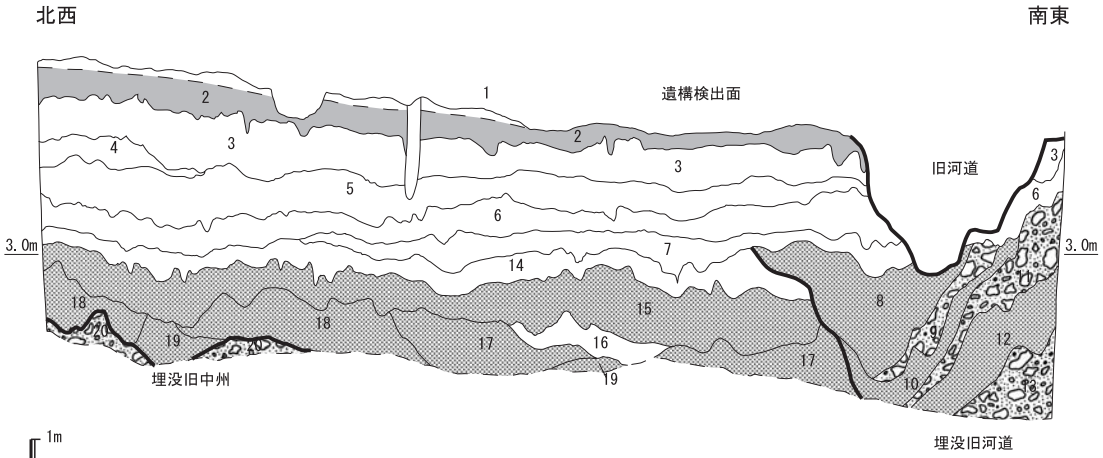
遺構検出面より上位の基本的な堆積物は、下位から暗褐灰色の砂質シルト（挿図７の堆積物１）、灰色のシルト、耕土および近年の盛土である。耕土と盛土を除く堆積物は厚さ数cm～十数cmと薄い。これらのうち、暗褐灰色の砂質シルトは調査区中央部の埋没旧中州上に局地的に分布する。この堆積物は弥生時代中期後半の遺物が含まれる同時期の旧表土にあたり、その下面からは同時期の遺構が検出される。一方、暗褐灰色の砂質シルト上面では、弥生時代後期後半と古墳時代初頭の遺構が認められる。中でも、古墳時代初頭の遺構は暗褐灰色の砂質シルトを切るものの、その上位には同時期の遺物を含む堆積物（旧表土）がみられない。この堆積物と弥生時代中期後半の遺物を含む暗褐灰色の砂質シルトは、洪水によって侵食されたか人為的に削り取られた可能性が高い。暗褐灰色砂質シルトの上位に位置する灰色のシルトは調査区のほぼ全域に分布する。この堆積物は水田土壌に相当し、中世の遺物を若干含む。

調査区南東部では、弥生時代中期後半と古墳時代初頭の遺構が確認される層位で流路跡が検出されている。流路内には下位から灰色のシルト、灰色の砂質シルト、暗オリーブ灰色の砂礫、および黒色のシルトが観察され、上位の堆積物３つは最下位の灰色シルトを切るやや小規模な流路内にみられる。各堆積物には、弥生時代中期後半と古墳時代初頭の遺物が混入する。

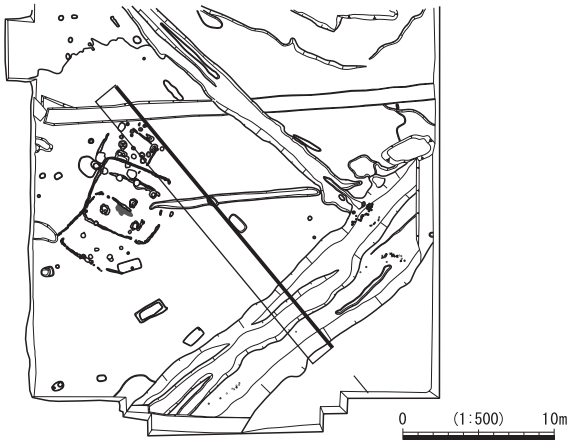
４．調査区付近における地形環境の変遷

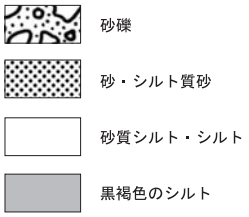
調査区付近の地形環境は、これまで述べてきた事柄から次のように考察される。

〔ステージ１〕　調査区付近には、完新世とりわけ縄文海進頂期以降に揖保川や大津茂川などによって砂礫が



1　暗褐灰色　砂質シルト
2　黒褐色　シルト
3　黄灰白色　シルト
4　暗灰白色　砂質シルト
5　黄灰白色　シルト
6　暗褐灰色　シルト
7　暗灰色　シルト
8　灰色　シルト質砂
9　灰色　砂礫：径１～3cmの亜角礫～亜円礫主体
10　灰色　砂：粗砂～細砂
11　灰色　砂礫：径１～4cmの亜角礫～亜円礫主体
12　灰色　砂：粗砂～細砂
13　灰色　砂礫：径２～5cmの亜角礫～亜円礫主体
14　灰色　砂質シルト
15　灰色　シルト質砂
16　灰色　砂質シルト
17　褐灰色　砂：粗砂～細砂
18　褐灰色　砂：粗砂～中砂
19　灰色　砂：極粗砂～粗砂
20　褐灰色　砂礫：径３～7cmの亜角礫～亜円礫主体





挿図７　遺構検出面からの断割りトレンチ断面図

堆積した。これに伴って扇状地が発達し、調査区付近には幾つかの旧中州が形成された。この時期、調査区南東部には流路が存在したと推定される。

〔ステージ２〕　扇状地の形成が終了した後、その上には数度の洪水によって主に砂がもたらされた。これに伴って、調査区付近の旧中州は浅く埋没した。

〔ステージ３〕　さらに砂質シルトが埋没旧中州上に堆積した後、調査区南東部では揖保川の分流または大津茂川が北東から南西へ流れた。この流路は、その後砂礫と砂などによって次第に埋積され、それに伴って小規模化していった。

〔ステージ４〕　流路の埋積後、調査区には数度の洪水が及び、砂質シルトやシルトが堆積した。これによって旧中州はさらに深く埋没していった。各堆積物がもたらされた後には、洪水の発生しない安定した環境がしばらくみられ、堆積した砂質シルトやシルトは上部またはすべてが土壌化した。とくに弥生時代中期後半以前には、こうした環境が比較的長く続いた時期があり、黒褐色のシルトが生成された。

〔ステージ５〕　弥生時代中期後半には、安定した環境下で人間生活が行われ、埋没旧中州上では竪穴住居群と木棺墓群がつくられた。弥生時代後期前半ころに洪水が発生した後、弥生時代後期後半に入ると埋没旧中州上では再び竪穴住居が建てられた。

〔ステージ６〕　古墳時代初頭には、それまでに形成された小規模な流路が調査区南東部の埋没旧河道上を北東から南西へ延びていた。そこでは、流路が１度埋積された後、その中に再び流路が形成された。この時期、埋没旧中州上の環境は安定しており、そこには竪穴住居群がつくられた。その後流路は、洪水に伴う砂質シルトや砂礫などの堆積によって埋積された。埋積の最終段階にはそこが低湿化し、黒色シルトの生成がみられた。

〔ステージ７〕　流路の埋積以降中世までのある時期、調査区付近には洪水が及び、そのほぼ全域にシルトの堆積がなされた。中世には、このシルトを土壌とした水田稲作が営まれた。また、この洪水が発生した後、揖保川や林田川などによる下刻が起こり、調査区付近の沖積低地は段丘化した（完新世段丘の形成）。

５．おわりに

本遺跡の調査区は揖保川東岸に広がる完新世段丘に位置する。調査区付近におけるこの段丘は、縄文海進頂期以降に発達した扇状地が洪水に伴う細粒堆積物によって埋没し、それが古墳時代初頭以降に段丘化したものである。そのため調査区付近には、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する。調査区は埋没旧中州上の南東端から埋没旧河道にかけて位置し、南東部にみられる埋没旧河道は北東から南西へ延びる。調査区では、こうした微地形の埋没過程にあたる弥生時代中期後半、弥生時代後期後半および古墳時代初頭に人間が活動した。

これらの時期は、いずれも洪水発生期の挟間に相当し、環境が安定していた。このような環境下で埋没旧中州上では、弥生時代中期後半に竪穴住居や木棺墓からなる集落ならびに墓域がつくられ、弥生時代後期後半と古墳時代初頭には集落が立地した。これは、埋没旧中州上が埋没旧河道上に比してわずかに高いため、排水されやすく比較的高燥な環境であったことに起因する。他方、埋没旧河道上では居住域や墓域がつくられず、地表がやや低いために小規模な流路が古墳時代初頭までに形成された。当時、隣接する埋没旧中州上で居住していた人間は、こうした流路の水を生活に利用していたと推定される。以上のように本遺跡の調査区では、旧中州と旧河道が埋没しており、その埋没過程で現出した地形環境に影響されて人間生活が営まれたと考えられるのである。

第２節　和久遺跡ＳＲ１出土坩堝の成分分析

岡本一秀（兵庫県立考古博物館）

はじめに

和久遺跡から出土したガラス質と金属質の物質が付着した土器（Ｍ２）について、顕微鏡観察と蛍光Ｘ線分析を行い、土器の用途と付着していた金属の材質を調査した。

１　試料

資料は厚さ約１㎝の碗状の土器の一部で、胎土の色は赤褐色であるが、内面（凹面）側が白っぽく発泡している。また、ヒビ割れが数ヶ所に認められ、間にガラス質の発泡した物質や青緑色の金属質の物質がしみこんでいる。

測定箇所は、土器内面の海綿状に発泡したガラス質の箇所（№１）と緑色の金属質の物質が付着した箇所（№２）、土器の外側（№３）の計３ヶ所である。

２　試料の観察と分析

⑴　実体顕微鏡による観察

最初に試料を実体顕微鏡で観察して測定箇所を検討し、デジタルカメラで記録を取った。使用した装置は（株）ニコン製ＳＭＺ－1500である。（挿図８～10）

⑵　蛍光Ｘ線分析装置による分析

蛍光Ｘ線分析は、スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置ＭＩＤＥＸ－Ｍでおこなった。分析の条件は、重元素側が電圧45ｋＶ、電流0.2ｍＡ、測定時間180秒でコリメータ径は1.0㎜で測定し、軽元素側は電圧19ｋＶ、電流0.3ｍＡ、測定時間300秒で、コリメータ径は2.0㎜で測定した。検出器はペルチェ冷却ＳＤＤ（液体窒素不要）である。測定雰囲気は、軽元素の検出感度を上げるためにヘリウムガスパージを行った。

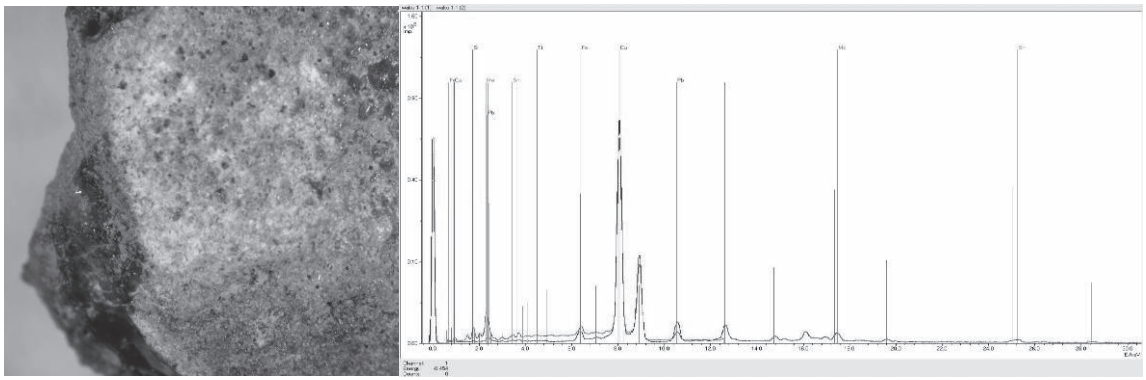
３　結果

主に検出された元素は、表１の通りである。№１ではマグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、シリコン（Si）、チタン（Ti）、鉄（Fe）が顕著に検出されるほか、鉛（Pb）も検出された。№２は、銅（Cu）が顕著に検出されたほか、錫（Sn）、鉛（Pb）も検出された。№３はマグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、シリコン（Si）、チタン（Ti）、鉄（Fe）といった土器の胎土の成分が検出された。それぞれのスペクトル図は挿図８～10に示す。

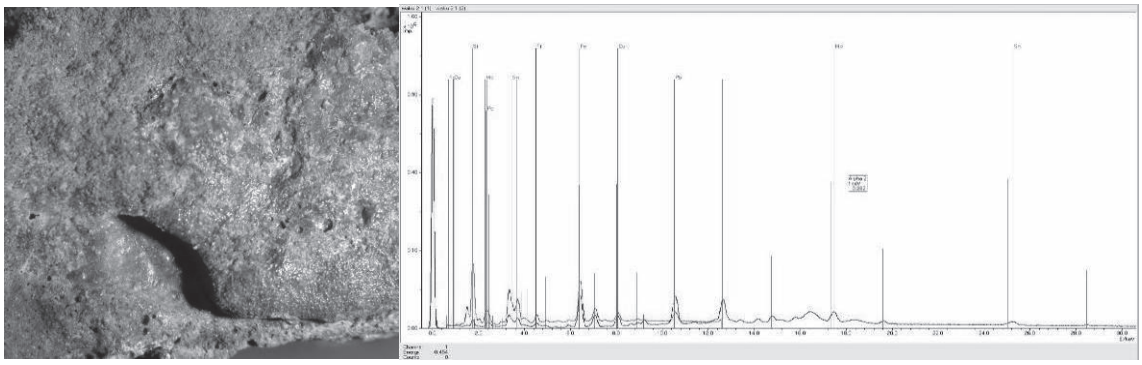
観察と分析の結果から、この土器は坩堝と考えられる。外面には被熱した痕跡が見られないことから、土器の中に燃料と地金、もしくは合金を入れて加熱し、溶かしてから加工に使用していたと判断される。また、溶解していた金属は、鉛を含む銅と錫の合金である青銅と考えられる。

	Ｍｇ	Ａｌ	Ｓｉ	Ｔｉ	Ｆｅ	Ｃｕ	Ｓｎ	Ｐｂ
№１	1.35	8.10	24.36	0.22	1.50	0.02	0.05	0.27
№２	0.02	1.24	2.16	0.05	0.06	30.24	0.49	1.41
№３	1.14	8.68	25.54	0.41	1.98	0.36	0.05	0.18

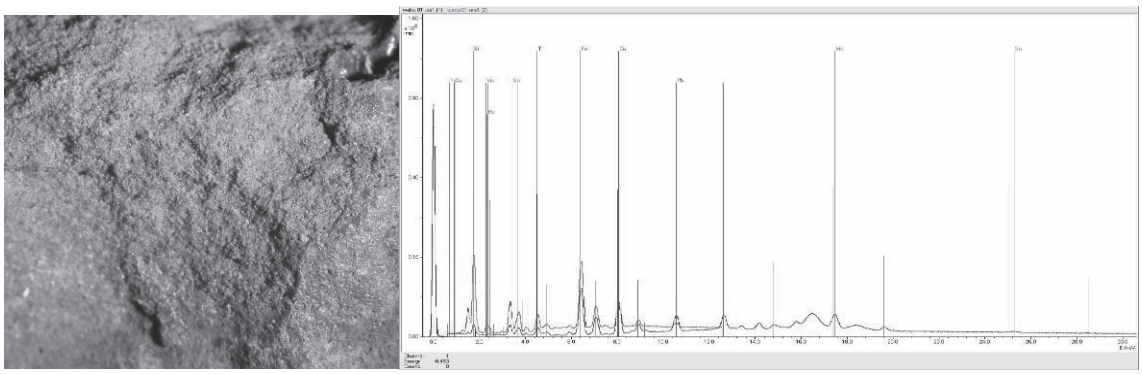
表２　坩堝（Ｍ２）付着物の成分分析結果



挿図８　No.１分析箇所の写真と蛍光Ｘ線定性分析スペクトル



挿図９　No.２分析箇所の写真と蛍光Ｘ線定性分析スペクトル



挿図10　No.３分析箇所の写真と蛍光Ｘ線定性分析スペクトル

第３節　和久遺跡における被熱遺構探査と考古地磁気年代

兵庫県立大学防災教育センター　森永速男
環境人間学部　構井未来
大学院環境人間学研究科　井口博夫

はじめに

土壌中に含まれる磁性粒子は土壌堆積時や被熱時に獲得した残留磁化を持っている。信頼性に違いはあるが、その残留磁化は堆積時や被熱時の地球磁場の記録となっている。被熱時には堆積時よりも、強度が大きく、その当時の地球磁場方向によく揃った方向を持つ残留磁化（熱残留磁化）が獲得される。その熱残留磁化の方向を過去の標準的な地球磁場方向の変化曲線と比較して年代を推定できる。これを考古地磁気（広義には古地磁気）年代決定法という。

また、土壌中に含まれる磁性粒子は被熱過程で別の磁性鉱物に化学的に変化することがある。この磁性鉱物の化学変化を検出できれば、土壌が被熱したかどうかを考察できる。この磁性鉱物の変化は化学的な分析でも検出できるが、磁気測定を用いた方法がより簡便である。このように土壌の磁性（磁気的性質）に着目して被熱遺構を検出する被熱遺構探査法が既に開発されており、かなりの成果を挙げている（森永2008）。

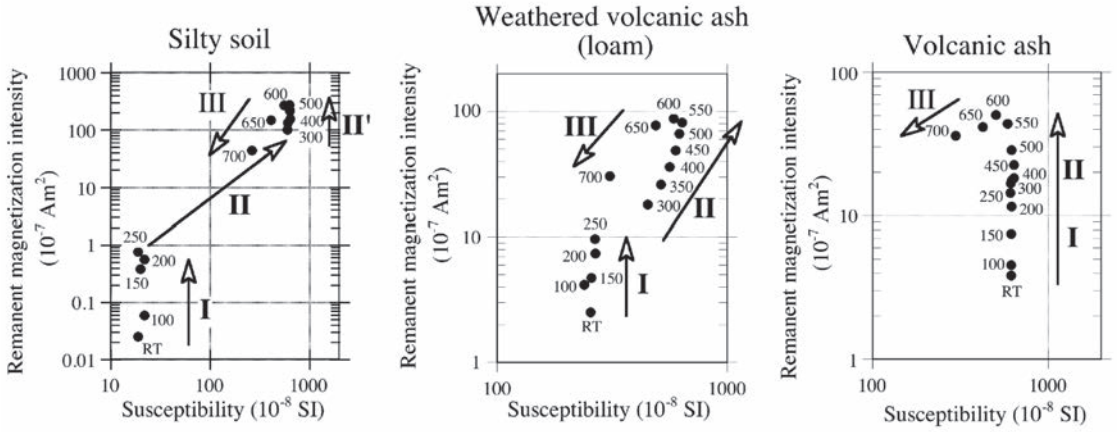
和久遺跡で検出された数カ所の遺構（主に土坑）で土壌を採取し、それらの被熱痕跡の磁気的な検出を試みた。また、採取土壌試料のうち被熱の可能性のある土壌の残留磁化方向から考古地磁気年代を推定した。それらの結果を報告する。

１　磁気的な被熱遺構探査法の原理

被熱によって起こる磁性鉱物の変化は、土壌の場合、水酸化鉄から酸化鉄への変化である。250℃～300℃の被熱で水酸化鉄の一種であるゲーサイト；α-FeOOHは脱水して酸化鉄の一種であるヘマタイト；α-Fe_2O_3に変わる。この変化では磁性パラメーターの一つである帯磁率はさほど変化しないが、ヘマタイトの一部がさらに酸化鉄の一種であるマグネタイト；Fe_3O_4に変わることで帯磁率が大きくなる（Morinaga他、1999；森永、2008）。河川堆積物などの粘土質、あるいはシルト質の土壌では、相対的に多くのゲーサイトを含むので、被熱によって帯磁率の大きな変化が起こる。オドリ火山灰や立川ロームなどの新鮮な火山灰中には水酸化鉄がほとんど含まれておらず、マグネタイトなどの酸化鉄が主な磁性鉱物であるために、被熱を通して上記の鉱物変化は起こらず、結果として帯磁率は変化しないとの結果が得られている。

帯磁率に変化に伴って残留磁化も変化するが、帯磁率増加の起こるゲーサイトからマグネタイトの変化によって残留磁化強度も増加する。このような磁性鉱物変化による磁性変化のみならず、被熱過程は熱残留磁化獲得を引き起こすのでそれによっても残留磁化強度は増加する。

シルト質土壌や火山灰質土壌（ロームと新鮮な火山灰）を用いて得られた磁性変化を挿図11（Morinaga他1999）に示す。左から、シルト質土壌、ローム（風化火山灰質土壌）、そして新鮮な火山灰（オドリ火山灰）の加熱実験結果である。



挿図11　３種類の土壌で行われた加熱実験結果
30分間の加熱後の帯磁率（横軸）と残留磁化強度（縦軸）の変化を示す。図中のＲＴは加熱前、数字は加熱温度を示す。

この図の横軸は帯磁率、縦軸は残留磁化強度で、図中のＲＴは加熱前、数字は加熱温度（℃）を意味している。250℃までの加熱で起こる残留磁化強度変化（図中のI）は熱残留磁化の獲得、250℃以上で起こる右肩上がりの変化（図中のII、帯磁率及び熱残留磁化の増加、ただし新鮮な火山灰では帯磁率変化は明瞭ではない）は、ゲーサイトがヘマタイトを経てマグネタイトに変わる磁性鉱物変化と熱残留磁化獲得に伴うものである。550℃もしくは600℃以上で帯磁率及び残留磁化強度が減少に転じるが、これはマグネタイトからヘマタイトへの酸化反応が起こっているためである。

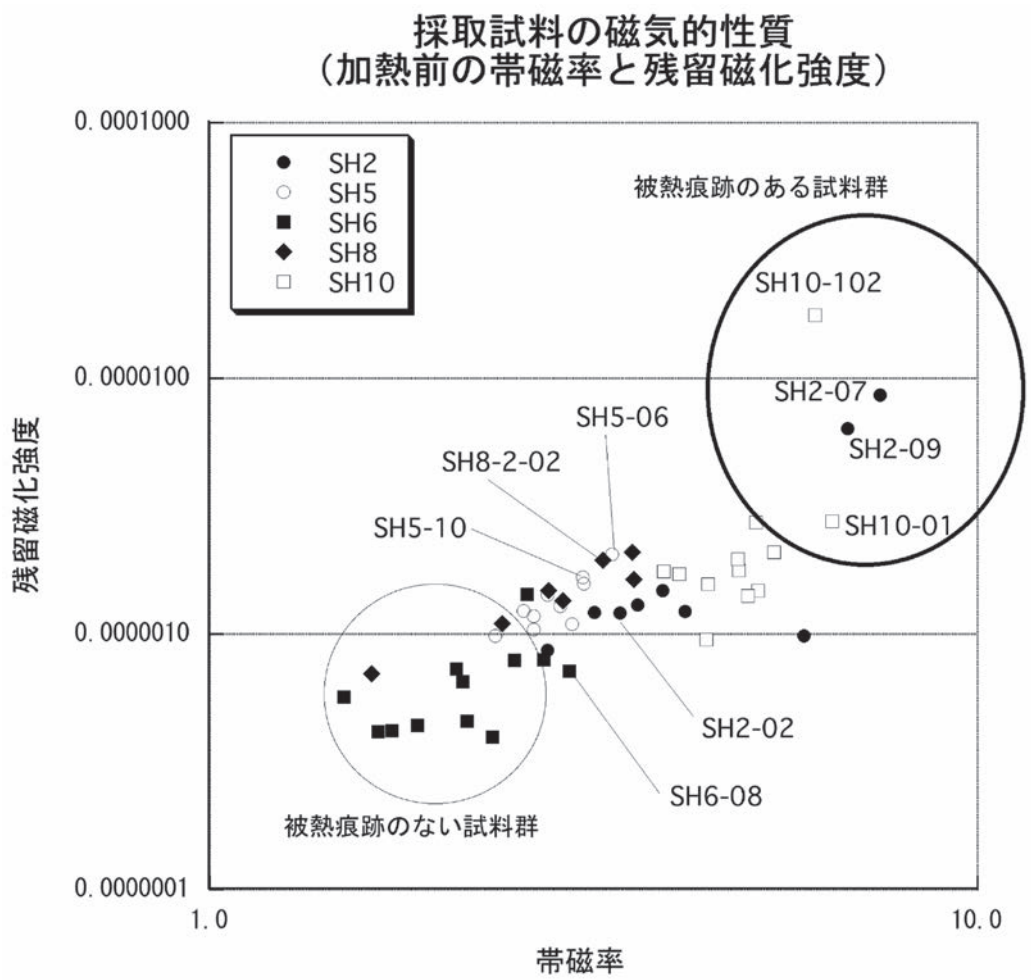
ここで示したような、被熱による帯磁率と残留磁化強度の増加という磁性変化を用いて、和久遺跡の遺構の土壌の被熱過程を考察する。

２　被熱遺構探査

この目的のために土壌試料を採取したのは次の遺構である:SH２（赤化した土壌のある遺構）、SH５-土坑、SH６-１○（イチマル）土坑、SH８-２-１○土坑、SH10-１○土坑。それぞれの遺構から採取した試料の帯磁率と残留磁化を、何も処理していない状態（加熱前）で測定した。その後、８個の試料を用いた加熱実験を、地球磁場程度（50μＴ）の直流磁場を設定した電気炉の中で行なった。加熱時間は20分間、電気炉内でファンによる冷却後に帯磁率と残留磁化強度を測定した。加熱温度は100、150、200、225、250、275、300、350、400、450、500、575、600、625、650、675、700（すべて単位は℃）であった。

すべての採取試料の加熱前の帯磁率（横軸）と残留磁化強度（縦軸）を挿図12に示す。なお、それらの数値を表３に示す。被熱のよる磁性変化は前述のように両者の値の増加として現れる。採取したすべての土壌がもともと同じだとすれば、帯磁率も残留磁化強度も同じような値になる。この図で明らかなように、SH２とSH10の４試料（挿図12の太い円内の試料）は他と比べて両者の値が大きくなっており、被熱していると考えられる。SH２の試料は赤化土壌を中心とした範囲から採取されており、「赤化土壌は被熱している」という一般的な解釈とも矛盾しない結果となっている。

一方、SH６の試料の多くはこれら被熱していると考えられる土壌試料とは逆に帯磁率も残留磁化強度も小さな値を持っている（図２中の細い円内の試料）。これら磁性の小さな試料は被熱していないと考えられ

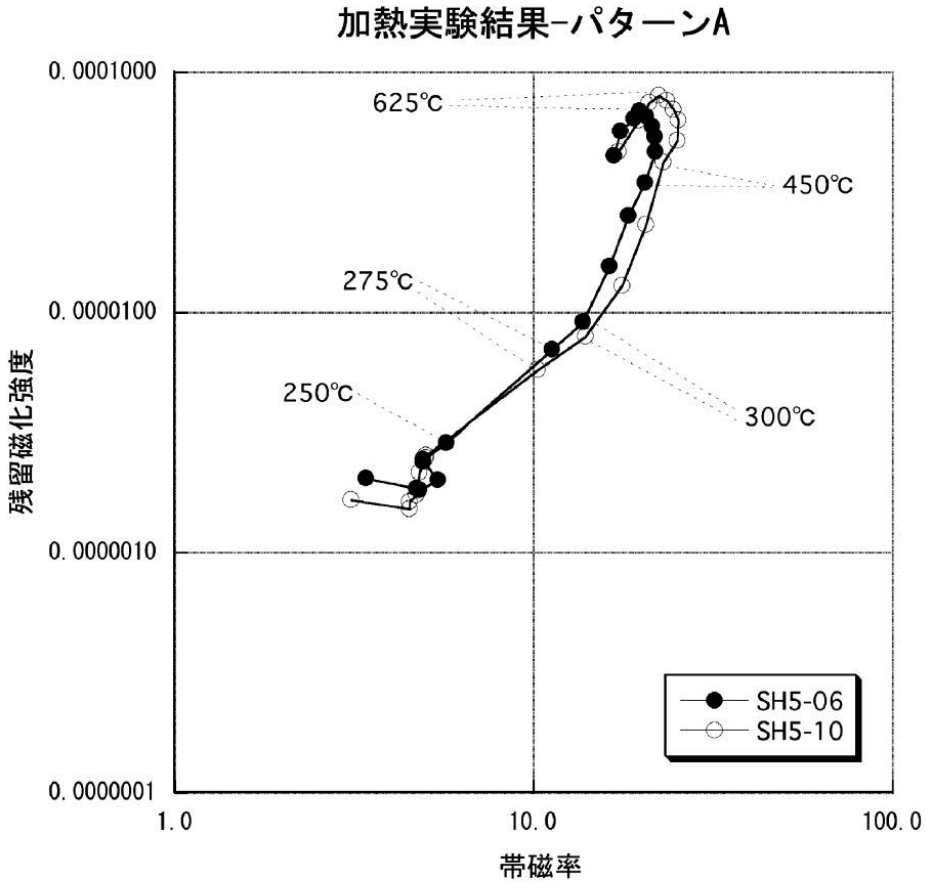


挿図12　和久遺跡で採取したすべての土壌の加熱前の帯磁率（横軸）と残留磁化強度（縦軸）
データ点（帯磁率と残留磁化強度）が右上に位置するほど被熱の可能性が高くなる。

る。しかし、磁性の大きさだけから判断された被熱した試料群とそうでない試料群の間の磁性を示す試料については、被熱の有無を簡単に判断することができない。そこで、次に加熱実験を通して被熱の有無を検討してみた。一般に被熱していない非火山灰質土壌は、挿図11の左図で示すようなシルト質土壌の加熱による磁性変化を示す。このパターンを基準として、同様の実験結果を求めることで被熱の有無を議論できる（森永他2010）。

加熱実験の結果を３つの変化パターン（A, B, C）に分けて挿図13～15に示す。パターンＡに分類される試料（挿図13）はSH５の土坑で採取された試料で、挿図11の（被熱していない）シルト質土壌と同様の変化パターン（図中IIの大きな磁性変化が特徴的なパターン）を示している。すなわち、この遺構の土壌は被熱を経験していない試料ということになる。このことは挿図12でも明らかで、SH５（挿図12中の○）で採取された試料は帯磁率や残留磁化強度が中間よりやや小さい側の大きさを持つ試料群である。これら試料は、その他の変化パターンを示す試料の被熱の有無を考察する際の基準の試料（被熱していない試料群）と考えることができる。

挿図14に示す試料の変化パターンＢには挿図11のIIの変化がわずかに認められるだけである。つまり、挿図13で見られる275℃前後の帯磁率の変化が大きくない。すなわち、ここで示したSH２の２試料とSH８-２の１試料は少なくとも275℃前後までの被熱を既に経験していると考えられる（ただし、詳細に見れば、SH２-07は他の２試料よりもさらに帯磁率変化が小さいので、より高い温度の被熱経験がありそうである）。



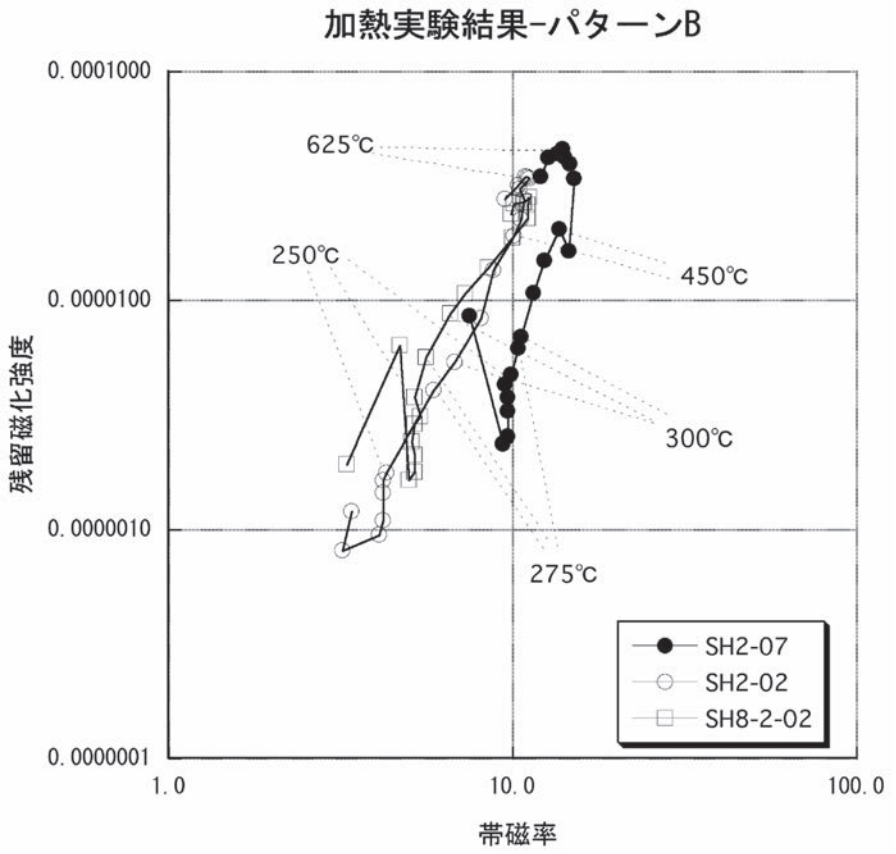
挿図13　加熱実験結果 - パターンA
275℃前後の加熱で帯磁率と残留磁化強度が大きく増加する。

SH２とSH８-２の試料は、挿図12において、被熱経験のないと判断されたSH５と同等（SH８-２；挿図12中の◆）もしくはやや大きめの帯磁率（SH２；挿図12中の●）を示している。275℃前後は、帯磁率や残留磁化強度が急激に変化する微妙な温度であるので、わずかな被熱温度の差がパターンＢの微妙な差として現れている可能性が高い。挿図12からもわかるように、SH２の遺構（挿図12中の●）には、被熱程度が高いものから低いものまで種々の被熱歴を持つ試料があるようである。

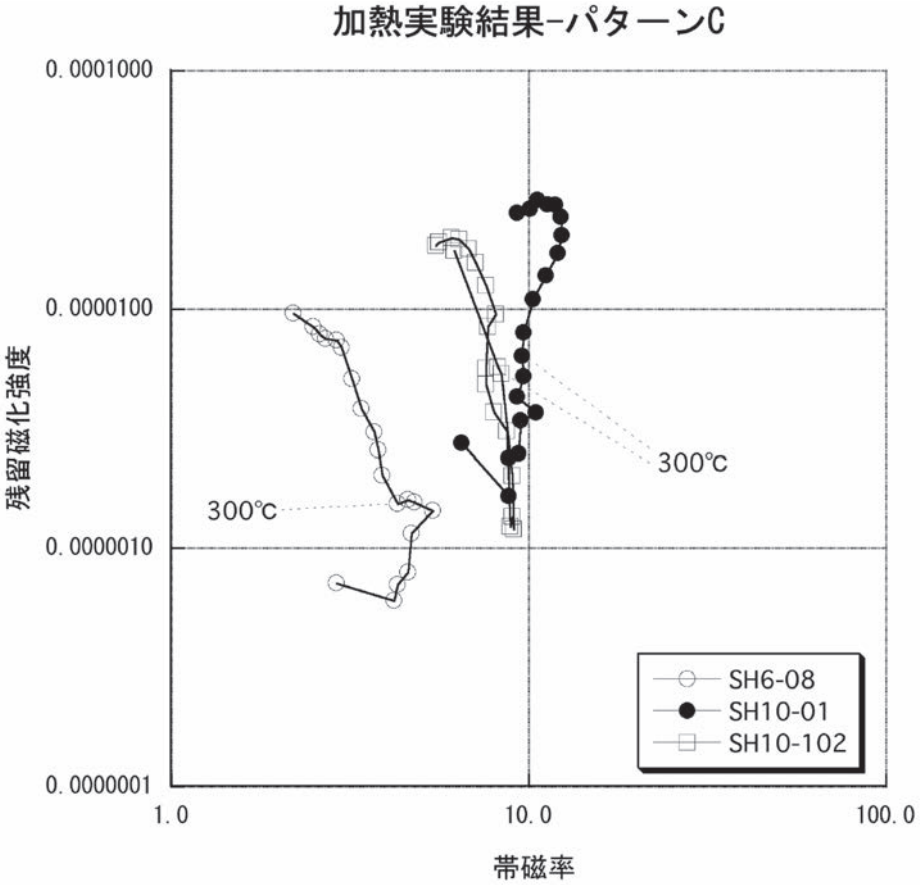
挿図15には被熱過程で帯磁率が増加しないパターンＣの結果を示した。これら３試料は、挿図11のIIの変化や挿図13で示した275℃前後での帯磁率や残留磁化強度の増加を示さない。このことは275℃前後で起こる磁性変化を既に経験していることを示しており、少なくとも300℃以上450℃程度の被熱を経験している可能性がある。遺構SH10の試料は、挿図12でも明らかなように他の遺構の試料と比べてより大きい帯磁率と残留磁化強度を持っている（挿図12中の□）。このことから、SH10の遺構は明らかに被熱した遺構と考えて良い。なお、SH10-01は１○土坑の１（イチ）土坑から、SH10-102は○（マル）土坑から採取された試料である。この両者が被熱していると判断されることから、１土坑と○土坑の両方で火の使用があったと考えられる。

SH６の遺構は挿図12を用いた判断では、被熱していないと考えたが、この挿図15で示した試料SH６-08はSH６で採取された試料のうちもっとも大きな帯磁率を示す試料である（挿図12）。このことから遺構SH６では、広い範囲ではなくわずかな領域で火が用いられた可能性があると考えられる。

試料が崩れやすいなどの物理的な事情と時間的な制約があり、すべての試料で加熱実験を行うことができなかったので、すべての試料で被熱判定を行うことができなかった。しかし、上記一連の結果から、少なく



挿図14　加熱実験結果 - パターンB
275℃前後の加熱で帯磁率と残留磁化強度が大きくは増加しない。



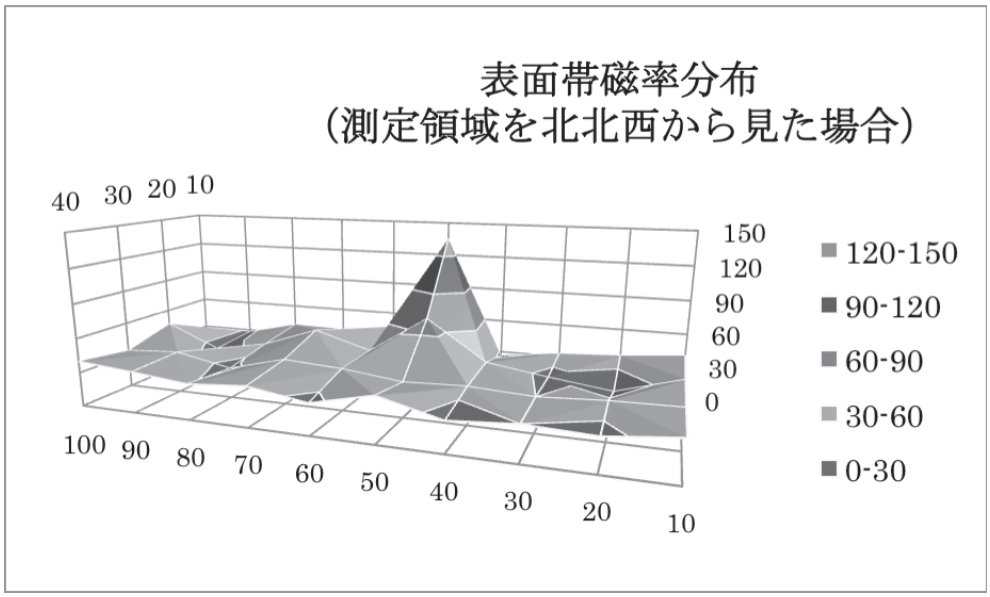
挿図15　加熱実験結果 - パターンC
加熱により帯磁率がほとんど増加しないか、減少する。

とも遺構のSH２とSH10ではかなり広い範囲で火の使用があったと考えることができる。また、遺構SH５を除くその他の遺構においても、一部の試料で低い温度の被熱があったと考えられることから、和久遺跡の遺構、特に土坑は火に関連した遺構であったと考えられる。

遺構SH８-２の炭化物集中部では、携帯用の帯磁率計とループセンサーを用いて、非破壊の表面帯磁率測定を行った。測定した範囲を挿図16に、その測定結果を挿図17に示す。

ループセンサーの直径は約10cmなので、一回の測定ではメッシュ交点を中心とする半径５cmの範囲の平均的な帯磁率分布を測定している。測定範囲の南側中央部に帯磁率が周辺と比べて数倍大きな部分が認められる。炭化物除去以前なので何が埋まっているかわからないが、金属物質かもしくはかなり高い温度で被熱した土壌が炭化物の下にあるのではないかと予想できる。なお、被熱の可能性を探るための土壌試料（上で結果を述べた試料）は、挿図16の上の方（北側）の中央付近、つまり表面帯磁率が小さい範囲から採取された（炭化物除去が済んでいなかったので、帯磁率の大きな箇所から試料を採取できなかった）。

挿図16　帯磁率を非破壊で測定した範囲（南南東から）
10cmごとに区切ったメッシュ交点で表面帯磁率を測定した。

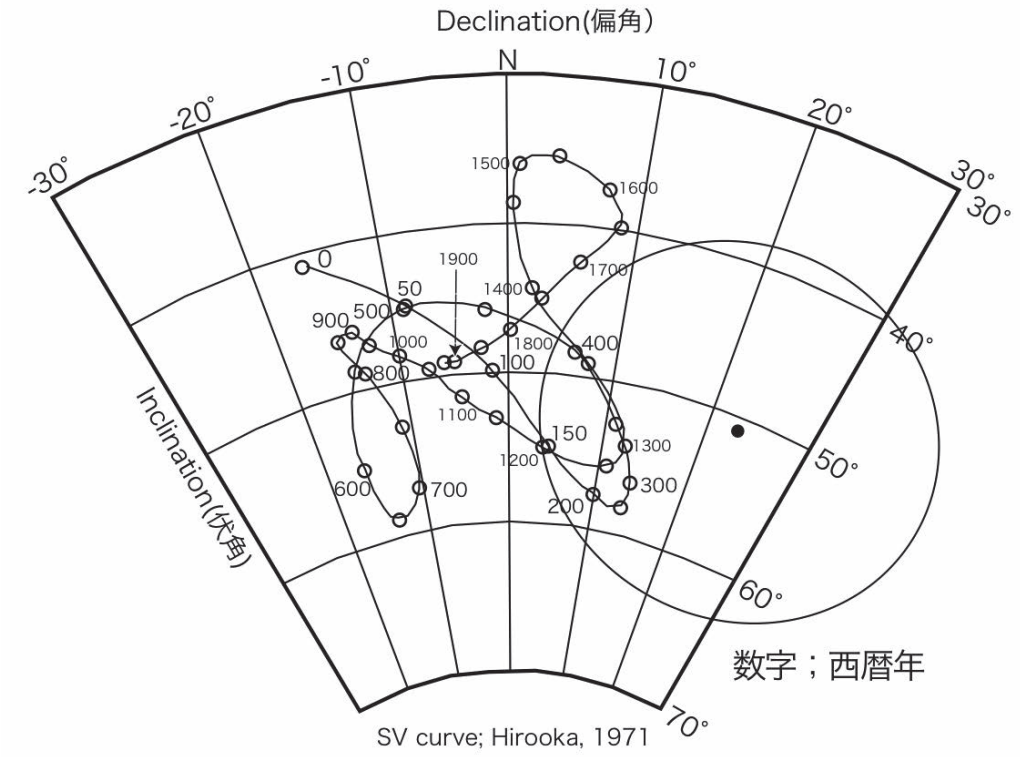


挿図17　表面帯磁率分布
測定範囲を挿図16とまったく反対の方向（北北西）から見ている。つまり、表面帯磁率の高いところは、写真１の手前中央部に対応している。

３　考古地磁気年代

赤化土壌の認められた遺構ＳＨ２の土壌は、赤化していること、さらに磁性的にも被熱していると考えられるので、ＳＨ２で採取された土壌を用いて考古地磁気年代の推定を試みた。残留磁化測定結果を用いて主成分分析より安定した残留磁化方向が得られた５試料（ＳＨ２-01～04と09）の残留磁化平均方位は、偏角=23.7°、伏角=50.7°（集中度パラメーター；ｋ＝37.9、フィッシャーの信頼限界；α95=12.6°、ｋが大きく、α95は小さいほどデータの精度がよい）であった。

この平均方向と過去2000年間の地球磁場方向の標準曲線（Hirooka1971）との比較を挿図17に示す。平均方向の誤差円（α95）が大きい（つまり、精度が低い）ので、明確な推定とはならないが、西暦150年～400年、もしくは西暦1200年～1350年の範囲が平均方向の誤差円内に入る。これらのどちらかが考古地磁気学的に推定される年代範囲であるが、考古学からの解釈も加味すれば前者（西暦150年～300年）の年代範囲がもっともらしい推定と考えられる。



挿図18　遺構ＳＨ２の土壌試料から求めた平均残留磁化方向
（●と円）と標準的な地球磁場方向の変化曲線（Hirooka, 1971）との比較。

参考文献

Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.*, 38, 167-207.

森永速男2008「考古遺跡における被熱遺構の磁気を用いた検出」*まぐね/Magnetics Jpn.*, 3(7)　P314-323

Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999　Magnetic detection of heated soils at paleolithic sites in Japan, *Geoarchaeology*, 14(5), P377-399

森永速男、土屋歓子、パリノサーヴェイ株式会社2010「磁性を用いた被熱土壌（焼土）の被熱温度推定」『文化財と探査』12　日本文化財探査学会　P82-89

試料	出土遺構	重量（g）	帯磁率／重量	残留磁化強度／重量
SH2-01	SH2　中央焼土坑	2.6	5.96	0.00000098
SH2-02		11.2	3.43	0.00000120
SH2-03		9.4	3.90	0.00000147
SH2-04		10.6	3.18	0.00000121
SH2-05		10.7	3.62	0.00000129
SH2-06		4.6	4.17	0.00000122
SH2-07		8.1	7.49	0.00000854
SH2-09		9.1	6.79	0.00000633
SH2-10		10.1	2.76	0.00000086
SH5-01	SH5　イチ土坑	7.9	2.97	0.00000109
SH5-02		11.8	2.65	0.00000104
SH5-03		9.8	2.87	0.00000128
SH5-04		8.3	3.08	0.00000156
SH5-05		11.4	2.36	0.00000098
SH5-06		9.4	3.35	0.00000203
SH5-07		11.5	2.65	0.00000117
SH5-08		9.3	2.57	0.00000122
SH5-09		11.0	2.76	0.00000142
SH5-10		8.5	3.07	0.00000166
SH6-01	SH6　イチ土坑	10.9	2.17	0.00000045
SH6-02		10.3	2.50	0.00000078
SH6-03		8.2	2.60	0.00000142
SH6-04		6.0	2.73	0.00000079
SH6-05		12.7	1.73	0.00000042
SH6-06		11.6	2.10	0.00000073
SH6-07		11.8	2.14	0.00000065
SH6-08		11.5	2.95	0.00000071
SH6-09		11.3	1.66	0.00000041
SH6-10		10.5	1.87	0.00000044
SH6-101	SH6　マル土坑	11.3	2.34	0.00000039
SH6-102		12.7	1.50	0.00000056
SH8-2-01	SH8　イチ土坑	6.9	2.77	0.00000147
SH8-2-02		11.5	3.26	0.00000193
SH8-2-03		10.7	3.56	0.00000207
SH8-2-04		12.0	2.89	0.00000134
SH8-2-05		11.2	3.58	0.00000162
SH8-2-101	SH8　マル土坑	8.7	1.63	0.00000070
SH8-2-102		11.7	2.41	0.00000109
SH10-01	SH10　イチ土坑	10.3	6.49	0.00000274
SH10-02		12.3	5.45	0.00000208
SH10-03		12.4	4.10	0.00000171
SH10-04		11.8	5.19	0.00000147
SH10-05		11.8	5.04	0.00000140
SH10-06		11.7	5.16	0.00000271
SH10-07		12.0	4.90	0.00000176
SH10-08		12.9	3.91	0.00000174
SH10-09		12.8	4.47	0.00000155
SH10-10		7.1	4.89	0.00000195
SH10-101	SH10　マル土坑	13.1	4.45	0.00000095
SH10-102		12.8	6.16	0.00001756

表3　磁気測定結果のまとめ

第５章　まとめ

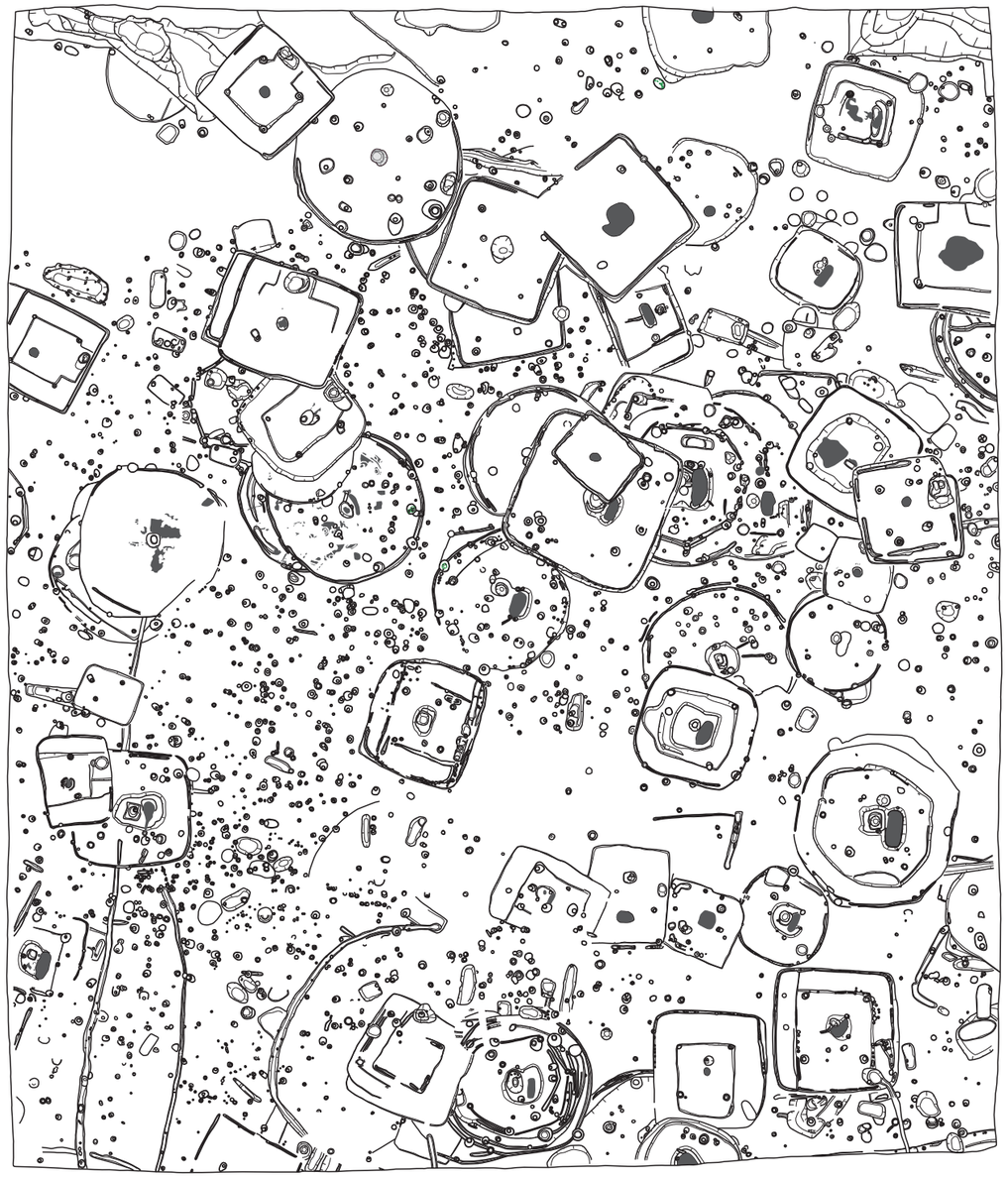
第１節　古墳時代初頭の土器

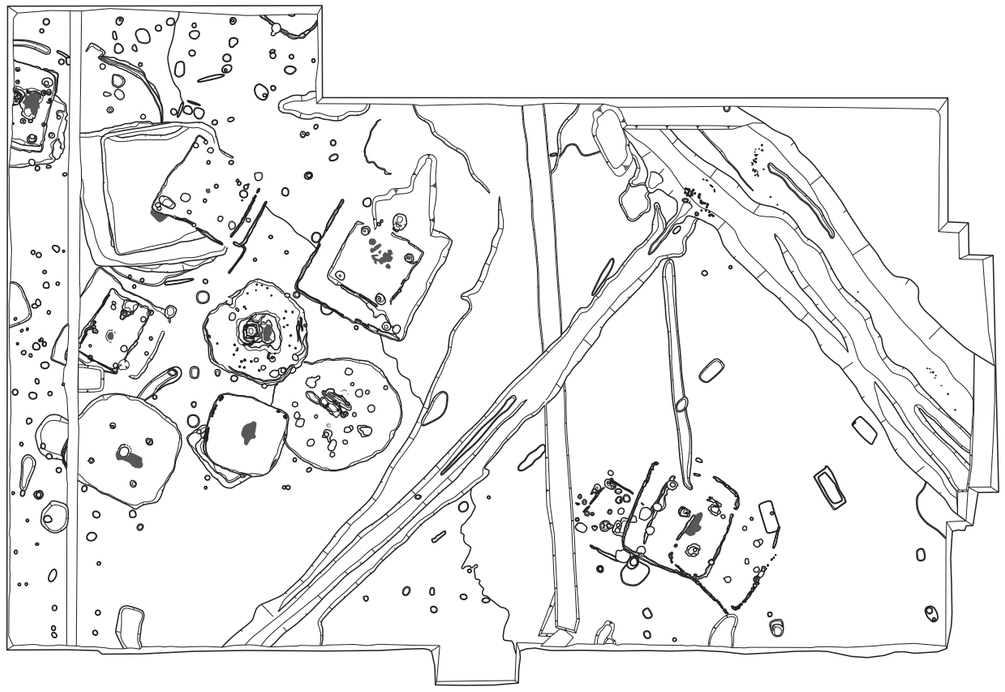
今回の調査で出土した遺物は、コンテナ（天昇電気工業製テンバコP18、約18リットル）に約200箱分で、そのうちの大半は土器であった。今回の出土資料の多くは、竪穴住居の建替え時の貼床構築に伴う人為的な埋戻し土から出土しており、既に指摘されているように廃棄の同時期性を考慮した編年（森岡・荒木2007,p427）を組み立てるのには良好な出土状態を呈していた。しかし、得られた資料の大半は全体像のわからない小片であるために、例えば、同じ遺構で出土した同じ器種であっても同一個体のものなのか否かについての判断材料に乏しいという制約が伴う。また、土器の分類に際して器種の定義が必要となるが、上述の理由から、ここでは行わない。そのため、和久遺跡が所在する播磨地域を扱った田中元浩氏をはじめとする先行研究を参考にすることにする（長友・田中2007）[註1]。このなかで田中氏は、姫路市長越遺跡の大溝出土土器の分析を軸にし、精製器種に製作技法、調整技法、胎土によって区分される３つの系統があることや、庄内式甕の細分について述べている。同様の系統は、住居址・土坑出土資料にも存在することを確認している。また、これらは、住居址の重複関係という層位学的前後関係とも矛盾がないという。長越遺跡で捉えられた傾向は、姫路市飯田カスカエ遺跡（旧仮称船場川東区整遺跡第２地点）、太子町鵤遺跡でも確認されている。そして、これをもとに田中氏は庄内式を１～４に細分し、とりわけ布留式土器に継続する新しい器種や製作技法の多くが出現する庄内３の段階に画期を求めている。具体的には、伝統式Ｖ様式（酒井1975・1976）の系統に加えて、精製器種における胎土の精選、庄内式甕の出現、高杯にみられる脚頂部凸面接合、横方向沈線状ミガキなどの新しい要素からなる系統が加わり、やがて変化していく段階である。仮に庄内１・２を庄内式併行期の前半、庄内３・４を庄内式併行期の後半とする。これと、今回検出した遺構出土土器を比較してみると、庄内式併行期の前半にはSH１-２が、後半にはSH１-１、SH２・３、SH６-１・２があたり、SH９・20を除く竪穴住居やSD１・SR１は概ね庄内式併行期の範疇に位置づけられる。また、これらはSH１やSH６にみられる遺構の層位学的な新旧関係とも齟齬をきたさない。

註１　田中氏の分析対象は主に精製器種や庄内式甕である。しかし、それら以外のいわゆる伝統的Ｖ様式の系統やそれが新しい系統に影響を受けて複雑に変容したと思われる一群が複雑に伴出しているのが実態であろう。特に甕においては、そういった様相が顕著であると思われる。また、庄内式甕についても、氏の分類に必ずしも当てはまらないような個体も見受けられるようである。

第２節　集落の変遷

今回の調査区の平面図と、第２章第３節でふれた第１次調査の平面図を合成したものが挿図19である。ここでは、前節で概観した土器の様相をもとに、各時期の遺構群の変遷をみていくことにする。なお、１次調査の遺構の時期につては、これまで公表されてきた調査成果を参考にしている（小柴2003・2010ほか）。





挿図 19　1・9 次調査区全体図（S=1：300、左が北）

弥生時代中期　第１次調査では25基の土坑や、旧河道を確認した。さらに古い中期前葉の甕も出土したが、明確な居住域は未確認であった。しかし、今回の調査で竪穴住居跡SH９を検出したことで、和久遺跡の集落の形成時期が一段階古くなることが確実になった。他に土坑３基（SK５～７）も確認している。今回検出した遺構の出土遺物のなかには、中期後半の土器が少なからず混入していることから、後世の営為の影響を多分に受けていることは明らかである。そして、SR１からは水流による摩滅をさほど受けていない土器が出土していることを勘案すると、今回の調査区の北東側のごく付近にはもう少し多くの遺構群が存在していたものと考えられる。また、調査区の南西隅で木棺墓の可能性が高い土坑を確認していることから、居住域の縁辺に墓域を配していた景観も想定できよう。

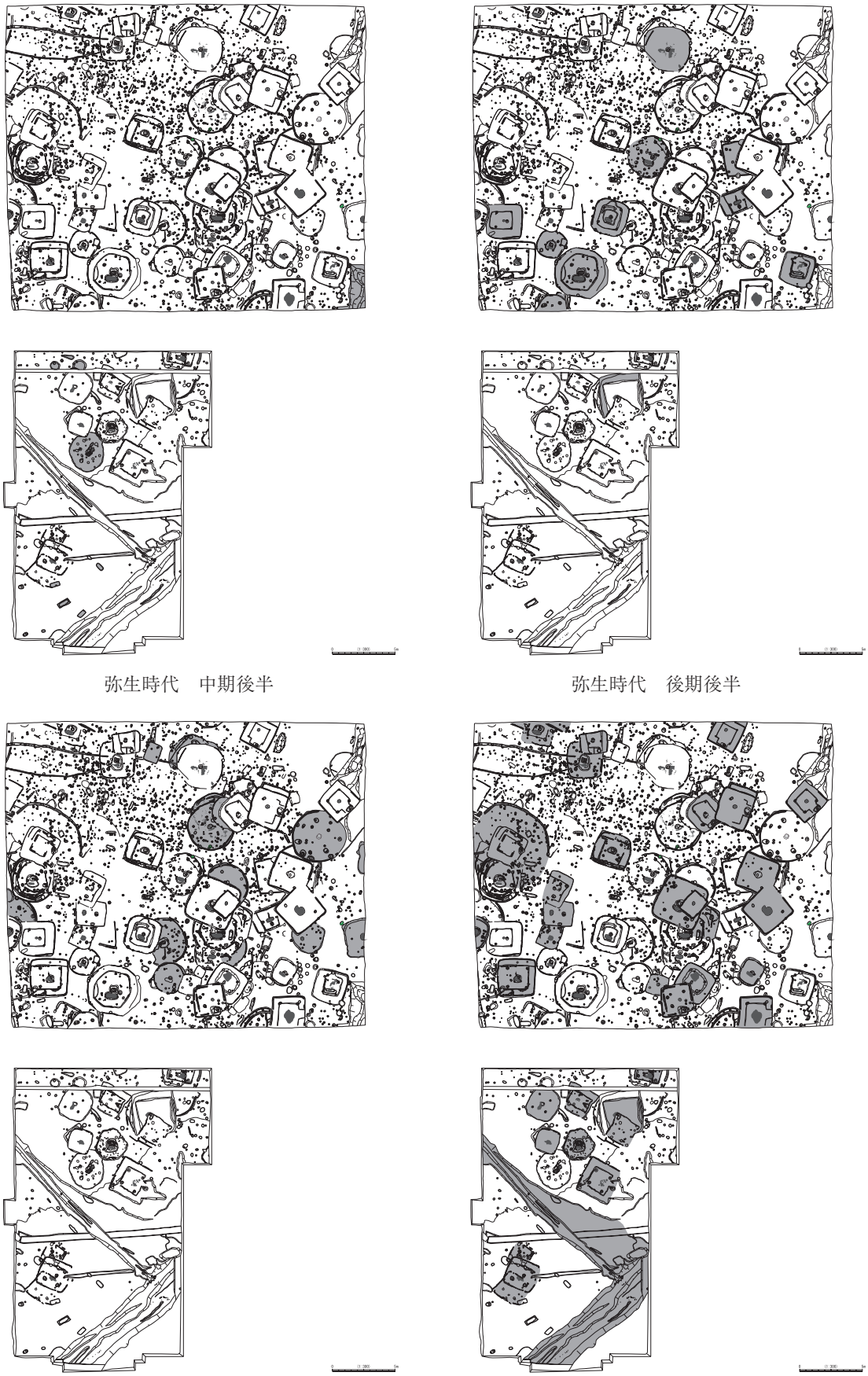
弥生時代後期前半　今回の調査では確認できなかったが、第１次調査で22棟を検出している。和久遺跡が集落として本格的に営まれだしたといえる。このうちの大半はほぼ同時期でありながら２、３棟単位で互いに切り合い関係をもっていることが特徴といえる。平面形は円形が大半を占める。また、重複関係からみた相対的な前後関係からは、小型化の傾向が看取できる。

弥生時代後期後半　SH20と第１次調査で検出した24棟の計25棟を数える。それに、第９次調査で未確認の後期末の７棟を足すと32棟になる。前段階とは異なり、近接はしていても互いに重複することはない。平面形は方形のものが円形のもに比べてわずかに多い。面積についてみてみると、円形、もしくは円形に近い平面形のものに比べて、平面方形のものは一回り小さい。平面形の変化に加えて、前段階でみられた面積の小型化がより進行していると考えられる。

庄内式併行期　住居は、SH１～６・８・10・12・13・15・16に第１次調査の検出例を合わせると計58棟となる。これにSD１やピットなどを合わせると、遺構の総数はさらに増え、和久遺跡は最盛期を迎える。住居の重複具合は、後期前葉段階と同じく、近接する２、３棟が重複するまとまりを形成しているようである。今回の調査でいうと、SH４・10、SH12・13・15・16・17である。特に後者の切り合い関係から、庄内式併行期まで残存していたイチマル土坑が中央焼土坑へと変化していく過程が見て取れる。また、ほとんどの住居が平面方形であるのに対して、SH５の平面形は不整ではあるが六角形を呈している点は特異である。これは、３点の碧玉製管玉（S３～５）が出土している点からも注目されよう。第１次調査でも同じく平面六角形のSH39からはガラス製小玉が、SH52-１からは碧玉製管玉が出土している。また、これらとはやや異なるかもしれないが、１次調査で確認した中で最大の方形竪穴住居SH25-２-１からはガラス製勾玉が出土している。住居間での出土遺物の差異は、以前にはあまりみられなかった。このような奢侈品の保有の有無として表出する住居間の差異は、古墳時代の幕開けである当該期にあって、非常に興味深い現象である。

小　　結　以上、時期ごとに住居跡の変遷を概観してきた。その結果、後期前半から後半、庄内式併行期へと住居数が増加していることがわかった。特に後期と庄内式併行期の差は大きく、先にふれたように庄内式併行期に至って和久遺跡は最盛期を迎えることは明らかである。また、各時期における重複関係についてみると、数棟が単位となって建てられているようである。

イチマル土坑　和久遺跡の住居の特徴的な屋内施設として、イチマル土坑が挙げられる。これについては、SH１-２の註２でふれたように、1983年に紹介されて以来の研究の蓄積がある。ただ、イチ



弥生時代　中期後半

弥生時代　後期後半

弥生時代　後期前葉

庄内式併行期

挿図20　遺構変遷

土坑・マル土坑それぞれの機能については、両者は灰穴炉が機能分化したもの、マル土坑については火消し壺、除水・排水を行うもの等、と定まった見解はない。このうち、SH２の中央焼土坑、SH５のイチ土坑、SH６・SH８・SH10のイチマル土坑については被熱探査を実施した。詳細については第４章第３節に譲るが、少なくとも、マル土坑のうちSH10例については、300～450度の被熱の経験の可能性が高いとされる分析結果があり、今回の調査成果の一つに挙げられよう。

第３節　おわりに

最後に、今回の調査成果をもとに、和久遺跡の評価の概要を述べることで、報告のまとめとしたい。

立　　地　和久遺跡は、揖保川東岸に広がる完新世段丘に立地する集落遺跡である。第４章第１節で詳述されたように、和久遺跡で遺構が検出される主要な時期は、環境が安定していた洪水発生期の挟間に相当する。また、調査区の旧地形である埋没旧中州上が埋没旧河道上に比べてわずかに高いため、排水されやすく比較的高燥な環境であったことに起因するという。

検出した遺構　今回の調査では、竪穴住居跡と土坑、木棺墓の可能性がある土坑、ピット、溝、旧河道を検出した。確認した住居跡は互いに近接、もしくは切り合うものが多く、なかには、ほぼ同位置で建て替えが行われているものもあった。今回、１棟ではあるが、SH９のように弥生時代中期後半に帰属する住居を確認できたことで、これまで検出されていた土坑とともに集落の形成時期がやや遡ることが確実になった。また、層位学的に得られた住居跡の新旧関係の把握によって、遺構の変遷や出土遺物の変遷を考えるうえでの好材料が得られた。そして、初めて木棺墓の可能性がある土坑を数基検出したことで、集落の景観がより具体的に復元できるようになった。

遺物・時期　出土した遺物の大半は土器で、その年代は大きく３つに大別できる。弥生時代中期後半、同後期後半、そして、庄内式併行期である。中期後半の土器はSH９やSK５～７、SD１、SR１で出土したが、特にSR１からは比較的大型で、摩滅の少ない破片が多くみられたことから、中期の集落域は今回の調査区のやや北西側に位置すると考えられる。出土した土器の大半は、庄内式併行期に比定できる。そのなかで特徴的なのは、地元産と思われる庄内式甕である。この甕は白色系の色調を呈し、石英粒・長石粒とともに黒褐色の砂粒を含有する胎土を有する。外面には細密ならせん状タタキを残し、底部は径が小さな平底を呈する。また、遠隔地からもたらされた搬入土器も比較的よく目に付く。出自が明らかなものは、山陰・吉備・讃岐・阿波・河内である。なかでも390・391は実測図を見る限りは搬入品と判別できないが、胎土は明らかに地元のものである。既にふれたように、太子町川島遺跡では讃岐に系譜をもつ土器の多くが地元の胎土をもつという。外来系土器の在地化とみられ、当該期に指摘されている活発な遠隔地交流の一端とみられる。土器以外の遺物としては、管玉（S３～８）や銅鏃（M１）、坩堝（M２）が挙げられる。管玉はSH５・６・ST１から出土した。管玉も今ふれた遠隔地交流を体現する遺物といえる。銅鏃は第１次調査でも出土しているが、坩堝は初めてみられたもので、小規模ながら青銅器生産が行われていた可能性を示唆し、和久遺跡の新たな一端をうかがわせる。

第５章　まとめ

本報告では調査成果の事実報告に終始したが、今後は、周辺の関連遺跡を含めて考察することで、和久遺跡の歴史的位置についてより深く考えていきたい。

【引用・参考文献】

秋本吉郎校注1978『風土記』日本古典文学大系２　岩波書店
秋山浩三2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
浅川滋男編2008『先史日本の住居とその周辺』同成社
浅田芳朗・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』
森田秀人・荒木幸治2007「播磨地域における弥生土器編年研究の沿革素描」長友朋子編『弥生土器集成と編年－播磨編－』六一書房
池田征弘編1999『清水遺跡-県道桑原北山揖保川緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告　第183冊　兵庫県教育委員会
石野博信1971「川島・20溝の土師器群」櫃本誠一編『川島・立岡遺跡（本文編）』太子町教育委員会
市村慎太郎2012「布留式と画期」『東生』第１号　東日本古墳確立期土器検討会
今里幾次1943「姫路市之郷彌生式遺蹟の研究－播磨国彌生式土器の様式分類－」『古代文化』第十四巻　第９號
今里幾次1969a「播磨弥生式土器の動態（一）」『考古学研究』第15巻第４号　考古学研究会
今里幾次1969b「播磨弥生式土器の動態（二）」『考古学研究』第16巻第１号　考古学研究会
今里幾次1977「播磨の雲母土器」『考古学研究』第22巻第４号　考古学研究会
今里幾次1978「第２章　長越遺跡調査前史」松下勝編『播磨・長越遺跡－本文編－』兵庫県文化財調査報告書　第12冊　兵庫県教育委員会
今里幾次1980『播磨考古学研究』　今里幾次論文集刊行会
井守徳男1983「第８章第１節奈カリ与弥生時代集落の構成」井守編『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ－本文編』　兵庫県教育委員会
岩崎直也1984「四国系土器群の伴出」『大阪文化誌』第17号　財団法人大阪文化財センター
上田哲也・田尾弘子・三宮勝子1960「丁古墳群「第四号墳」調査概報」『CULTURE』第２号　神戸女子商業高等学校歴史クラブ
上田哲也1973「黒岡山墳墓」上田哲也編『播磨の土師器の研究』東洋大学付属姫路高等学校第３冊　東洋大学附属姫路高等学校
及川良彦2004「第２節　深い竪穴、浅い竪穴　－旧表面の考古学のために－」山岸良二編『原始・古代日本の集落』同成社
大久保徹也1990「第10節　下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」藤吉史郎・西村尋文編『下川津遺跡　－第Ⅱ分冊－　瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財センター・本州四国連絡橋公団
大久保徹也2006「讃岐及び周辺地域の前方後円墳成立時期の土器様相」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
大谷輝彦2003「２和久遺跡（２次）」
中川猛編『TSUBOHORI』平成13年度（2001）姫路市教育委員会
岡垣頼和･今城愛･木村歩2008『2007年　とっとり「知の財産」活用推進事業調査研究　山陰地域の弥生時代建築に関する実証的復元研究』鳥取環境大学浅川研究室
置田雅昭1985「弥生土器から土師器へ」『月刊考古学ジャーナル』９月号（第二百五十二号）　ニューサイエンス社
甲斐昭光編1990『周世入相遺跡－県道高尾－有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県文化財調査報告書　第70冊　赤穂市教育委員会
香芝市二上山博物館編2006『シンポジウム『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』資料集』ふたかみ邪馬台国シンポジウム６　香芝市教育委員会
香芝市二上山博物館編2011『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』学生社
岸岡貴英2000「屋内高床部を持つ竪穴式住居跡について－近畿地方の事例から－」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
岸本一宏2001「北東播磨の弥生後期土器」松岡千寿編『荒田神社裏遺跡　－主要地方加美山崎線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告－』兵庫県文化財調査報告　第221冊　兵庫県教育委員会
岸本道昭1995a「2.494－土器群の実態と性格」『養久山・前地遺跡－龍野広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』龍野市文化財調査報告15　龍野市教育委員会
岸本道昭1995b「庄内播磨型甕発生説考」『庄内式土器研究－庄内式併行期の土器生産とその動き－』Ｘ　庄内式土器研究会
岸本道昭編2001『北山遺跡－1988・1989年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』龍野市文化財調査報告23　龍野市教育委員会
岸本道昭2001「6.檀特山西５・８号墳と鷲山古墳－西播磨における前方後円墳３基の測量報告－」『ひょうご考古』第７号　兵庫考古研究会
久城育夫・荒牧重雄・青木謙一郎編1989『日本の火成岩』岩波書店
國下多美樹1999「乙訓地域における土器交流拠点」『庄内式土器研究－庄内式併行期の土器生産とその動き－「庄内式併行期の土器交流拠点」』ＸＸ　庄内式土器研究
甲元眞之・寺沢薫編2011『弥生時代　上』講座日本の考古学５　青木書店
甲元眞之・寺沢薫編2011『弥生時代　下』講座日本の考古学６　青木書店
小柴治子2003「「¦○（いちまる）型中央土坑」の変遷－和久遺跡検出資料の検討－」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
小柴治子2010「Y22）和久遺跡」姫路市市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市
小林謙一1996「竪穴住居跡のライフサイクルの理解のために」『異貌』第十五号　共同体研究会
酒井龍一1975「第６章　「付載」－和泉における弥生式～土師器の移行過程について－　認識論的作業仮説として」『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会
酒井龍一1976「和泉における『伝統式Ｖ様式』に関する覚え書」『豊中・古池遺跡　発掘調査概報　そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会
櫻田小百合・大木要・西中久典2010「竪穴建物復元実験－弥生時代における平面方形化について－」『人間文化』26号　公立大学法人滋賀県立大学人間学部
笹川真一編2001『旧練兵場遺跡』善通寺教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
篠宮正1996「第３節　弥生時代中期中頃から後半の土器」兵庫県埋蔵文化財調査事務所編『神戸市西区玉津田中遺跡－第６分冊－』兵庫県文化財調査報告　第135－６冊　兵庫県教育委員会

篠宮正編2002『五反田遺跡　県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告　第227冊　兵庫県教育委員会
篠宮正2007a「2.東播磨地域の編年」長友朋子編『弥生土器集成と編年　－播磨編－』六一書房
篠宮正2007b「弥生土器の分類」篠宮正編『川戸遺跡（主）宍粟香寺線単独道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告　第314冊　兵庫県教育委員会
菅原康夫1987「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
菅原康夫1992「弥生時代終末期社会の特質」森浩一編『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
菅原康夫・梅木謙一編2000『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社
第４回播磨考古学研究集会実行委員会編2003『播磨の弥生時社会を探る－弥生時代中期から後期における集落動態－』第４回播磨考古学研究集会の記録
第10回播磨考古学研究集会実行委員会編2009『播磨の弥生時代竪穴建物を探る』第10回播磨考古学研究集会　資料集
第10回播磨考古学研究集会実行委員会編2010『播磨の弥生時代竪穴建物を探る』第10回播磨考古学研究集会　記録集
多賀茂治1996「玉津田中遺跡の竪穴住居について」兵庫県埋蔵文化財調査事務所編『神戸市西区玉津田中遺跡－第６分冊』兵庫県文化財調査報告　第135-6冊　兵庫県教育委員会
高木真光1981「７中田遺跡＜刑部遺跡＞関西電力Ｋ.Ｋ.地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」『昭和53・54年度　埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告７　八尾市教育委員会
髙田浩司2001「弥生時代銅鏃の二つの性格とその特質－石鏃・鉄鏃との比較を通じて－」『考古学研究』第47巻第４号　考古学研究会
高野陽子編2003『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書　第33冊＜本文編＞　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
高野陽子2004「共同研究　庄内式甕の出現」『京都府埋蔵文化財情報』第92号　財団法人京都府埋蔵文化財センター
高野陽子2010「山城の庄内式甕をめぐる二、三の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第６集　財団法人京都府文化財センター
田中眞吾編1994『播磨の地理　空と海と大地』神戸新聞出版センター
田中琢1965「布留式以前」『考古学研究』第12巻第２号　考古学研究会
田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号　有限責任中間法人日本考古学協会
次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会
坪井清足1956『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』笠岡市教育委員会
都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係-淀川水系を中心に-」『考古学研究会』第20巻第４号　考古学研究会
寺沢薫1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」寺沢薫編『奈良市六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県橿原考古学研究所
友久伸子1990「弥生時代の播磨型装飾壺－その文様にみる地域色－」『今里幾次先生古希記念　播磨考古学論叢』　今里幾次先生古希記念論文集刊行会
長友朋子2004「近畿における編年研究の経緯と現状」『弥生中期の並行関係』第53回埋蔵文化財研究集会　発表要旨集　埋蔵文化財研究会
長友朋子編2007『弥生土器集成と編年　－播磨編－』六一書房
長友朋子・田中元浩2007「３．西播磨地域の土器編年」大手前大学史学研究所編『弥生土器集成と編年　－播磨編－』六一書房
中溝康則1973「姫路勝原山戸墳墓」上田哲也編『播磨の土師器の研究』東洋大学付属姫路高等学校第３冊　東洋大学附属姫路高等学校
中溝康則1980「兵庫県揖保郡太子町川島川床遺跡出土の弥生中期絵画土器」『考古学雑誌』第66巻　第１号　日本考古學會
西岡達哉編1989『稲木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第六冊　香川県埋蔵文化財研究会
橋本政次1956『姫路町名字考』
浜田晋介2008「弥生時代の重複住居から見る集落の動態」『考古学研究』第55巻第１号　考古学研究会
濱田延充編2009『寝屋南遺跡-寝屋南地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』寝屋川市文化財資料27　寝屋川市教育委員会
播磨学研究所編2010『播磨から読み解く邪馬台国　最新考古学事情』　神戸新聞総合出版センター
櫃本誠一編1981『川島・立岡遺跡（本文編）』　太子町教育委員会
姫路市史編集委員会編1970『姫路市史』第２巻　姫路市役所
姫路市史編集専門委員会編2001『姫路市史』第一巻上　本編自然　姫路市
姫路百年編集委員会編1990『姫路百年』姫路市
姫路歴史研究会編1996『姫路の山々　山名の由来と周辺の歴史』中島書店
福井優2010「Y18）権現遺跡２」姫路市市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻　資料編　考古　姫路市
古本寛1995「中期後半の弥生土器について」『尾崎遺跡Ⅱ－市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』龍野市文化財調査報告14　龍野市教育委員会
古本寛2001「播磨系弥生鉢形土器の地域性について　－地域制の位置指標として－」『ひょうご考古』第８号　兵庫考古研究会
増田重信1962『播磨の先史時代』
松下勝1971「檀特山遺跡確認調査報告」『川島・立岡』　太子町教育委員会
松下勝編1976『播磨・長越遺跡－本文編－』兵庫県文化財報告　第12冊　兵庫県教育委員会
松本正信1981「姫路市檀特山遺跡出土の土器・石器について」『兵庫考古』第15号　兵庫考古研究会
松本正信1989「25）黒岡山墳丘墓」『太子町史』第３巻　太子町
松本正信2010「Z31）檀特山古墳群」姫路市史編集専門委員会『姫路市史』第七巻　下　資料編　考古　姫路市
森岡秀人1985「土器の交流－西日本－」『月刊考古学ジャーナル』９月号（第二百五十二号）　ニューサイエンス社
村上泰樹編1990『上構遺跡－揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告－』兵庫県文化財調査報告　第69冊　兵庫県教育委員会
山崎敏昭2009「１○（いちまる）型中央土坑と関連遺構の広がり－兵庫県西部から瀬戸内海沿岸地域に展開した弥生時代後半の炉跡－」『考古学の視点　兵庫発信の考古学　間壁葭子先生喜寿記念論文集〔献呈編〕』間壁葭子先生喜寿記念論文集刊行会
山下史郎1994「遺構について」高瀬一嘉編『姫路市六角遺跡』兵庫県文化財報告第134冊　兵庫県教育委員会
山田清朝編1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告書第165冊　兵庫県教育委員会
山田清朝編2002『共同住宅造成にともなう日輪寺遺跡発掘調査報告書　日輪寺遺跡第４次～第７次調査』神戸市教育委員会
山本三郎1971「第２節　播磨中期弥生式土器の実態－土坑出土土器を中心に－」櫃本誠一編『川島・立岡遺跡（本文編）』太子町教育委員会
山本三郎・田井恭一編1990『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会

山本三郎編1995『赤穂市　堂山遺跡－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告ＸＶＩ－　本文編』兵庫県文化財調査報告　第142冊　兵庫県教育委員会
山本博利・秋枝芳編『八代深田遺跡－姫路市八代字深田－』姫路市文化財調査報告Ⅵ　姫路市教育委員会
山本博利・山本和子2010「Y21）高田遺跡１」姫路市史編集専門委員会『姫路市史』第七巻　下　資料編　考古　姫路市
米田敏幸1986「中田１丁目39番地出土土器」『八尾市文化財紀要』２　八尾市教育委員会文化財室
湯村功編2002『鳥取県気高郡青谷町　青谷上寺地遺跡－一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』鳥取県教育文化財団調査報告書74　財団法人鳥取県教育文化財団
渡辺昇他編1987『法林寺北遺跡』兵庫県文化財調査報告　第49冊　兵庫県教育委員会
渡辺昇編1990『上構遺跡－揖保川流域下水道建設工事に伴う発掘調査報告－』兵庫県文化財調査報告　第69冊　兵庫県教育委員会
渡辺昇1996「長越遺跡の庄内式土器について－播磨での庄内式土器編年と播磨型甕存在の意義」『庄内式土器研究－庄内式併行期の土器生産とその動き－「摂津・播磨を中心とする庄内併行期の動き」』ＸＩ　庄内式土器研究
渡辺昇1999「庄内期の播磨の集落」森岡秀人・渡辺昇編『庄内式土器研究』ＸＸＩ　庄内式土器研究会
渡辺昇2009「Ⅱ　位置と環境」渡辺昇編『揖保郡太子町　鵤石田遺跡－（主）太子御津線（街路辰野線）都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ－』兵庫県文化財調査報告　第363冊　兵庫県教育委員会
渡辺昇編2010『姫路市所在　長越遺跡Ⅱ（飯田湯田遺跡）－（二）船場川水系船場川都市一般河川改修事業に伴う発掘調査報告書－』兵庫県文化財調査報告書　第375冊　兵庫県教育委員会
渡辺昇編2011『揖保郡太子町　沖代遺跡－一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－』兵庫県文化財調査報告　第391冊　兵庫県教育委員会
渡辺昇編2012『姫路市　長越遺跡Ⅲ（飯田湯田遺跡）』兵庫県文化財調査報告　第432冊　兵庫県教育委員会

土器観察表

土器観察表 1

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
1	古式土師器	甕	SH1-1	(15.4)	-	-	外面：右上がりタタキ？内面：粘土接合痕？
2	古式土師器	甕	SH1-1	-	-	-	外面：ヨコナデ。内面：口縁部ヨコナデ、肩部反時計回りのケズリ。
3	古式土師器	甕	SH1-1	-	-	-	外面：比較的細かい右上がりタタキ、下→上方向ハケメ。スス付着。内面：器壁粗く不明。
4	古式土師器	甕	SH1-1	-	4.5	-	外面：オサエ。内面：放射状ハケメが微細に残存。
5	古式土師器	甕	SH1-1	-	5.3	-	外面：右上がりタタキ。内面：左上がりハケメが微細に残存。底部：輪台技法。
6	古式土師器	甕	SH1-1	-	3.2	-	外面：右上がりタタキが微細に残存、底面上底状。内面：板状工具の当たりのみ残存。
7	古式土師器	甕	SH1-1	-	2.1	-	外面：放射状タタキ。内面：クモの巣状ハケメが微細に残存。底面：小さい平底。
8	古式土師器	甕	SH1-1	-	2.0	-	外面：やや右上がりハケメ。黒斑。内面：ナデが微細に残る。黒斑。底面：小さい平底。
9	古式土師器	甕	SH1-1	-	2.8	-	外面：不定方向のナデ・オサエ。黒斑。内面：ヨコナデ。底面：底部と胴部の境界が不明瞭。
10	古式土師器	甕	SH1-1	-	3.4	-	外面：右上がり粗いタタキ。黒斑。内面：調整不明。底面：タタキ。
11	古式土師器	甕/鉢	SH1-1	-	2.6	-	外面：調整不明。内面：クモの巣状ハケメが微細に残存。
12	古式土師器	高杯	SH1-1	-	-	-	外面：ヨコナデ。内面：火回り不良の黒斑
13	古式土師器	高杯	SH1-1	-	-	-	外面：下→上方向ハケメの後に縦位ミガキ。杯部内面：調整不明。脚部内面：オサエ。
14	古式土師器	高杯	SH1-1	-	(20.4)	-	外面：縦位ハケメが微細に残存。化粧土?内面：右下がりハケメ。
15	古式土師器	小型器台	SH1-1	-	-	-	外面：調整不明。内面：調整不明。受部：充填法。
16	古式土師器	小型鉢	SH1-1	-	-	-	外面：丁寧なナデ・オサエ。黒斑。内面：口縁部横位ハケメ、胴部横位ハケメが微細に残存。
17	古式土師器	有孔鉢	SH1-1	-	2.6	-	外面：オサエ以外は不明、黒斑。内面：板状工具によるナデ。底部：焼成前穿孔。
18	古式土師器	有孔鉢	SH1-1	-	-	-	外面：右上がりタタキ。黒斑。内面：オサエ。底部：粘土盤剥落、焼成前穿孔。
19	古式土師器	長口壺	SH1-2	11.6	-	-	外面：口縁部左上がりハケメ、胴部右上がりタタキ。内面：口縁部やや左上がりハケメ、胴部調整不明。
20	古式土師器	壺	SH1-2	3.8	-	-	外面：調整不明。黒斑。内面：不定方向の幅の狭いハケメ。黒斑。
21	古式土師器	甕	SH1-2	(12.8)	-	-	外面：右上がりハケメ。黒斑。内面：横～右上がりハケメ。
22	古式土師器	甕	SH1-2	(12.0)	-	-	外面：右上がりタタキが微細に残存、口縁部スス付着。内面：調整不明。
23	古式土師器	甕	SH1-2	-	-	-	外面：縦位ハケメ。内面：右上がりハケメ。
24	古式土師器	甕	SH1-2	-	-	-	外面：右上がりタタキ、口縁部叩き出し。黒斑。内面：調整不明。
25	古式土師器	甕	SH1-2	-	(6.0)	-	外面：平行～右上がりタタキ。内面：調整不明。
26	古式土師器	甕	SH1-2	-	3.9	-	外面：右上がりタタキ。内面：クモの巣状ハケメ、黒斑。底部：葉脈痕。
27	古式土師器	甕	SH1-2	-	3.8	-	内外面：調整不明。底部：輪台技法。
28	古式土師器	甕	SH1-2	-	1.6	-	内外面：調整不明。底部：小さい平底。
29	古式土師器	高杯	SH1-2	18.8	-	-	内外面：調整不明。
30	古式土師器	高杯	SH1-2	-	-	-	内外面：調整不明。
31	古式土師器	高杯	SH1-2	-	15.6	-	外面：調整不明。内面：ヨコナデ、化粧土？
32	古式土師器	小型器台	SH1-2	9.6	12.0	8.5	外面：脚部縦位ミガキ、他は調整不明、化粧土？内面：受部調整不明、脚部丁寧なヨコナデ。
33	古式土師器	小型鉢	SH1-2	7.4	-	7.2	外面：タタキと考えられる調整単位の面が残る。内面：ヨコナデ?底部：尖底。
34	古式土師器	小型鉢	SH1-2	10.0	-	-	外面：口縁部端部面取り、右上がりタタキ。内面：口縁部横位ハケメ。火回り不良の黒斑。
35	古式土師器	蓋	SH1-2	3.0	-	-	外面：縦位ハケメ、摘み部ヨコナデ。内面：調整不明。
36	古式土師器	小型器台	SH1-2	-	-	-	外面：横位沈線状ミガキ。内面：受部ヨコナデ、脚部横位沈線状ミガキが微細に残存。
37	古式土師器	製塩土器?	SH1-2	-	4.2	-	外面：二次被熱による風化著しい。内面：脚部全面にスス付着。
38	古式土師器	広口壺	SH2	-	-	-	外面：調整不明。黒斑。内面：左上がりハケメが微細に残存。頸部横位ハケメ。
39	古式土師器	甕	SH2	15.9	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部やや張る。右上がりやや細かいタタキの後に胴部下半下→上方向ハケメ。肩部以下スス付着。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、肩部オサエ、胴部左上がりケズリ。口縁部接合痕観察可。
40	古式土師器	甕	SH2	14.0	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部やや張る。右上がりタタキ、やや左上がりハケメ肩部に達する。内面：左上がりハケメ。
41	古式土師器	甕	SH2	16.8	-	-	外面：口縁部叩き出し、口縁部丁寧なヨコナデ、胴部右上がりタタキ。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、胴部左上がりケズリ。
42	古式土師器	甕	SH2	-	-	-	外面：右上がりやや細かいタタキが微細に残存。下半黒斑。内面：左上がりケズリ。
43	古式土師器	甕	SH2	-	1.8	-	外面：右上がりタタキの後に主に左上がりハケメ。下半スス付着。内面：左上がりハケメ、底部付近のみ左上がりケズリ。底部；やや突出するものの、小さな平底。
44	古式土師器	複合口縁壺	SH2	-	-	-	外面：櫛描き波状文、端部下端貼付け。内面：調整不明。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
暗黄灰色、橙色	軟質	径～3mm石英粒・長石粒・チャート粒をやや多く含みやや粗い。	38		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・チャート粒等を含む。	38		
灰白色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒・チャート粒等を含む。	38	36	
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒、長石粒、黒褐色粒、褐色粒を含む。	38	36	
にぶい橙色、黄灰色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	38	36	
にぶい橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒・クサリレキを含むが比較的精良。	38	36	
褐灰色、黄灰色	軟質	径～1mm石英粒、長石粒、黒褐色粒を含む。	38		
浅黄橙色、黒褐色	軟質	径～1mm石英粒・灰色粒やや多く、長石を少量含み、比較的精良。	38	36	
黒色、にぶい褐色	軟質	径～2mm長石粒、褐色粒、灰色粒をやや多く、石英粒を僅かに含む。	38		
灰白色	軟質	径～2mm長石粒・灰色粒・クサリレキ・花崗岩粒?をやや多く含む。	38	36	
灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・灰色粒・クサリレキをやや多く含む。	38		
浅黄褐色、灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・チャート粒・結晶片岩粒?・黒褐色粒を含む。	38		
にぶい黄褐色、浅黄橙色	やや良好	径～0.5mm長石粒・クサリレキを主体に、石英粒・黒褐色粒を少量含み、比較的精良。	38		
橙色～浅黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・灰色粒・黒褐色を少量、長石粒を僅かに含み、比較的精良。	38		円孔2孔残存。
灰白色	軟質	径～1mm赤褐色粒・クサリレキをやや多く、径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含み、比較的精良。	38		
黄灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・雲母粒?を含む。	38		
灰黄色、黄灰色	軟質	径～1mm長石粒・チャート粒・褐色粒を多く、石英粒を少量含む。	38		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体で、なかには両者が噛み合うものもある。比較的精良。	38		
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・黒褐色粒・クサリレキを含む。	38	37	
にぶい橙色、褐灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。径1mm大の同種砂粒を少量含む。	38	37	
明褐灰色、灰黄褐色	軟質	径～2mm長石粒・褐色粒をやや多く含む。	38	37	
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒主体、径5mm大黒褐色粒を稀に含み、やや粗い。	38	37	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大黒褐色粒を稀に含む。	38		
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	38		
にぶい橙色、褐灰色	軟質	径～1mm長石粒を多く含む。	38	37	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	38	37	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・クサリレキを含む。	38	38	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm長石粒、黒褐色粒を含む。	38		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含むが精良。	38		
浅黄橙色、灰白色	軟質	29に近く精良。	38		
灰白色、（橙色）	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含むが精良。灰色粒を含む。	38		
橙色、橙色～浅黄橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	38	38	床面出土、 円孔（径6mm） 3孔
浅黄橙色	軟質	径～2mm褐色粒・灰色粒主体、長石粒を少量含む。稀に径3mm大のものもありやや粗い。	38	38	床面出土
にぶい黄橙色、褐灰色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒主体、黒褐色粒を少量含む。	38	38	
にぶい橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色・褐色粒を含むが29に近く比較的精良。	38	38	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・灰色粒をやや多く含む。	38	38	
明赤褐色、黒褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。角閃石粒はみられない。	38	38	在地の胎土ではない。
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～3mm石英粒・長石粒・褐色粒を多く含む。	39		床面出土
灰黄褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒主体、チャート粒?を少量含む。	39	39	床面出土
灰白色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	39		床面出土
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	39		床面出土
淡黄褐色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含み、比較的精良。	39		床面出土
褐灰色、黄灰色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒少量含む。	39	39	床面出土
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒主体、石英粒・黒褐色粒を少量含む。	39		

土器観察表 2

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
45	古式土師器	広口壺	SH2	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
46	古式土師器	広口壺	SH2	-	-	-	内外面：調整不明。
47	古式土師器	直口壺	SH2	10.1	-	-	内外面：ヨコナデ。
48	古式土師器	広口壺	SH2	23.0	-	-	外面：円形浮文＋竹管文、ヘラ描き波状文、半截竹管文。内面：調整不明。
49	古式土師器	甕	SH2	15.5	-	-	外面：口縁部叩き出し、右上がりタタキの後に左上がりハケメ。下半スス付着。内面：口縁部横位ハケメ、胴部左上がりケズリ、円形コゲ付着。
50	古式土師器	甕	SH2	13.4	-	-	外面：右上がりやや細かいタタキ、口縁部下→上方向ハケメ。口縁部黒斑。内面：粘土接合痕観察可。
51	古式土師器	甕	SH2	(12.0)	-	-	外面：口縁部叩き出し、ヨコナデ。内面：ヨコナデ。
52	古式土師器	甕	SH2	-	-	-	内外面：調整不明。
53	古式土師器	甕	SH2	-	-	-	外面：横位やや粗いタタキ。スス付着。内面：調整不明。
54	古式土師器	甕	SH2	-	(6.8)	-	外面：右上がりタタキ。スス付着。内面：オサエ。
55	古式土師器	甕	SH2	-	1.4	-	外面：底部付近ケズリ。黒斑。内面：クモの巣状ハケメ。底部：ほとんど尖底。
56	古式土師器	有稜高杯	SH2	-	-	-	外面：縦位ハケメ。内面：調整不明。
57	古式土師器	高杯	SH2	-	-	-	外面：杯部は付加法、脚部縦位ミガキ。内面：ナデ。
58	古式土師器	高杯	SH2	-	-	-	外面：縦位ハケメが微細に残存。内面：ナデ。
59	古式土師器	器台	SH2	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：横位ケズリ。
60	古式土師器	鉢	SH2	-	-	-	外面：口縁部叩き出し、胴部右上がりタタキの後にやや左上がりハケメ。黒斑。内面：口縁部横位ハケメ。
61	古式土師器	直口壺	SH2-SK1	-	1.0	-	外面：縦位～左上がりミガキ。黒斑。内面：調整不明。底部：尖底気味の小さい平底。
62	古式土師器	甕	SH2-SK1	-	-	-	外面：やや右上がりタタキの後に左上がりハケメ。スス付着。内面：左上がりケズリ。
63	古式土師器	鉢	SH2-SK1	9.6	2.2	8.6	外面：縦位の粗いハケメが微細に残存。内面：丁寧なヨコナデ。おきだまり黒斑。底部：小さな平底。
64	古式土師器	鉢	SH2-SK1	(7.6)	1.1	5.1	外面：横位ミガキ。黒斑。内面：横位ミガキが微細に残存。底部：丸底気味の小さな平底。
65	古式土師器	鉢	SH2-SK1	7.8	-	-	外面：黒斑。内面：調整不明。
66	古式土師器	鉢	SH2-SK1	8.5	2.7	5.2	外面：粘土接合痕観察可。黒斑。内面：ヨコナデ。粘土接合痕観察可。
67	古式土師器	複合口縁壺	SH3	-	-	-	外面：ヨコナデ？内面：ヨコナデ、黒斑。
68	古式土師器	複合口縁壺	SH3	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
69	古式土師器	複合口縁壺	SH3	-	-	-	外面：頸部横位タタキの後に下→上方向粗いナデ。内面：下→上方向ナデ。
70	古式土師器	壺	SH3	6.6	-	-	外面：板状工具と思われる原体の当たりが微細に残存。内面：粗いオサエ。底部：輪台技法の可能性あり。
71	古式土師器	甕	SH3	16.0	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部横位～右上がりタタキ。黒斑。内面：左上がり粗いハケメ
72	古式土師器	甕	SH3	(13.8)	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部左上がりタタキ。内面：肩部左上がりケズリ。
73	古式土師器	庄内式甕	SH3	(14.6)	-	-	外面：肩部横位細密なタタキ、口縁部外側にやや膨れる。黒斑。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、肩部横位ケズリ。
74	古式土師器	庄内式甕	SH3	(14.0)	-	-	外面：口縁部外側にやや膨れる、丁寧なヨコナデ。内面：丁寧なヨコナデ。
75	古式土師器	甕	SH3	(15.2)	-	-	外面：擬凹線文がわずかに残存。内面：ヨコナデ。
76	古式土師器	甕	SH3	-	-	-	内外面：丁寧なヨコナデ。
77	古式土師器	庄内式甕	SH3	-	-	-	外面：横位細密なタタキ。内面：やや左上がりケズリ。
78	古式土師器	甕	SH3	-	7.1	-	外面：右上がり細密なタタキ。内面：調整不明。底部：輪台技法、葉脈痕。黒斑。
79	古式土師器	甕	SH3	-	3.7×4.2	-	外面：下→上方向ハケメが微細に残存。黒斑。内面：成形時に素地が乾燥していたための縦位のヒビが割れが観察可。底部：輪台技法。
80	古式土師器	甕	SH3	-	1.8	-	外面：右上がりタタキ。内面：調整不明。黒斑。底部を構成していたはずの粘土が剥落しており、小さな平底状を呈している。
81	古式土師器	有稜高杯	SH3	(25.5)	-	-	外面：ヨコナデ？黒斑。内面：ヨコナデ？
82	古式土師器	高杯	SH3	-	-	-	外面：調整不明。脚部：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。内面に軸芯痕が残存。
83	古式土師器	高杯	SH3	-	-	-	内外面：調整不明。
84	古式土師器	高杯	SH3	-	14.0	-	外面：調整不明、円孔1孔残存。内面：横位ハケメ。
85	古式土師器	高杯	SH3	-	-	-	外面：調整不明、裾部にヘラ描き沈線3条。内面：ナデ・オサエ。
86	古式土師器	鉢	SH3	(26.6)	-	-	外面：胴部縦位ハケメ。黒斑。内面：調整不明。
87	古式土師器	鉢	SH3	(14.6)	-	-	外面：口縁端部に沈線1条。内面：左上がりハケメの後にナデ。
88	古式土師器	鉢	SH3	(10.0)	-	-	内外面：調整不明。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
にぶい褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm長石粒を少量含み、比較的精良。	39		在地の胎土ではない。
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	39		
淡橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	39		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒をやや多く含む。	39	39	讃岐系
黄灰色、灰黄褐色	軟質	径～1mm褐色粒やや多く、石英粒・長石粒を少量含む。	39		
にぶい褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	39		
褐灰色、灰黄褐色	軟質	径～2mm長石粒をやや多く含む。	39		
浅黄色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・赤褐色粒を少量含み、比較的精良。	39		
黄灰色、橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	39		
褐灰色、黄灰色	軟質	径～1mm長石粒主体、石英粒を少量含む。	39		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	39	39	
にぶい黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	39		
にぶい黄褐色、にぶい橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含み、比較的精良。	39		
にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	39		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含み、比較的精良。	39	39	
灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	39		
黄灰色、褐灰色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・花崗岩粒を少量含み、比較的精良。	40	39	
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	40		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含み、比較的精良。	40	40	
にぶい橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、褐色粒・黒褐色粒を少量含み比較的精良。	40		
灰白色、褐灰色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、褐色粒・黒褐色粒を少量含み比較的精良。	40		
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含み、比較的精良。	40	40	
浅黄橙色、灰色	軟質	径～1mm長石粒主体、石英粒を少量含む。	40		
灰白色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	40		
灰白色	軟質	径～3mm長石粒主体、石英粒・褐色粒を少量含む。	40		
暗灰黄色、灰黄色	軟質	径～2mm角閃石粒主体、石英粒を少量含む。	40	40	河内産
灰白色、にぶい橙色	軟質	径～1mm長石粒主体、石英粒・褐色粒を僅かに含む。全体的に砂粒は少ない。	40	40	
にぶい橙色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	40		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を主体、褐色粒、黒褐色粒を少量含む。	40		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	40		
浅黄橙色、黄灰色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒、暗褐色粒を含む。	40		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm褐色粒・黒褐色粒主体、石英粒を僅かに含む。	40		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	40	40	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	40	40	
橙色、灰白色	軟質	径～2mm長石粒・暗褐色粒主体、石英粒を少量含む。	40	41	
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・径～3mm褐色粒・暗褐色粒をやや多く含む。	40	40	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・灰色粒を含む。	40		
浅黄橙色、明黄褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・暗褐色粒を少量含むが精良。	40	41	
灰色、橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・暗褐色粒を少量含むが精良。	40	41	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	40		円孔径：8mm
淡橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	40		
にぶい黄橙色	軟質	長石極小粒主体、径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	40	41	
にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	40		
にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量含み、精良。	40		

土器観察表 3

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
89	古式土師器	鉢	SH3	-	-	-	内外面：調整不明。
90	古式土師器	鉢	SH3	-	2.8	-	外面：右上がりやや細いタタキ、黒斑。内面：クモの巣状ハケメ。黒斑？底部：輪台技法。
91	古式土師器	甕	SH3-SK1	(11.8)	-	-	外面：口縁部丁寧なヨコナデ、胴部上半下→上方向ハケメ。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、胴部上半左上がりハケメ。粘土接合痕観察可。
92	古式土師器	甕	SH3-SK1	-	-	-	外面：横位細密なタタキ。スス付着。内面：左方向ケズリ。
93	古式土師器	甕	SH3-SK1	-	-	-	外面：やや右上がり粗いタタキ。下半スス付着。内面：調整不明。
94	古式土師器	庄内式甕	SH3-SK1	-	-	-	外面：右上がり細密なタタキの後に左上がりの細かいハケメ。下半スス厚く付着。内面：左上がりケズリ。下半コゲ。95に類似。
95	古式土師器	庄内式甕	SH3-SK1	-	-	-	外面：やや右上がり細密なタタキの後に縦位～やや左上がり細かいハケメ。全面にスス付着、特に下半は厚い。内面：左上がりケズリ。下半コゲ。94に類似。
96	古式土師器	甕	SH3-SK1	-	3.2	-	外面：右上がりやや細いタタキ。内面：板状工具によるナデつけ。底部：輪台技法。
97	古式土師器	初期布留型甕	SH3-SK1	-	-	-	外面：主に縦位ハケメ、薄くスス付着。内面：オサエの後に下→上方向ケズリ。コゲ付着（穀粒痕跡残存）。底部：尖底？
98	古式土師器	高杯	SH3-SK1	-	-	-	外面：縦位ハケメ、円孔１孔残存。内面：調整不明。
99	古式土師器	鉢	SH3-SK1	-	-	-	外面：ナデ？内面：粗いオサエ、頸部粘土接合痕観察可。
100	古式土師器	広口壺	SH5	13.2	-	-	外面：右上がりハケメが微細に残存。内面：調整不明。
101	古式土師器	広口壺	SH5	-	-	-	外面：口縁端部下端貼付け、口縁端部に円形浮文の剝落痕観察可。内面：ヨコナデ。
102	古式土師器	広口壺	SH5	-	-	-	外面：口縁端部櫛描き波状文を切る沈線2条。内面：調整不明。
103	古式土師器	壺	SH5	-	-	-	外面：頸肩部界に刻目のある突帯貼付け。内面：調整不明。
104	古式土師器	甕	SH5	14.7	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部右上がり粗いタタキ。内面：調整不明。
105	古式土師器	甕	SH5	-	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、肩部下→上方向ハケメ。黒斑。内面：調整不明。
106	古式土師器	甕	SH5	-	4.0	-	外面：水平～やや左上がりタタキ。内面：ナデ・オサエ。底部：輪台技法。
107	古式土師器	甕	SH5	-	(3.8)	-	外面：水平～右上がりタタキ。内面：ナデ・オサエ。底部：輪台技法。
108	古式土師器	甕	SH5	-	5.3	-	外面：右上がりタタキ、胴部下端の粘土剝落痕観察可。黒斑。底部粘土剝落部分に穀物と思われる圧痕観察可。内面：粗いオサエ。
109	古式土師器	高杯	SH5	-	(11.5)	-	外面：裾部縦位ハケメ、円孔１孔残存。内面：右→左方向断続的なハケメ、端部付近ヨコナデ。
110	古式土師器	鉢	SH5	-	-	-	内外面：調整不明。接合面で剝落。
111	古式土師器	甕	SH5 イチ土坑	-	-	-	外面：下→上方向ハケメ微細に残存。内面：調整不明。
112	古式土師器	高杯	SH5 マル土坑	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。
113	古式土師器	鉢	SH5 マル土坑	-	3.8	-	外面：鉢部縦位ハケメ、底部付近オサエ。内面：調整不明。底部：輪台技法。底部外面と鉢部内面黒斑。
114	古式土師器	鉢	SH5 マル土坑	-	2.3×2.6	-	外面：左上がりハケメ。内面：縦位ハケメ、オサエ。
115	古式土師器	広口壺	SH6-1	-	-	-	外面：ヨコナデ？内面：口縁部丁寧なヨコナデ、頸部縦位ハケメが微細に残存、オサエ。
116	古式土師器	甕	SH6-1	(15.0)	-	-	外面：胴部左上がりハケメ。スス付着。内面：調整不明。
117	古式土師器	甕	SH6-1	14.0	-	-	外面：口縁部叩き出し、胴部右上がり粗いタタキの後に下→上方向ハケメ。胴部下半2次被熱による破裂痕。内面：胴部下半下→上方向ケズリ。
118	古式土師器	甕	SH6-1	14.8	(4.7)	22.4	外面：口縁端部擬凹線文2条、胴部縦位～左上がりハケメ。スス付着。内面：胴部下半下→上方向ケズリ、胴部上半オサエ。
119	古式土師器	小型器台	SH6-1	-	8.0	-	内外面：調整不明。
120	古式土師器	鉢	SH6-1	(8.5)	2.6	3.9	外面：右上がり粗い微細に残存、底部籾圧痕。内面：粗いオサエ。黒斑。
121	古式土師器	鉢	SH6-1	10.2	5.2	7.8	外面：胴部上半左上がりやや細かいタタキ、高台接合部分オサエ。内面：板状工具の当たりのみ残存。黒斑。
122	古式土師器	有孔鉢	SH6-1	-	3.6	-	外面：右上がり細密なタタキ、底部焼成前穿孔。黒斑。内面：縦位ハケメ。
123	古式土師器	広口壺	SH6-1	-	-	-	外面：口縁端部櫛描き波状文。内面：口縁部櫛描き波状文。
124	古式土師器	広口壺	SH6-1	-	-	-	外面：口縁端部櫛描き波状文の上に円形浮文1個残存。内面：調整不明。
125	古式土師器	広口壺	SH6-1	(22.7)	-	-	内外面：丁寧なヨコナデ。黒斑。
126	古式土師器	広口壺	SH6-1	(16.8)	-	-	外面：口縁端部櫛描き波状文。内面：口縁端部櫛描き波状文。
127	古式土師器	直口壺	SH6-1	(12.0)	-	-	外面：口縁端部下端ヘラ描き沈線1条。内面：丁寧なヨコナデ、粘土接合痕観察可。
128	古式土師器	直口壺？	SH6-1	(12.2)	-	-	内外面：調整不明。
129	古式土師器	壺	SH6-1	-	3.3	-	外面：調整不明。内面：クモの巣状ハケメが微細に残存。
130	古式土師器	甕	SH6-1	(16.4)	-	-	外面：縦位ハケメ。内面：ヨコナデ？
131	古式土師器	庄内式甕	SH6-1	(15.6)	-	-	外面：口縁部端部面形成、沈線１条が微細に残存、肩部右上がり細密なタタキ。内面：横位ケズリ？接合痕観察可。黒斑。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰黄褐色、暗灰黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・角閃石粒・雲母粒をやや多く含む。	40		河内/讃岐産
にぶい黄橙色～褐灰色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・暗褐色粒をやや多く含む。	40	41	
にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	41		
にぶい黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、褐色粒を少量含む。	41	41	
黄灰色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	41		
にぶい黄橙色～黒褐色、灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含むが、粗くはない。	41	42	
浅黄橙色～黒褐色、灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含むが、粗くはない。	41	42	
にぶい黄橙色～浅黄橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	41		
灰黄褐色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	41		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒をやや多く含むが精良。	41		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・クサリレキを含む。	41		
浅黄橙色、橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒を含む。	41	42	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	41		
浅黄橙色、灰白色	軟質	石英粒・長石粒・黒褐色粒の極小粒を少量含むが比較的精良。	41		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を主体に、径3mm大の同種鉱物粒をやや多く含む。	41	42	
にぶい橙色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を多く含む。	41		
暗灰色、褐灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を主体に、暗褐色粒を少量含む。	41		
灰白色～橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を主体に、赤褐色粒を少量含む。	41		
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・黒褐色粒を含む。	41		
灰白色	軟質	径～0.5mm長石粒を含む。	41	43	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を主体に、チャート粒を少量含む。	41		円孔径：5mm
橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・クサリレキを少量含む。	41		
灰白色、灰黄褐色	軟質	砂粒をほとんど含まない。	41		
にぶい黄橙色、褐灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	41	42	
黄灰色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、石英粒を少量含む。	41	42	
浅黄橙色、黄灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	41		
にぶい黄橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	41		床面出土
橙色	軟質	径～3mm石英粒・長石粒を多く含み、粗い。	41		床面出土
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	41	43	床面出土
にぶい橙色、橙色～浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	41	43	床面出土、阿波系？
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒をやや多く含む。	41	43	床面出土
灰黄色、にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・暗褐色粒・長石粒極小粒を含む。	41		床面出土
灰白色	軟質	径～3mm石英粒・長石粒主体、黒褐色粒を少量含む。	41	43	床面出土
にぶい黄橙色、灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	41	44	床面出土
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	42	44	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を含むが、精良。	42		
褐灰色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	42		阿波系
橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	42		
にぶい橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	42		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	42		
灰白色	軟質	径～0.5mm褐色粒・黒褐色粒主体、石英粒を少量含む。	42		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、黒褐色粒を少量含む。	42		
灰白色、黄灰色	軟質	径～1mm褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒主体・石英粒を少量含む。	42		

土器観察表 4

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
132	古式土師器	甕	SH6-1	(17.0)	-	-	外面：口縁部叩き出し、胴部右上がり粗いタタキ。内面：調整不明。
133	古式土師器	甕	SH6-1	(13.9)	-	-	内外面：調整不明。
134	古式土師器	甕	SH6-1	-	3.0×3.5	-	外面：右上がりタタキ。内面：コゲ付着。底部：タタキ。
135	古式土師器	甕	SH6-1	-	2.1	-	外面：右上がりタタキ。スス付着。内面：ナデ・オサエ。底部：タタキ、小さい平底。
136	古式土師器	有段高杯	SH6-1	-	-	-	外面：杯部段立上がり櫛描き波状文、口縁部端部縦位ミガキ、黒斑。内面：口縁端部櫛描き波状文。黒斑。
137	古式土師器	高杯	SH6-1	-	-	-	外面：縦位ミガキ。内面：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。軸芯痕観察可。
138	古式土師器	器台	SH6-1	(18.0)	-	-	外面：口縁部付近ヨコナデ、筒部縦位ハケメが微細に残存。内面：ヨコナデ？
139	古式土師器	小型器台	SH6-1	-	-	-	内外面：調整不明。
140	古式土師器	小型器台	SH6-1	-	-	-	外面：縦位ミガキ？杯部接合痕観察可、円孔2孔残存。内面：調整不明。
141	古式土師器	小型器台	SH6-1	-	-	-	外面：軸部縦位ミガキ、円孔2孔残存。内面：径8mmの小孔が貫通して中空状。
142	古式土師器	小型器台	SH6-1	-	8.0	-	外面：縦位ミガキ。内面：径１cmの小孔が貫通して中空状。
143	古式土師器	鉢	SH6-1	(10.8)	-	-	外面：縦位～左上がりハケメ。内面：調整不明。
144	古式土師器	鉢	SH6-1	8.1	-	4.7	外面：右上がりタタキ微細に残存。内面：調整不明。
145	古式土師器	鉢	SH6-1	-	4.2	-	内外面：調整不明。外面黒斑。
146	古式土師器	鉢	SH6-1	(13.5)	-	-	外面：横位短いミガキが微細に残存。内面：屈曲部横位ミガキが微細に残存。黒斑？
147	古式土師器	鉢?	SH6-1	(15.0)	-	-	外面：横位～右上がりタタキが微細に残存。内面：粗いオサエ。全体として作りが粗い。
148	古式土師器	鉢	SH6-1	-	4.2	-	内外面：調整不明。全体として作りが粗い。
149	古式土師器	鉢	SH6-1	-	-	-	内外面：ナデ・オサエ。
150	古式土師器	鉢/製塩土器	SH6-1	-	3.3	-	内外面：調整不明。
151	古式土師器	複合口縁壺	SH6-2	14.7	-	-	外面：頸部縦位ハケメ、胴部下半右上がりタタキが微細に残存。内面：胴部上半2条1単位の工具の当たり、オサエ、胴部下半下→上方向ケズリ。
152	古式土師器	複合口縁壺	SH6-2	-	-	-	外面：ヨコナデ。内面：頸部横位ハケメ、肩部横位ミガキ。
153	古式土師器	直口壺	SH6-2	-	-	-	内外面：縦位ミガキ。
154	古式土師器	甕?	SH6-2	(13.2)	-	-	内外面：ヨコナデ。
155	古式土師器	甕	SH6-2	13.0	-	-	外面：口縁部叩き出し、肩部右上がり粗いタタキ。内面：調整不明。黒斑。
156	古式土師器	甕	SH6-2	(11.8)	-	-	外面：肩部左上がりハケメが微細に残存。内面：やや強いヨコナデ？
157	古式土師器	甕	SH6-2	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
158	古式土師器	甕	SH6-2	(13.4)	-	-	外面：ヨコナデ。内面：肩部やや左上がりケズリ。
159	古式土師器	甕	SH6-2	-	4.6	-	外面：右上がり粗いタタキ。黒斑。内面：ナデ・オサエ。底部：輪台技法？
160	古式土師器	甕	SH6-2	-	5.2	-	外面：右上がり粗いタタキ、スス付着。内面：調整不明、黒斑？底部：輪台技法、葉脈痕。
161	古式土師器	甕	SH6-2	-	2.0	-	内外面：調整不明。底部：小さな平底様。
162	古式土師器	鉢	SH6-2	-	-	-	外面：横位粗いタタキ。内面：ナデ・オサエ。
163	古式土師器	鉢	SH6-2	-	4.0	-	外面：底部付近オサエ。内面：粗いオサエ。底部：輪台技法。
164	古式土師器	土製円盤	SH6-2	3.4	-	-	表面：櫛描き波状文が微細に残存。裏面：詳細不明。
165	古式土師器	広口壺	SH8-1	13.0	-	-	外面：頸部縦位ミガキ、肩部縦位～左上がりミガキ。内面：肩部しぼり目。
166	古式土師器	広口壺	SH8-1	-	-	-	外面：左上がりハケメが微細に残存。内面：左上がりハケメが微細に残存。
167	古式土師器	壺	SH8-1	-	(5.4)	-	外面：底部付近下→上方向ケズリ。内面：左上がりハケメ。
168	古式土師器	甕	SH8-1	-	-	-	外面：口縁部叩き出し。内面：ヨコナデ。
169	古式土師器	甕	SH8-1	-	-	-	内外面：ヨコナデ。外面スス付着。
170	古式土師器	甕	SH8-1	(14.0)	-	-	外面：口縁端部擬凹線文3条、肩部縦位ハケメが微細に残存。内面：左上がりケズリ。
171	古式土師器	甕	SH8-1	-	2.7	-	外面：右上がりの微細なタタキの後に縦位ハケメ。内面：板状工具によるナデつけ。昆虫の可能性のある圧痕観察可。
172	古式土師器	甕	SH8-1	-	-	-	内外面：調整不明。外面黒斑。
173	古式土師器	高杯	SH8-1	-	-	-	内外面：調整不明。内面：径5mm軸芯痕観察可。
174	古式土師器	鉢	SH8-1	5.6	1.7	2.1	外面：口縁部下にヘラ描き沈線1条、底部付近縦位ハケメが微細に残存。内面：オサエ？黒斑
175	古式土師器	広口壺	SH8-2	-	-	-	外面：黒斑。内面：調整不明。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含み粗い。	42		
黄灰色	軟質	径～1mm褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒主体、石英粒を少量含む。	42		
灰白色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	42	44	
灰褐色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	42	44	
褐灰色、暗灰色	軟質	径～1mm石英粒・黒褐色粒・長石極小粒を少量含む。	42	45	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・黒褐色粒を少量含むが精良。	42	44	
にぶい褐色、灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	42	45	丹波系
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm褐色粒・黒褐色粒主体、石英粒・長石粒を少量含むが精良。	42		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	42		
灰黄褐色、灰褐色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	42		円孔径：8mm
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	42		
にぶい橙色、橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	42		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	42	44	
橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・黒色粒を含む。	42		在地の胎土ではない可能性
褐灰色、にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含むが比較的精良。	42	45	丹波・但馬系？
褐灰色～浅黄橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・黒褐色粒を少量含む。	42	45	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	42		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	42		
明赤褐色、黒褐色	軟質	石英・長石極小粒を含む。	42	44	讃岐系？
浅黄橙色、にぶい黄橙色	やや堅緻	径～1mm長石粒・褐色粒を少量含む。	42	45・46	床面出土
灰黄褐色～にぶい黄褐色	軟質	長石極小粒をやや多く、径～0.5mm黒褐色粒を少量含む。	42		
にぶい橙色、灰黄褐色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含むが精良。	42		
橙色	軟質	砂粒をほとんど含まず比較的精良。	42		在地の胎土ではない可能性
灰黄褐色、褐灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	42	46	
褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	42	46	在地の胎土ではない可能性
褐灰色、灰褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	42		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	42	46	
褐灰色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	42	46	
灰褐色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、チャート粒を少量含む。	42	46	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒主体、赤褐色粒を少量含む。	42	46	
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒をやや多く含み、粗い。	42		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	42		
灰黄褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	42		弥生中期の広口壺を転用
浅黄橙色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	43		
浅黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量、径3mm大赤褐色粒を稀に含む。	43		
褐灰色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	43		
橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒、径4mm大花崗岩粒を少量含む。	43		
灰黄褐色、にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量含む。	43		
灰黄褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・クサリレキを含む。	43	47	
灰白色、灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	43		
にぶい黄橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、石英粒・黒褐色粒を少量含む。	43		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	43		
にぶい橙色、黄灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	43	47	
暗灰色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、石英極小粒をやや多く含む。	43		

土器観察表 5

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
176	古式土師器	広口壺	SH8-2	-	-	-	外面：頸肩部境界に刻目のある突帯貼付け。内面：調整不明。
177	古式土師器	甕	SH8-2	-	4.4	-	外面：ナデ・オサエ。黒斑。内面：縦位ハケメ。底部：輪台技法？
178	古式土師器	甕	SH8-2	-	2.9	-	外面：右上がり粗いタタキ。黒斑。内面：粗いオサエ。底部：小さい平底様、タタキ。
179	古式土師器	高杯	SH8-2	-	11.0	-	内外面：調整不明。脚裾部円孔3孔残存。
180	古式土師器	有孔鉢	SH8-2	-	2.3	-	外面：右上がりやや細いタタキ。内面：縦位ハケメが微細に残存。黒斑。底部：焼成前穿孔4孔残存。
181	弥生土器	広口壺	SH9	-	-	-	外面：口縁端部ヘラ描き沈線3条の後に縦位の鋭利な沈線。内面：調整不明。
182	弥生土器	広口壺	SH9	(19.4)	-	-	外面：口縁端部櫛歯状工具による圧痕文。内面：ナデ。
183	弥生土器	壺	SH9	-	6.1	-	外面：縦位ミガキ。黒斑。内面：調整不明。
184	弥生土器	無頸壺	SH9	(15.0)	-	-	外面：口縁部凹線文4条、下段二枚貝腹縁圧痕文2段、円形浮文2個残存。内面：ナデ・オサエ。
185	弥生土器	無頸壺	SH9	-	-	-	外面:括れ部分に断面三角形突帯2条貼付け、上半縦位ミガキ、下半隅丸方形透し孔2孔残存、内面:調整不明。底部粘土円盤剝落痕観察可。
186	弥生土器	甕	SH9	11.3	-	-	外面：縦位ハケメ。スス付着。内面：下半下→上方向ケズリ、コゲバンド。
187	弥生土器	甕	SH9	(12.2)	-	-	外面：縦位ハケメ微細に残存、板状工具による左下がり圧痕文が微細に残存。内面：縦位ハケメ。
188	弥生土器	甕	SH9	12.0	-	-	外面：調整不明。内面：口縁端部僅かに摘み上げ。
189	弥生土器	甕	SH9	(14.6)	-	-	外面:縦位粗いハケメ、板状工具の左下がり圧痕文、口縁端部擬凹線文1条。内面:口縁端部僅かに摘み上げ。
190	弥生土器	甕	SH9	(14.4)	-	-	外面：調整不明。スス付着。内面：調整不明。
191	弥生土器	甕	SH9	-	-	-	外面：縦位ハケメが微細に残存。スス付着。内面：調整不明。
192	弥生土器	甕	SH9	-	5.2	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：縦位板状工具によるナデつけ。コゲ付着。
193	弥生土器	甕	SH9	-	9.4	-	外面：縦位ミガキ。内面：調整不明。
194	弥生土器	高杯	SH9	-	-	-	外面：縦位ミガキ。内面：杯部粘土円盤剝落痕観察可、しぼり目。
195	弥生土器	土製有孔円盤	SH9	3.4×3.8	-	-	表裏面：調整不明。中央付近に焼成後穿孔。
196	弥生土器	水差し	SH9	9.4	-	-	外面：縦位ハケメ、二枚貝腹縁圧痕文、把手完存。内面：左上がりハケメ微細に残存。
197	弥生土器	広口壺	SH9 マル土坑	-	-	-	外面：縦位粗いハケメ。内面：ナデ？
198	弥生土器	脚台	SH9 マル土坑	-	10.0	-	外面：ナデ。黒斑。内面：しぼり目。
199	弥生土器	広口壺	SH9-SK1	-	-	-	外面：断面三角形突帯4条。内面：調整不明。
200	古式土師器	有稜高杯	SH10	(19.5)	-	-	内外面：調整不明。外面黒斑。
201	古式土師器	高杯	SH10	-	-	-	外面：調整不明。内面：脚頂部凸面接合。
202	古式土師器	高杯	SH10	-	(16.3)	-	外面：ヨコナデ。内面：左上がりケズリ。
203	古式土師器	高杯	SH10	-	17.5	-	外面：裾部右上がりタタキの後に縦位ミガキ。内面：ナデ？
204	古式土師器	広口壺	SH20	-	6.0	-	内外面：ナデ・オサエ。黒斑。
205	古式土師器	壺	SH20	-	5.9	-	外面：右上がりタタキ微細に残存、黒斑。内面：縦位ハケメ。
206	古式土師器	細頸壺	SH20	-	-	-	外面：調整不明。内面：しぼり目。
207	古式土師器	小型丸底鉢?	SH20	-	-	-	外面：調整不明。内面：ナデ・オサエ。
208	古式土師器	甕	SH20	12.4	-	-	外面：右上がりタタキ。黒斑。内面：ヨコナデ。
209	古式土師器	甕	SH20	(11.4)	-	-	外面：口縁端部擬凹線文2条。内面：ヨコナデ。
210	古式土師器	甕	SH20	(10.3)	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、肩部やや右上がりハケメ。内面：ヨコナデ。
211	古式土師器	甕	SH20	-	5.2	-	外面：右上がり粗いタタキ。内面：縦位ハケメ？底部：スス付着。
212	古式土師器	高杯	SH20	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。
213	古式土師器	高杯	SH20	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：横位ケズリ。
214	古式土師器	高杯	SH20	(26.4)	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、杯部調整不明。内面：ヨコナデ。
215	古式土師器	高杯	SH20	-	-	-	外面：横位ピッチの短いミガキ。内面：杯部横位ミガキ、脚部横位ケズリ。
216	古式土師器	高杯	SH20	-	(18.6)	-	外面：調整不明、裾部に円孔1孔残存。内面：ナデ・オサエ。
217	古式土師器	高杯	SH20	(15.5)	-	-	外面：杯部横位ミガキ。内面：杯部横位細かいミガキ。
218	古式土師器	蓋	SH20	-	-	-	外面：摘み完存、傘部縦位ミガキ。内面：左下がりケズリ。
219	古式土師器	鉢	SH20	-	(4.2)	-	外面：縦位ハケメが微細に残存。黒斑。内面：オサエ。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰黄褐色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	43	47	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒主体、径3mm大花崗岩粒を稀に含む。	43	47	
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・クサリレキ主体、径2mm大花崗岩粒を少量含む。	43	47	
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	43	47	円孔径：8mm
にぶい黄橙色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒を少量、赤褐色粒を稀に含むが比較的精良。	43	47	
橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒主体、径5mm大花崗岩粒を稀に含む。	43		
にぶい橙色、橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、同大黒褐色粒を稀に含む。	43		
にぶい橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	43		
浅黄橙色、灰白色	軟質	砂粒をほとんど含まず比較的精良。	43	48	円形浮文径：8mm
橙色、淡黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	43	48	
黒褐色～浅黄橙色、 暗褐色～浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	43	48	
灰白色	軟質	長石極小粒・径2mm大赤褐色粒を少量含む。	43	48	
にぶい黄橙色、淡橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	43		
にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量含む。	43	48	
にぶい黄橙色、灰白色	軟質	石英・長石極小粒・径1mm大赤褐色粒を少量含むが比較的精良。	43	48	
灰黄褐色、浅黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量含む。	43		
橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量含む。	44		
浅黄橙色、灰白色。	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	44	49	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒を少量含むが比較的精良。	44		
橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	44		土器を転用、紡錘車か
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	44	49	
にぶい黄橙色	軟質	石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒極小粒を少量含む。	44		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	44	49	
黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、径3mm大花崗岩粒稀に含む。	44	49	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・赤褐色粒を少量含む。	44		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、黒褐色粒を少量含む。	44	49	
にぶい褐色、明褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒主体、径2mm大石英粒・長石粒が噛合う小礫を稀に含む。	44		讃岐産
浅黄橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	44	50	
黄灰色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	44	49	
にぶい橙色、明橙色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・角閃石粒？・赤褐色粒をやや多く含む。	44	50	在地の胎土ではない可能性
明褐色、にぶい褐色	やや堅緻	径～1mm石英粒・角閃石粒・雲母粒を主体、径3mm大花崗岩粒を稀に含む。	44		讃岐系？
にぶい橙色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	44	50	色調はやや異質 阿波系？
浅黄橙色、にぶい橙色	軟質	径～2mm長石粒・褐色粒を含む。	44		
橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒を少量含む。	44	50	
灰白色、灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・暗褐色粒を少量含む。	44		
にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	44	50	
灰白色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	44	51	
にぶい赤褐色、橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・暗褐色粒を含む。	44		丹波・但馬系？
にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母粒をやや多く含む。	44	50	讃岐産
明褐色、褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母粒を含む。	44		阿波産？
明褐色、橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母粒を含む。	44		阿波産？
橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石極小粒を含む。	44	51	阿波産？
浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒主体、暗褐色粒を含む。	44	51	
褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・角閃石粒を少量含む。	44		讃岐産？

土器観察表 6

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
220	古式土師器	鉢	SH20	-	2.2	-	外面：右上がりタタキ微細に残存、部分的に顔料が残存している可能性。内面：縦位ケズリ。
221	古式土師器	直口壺	SH20 マル土坑	10.6	6.2	29.4	外面：縦位ミガキが微細に残存。肩部黒斑。内面：胴部横位～左上がりケズリ、底部オサエ。
222	古式土師器	甕	SH20 マル土坑	（14.8）	-	-	内外面：ヨコナデ。
223	古式土師器	直口壺	SH20 ベッド状遺構	-	-	-	外面：右上がりタタキの後に縦位ハケメ。内面：横位ハケメ。黒斑。
224	古式土師器	細頸壺	SH20 ベッド状遺構	-	-	-	外面:縦位細かいハケメの後に縦位ミガキ（胴部上半・下半で別単位）、内面:上半オサエ、下半横位ケズリ。底部：丸底。
225	古式土師器	甕	SH20 ベッド状遺構	-	5.7	-	外面：縦位ハケメ、スス付着。内面：板状工具によるナデつけ。
226	古式土師器	甕	SH20 ベッド状遺構	-	-	-	外面：右上がり粗いタタキ。黒斑。内面：横位ハケメ。
227	古式土師器	広口壺	SH11	-	-	-	外面：口縁端部擬凹線文2条。内面：ヨコナデ。
228	古式土師器	甕	SH11	-	3.3	-	外面：右上がりタタキ微細に残存。内面：粗いオサエ。
229	古式土師器	鉢	SH11	12.0	6.8	4.0	外面：右上がり粗いタタキ。内面：横位ハケメ。上半黒斑。底部葉脈痕。
230	古式土師器	鉢	SH11	（18.6）	-	-	外面：調整不明。内面：縦位ミガキが微細に残存。
231	古式土師器	鉢	SH12-SP10	-	-	-	外面：横位沈線状ミガキ。内面：横位沈線状ミガキの後に左下がりミガキ。
232	古式土師器	高杯	SH12-SP10	-	-	-	外面：調整不明。内面：横位ミガキが微細に残存。黒斑。
233	古式土師器	鉢	SH12-SP10	-	-	-	外面：横位沈線状ミガキ微細に残存。内面：ヨコナデ？
234	古式土師器	広口壺	SH13 マル土坑	18.3	-	-	外面:口縁部打ち欠きの可能性あり、口縁端部沈線2条、頸部縦位ハケメ微細に残存。内面:調整不明。黒斑。
235	古式土師器	高杯	SH13 マル土坑	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
236	古式土師器	広口壺	SH13 イチ土坑	（20.7）	-	-	外面：口縁端部沈線1条。内面：調整不明。
237	古式土師器	広口壺？	SH13 イチ土坑	（18.2）	-	-	外面：頸部左上がりハケメ微細に残存。内面：ヨコナデ。
238	古式土師器	高杯	SH13 イチ土坑	-	-	-	内外面：調整不明。
239	古式土師器	小型器台	SH13 イチ土坑	-	-	-	外面：調整不明。内面：受部は脚部に粘土を充填して成形。
240	古式土師器	甕	SH14	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
241	古式土師器？	甕	SH14	-	3.6	-	外面：右上がりタタキ。スス付着。内面：調整不明。底部：葉脈痕。
242	弥生土器	広口壺	SH14	-	-	-	外面：頸肩部境界に指頭圧痕突帯、頸部縦位ハケメ。内面：調整不明。
243	弥生土器	広口壺	SK6	16.0	8.5	26.4	外面：口縁部強く折り曲げ、頸肩部の屈曲鋭く胴部は強く張る、縦位～左下がり粗いハケメの後に胴部中位横位ミガキ、胴部下半縦位ミガキ、胴部上半・口縁端部板状工具小口の圧痕文、化粧土？内面:口縁部黒斑。下→上方向ハケメが微細に残存。
244	弥生土器	広口壺	SK6	-	6.7	-	外面：製作技法は基本的に243と同じだが、1次調整のハケメの原体は243より細かく丁寧、頸部断面三角形2条貼付け、胴部上半二枚貝腹縁圧痕文3段、胴部中位黒斑。内面：胴部下半下→上方向ケズリ、胴部中位以上下→上方向ハケメ。
245	弥生土器	広口壺	SK6	17.9	-	-	外面：口縁端部は上下に拡張して端面を成形、口縁端部上半板状工具小口の圧痕文、中央に3個一対の円形浮文5対残存、頸部縦位ハケ、化粧土？内面：調整不明。
246	弥生土器	広口壺	SK6	-	-	-	外面:口縁端部は上下に軽く摘み出し板状工具小口の圧痕文・円形浮文1個残存。内面:口縁内突帯2条残存、頂部に刻目、接合箇所で剝落。
247	弥生土器	広口壺	SK6	-	6.2	-	外面：243・244の中型品、胴部の張りはやや弱い、胴部中位の横位ミガキが下位の縦位ミガキを切る、化粧土？内面：調整不明。
248	弥生土器	広口壺	SK6	-	-	-	外面：製作技法は243・244と同じ、櫛描き直線文・同波状文を交互に配置、中央の直線文上に3個一対の円形浮文2対残存。内面：左上がりハケメ、施文に伴うオサエ。
249	弥生土器	広口壺？	SK6	-	-	-	外面：1次調整は不明、櫛描き直線文2段、半円弧文。黒斑。内面：調整不明。
250	弥生土器	直口壺	SK6	11.9	33.6	8.2	外面：製作技法は」243・244と同じ、胴部中位に板状工具小口の圧痕文、化粧土？胴部下半黒斑。内面：主に縦位ハケメが微細に残存、ほぼ全面黒斑。
251	弥生土器	無頸壺	SK6	11.0	-	-	外面：縦位ハケメの後に同方向ミガキ、胴脚部界に断面三角形突帯1条貼付け、脚部三角形透し孔2孔残存。上半黒斑。内面：縦位ハケメ。
252	弥生土器	甕	SK6	15.3	-	-	外面：口縁端部はヨコナデにより僅かに摘み出し、調整不明。内面：外面調整に伴うオサエ。コゲ付着。
253	弥生土器	甕	SK6	15.2	-	-	外面：口縁端部は摘み出し、胴部縦位ハケメが微細に残存。内面：調整不明。
254	弥生土器	甕	SK6	-	6.2	-	外面：縦位ハケメの後に同方向ミガキ。下半被熱に伴う破裂痕。内面：下半下→上方向ケズリ。下半コゲ。
255	弥生土器	高杯	SK6	-	14.0	-	外面：縦位ミガキが微細に残存、長方形透し孔2孔残存。脚部下端黒斑。内面：縦位ハケメが微細に残存。
256	古式土師器	鉢	SP25	24.4	5.5	10.0	外面:片口の可能性あり、口縁端部ヘラ描き沈線1条、右上がりタタキの後に上下方向の粗いミガキ。黒斑。内面：上下方向のミガキ（外面よりは細かい）。黒斑。
257	古式土師器	甕	SP25	15.9	5.1	27.5	外面：口縁端部ヘラ描き沈線2条、胴部右上がりやや細かいタタキの後に縦位～やや左上がりハケメ。下半黒斑。内面：右上がり粗いハケメ、胴部中位に黒斑。底部：平底。口縁部一部打ち欠きの可能性。
258	古式土師器	鉢	SP16	11.6	-	-	外面：口縁部は歪で、全体的に作りが粗い。ナデ・オサエ。内面：右→左方向の短いハケメ、上半被熱？

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm褐色粒・暗褐色粒主体、石英粒を少量含む。	44		
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	45		
明褐色、にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒やや多く含む。	45		讃岐産
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・赤褐色粒を含む。	45	50	
にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒を含む。	45	50	四国北部系
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、暗褐色粒を少量含む。	45	50	
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm長石粒・暗褐色粒を少量含む。	45	52	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	45		
橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・暗褐色粒を少量含む。	45	52	
褐灰色、黄灰色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・暗褐色粒を少量含む。	45	52	
浅黄橙色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	45	52	
橙色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	45	52	
灰黄色、灰白色	軟質	石英粒・長石粒・褐色粒の極小粒を含む。	45		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	45		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	45	52	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒を含む。	45		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒を含む。	45		
橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・褐色粒を少量含む。	45		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	45		
橙色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	45		
明赤褐色、にぶい褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	45		阿波系？
褐灰色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、径2mm大花崗岩粒を稀に含む。	45		
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	45		
浅黄橙色、灰色	軟質	径～0.5mm石英粒主体、長石粒・褐色粒を少量含む。	46	53	
浅黄橙色、灰色	軟質	径～1mm石英粒主体、褐色粒を少量含む。	46	53	
にぶい褐色、赤橙色	軟質	石英粒・長石粒極小粒を含む。243･244とはやや異質。	46	52	
にぶい橙色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒主体、暗褐色粒を少量含む。	46		
にぶい橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、径3mm大同種鉱物粒を少量含む。	46		
にぶい橙色、灰黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	46	54	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、黒褐色粒を少量含む。	46		
浅黄橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	46	54	
浅黄橙色、にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	46	53	
橙色～赤橙色、赤橙色	軟質	石英粒・長石粒極小粒主体、径1mm大赤褐色粒を少量含む。	47		
赤橙色～橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を少量含みやや粗い。	47		
にぶい橙色、灰褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含むが比較的精良。	47		
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・雲母粒？・黒褐色粒を少量含むが精良。	47		
灰白色、淡黄色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	47	56	
灰白色	軟質	径～3mm石英粒・長石粒を多く含み、やや粗い。	47	56	阿波系？ 少なくと影響あり
にぶい黄橙色、 浅黄橙色～灰黄褐色	軟質	径～1mm長石粒・暗褐色粒を少量含む。	47		

土器観察表 7

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
259	古式土師器	甕	SP82	13.0	4.5	17.0	外面:口縁部縦位ハケメ、胴部右上がり連続ラセンタタキ。上半と下半対向する黒斑。内面:調整不明。底部:輪台技法。
260	古式土師器	甕	SP97	(11.4)	2.9	11.8	外面：口縁端部擬凹線文1条、胴部上半左上がりタタキの後に縦位ハケメ。胴部中位黒斑。内面：横位～右上がりケズリ。底部：輪台技法。
261	弥生土器	甕	ST1	(16.4)	-	-	外面：口縁端部は明瞭に摘み出し、調整不明。肩部黒斑。内面：口縁部～肩部丁寧なヨコナデ、胴部中位オサエ。
262	弥生土器	高杯	ST1	-	(12.1)	-	外面：縦位細かいハケメの後に同方向ミガキ。裾端部黒斑。内面：しぼり目。杯部：粘土円盤充填。
263	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面：数段の櫛描き直線文が微細に残存。内面：外面施文に伴うオサエ（爪の当たり）。
264	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面：縦位～やや左上がり細かいハケメ、下端櫛描き沈線文。内面：櫛描き文。
265	弥生土器	広口壺	SD1	(22.0)	-	-	外面：口縁端部上下に拡張、ヘラ描き沈線文3条の後に左下がり鋭利なヘラ描き直線文、刻目のある棒状浮文2本残存。内面：頂部に刻目のある口縁内突帯3条、紐孔1孔残存。
266	弥生土器	広口壺	SD1	15.3	-	-	外面：口縁端部上下に拡張、板状工具小口の圧痕文上下2段の後に3個一対の円形浮文2対残存、口縁部～頸部丁寧なヨコナデ、口縁部黒斑。内面：頂部に刻目のある口縁内突帯2条、2孔一対紐孔2対残存、頸部横位ナデ。
267	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面：断面三面三角形突帯2条貼付け、頸部縦位ハケメ。内面：ナデ・オサエ。
268	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面：断面三角形突帯4条貼付け、2本一対の棒状浮文2対。内面：調整不明。
269	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面:頸部下端摘み出し指頭圧痕文のある突帯2条貼付け、頸部縦位ハケメ。内面:横位ミガキ微細に残存。
270	弥生土器	広口壺	SD1	-	-	-	外面：胴部中位横位ミガキ。板状工具小口の圧痕文。内面：左上がり断続的なハケメ。
271	弥生土器	壺	SD1	-	9.4	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：オサエが微細に残存。底部：接合痕跡観察可。
272	弥生土器	短頸壺	SD1	-	-	-	外面：口縁部やや強く折り曲げ、口縁端部板状工具小口の圧痕文、3個一対の円形浮文1対残存。内面：調整不明。
273	弥生土器	直口壺	SD1	(13.5)	-	-	外面：頂部に刻目のある断面三角形突帯4条貼付け、頸肩部櫛描き直線文微細に残存。内面：調整不明。
274	弥生土器	受口壺	SD1	-	-	-	外面：口縁部上下端板状工具小口の圧痕文。内面：調整不明。
275	弥生土器	長頸壺	SD1	-	-	-	外面：縦位～右下がり粗いミガキ。内面：粘土接合痕観察可。
276	弥生土器	壺	SD1	-	4.0	-	内外面：調整不明。底部：上底状。内面黒斑。
277	弥生土器	壺	SD1	-	4.0	-	外面:縦位ミガキが微細に残存。下半黒斑。内面:底部付近板状工具によるナデつけ、上半左上がりハケメ。底部：側面に粘土貼付け。
278	弥生土器	壺	SD1	-	3.2	-	内外面：調整不明。
279	弥生土器	広口壺	SD1	(34.0)	-	-	外面：口縁端部竹管文2段。内面：竹管文1段。
280	弥生土器	長頸壺	SD1	-	5.4	-	外面：粗い横位タタキの後に粗い縦位ミガキ。胴部中位黒斑。内面：左上がりハケメ。黒斑。
281	古式土師器	直口壺	SD1	13.8	-	-	外面：調整不明。内面：口縁部付近横位ハケメ。
282	古式土師器	直口壺	SD1	12.0	-	-	外面：やや強いヨコナデ。内面：ヨコナデ？
283	古式土師器	直口壺	SD1	(11.7)	-	-	外面：下→上方向ハケメ。黒斑。内面：右→左方向ハケメ。
284	古式土師器	広口壺	SD1	(14.2)	-	-	内外面：調整不明。
285	古式土師器	複合口縁壺	SD1	(22.2)	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、頸部縦位ハケメの後に横位沈線状ミガキ。内面：頸部横位ハケメ。
286	古式土師器	複合口縁壺	SD1	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
287	古式土師器	壺/鉢	SD1	-	4.8	-	外面：右上がり粗いタタキ。黒斑。内面：やや左上がりハケメ。底部：葉脈痕。
288	古式土師器	壺	SD1	-	6.1	-	外面：ピッチの短い縦位ミガキ、黒斑。内面：左上がりハケメ。黒斑？底部：側面に粘土を貼付けたような痕跡観察可。
289	古式土師器	壺	SD1	-	4.9	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：左上がりハケメ。黒斑？
290	古式土師器	壺	SD1	-	4.8	-	外面：右上がり粗いタタキの後に縦位ハケメ。内面：調整不明。
291	弥生土器	甕	SD1	(13.4)	-	-	外面：口縁部ヨコナデ。内面：肩部右→左方向ケズリ。
292	弥生土器	甕	SD1	(14.6)	-	-	外面：右上がりタタキの後に縦位ハケメ。内面：肩部右→左方向ケズリ。
293	弥生土器/古式土師器	甕	SD1	15.7	-	-	外面：肩部やや右上がりタタキを左上がりハケメで消す。内面：肩部ピッチの短い右→左方向ケズリ。
294	弥生土器/古式土師器	甕	SD1	(14.4)	-	-	外面：口縁端部摘み出し、口縁部叩き出し、肩部左上がりタタキ。内面：ヨコナデ。
295	古式土師器	庄内式甕	SD1	13.1	-	-	外面：口縁端部僅かに面取り、口縁部中程が僅かに膨らみ内湾する、肩部水平方向細密なタタキ。内面：口縁部ヨコナデ、肩部左→右方向ケズリ。
296	古式土師器	庄内式甕	SD1	17.2	-	-	外面：口縁端部は丸く収める、口縁部中程が僅かに膨らむが直線的に伸びる、肩部水平方向細密なタタキ。内面：口縁部ヨコナデ、肩部左→右後方ケズリ、口縁部接合痕観察可。
297	古式土師器	庄内式甕	SD1	(22.0)	-	-	外面：口縁端部上下の強いヨコナデにより端面は直立した面取り、端部に擬凹線文1条。内面：調整不明。
298	古式土師器	庄内式甕	SD1	15.8	-	-	外面：口縁端部上下の強いヨコナデにより外傾する。口縁部はやや外湾しながらも直線的に伸びる、横位ハケメ微細に残存。内面：口縁部横位ハケメをナデ消し。
299	古式土師器	庄内式甕?	SD1	14.1	-	-	外面：口縁端部上方への摘み出しはみられるが端面は面取りというよりは丸く収めているといえる、横位ハケメが微細に残存。内面：調整不明。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	47	55	
浅黄橙色、淡橙色	軟質	径～2mm長石粒・褐色粒を含む。褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒をやや多く含む。	47	55	
灰白色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	47		
にぶい橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	47		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、石英・長石極小粒を多く含む。	48		
にぶい橙色～橙色	軟質	径～1mm長石粒主体、同大石英粒を少量含み、やや粗い。	48	55	
橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	48		紐孔径：3mm
淡黄色、浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒を少量含むが比較的精良。	48		紐孔径：1.5mm
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒主体、褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	48		
淡黄色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	48		
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	48		
灰白色、浅黄橙色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	48	55	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	48		
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、同大石英粒を少量含む。	48		
浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒主体、長石極小粒をやや多く含む。	48		
灰白色	軟質	径～2mm石英粒主体、同大暗褐色粒を少量含む。	48		
にぶい黄橙色	軟質	径～2mm長石粒をやや多く含む。	48		
浅黄橙色、オリーブ黒色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	48	55	
にぶい橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm長石粒主体、同大赤褐色粒を少量含む。	48	55	
浅黄橙色、黄灰色	軟質	長石極小粒主体、径2mm大長石粒を少量含む。	48	56	
淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	48	56	
淡黄色、黒色	軟質	径～1mm長石粒主体、同大褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	48	56	
灰白色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、同大褐色粒を少量含む。	48		
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、同大赤褐色粒を少量含む。	48		
にぶい黄橙色、灰黄色	軟質	長石極小粒を含む。	48		
明赤褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・クサリレキをやや多く含むが比較的精良。	48	56	在地の胎土ではない可能性
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	48	56	
にぶい橙色、浅黄橙色	軟質	石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒極小粒を含む。	48		
にぶい黄橙色、黄灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	48	56	
浅黄橙色、灰黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	48	57	
浅黄橙色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	48		
にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	48	57	在地の胎土ではない可能性
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	49		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	49		
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	49	57	
灰黄褐色、暗灰黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・石英、長石極小粒を含む。	49	57	在地の胎土ではない可能性
黄灰色、浅黄色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒、同種極小粒をやや多く含む。	49	57	在地の胎土
浅黄橙色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒、同種極小粒をやや多く含む。	49	58	在地の胎土
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒、同種極小粒を含む。	49	57	
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒、赤褐色粒、同種極小粒を含む。	49	58	
灰白色、灰黄色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒、同種極小粒を含む。	49	58	

土器観察表 8

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
300	古式土師器	甕	SD1	(13.8)	-	-	外面：口縁部外側へ強く折り曲げ、口縁部叩き出し、肩部右上がり粗いタタキ。内面：調整不明。
301	古式土師器	甕	SD1	(14.8)	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、肩部下→上方向ハケメ。内面：ヨコナデ。
302	古式土師器	甕	SD1	-	-	-	外面：口縁端部に擬凹線文1条。内面：調整不明。
303	古式土師器	甕/鉢	SD1	(8.8)	-	-	外面：ナデ・オサエ。内面：右→左方向ハケメ。
304	古式土師器	甕	SD1	-	-	-	外面：口縁部叩き出し、胴部右上がりタタキの後に縦位ハケメ。2次被熱による破裂痕。上半吹きこぼれ、下半スス付着。内面：下半下→上方向ハケメ、肩部左上がりハケメ、粘土接合部観察可。内外面でハケメの原体異なる。
305	古式土師器	布留式甕	SD1	-	-	-	外面:肩部横位ハケメが微細に残存、胴部上半ヘラ描き波状文。内面:下半右上がりケズリ、上半粗いオサエ。
306	弥生土器	甕	SD1	-	4.4	-	外面：縦位ハケメが微細に残存、黒斑。内面：調整不明。底部：輪台技法。
307	弥生土器	甕	SD1	-	4.8	-	外面：縦位に近いタタキが微細に残存。内面：右上がりハケメが微細に残存。底部：輪台技法。
308	弥生土器	甕	SD1	-	3.2	-	外面：右上がりタタキが微細に残存、黒斑。内面：調整不明。底部：輪台技法？
309	弥生土器/古式土師器	甕	SD1	-	4.9	-	外面：右上がりタタキが微細に残存。黒斑。内面：左上がりハケメ。底部：輪台技法。
310	古式土師器	甕	SD1	-	5.0	-	外面：調整不明。黒斑。内面：クモの巣状ハケメが微細に残存。底部：中心にヘラ描き沈線1条。
311	古式土師器	甕	SD1	-	5.2	-	外面：右上がりタタキ。内面：主に縦位ハケメ。底部：葉脈痕、籾圧痕。
312	古式土師器	甕	SD1	-	3.6	-	外面：右上がりタタキの後に縦位ナデ消し。スス付着。内面：ナデ・オサエ。底部：輪台技法？タタキ。
313	古式土師器	甕	SD1	-	4.6	-	外面：右上がりが微細に残存。内面：板状工具によるナデつけ？底部：交差するタタキ。
314	古式土師器	甕	SD1	-	3.2	-	外面：右上がり連続ラセンタタキ。黒斑。内面：調整不明。底部：輪台技法。
315	古式土師器	甕	SD1	-	3.4	-	外面：右上がりタタキの後に、縦位の微細なハケメ。内面：底面オサエ。黒斑。底部：輪台技法？高台部貼付け。
316	古式土師器	甕	SD1	-	2.9	-	外面：左上がり粗いタタキ、スス付着。内面：ケズリ。黒斑？底部：タタキ。
317	古式土師器	甕	SD1	-	2.1	-	外面：右上がりやや細かいタタキ。内面：下→上方向ケズリ。底部：小さな平底、輪台技法のように粘土を充填。
318	古式土師器	甕	SD1	-	2.2	-	外面：縦位～左上がりタタキが微細に残存。内面：下→上方向ケズリ。底部：小さな平底。
319	古式土師器	甕/鉢	SD1	-	2.5	-	外面：タタキ目は残存していないが、器壁は面をなす、黒斑。内面：板状工具によるナデつけ。底部：小さな平底と考えられるが、焼成時に粘土が剥落している可能性。
320	古式土師器	甕/鉢	SD1	-	7.0	-	外面：ナデ・オサエ。内面：底部充填に伴うナデ・オサエ。
321	弥生土器	椀形高杯	SD1	(22.4)	-	-	外面：口縁端部綾杉様の圧痕文、円形浮文6個（うち2つ剥落）、口縁直下接合面で剥離（内傾接合）。内面：ヨコナデ？
322	弥生土器	高杯	SD1	-	-	-	外面：未貫通三角形透し孔3孔残存。黒斑。内面：接合面で剥落、接合面ハケメ。
323	弥生土器	高杯	SD1	-	-	-	外面：調整不明、裾部円孔1孔残存。内面：右→左方向ケズリ、粗いナデ・オサエ。
324	弥生土器	高杯	SD1	-	(15.6)	-	内外面：ヨコナデ。
325	弥生土器	有稜高杯	SD1	(24.6)	-	-	外面：調整不明。内面：口縁部接合部分を中心に横位ミガキが微細に残存。
326	古式土師器	有稜高杯	SD1	(18.0)	-	-	外面：調整不明。内面：縦位ミガキ？
327	古式土師器	有稜高杯	SD1	(13.8)	-	-	外面：屈曲部分に刻目。口縁部黒斑。内面：調整不明。
328	古式土師器	有稜高杯	SD1	(27.0)	-	-	外面：ヨコナデ。内面：口縁部上半ヨコナデ、下半縦位ミガキが微細に残存。
329	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：調整不明、裾部やや大きい円孔2孔残存。内面：横位ケズリ？微細に残存。
330	古式土師器	高杯/器台	SD1	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存、2段一対円孔3対（完存）。内面：ヨコナデ？
331	古式土師器	高杯	SD1	-	(16.6)	-	外面：やや左上がりミガキが微細に残存、裾部円孔3孔残存、裾端部ヘラ描き沈線2条。内面：横位ケズリ、裾部ヨコナデ、化粧土？
332	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：調整不明。脚部：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。
333	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：調整不明。脚部：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形。内面：軸芯痕残存？
334	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：縦位ミガキ。内面：杯底部は粘土を充填して成形、脚部上半左→右方向ケズリ、下半しぼり目。
335	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形、脚上半横位沈線状ミガキが微細に残存。内面：しぼり目、杯部中央に小孔貫通。
336	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：調整不明。内面：杯部は粘土を充填して成形、軸芯痕残存。
337	古式土師器	器台	SD1	-	-	-	外面：縦位ミガキ、円孔3孔残存。内面：調整不明。
338	古式土師器	器台	SD1	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存、受部接合面で剥離（内傾接合）、円孔2孔残存。内面：受部粘土円盤剥離痕観察可。
339	古式土師器	小型器台	SD1	-	-	-	外面：ナデ・オサエ。内面：受部中央小孔貫通、脚裾部板状工具の原体の当たりのみ残存。
340	古式土師器	小型器台?	SD1	-	-	-	外面：ナデ・オサエ。内面：受部小孔貫通、脚部しぼり目。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰黄色、黄灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含むが、比較的精良。	49	58	在地の胎土ではない可能性
黄灰色、灰黄色	軟質	径～0.5mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	49	58	
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・暗褐色粒・赤褐色粒、長石極小粒をやや多く含む。	49		在地の胎土ではない可能性
にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒、長石・褐色・赤褐色極小粒を含む。	49		在地の胎土ではない可能性
浅黄橙色、にぶい黄橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒、石英・長石・褐色極小粒をやや多く含む。	49	58	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	49	58	
灰白色、灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒、同種鉱物極小粒を含む。	49		
橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	49		
にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒主体、径3mm大黒色粒を少量含む。	49		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・黒色粒を含む。赤褐色粒を含む。	49		
灰白色、黄灰色	軟質	径～0.5mm長石粒主体、同大黒褐色粒を少量含む。	49	59	
にぶい橙色、にぶい黄橙色	軟質	長石極小粒主体、径1mm石英・長石が噛み合うものを稀に含む。	49	59	在地の胎土ではない可能性
にぶい赤橙色、灰黄褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く、径2mm大花崗岩粒を僅かに含む。	49		
にぶい赤橙色、にぶい橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	49		在地の胎土ではない可能性
灰白色、灰黄色	軟質	径～1mm長石主体、同大褐色粒・黒褐色粒を少量、石英粒を僅かに含む。	49	59	
橙色、淡黄色	軟質	石英・長石・褐色極小粒主体、～径1mm同種鉱物粒を少量、同大花崗岩粒を稀に含む。	49		胎土は在地だが、発色が異質
灰黄褐色、黒色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	49	59	
赤橙色、灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒主体、径～0.5mm褐色粒、暗褐色粒を少量含む。	49	59	胎土は在地だが、発色が異質
明赤褐色、淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	49	59	胎土は在地だが、発色が異質
灰黄褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm調整粒主体、同大石英粒を少量含む。	49		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒主体、長石極小粒やや多く含む。	49		
淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒含む。	50		円形浮文径：8mm
オリーブ黒色、黄灰色	軟質	石英・長石極小粒主体、同大赤褐色粒を少量含むが比較的精良。	50		
灰白色、淡黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	50		円孔径：6mm
浅黄橙色	軟質	径～1mm褐色粒・黒褐色粒主体、石英・長石極小粒を少量含む。	50		
灰白色、淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	50		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	50		
淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	50	60	
灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、赤褐色極小粒を少量含む。	50		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒、赤褐色極小粒を少量含む。	50		円孔径：1.9cm
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒主体、赤褐色極小粒を少量含む。	50	60	
橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒主体、径5mm石英粒・長石粒が噛み合うものを稀に含む。	50	60	胎土は在地だが、発色が異質
灰黄色、淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒、同種極小粒を含む。	50	60	
褐灰色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	50	61	
浅黄橙色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量、径5mm大花崗岩粒を稀に含む。	50		
浅黄橙色、にぶい橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	50	61	小孔径：3mm
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	50		
浅黄橙色、にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒主体、径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	50		
淡黄色、淡赤橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	50		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	50	61	小孔径：7mm
灰白色～橙色、浅黄橙色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	50		在地の胎土ではない可能性、小孔径：2.5mm

土器観察表 9

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
341	古式土師器	小型器台	SD1	-	-	-	外面：括れ部分や強いヨコナデ。内面：ナデ・オサエ。
342	古式土師器	小型器台	SD1	-	-	-	外面：縦位ハケメが微細に残存、裾部円孔2孔残存。内面：脚裾部横位ハケメ。
343	古式土師器	鼓形器台	SD1	20.0	-	-	外面：調整不明、屈曲部はしっかりしている。内面：調整不明。
344	古式土師器	鼓形器台	SD1	-	16.0	-	外面：調整不明、屈曲部分はヘラ描き沈線による成形。内面：調整不明。
345	古式土師器	鉢/甕	SD1	-	4.6	-	外面：縦位ハケメ。被熱の可能性。内面：高台粗いオサエ。
346	古式土師器	鉢	SD1	-	3.4	-	外面：縦位ハケメが微細に残存。内面：ナデ・オサエ。
347	古式土師器	鉢	SD1	-	2.3	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。黒斑。内面：縦位ミガキが微細に残存。
348	古式土師器	鉢	SD1	-	-	-	外面：口縁部ヘラ描き波状文。内面：口縁部付近丁寧な横位ミガキ、鉢部丁寧な縦位ミガキ、化粧土？
349	古式土師器	鉢	SD1	-	-	-	外面：口縁部右上がりタタキ、鉢部縦位～左上がり粗いハケメ。黒斑。内面：口縁部・鉢部横位ハケメ。
350	古式土師器	有孔鉢	SD1	-	3.6	-	外面：やや右上がりタタキ。黒斑。内面：左上がりケズリ。底部：焼成前穿孔。
351	古式土師器	有孔鉢	SD1	-	3.0	-	外面：右上がりやや細かいタタキ。黒斑。内面：クモの巣状ハケメの工具の当たりの残存。底部：穿孔時にやや突出気味に変形。
352	古式土師器	甕	SD1	-	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、肩部縦位ハケメ。内面：口縁端部僅かに摘み出し、肩部オサエ。
353	古式土師器	甕	SD1	-	-	-	内外面：調整不明。
354	古式土師器	高杯	SD1	-	-	-	外面：ヨコナデ。内面：調整不明。
355	古式土師器	高杯	SD1	(22.2)	-	-	外面：杯部横位ミガキが微細に残存。内面：調整不明。
356	古式土師器	製塩土器？	SD1	-	3.8	-	外面：オサエ。内面：ナデ・オサエ。
357	古式土師器	甕	SD1	-	-	-	内外面：丁寧なヨコナデ。
358	古式土師器	広口壺	SD1	(20.6)	-	-	外面：垂下口縁端部沈線1条、竹管文のある円形浮文5個残存、頸部縦位ハケメ。内面：横位ハケメが微細に残存。
359	古式土師器	壺	SD1	-	7.4	-	外面:左上がりハケメの後に縦位ミガキ。内面:左上がりやや密なハケメ、接合面僅かに観察可。黒斑。底部:輪台技法。
360	古式土師器	壺	SD1	-	4.8	-	内外面：調整不明。
361	古式土師器	鉢	SD1	(10.4)	-	-	外面：ナデ・オサエ。内面：左上がりケズリ。
362	古式土師器	鉢	SD1	4.2	尖底	2.5	外面：縦位ハケメが微細に残存、ナデ。内面：ナデ・オサエ。黒斑。
363	古式土師器	鉢	SD1	-	2.5	-	内外面：調整不明。外面黒斑。
364	古式土師器	手捏土器	SD1	3.9	1.5	1.9	内外面：ナデ・オサエ。
365	古式土師器	手捏土器	SD1	3.8	1.0	4.9	内外面：粗いナデ・オサエ。全体的に粗い作り、土器製作者によるものとは思えない。
366	古式土師器	土製勾玉	SD1	-	-	-	径：1.4cm、全長：4.4cm、
367	弥生土器	大型短頸壺	遺構に切られる砂層	(26.6)	-	-	外面：口縁部ヘラ描き斜格子文、頸部縦位細かいハケメ、頸肩部界指頭圧痕文突帯。内面：ヨコナデ。
368	弥生土器	壺	遺構に切られる砂層	-	(9.2)	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。内面：調整不明、黒斑。
369	弥生土器	甕？	遺構に切られる砂層	-	7.8	-	外面：縦位ミガキ。黒斑。内面：右上がりハケメが微細に残存。底部：不定方向ナデ。
370	弥生土器	甕	遺構に切られる砂層	-	7.8	-	外面：縦位ミガキ。内面：下→上方向ハケメ。底部：やや上底状。
371	弥生土器	高杯	遺構に切られる砂層	-	-	-	外面：ヘラ描き斜格子文。内面：ナデ・オサエ。
372	古式土師器	広口壺	SR1 2～6層	(12.4)	-	-	外面：頸部縦位ハケメ、化粧土？内面：右上がりハケメ。
373	古式土師器	広口壺	SR1 2～6層	16.1	-	-	外面：口縁部ヨコナデ、頸部左上がりハケメが微細に残存。内面：口縁端部摘み上げ。
374	古式土師器	広口壺	SR1 2～6層	15.6	-	-	外面：口縁端部丁寧なヨコナデにより面取り、頸部上半～口縁部右上がりタタキ残存、頸部縦位ハケメ、肩部右上がりタタキ。黒斑。内面：肩部横位やや細かいハケメ・オサエ、頸部接合痕観察可。
375	古式土師器	直口壺	SR1 2～6層	-	尖底	-	外面：胴部中位右→左方向ケズリ、同下位下→上方向ケズリの後に同方向ミガキ。黒斑。内面：外面調整に伴うオサエ。底部：丸底気味の尖底。
376	古式土師器	複合口縁壺	SR1 2～6層	(24.6)	-	-	外面：口縁端部不整美な櫛描き波状文2単位、その間に渦巻き状浮文の剝離痕、頸部粗い縦位ハケメの後に横位沈線状ミガキ。内面：ヨコナデ？
377	古式土師器	甕	SR1 2～6層	13.7	4.0	27.0	外面：口縁部叩き出し、胴部右上がりタタキの後に幅狭の工具によるナデ消し、胴部下半スス付着。内面：胴部下半左上がりハケメ。底部：平底、輪台技法。
378	古式土師器	甕	SR1 2～6層	-	5.3	-	外面:右上がりタタキの後に下→上方向ハケメ。内面:不定方向板状工具によるナデつけ。底部:輪台技法。黒斑。
379	古式土師器	甕	SR1 2～6層	-	1.3	-	外面：右上がりタタキが微細に残存。内面：調整不明。底部：尖底気味の小さな平底。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	50		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒、赤褐色極小粒を含むが比較的精良。	50		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	50	62	山陰系、胎土は在地
灰白色、淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	50	62	山陰系、胎土は在地
にぶい黄橙色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	50		
灰白色、浅黄橙色	軟質	石英・長石・褐色極小粒主体、～径1mm同種鉱物粒を少量含む。	50		
灰白色	軟質	砂粒をほとんど含まず精良。	50		
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	50	62	
浅黄橙色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	50	62	
黒褐色、黄灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	50		穿孔径：7mm
黄灰色、浅黄橙色	軟質	径5mm大の長石粒を含むが比較的精良。	50	62	
にぶい橙色	軟質	石英・長石・角閃石・雲母極小粒をやや多く含む。	51		讃岐産
にぶい褐色、明褐色	軟質	石英・長石・角閃石を主体、径1mm大赤褐色粒を稀に含む。	51		四国北部産
にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒、同種鉱物極小粒を含む。	51		四国北部産
にぶい褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒、同種鉱物極小粒をやや多く含む。	51	62	四国北部産
赤橙色、にぶい褐色	軟質	石英・長石・角閃石・赤褐色極小粒を少量含む。	51	63	四国北部産
灰白色、灰黄色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒?を含む。	51	63	山陰径
にぶい褐色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・角閃石・雲母粒主体、同大石英粒・長石粒が噛み合うものも少量含む。	51	63	河内産
にぶい褐色、灰色～黒色	軟質	石英・長石・角閃石極小粒主体、径～1mm石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	51		河内産
明赤褐色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	51		在地の胎土だが、発色が異質
明赤褐色、にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	51	63	河内/讃岐産
にぶい橙色、浅黄橙色～黒褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	51		在地の胎土だが、発色が異質
灰黄色、淡黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	51	63	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	51	63	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量含む。	51	63	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	51	64	
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒、石英・長石極小粒を含む。	51	64	
にぶい黄褐色、暗灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大褐色粒を少量含む。	51		
褐灰色～にぶい褐色、灰黄褐色	やや堅緻	径～1mm長石粒主体、石英極小粒を含む。	51		
橙色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	51		
灰白色、浅黄橙色	軟質	石英・長石・褐色極小粒主体、径1mm大石英粒を少量含む。	51		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	52		
灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大褐色粒、石英粒・長石粒が噛み合うものを少量含む。	52		
灰黄色、灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・クサリレキ主体、黒褐色粒を含む。	52	64	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	52	64	
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	52	64	
にぶい橙色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を少量、同大褐色粒を稀に含む。	52	64	
灰黄色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒主体、長石極小粒をやや多く含む。	52	65	
にぶい橙色、灰黄色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒を含む。	52	65	

土器観察表10

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
380	古式土師器	高杯	SR1 2～6層	-	-	-	外面：鋸歯文L。内面：調整不明。
381	古式土師器	高杯	SR1 2～6層	-	(10.9)	-	外面：縦位ハケメの後に横位沈線状ミガキ。脚部：窪ませた脚頂部に杯部の粘土を補充し、脚頂部の側面に粘土を付加することで杯部を成形、中実。内面：横位ハケメ。
382	古式土師器	高杯	SR1 2～6層	-	-	-	外面:調整不明、裾部に円孔3孔残存。脚部:窪ませた脚頂部に粘土を補充して杯底部を成形。内面:しぼり目。
383	古式土師器	器台	SR1 2～6層	(19.6)	-	-	外面：口縁端部櫛描き直線文・波状文・孤文の組合せが部分で異なる、胴部沈線文帯（6条）、その下位に円孔2孔残存。内面：口縁部付近ヨコナデ、胴部下半左下がりケズリ、中位左→右方向ケズリ。
384	古式土師器	小型器台	SR1 2～6層	-	-	-	外面：縦位ハケメが微細に残存、裾部に円孔1孔残存。内面：受部中央小孔貫通、裾部粗い横位板状工具によるナデつけ。
385	古式土師器	小型器台	SR1 2～6層	(9.6)	-	-	外面：口縁端部摘み出し。内面：中空。
386	古式土師器	小型器台	SR1 2～6層	-	-	-	内外面：調整不明。
387	古式土師器	鉢	SR1 2～6層	-	(6.0)	-	内外面：ヨコナデ。
388	古式土師器	鉢	SR1 2～6層	9.1	3.5	5.2	外面：ナデ・オサエ。内面：底面オサエ、鉢部下→上方向ナデ。黒斑。
389	古式土師器	有孔鉢	SR1 2～6層	-	3.0	-	外面：縦位～左上がりタタキ。内面：左上がりハケメ。底部：外面側から穿孔
390	古式土師器	広口壺	SR1 2～6層	(20.3)	-	-	外面：口縁端部擬凹線文1条、口縁部接合痕観察可（内傾接合）、頸部左上がりハケメが微細に残存。内面：接合痕観察可。
391	古式土師器	広口壺	SR1 2～6層	(31.2)	-	-	外面：口縁端部ヘラ描き沈線3条の後に竹管文のある3個一対の円形浮文1対。黒斑。内面：ヨコナデ。
392	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	28.8	-	-	外面：口縁端部板状工具による綾杉状圧痕文の後に4個一対の円形浮文3対残存、頸部断面三角形貼付け突帯上に2本1対の棒状浮文5対残存、胴部櫛描き直線文・波状文・ヘラ描き斜格子文を段違いに配置、その上に3個1対の円形浮文3対残存。内面：頂部に刻目のある口縁内突帯3条、2孔1対の紐孔対残存、頸部横位ミガキが微細に残存、胴部左上がりハケメが微細に残存。
393	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	(14.4)	-	-	外面：口縁端部上部に拡張、ヘラ描き沈線4条の後に左下がり鋭い沈線文・円形浮文。内面：ヨコナデ。
394	古式土師器	無頸壺	SR1 7～12層	(13.4)	-	-	外面：頸部頂部に刻目のある貼付け突帯2条、櫛描き直線文・波状文段違い。内面：粗い左上がりハケメ、外面施文に伴うオサエ。黒斑。
395	古式土師器	壺	SR1 7～12層	-	8.8	-	外面：調整不明。黒斑。内面：底部付近ナデ・オサエ。
396	古式土師器	短頸壺	SR1 7～12層	(11.3)	-	-	外面：やや左上がりハケメ。黒斑。内面：右→左方向ケズリ。
397	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	(15.8)	-	-	外面：右上がりタタキの後に粗い左上がりハケメ、不整美な櫛描き波状文、粗い横位ミガキ。内面：粘土接合痕観察可、ヨコナデ・オサエ。
398	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	12.8	-	-	外面：肩部右上がりタタキ。内面：ヨコナデ。黒斑。
399	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：口縁端部櫛描き波状文・渦巻き状浮文。内面：横位ミガキ。
400	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	16.4	-	-	外面：口縁端部板状工具小口の圧痕文、櫛描き波状文・直線文の組合せ。内面：やや細かい縦位ミガキ。
401	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	(22.6)	-	-	外面:口縁立上がり部縦位ミガキ、口縁部縦位ミガキ。内面:縦位ミガキの後に屈曲部分横位沈線状ミガキ。
402	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	(18.6)	-	-	内外面：丁寧なヨコナデ。
403	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	16.0	-	-	外面：口縁部ほぼ直立、口頸部丁寧なヨコナデ、頸肩部縦位ハケメ。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、頸部右→左方向ピッチの短いハケメ。
404	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	(16.8)	-	-	外面:口縁端部緩やかに外反、口頸部丁寧なヨコナデ。内面:口縁部付近丁寧なヨコナデ、頸部ナデ、オサエ。
405	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：上→下方向ミガキ。内面：ナデ・オサエ。
406	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：やや粗い縦位ハケメの後に粗い横位沈線状ミガキ。内面：右→左方向ピッチの短いハケメの後に外面調整に伴うオサエ。
407	古式土師器	壺	SR1 7～12層	-	4.0	-	外面：右上がりタタキの後に縦位ハケメ。黒斑。内面：板状工具による縦位ナデつけ。
408	古式土師器	壺	SR1 7～12層	-	6.0	-	外面：左上がりタタキの後に下→上方向ハケメ・縦位ミガキ。黒斑。内面：横位ハケメの後に板状工具による縦位ナデつけ。
409	古式土師器	瀬戸内型甕	SR1 7～12層	-	-	-	外面：口縁部直下断面三角形突帯貼付け、ヘラ描き沈線4条残存。内面：ナデ・オサエ。
410	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(34.0)	-	-	外面：口縁端部摘み出し、肩部縦位ハケメ。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、肩部オサエ。
411	古式土師器	甕	SR1 7～12層	6.7	-	-	外面：調整不明。内面：下→上方向ケズリ。コゲ付着。
412	古式土師器	甕	SR1 7～12層	14.4	-	-	外面：口縁端部擬凹線文3条、肩部接合面で剥離。スス付着。内面：肩部右→左方向ケズリ。
413	古式土師器	甕	SR1 7～12層	14.4	-	-	外面：口縁端部擬凹線文2条、口肩部丁寧なナデ、スス付着。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、肩部右→左方向ケズリ。口縁部歪み。
414	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(16.2)	-	-	外面：右上がりタタキの後に縦位ハケメ。黒斑。内面：左上がりケズリの後に部分的な右上がりハケメ。
415	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(11.6)	-	-	外面：口縁部叩き出し、口縁部はほぼ垂直に立上がり、胴部右上がり粗いタタキ。内面：ナデ・オサエ、粘土接合痕観察可、化粧土？
416	古式土師器	甕	SR1 7～12層	17.2	-	-	外面：口縁部叩き出し。スス付着。内面：右→左方向ケズリ。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
淡黄色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	52	65	
灰白色、灰黄色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大褐色粒を少量含む。	52		円孔径：8mm
灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含み、粗い。	52		
にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	52		
灰黄色	軟質	石英・長石・褐色極小粒を少量含む。	52		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	52	65	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒をやや多く含む。	52		
灰黄色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大赤褐色粒を少量含む。	52		
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	52	65	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒主体、長石極小粒をやや多く含む。	52		穿孔経：6×8mm
にぶい黄橙色、浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含み、粗い。	52	65	阿波系、胎土は在地
灰白色、灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	52	65	河内産、胎土は在地
浅黄橙色、淡黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	53	66	
にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を含むが、比較的精良。	53		
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、経0.5mm大赤褐色粒を少量含む。	53		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒主体、同大赤褐色粒を少量含む。	53		
明褐色、灰白色	軟質	径～1mm長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	53		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	53	66	
にぶい黄橙色～橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒すy帯、同大褐色粒少量含む。	53	66	在地の胎土だが、発色が異質
浅黄橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含むが、比較的精良。	53	66	
にぶい橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、径5mm大同種鉱物粒を稀に含む。	53	67	
浅黄橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を含むが、比較的精良。	53		
灰白色	やや堅緻	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	53		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒主体、径3mm大赤褐色粒を稀に含む。	53	67	
にぶい橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒をやや多く含む。	53		胎土は在地だが、発色がやや異質
灰黄色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	53		
淡黄色、灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	53	67	
灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を少量含むが、比較的精良。	53		
浅黄色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒を含むが、比較的精良。	53	67	
灰黄色	軟質	長石極小粒主体、径2mm褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	54	68	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒、同種鉱物極小粒を含む。	54		
にぶい褐色、黒褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母粒をやや多く含む。	54	68	讃岐産
浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒、同種鉱物・褐色・黒褐色極小粒を含む。	54	68	
灰黄色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒を含むが、比較的精良。	54	68	
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	54	68	在地の胎土ではない可能性
浅黄橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒主体、同種鉱物極小粒をやや多く含む。	54	68	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	54		

土器観察表11

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
417	古式土師器	甕	SR1 7～12層	16.5	-	-	外面：口縁部丁寧なヨコナデ、肩部下→上方向板状工具によるナデつけ。内面：肩部右→左方向板状工具によるナデつけ。
418	古式土師器	甕	SR1 7～12層	-	4.7	-	外面:右上がりタタキの後に板状工具による縦位ナデつけ。黒斑、スス付着。内面:左上がりハケメ。底部:輪台技法。
419	古式土師器	甕	SR1 7～12層	-	2.6	-	外面：右上がりやや細かいタタキ。内面：調整不明。
420	古式土師器	甕	SR1 7～12層	-	2.3	-	外面：左上がりタタキ。内面：ナデ・オサエ。底部：小さな平底。
421	古式土師器	甕	SR1 7～12層	-	3.7	-	外面：右上がり細密なタタキの後に縦位ナデ消し。内面：クモの巣状ハケメ、コゲやや厚く付着。底部：葉脈痕。
422	古式土師器	甕	SR1 7～12層	-	1.0	-	外面：タタキがごく僅かに残存。内面：調整不明。底部：極小さな平底、底部の器壁は厚くつくりは粗い。
423	古式土師器	初期布留型甕	SR1 7～12層	13.6	-	-	外面：口縁部中程がやや膨れ内湾して立上がる、口縁部の屈曲はあまい、口縁端部は上方に面を持ち端面に強いヨコナデに伴う擬凹線文状のくぼみ、胴・肩部縦位ハケメの後にやや上下に振れる横位ハケメ、胴部粗い横位ハケメ。内面：胴部下→上方向ケズリ、肩部右上がりケズリ。
424	古式土師器	初期布留型甕	SR1 7～12層	(15.2)	-	-	外面：口縁部はやや直線的に伸び、口縁端部は丸く収めている、胴部縦位ハケメの後に粗い横位ハケメ、下半スス付着。内面：左→右方向ケズリ。
425	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(15.8)	-	-	外面:口縁部はやや直線的に伸び、口縁端部はなだらかな面を持つ、胴部ハケメの後に肩部丁寧なヨコナデ。内面：口縁部丁寧なヨコナデ、胴部右→左方向ケズリ。
426	古式土師器	初期布留型甕	SR1 7～12層	12.6	丸底	19.3	外面：口縁部内湾しながら立上がり、口縁端部は上方に面を持つ、口縁部の屈曲はあまい、胴部縦位ハケメが微細に残存。下半スス付着。内面：右上がりやや幅の広いケズリ、肩部オサエ。
427	古式土師器	水平口縁高杯	SR1 7～12層	(23.4)	-	-	外面：口縁部強く折曲げ、杯部縦位ハケメの後に縦位ミガキ。内面：口縁部横位ミガキ、杯部左上がりハケメの後に横位ミガキ。
428	古式土師器	水平口縁高杯	SR1 7～12層	16.8	-	-	内外面：調整不明。
429	古式土師器	椀形高杯	SR1 7～12層	(33.0)	-	-	外面：口縁部～鉢部頂部に刻目を持つ断面三角形貼付け突帯4条、2本一対の棒状浮文2対残存。内面：右上がりハケメが微細に残存。
430	古式土師器	椀形高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：口縁部断面三角形貼付け突帯、ヘラ描き沈線3条の上にやや左下がり同種沈線文、黒斑。内面：横位粗いミガキが微細に残存。
431	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：ヘラ描き斜格子文、沈線文、鋸歯文Lを段違いに施す。内面：調整不明。
432	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	(11.6)	-	外面：未貫通の三角形透し孔。黒斑。内面：粘土接合面で剥離。
433	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	(14.6)	-	外面：縦位ミガキが微細に残存。黒斑。内面：底部円盤の剥離痕観察可、しぼり目。
434	古式土師器	有稜高杯	SR1 7～12層	(25.8)	-	-	外面：口縁部縦位ミガキが微細に残存、杯部横位ハケメの後に縦位ミガキ。内面：調整不明。
435	古式土師器	有稜高杯	SR1 7～12層	22.4	-	-	外面：口縁部縦位ミガキ、杯部縦位ミガキ？黒斑内面：口縁部縦位ミガキが極微細に残存。
436	古式土師器	有稜高杯	SR1 7～12層	23.8	-	-	外面：口縁部横位～やや左上がり沈線状ミガキ。内面：左上がりハケメが極微細に残存。
437	古式土師器	有段口縁高杯	SR1 7～12層	17.5	-	-	外面：口縁部縦位ハケメの後に左上がりミガキ、口縁部屈曲部分横位ミガキ、杯部縦位ミガキ。内面：杯部右→左方向ハケメ、底部縦位ハケメ、脚頂部の凸面に杯を接合。
438	古式土師器	有段高杯	SR1 7～12層	(19.0)	-	-	外面：丁寧なヨコナデ、杯底部付近ケズリ？内面：口縁部屈曲付近横位沈線状ミガキ。黒斑。
439	古式土師器	椀形高杯	SR1 7～12層	(13.2)	-	-	外面：丁寧なヨコナデ。内面：丁寧なヨコナデ、口縁部屈曲部分横位沈線状ミガキ。
440	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：脚部縦位ハケメの後に縦位ミガキ。脚部：脚中心に小孔貫通、その頂部の窪みに粘土を充填することで杯底部を成形。中空。
441	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：脚部縦位ハケメの後に縦位ミガキ、裾部縦位より細かいミガキ、裾部円孔3孔残存。脚部小孔貫通。中空。内面：調整不明。
442	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：縦位ミガキが微細に残存、裾部縦位ハケメが微細に残存、裾部円孔1孔残存。脚部：窪ませた脚頂部に粘土を補充して杯底部を成形、中実の可能性高い。内面：裾部頂部に爪の当たり。
443	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：裾部下端に擬凹線文3条、脚端部に1条。内面：左上がりハケメが微細に残存。
444	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	9.0	-	外面：脚部縦位ハケメ、裾部は粗いオサエによる折り曲げ。内面：脚部しぼり目、裾部粗いハケメ、ナデ・オサエ。
445	古式土師器	器台	SR1 7～12層	-	-	-	外面：受部・胴部縦位ミガキ、円孔2段一対が3対残存。内面：粘土接合痕観察可。
446	古式土師器	器台	SR1 7～12層	17.5	12.7	14.4	外面:受部・脚裾部縦位ハケメの後に右→左方向沈線状ミガキ、脚部下→上方向板状工具によるナデつけ（砂粒の移動を伴う）。内面：受部右→左方向ハケメの後に同方向沈線状ミガキ。脚部左→右方向ケズリ、脚裾部やや左上がりハケメ。
447	古式土師器	器台	SR1 7～12層	-	-	(13.4)	外面：受部・脚部それぞれ縦位ミガキ、裾部右下がりナデ、黒斑。内面：ナデ・オサエ。
448	古式土師器	器台	SR1 7～12層	-	-	-	外面:受部・脚部それぞれ縦位ミガキ、裾部円孔2孔残存。内面:小孔貫通、受部縦位ミガキ、脚部横位ケズリ、裾部ナデ・オサエ。
449	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	9.3	10.4	8.3	外面：口縁端部上下に摘み出し、受部ヨコナデ、筒部縦位ミガキがごく微細に残存、裾部赤色顔料が微細に残存、円孔4孔。内面：受部・筒部ナデ。裾部：不定方向左下がりハケメ微細に残存。脚部中空。
450	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	-	10.8	-	外面：脚部縦位ハケメの後に縦位ミガキ、裾部横位ミガキ、ほぼ対向する円孔4孔。内面：小孔貫通、中空、裾部ほぼ縦位ハケメ。
451	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	-	13.8	-	外面：脚部縦位ミガキ、裾部縦位ハケメ、円孔3孔残存。黒斑。内面：脚部横位ケズリ、裾部横位ハケメ・オサエ。
452	古式土師器	小型器台？	SR1 7～12層	-	8.4	-	外面：脚部縦位やや細かいミガキ、屈曲部短いミガキ、裾部縦位ハケメが微細に残存。内面：脚部中実、受部ナデ・オサエ、脚裾部横位ハケメ・オサエ。
453	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	8.4	-	-	外面：口縁端部摘み出し、口縁端部下端横位ミガキ、受部縦位ミガキ、脚部縦位ミガキが微細に残存、裾部円孔3孔。内面：受部ヨコナデ？脚裾部横右→左方向ハケメ。脚部中実。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	54	68	
黄灰色、灰白色	軟質	径～0.5mm褐色粒を多く、長石極小粒をやや多く含む。	54	69	
にぶい橙色、灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	54	68	胎土は在地だが、発色がやや異質
明褐色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	54	69	
灰白色、黒色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	54	69	
黄灰色、灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	54	69	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	54	69	
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	54	69	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	54		
淡黄色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	54	70	
浅黄橙色、灰白色	軟質	石英・長石極小粒を含むが、比較的精良。	55		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	55		
橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	55		
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	55		
灰白色、灰色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	55		
灰白色	軟質	石英・長石極小粒を含むが、比較的精良。	55		
灰白色	軟質	砂粒少なく比較的精良。	55		
明褐灰色、にぶい橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色を含むが、比較的精良。	55		
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	55		
橙色～浅黄橙色、灰白色	軟質	石英・長石・褐色・暗褐色・黒褐色極小粒を含むが、比較的精良。	55		
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒を含むが、比較的精良。	55	70	
にぶい赤橙色、淡赤褐色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を少量含むが、比較的精良。	55		
にぶい黄橙色	やや堅緻	砂粒少なく精良。	55	70	
にぶい黄橙色、褐灰色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	55	71	
浅黄橙色、褐灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	55		
灰白色、灰黄色	軟質	径～1mm長石粒・赤褐色粒を少量含む。	55	70	
にぶい橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	55	70	
にぶい橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒主体、径5mm大褐色粒を極稀に含む。	55	71	
灰白色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒・赤褐色粒主体、同種・黒褐色極小粒を少量含む。	56	71	円孔径：1.2cm
浅黄橙色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・暗褐色粒・褐色粒をやや多く含む。	56	71	丹波・但馬系
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	径～2mm長石粒・褐色粒・暗褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	56	71	丹波・但馬系 円孔径：1.2cm
灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・暗褐色粒・赤褐色粒を含むが、比較的精良。	56		小孔径：1cm
黄灰色、灰白色	軟質	径～1mm石英粒・褐色粒・赤褐色粒を含む。	56		
淡赤橙色、浅黄橙色	やや堅緻	石英・長石・褐色・暗褐色・黒褐色極小粒を含むが、比較的精良。	56	71	在地の胎土ではない可能性、円孔径：7mm
灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	56	72	
浅黄色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	56	72	
灰白色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	56	72	

土器観察表12

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
454	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	-	-	-	外面：裾部縦位ハケメがごく微細に残存。内面：裾部縦位ハケメがごく微細に残存。脚部中実。
455	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	-	13.2	-	内外面：丁寧なヨコナデ。脚部中空。
456	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	(9.1)	8.9	8.0	外面：口縁端部面取り、受部・脚部縦位ミガキ。内面：受部・脚裾部ヨコナデ。
457	古式土師器	小型器台	SR1 7～12層	7.4	-	-	外面:口縁端部摘み出し、受部左下がりミガキ、脚裾部左下がりミガキ、円孔2孔残存。内面:受部ヨコナデ、脚裾部ナデ・オサエ。
458	弥生土器	脚台	SR1 7～12層	-	-	-	外面：鉢部・脚部境界に断面三角形突帯貼付け、その上に2本一対の棒状浮文を4対残存、脚部縦位下→上方向ハケメ。内面：底部粘土円盤剝落、脚部しぼり目。
459	弥生土器	脚台	SR1 7～12層	-	7.6	-	外面：脚部縦位ミガキ、裾部横位ミガキ、裾部で強く折曲げ、端部は丸く収める。内面：鉢部縦位ミガキ、脚裾部粗いヨコナデ。器壁が厚い。
460	弥生土器	鉢	SR1 7～12層	-	-	-	外面：鉢部は右上がりタタキ、把手貼付け。黒斑。内面：縦位ミガキ。
461	古式土師器	鉢	SR1 7～12層	(26.2)	-	-	外面：左上がり粗いハケメ。内面：横位ハケメ。
462	古式土師器	鉢	SR1 7～12層	-	2.3	-	外面：縦位ミガキ。内面：縦位丁寧なナデ。底部：小さな平底。
463	古式土師器	鉢	SR1 7～12層	(9.3)	-	-	外面：左下がりハケメが微細に残存、口縁部付近オサエ。内面：主に横位沈線状ミガキ。
464	古式土師器	鉢	SR1 7～12層	-	8.3	-	外面：鉢部右上がりタタキの後に縦位ミガキ。内面：鉢底部一部剝落、脚裾部調整不明。
465	古式土師器	鉢?	SR1 7～12層	-	(7.3)	-	内外面：調整不明。上面端に右下がり穿孔が並ぶ（編み籠などの紐孔？）
466	古式土師器	有孔鉢	SR1 7～12層	15.3	3.0	10.1	外面：右上がりタタキの後に縦位ナデ消し。内面：縦位～左上がりハケメ。黒斑。底部：焼成前穿孔。
467	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	(11.3)	-	-	外面:口縁部外側へ強く折曲げ丁寧なヨコナデ、頸部縦位ハケメ、肩部縦位～左下がり細かいミガキ。内面:口縁部丁寧なヨコナデ、頸肩部ナデ・オサエ。
468	弥生土器/古式土師器	細頸壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：縦位～左下がりハケメの後に上半・下半縦位ミガキ。内面：上半ナデ・オサエ、下半オサエ・左→右方向ケズリ
469	古式土師器	壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：調整不明。内面：肩部粗いオサエ。
470	弥生土器/古式土師器	壺/鉢	SR1 7～12層	-	2.8	-	内外面：調整不明。底部：上底状。
471	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(10.0)	-	-	外面：口縁部丁寧なヨコナデ。スス付着。内面：口縁部ヨコナデ。
472	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(14.0)	-	-	外面：口縁端部摘み出し、肩部縦位ハケメ。内面：口縁部横位ハケメ？
473	弥生土器	水平口縁高杯	SR1 7～12層	-	-	-	内外面：ヨコナデ。
474	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	外面：ヨコナデ、裾部に円孔1孔残存。内面：左上がりハケメ。
475	古式土師器	高杯	SR1 7～12層	-	-	-	内外面：調整不明。
476	弥生土器/古式土師器	土製支脚	SR1 7～12層	4.1	-	-	外面：僅かに外反する口縁部端部に刻目、脚部縦位ハケメ。内面：しぼり目、粗いナデ。中空。
477	弥生土器	長頸壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：頸部凹線文4条、左下がり刺突文。
478	古式土師器	甕	SR1 7～12層	(15.0)	-	-	外面：口縁端部擬凹線文5条。スス付着。内面：丁寧なヨコナデ。
479	古式土師器	複合口縁壺	SR1 7～12層	-	-	-	外面：口縁部外反、頸部羽状文。内面：調整不明。
480	古式土師器	複合口縁甕	SR1 7～12層	(13.6)	-	-	外面：口縁部外反、口頸部強いヨコナデ。内面：口頸部強いヨコナデ、肩部右→左方向ケズリ。
481	古式土師器	鉢	SR1 7～12層	-	-	-	外面：胴部横位ハケメの後に左上がり～横位沈線状ミガキ。内面：胴部右→左方向ケズリ、頸部密な横位沈線状ミガキ。
482	古式土師器	広口壺	SR1 7～12層	29.4	-	-	外面：口縁端部下方に拡張、口縁端部ヘラ描き沈線3条、その上に竹管文を持つ単体の円形浮文７個残存。内面：ヨコナデ。
483	古式土師器	蓋	SR1 7～12層	(2.3)	12.0	6.4	外面：縦位～左下がりハケメ。内面：左→右方向ハケメ。
484	弥生土器/古式土師器	把手	SR1 7～12層	-	-	-	表面：中心線がしっかりとした綾杉状ヘラ描き沈線、中心線は一筆書きではなく断続的に静止している。裏面：ナデ・オサエ。
485	古式土師器	土製当具	SR1 7～12層	5.6	-	3.3	上面：ナデ・オサエによって摘み部分を成形、一部に布圧痕。下面：ナデ・オサエ。
486	弥生土器/古式土師器	土錘	SR1 7～12層	2.8	-	6.1	外面：ナデ・オサエ。側面：面取り。内面：中空。
487	弥生土器	広口壺	SR1 17層	(22.0)	-	-	外面：口縁端部上下に拡張、端面板状工具小口による圧痕文、頸肩部縦位細かいハケメの後に指頭圧痕文突帯。内面：肩部右→左方向ハケメの後に頸部同方向ミガキ。
488	弥生土器	大型短頸壺	SR1 17層	-	-	-	外面:口縁端部下半を貼付けて拡張、頸肩部界指頭圧痕文突帯貼付け。肩部接合部分で剝落。内面:調整不明。
489	弥生土器	短頸壺	SR1 17層	9.6	-	-	外面：頸部指頭圧痕文突帯貼付け、肩部縦位ハケメ。内面：調整不明。
490	弥生土器	直口壺	SR1 17層	12.2	-	-	外面：口縁端部内面に拡張、横位ハケメが微細に残存。内面：左上がりハケメが微細に残存。
491	弥生土器	壺	SR1 17層	-	9.7	-	外面：調整不明。黒斑。内面：縦位ハケメが微細に残存、底部接合痕観察可。黒斑。底部：やや上底状。

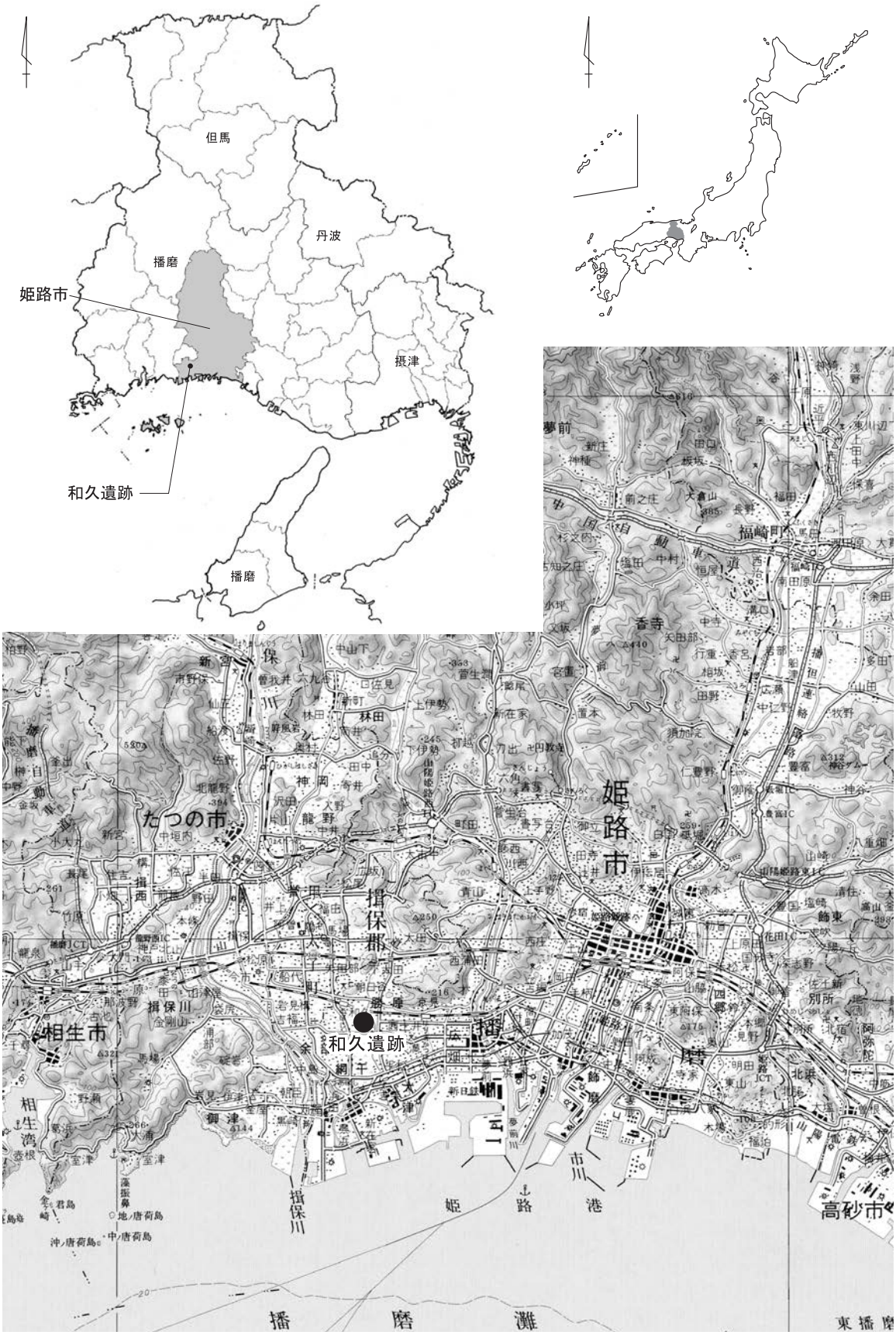
色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
灰黄褐色	軟質	石英・長石極小粒主体、径1mm大同種鉱物粒を少量含む。	56		在地の胎土ではない可能性
浅黄橙色	やや堅緻	石英・長石・褐色・暗褐色・黒褐色極小粒を含むが、比較的精良。	56		
にぶい橙色、淡橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含むが、比較的精良。	56	72	在地の胎土ではない可能性
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	56	72	
灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含むが、比較的精良。	56		
黄灰色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	56		
灰白色、灰白色～橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	56		
にぶい黄橙色、灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	56		
浅黄橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含むが、比較的精良。	56		
浅黄橙色、にぶい橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・褐色粒・黒褐色粒を含むが、比較的精良。	56	72	
橙色、淡橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、径1mm大同種鉱物粒・褐色粒を少量含む。	56	73	胎土は在地だが、発色がやや異質
灰白色、黄灰色	軟質	径～1mm長石粒主体、同大石英粒を少量、同大花崗岩粒を稀に含む。	56		
浅黄色、にぶい黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を少量含む。	56	72	穿孔径：7mm
にぶい黄橙色	軟質	石英・長石・角閃石・雲母極小粒を含む。	57	73	阿波産？
にぶい褐色、灰黄褐色	軟質	石英・長石・角閃石・雲母極小粒主体、径～1mm同種鉱物粒を少量含む。	57	73	四国北部産
明赤褐色、明赤褐色	軟質	石英・長石極小粒を含むが、比較的精良。	57		阿波系？
橙色～明赤褐色、橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含むが、精良。	57	73	四国北東部産
にぶい褐色	軟質	砂粒をほとんど含まず、比較的精良。	57		四国北東部産
赤褐色	軟質	石英・長石・角閃石？極小粒主体、径2mm大長石粒を少量含む。	57	74	四国北東部産
明赤褐色、橙色	軟質	石英・長石・黒色極小粒を含む。	57		阿波産？
にぶい橙色、にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・角閃石粒主体、径1mm大花崗岩粒を少量を含む。	57		四国北東部産
褐色、にぶい褐色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒色粒を含む。	57		四国北東部産
灰黄褐色、にぶい黄橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を少量、同大花崗岩粒を稀に含む。	57	73	讃岐系
灰黄色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	57	73	吉備系
褐灰色、にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	57	74	吉備系
浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	57	74	山陰系
橙色、浅黄橙色～橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	57	74	山陰系
浅黄橙色～灰白色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒を含むが、比較的精良。	57	74	丹波・但馬系?
灰黄褐色、にぶい黄橙色～にぶい褐色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母粒を含む。	57	74	河内産
にぶい黄橙色、にぶい橙色	軟質	石英・長石・褐色・赤褐色極小粒を含む。	57	75	
灰白色	やや堅緻	径～ mm石英粒・長石粒を含む。	57	74	
にぶい黄橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒を含む。	57	75	
灰白色	軟質	径0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	57	75	
橙色、にぶい橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を少量含むが、比較的精良。	58	75	
浅黄橙色、橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	58	75	
にぶい黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	58	75	
灰白色、にぶい黄橙色	軟質	石英・長石極小粒を少量、径2mm大同種鉱物粒を稀に含む。	58		
黄灰色～灰白色、灰色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	58		

土器観察表13

掲載番号	種別	器種	出土遺構	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・技法の特徴
492	弥生土器	広口壺	SR1 17層	17.5	-	-	外面：口縁端部下半を貼り付けて拡張、口縁端部ヨコナデ、3個一対の竹管文3対残存。内面：ヨコナデ、外面と同様の竹管文ほぼ位置を合わせて3対残存。
493	弥生土器/古式土師器	壺	SR1 17層	-	-	-	外面：扁球な胴部に、頂部に刻目を持つ断面台形突帯貼付、。その後に縦位ミガキ。内面：ナデ・オサエ。
494	弥生土器	甕	SR1 17層	(25.0)	-	-	外面：胴部縦位ハケメが極微細に残存。内面：左上がりハケメ。
495	弥生土器	甕	SR1 17層	(14.1)	-	-	外面：口縁端部僅かに摘み出し、口縁部やや強いヨコナデ、胴部縦位ハケメ、スス付着。内面：左上がりハケメ。
496	弥生土器	甕	SR1 17層	-	3.7	-	外面：縦位ミガキ。内面：縦位ハケメが微細に残存。底部：輪台技法。
497	弥生土器	甕	SR1 17層	-	4.5	-	外面：右上がり細かいハケメの後に横位叩き・右上がりやや粗いハケメ。スス付着。内面：底部充填に伴うナデ・オサエ。底部：輪台技法、長さ約75mm有機質の圧痕。
498	弥生土器/古式土師器	甕	SR1 17層	-	3.5	-	外面：右上がり粗いタタキの後に上→下方向ハケメ。黒斑。内面：左上がりハケメ、底部やや粗いナデ・オサエ。
499	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	16.2	-	-	外面：口縁端部丸く収める、胴部球体、胴部上半右上がり細密なタタキ、下半縦位ハケメ、2次被熱による破裂痕、スス厚く付着。内面:下半下→上方向ケズリ、上半左上がりケズリ、上半外面調整に伴うオサエ。底部付近コゲ付着。
500	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	19.4	-	-	外面:やや外反する口縁部、口縁端部強いヨコナデ、接合痕観察可。内面:右→左方向ハケメの後にヨコナデ、肩部左上がりケズリ。
501	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	18.4	-	-	外面：直線的に伸びる口縁部、口縁端部直立した面に擬凹線文1条、肩部横位細密なタタキ、胴部上半縦位やや粗いハケメ、スス付着。内面：口縁部右→左方向ハケメの後にヨコナデ、肩部オサエの後に横位ハケメ、胴部上半左上がりケズリ。
502	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	(17.8)	-	-	外面:僅かに外反する口縁部、口縁端部直立した面に擬凹線文1条、肩部横位細密なタタキ、スス厚く付着。内面:口縁部横位ハケメの後にヨコナデ、肩部横位ハケメ、口縁部接合痕僅かに観察可。504と酷似するが、口縁部の形状と長さから別個体と判断。
503	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	(17.1)	-	-	外面：やや直線的に伸びる口縁部、口縁端部丸く収める、肩部右上がり細密なタタキ。スス付着。内面：口縁部横位ハケメの後にヨコナデ、肩部右→左方向ケズリ。
504	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	(13.2)	-	-	外面：やや直線的に伸びる口縁部、口縁端部やや内傾する面を持つ。内面：横位ハケメの後にヨコナデ、口縁部接合痕観察可。
505	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	(15.2)	-	-	外面：中程がやや膨れやや外反する口縁部、口縁端部直立する面を持つが稜はあまい、肩部横位細密なタタキ。内面：口縁部ヨコナデ?、肩部右上がりハケメ。
506	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：中程がやや膨れるが直線的に伸びる口縁部、口縁端部直立する面を持つが稜はあまい、肩部横位細密なタタキ。内面：口縁部左下がりハケメの後にヨコナデ、肩部右→左方向ケズリ。
507	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：肩部左上がり細密なタタキの後に左上がりハケメ。スス厚く付着。内面：口縁部横位ハケメの後にヨコナデ、肩部横位ハケメの後に胴部上半オサエ。
508	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：右上がりやや細密なタタキの後に肩部上端ヨコナデ、胴部上半左上がりハケメ。内面：左上がりケズリ。
509	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：やや左上がり細密なタタキの後に左上がりハケメ。スス付着。内面：左上がりケズリ。
510	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：ほぼ横位細密なタタキの後に下半縦位ハケメ。スス付着。内面：右→左方向ハケメの後に肩部ほぼ同方向ケズリ、口縁部接合痕観察可。
511	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面：横位細密なタタキの後に縦位粗いハケメ。スス付着。内面：肩部横位ハケメの後に肩部付近左上がりナデ・縦位に近い左上がりケズリ。
512	古式土師器	庄内式甕？	SR1 17層	-	-	-	外面：右上がりやや細密なタタキ。スス厚く付着。内面：横位の粗いハケメの後に縦位ケズリ。コゲ付着。
513	古式土師器	庄内式甕？	SR1 17層	-	-	-	外面：右上がりやや細密なタタキの後に縦位ハケメ。スス付着。内面：外面調整に伴うオサエ。
514	古式土師器	庄内式甕	SR1 17層	-	-	-	外面:横位～右上がりやや細密なタタキの後に左上がりハケメ。スス厚く付着。2次被熱による破裂痕。内面:左上がりハケメの後に胴部下半のみ左上がりケズリ。
515	古式土師器	初期布留式甕	SR1 17層	(15.8)	-	-	外面：内湾しながら立上がる口縁部、口縁端部は上方に面を持ち沈線1条、肩部下→上方向ハケメが微細に残存。内面：口縁部左上がり～横位ハケメの後にヨコナデ。肩部右→左方向ケズリ。
516	古式土師器	初期布留式甕	SR1 17層	14.6	-	-	外面：内湾しながら立上がる口縁部、口縁端部は上方に面を持ち沈線1条。肩部下→上方向ハケメ。内面：口縁部左上がりハケメの後にヨコナデ、肩部左→右方向ケズリ。
517	古式土師器	初期布留式甕	SR1 17層	(13.2)	-	-	外面：内湾しながら立上がる中程がやや膨れる口縁部、口縁端部は上方に面を持ち沈線1条。肩部縦位ハケメが微細に残存。内面：口縁部左上がりハケメの後にヨコナデ。肩部右上がりケズリ。
518	弥生土器	脚台	SR1 17層	-	-	-	外面：鉢部・脚部境界に断面三角形突帯貼付け。三角形透し孔2孔残存。内面：底部粘土円盤剝落、脚部しぼり目。
519	古式土師器	鉢	SR1 17層	-	3.0	-	外面：鉢部・台部縦位細かいミガキ。内面：鉢部縦位ミガキ。台部粗いオサエ。
520	古式土師器	鉢	SR1 17層	-	-	-	外面：頸肩部界右上がり粗いタタキ（口縁部叩き出し？）の後に口縁部ヨコナデ。胴部左上がりハケメの後に同方向ミガキ。内面：口縁部横位ミガキ。胴部左上がりハケメの後に横位ミガキ。黒斑。
521	古式土師器	有孔鉢	SR1 17層	-	3.2	-	外面：右上がりタタキ。内面：底部付近板状工具によるナデつけの後に縦位ハケメ。底部：焼成前穿孔（内面調整に切られる）。
522	古式土師器	手焙形土器	SR1 17層	-	-	-	外面：覆部のみ残存、鉢部との接合部分で剝離。粘土帯の接合部分に断面台形突帯貼付け。内面：覆部下半ナデ・オサエ、同上半右→左方向ケズリ。
523	古式土師器	甕	SR1 17層	-	-	-	外面：口縁端部櫛歯状工具による擬凹線文6条、口縁部ヨコナデ。内面：丁寧なヨコナデ。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
浅黄橙色、にぶい橙色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、黒褐色極小粒を少量含む。	58	75	
にぶい黄橙色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	58		
浅黄橙色、灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒主体、同種鉱物極小粒をやや多く含む。	58		
浅黄橙色、灰白色	軟質	石英・長石極小粒主体、径2mm大赤褐色粒を稀に含むが、比較的精良。	58		
灰黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	58		
灰黄色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	58		
淡橙色、淡黄色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒・褐色粒やや多く、同種鉱物・黒褐色極小粒を含み、やや粗い。	58	76	
浅黄橙色、淡黄色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	58	76	
灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	58		
にぶい黄橙色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を含む。	58	76	
灰黄色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒主体、同大赤褐色粒を稀に含む。	58	76	
灰黄色、にぶい黄橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒、同大赤褐色粒を稀に含む。	58		
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒、黒褐色粒を含む。	58	77	
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒、黒褐色粒をやや多く含む。	58		
灰白色、浅黄橙色	軟質	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒、黒褐色粒をやや多く含む。	58	77	
にぶい黄橙色、にぶい褐色	やや堅緻	径1mm大角閃石粒・雲母粒主体、同種鉱物極小粒を多く、石英極小粒を僅かに含む。	58	77	庄内大和型甕
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・褐色粒をやや多く含む。	59	77	
灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒主体、同大赤褐色粒を稀に含む。	59	78	
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	59	78	
灰白色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒主体、同大褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	59		
黒褐色、暗褐色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、同大黒褐色粒を僅かに含む。	59	78	
灰黄褐色、黄灰色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	59	78	
黒褐色、灰白色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒・褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	59	78	
灰黄色、にぶい黄橙色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	59	78	
浅黄橙色	やや堅緻	石英・長石・褐色・黒褐色極小粒を少量含む。	59		
灰黄色、浅黄色	やや堅緻	石英・長石・褐色極小粒を含む。	59		
橙色、浅黄橙色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒を含む。	59		
灰黄色、黄灰色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	59	79	
浅黄橙色～にぶい橙色、にぶい橙色	軟質	径～2mm石英粒・長石粒を含む。	59	78	
灰黄色、淡黄色	軟質	径～1mm石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	59		
にぶい黄橙色～褐灰色 にぶい黄橙色～灰黄褐色	やや堅緻	径～1mm石英粒・長石粒主体、径～0.5mm同種鉱物粒・褐色粒を含む。	59	79	
灰黄色	やや堅緻	径～0.5mm石英粒・長石粒を含む。	59	79	吉備系

図　　版



和久遺跡の位置（S=1：200,000）

図版2　遺跡

【集落遺跡】

1　**和久遺跡**　2　大津茂川床遺跡　3　川島遺跡　4　檀特山山頂遺跡　5　ツクワ遺跡
6　下太田遺跡　7　檀特山遺跡　8　丁・柳ヶ瀬遺跡　9　南山戸遺跡　10　山戸遺跡
11　茶屋遺跡　12　坂出遺跡　13　鵤遺跡　14　鵤石田遺跡　15　立岡遺跡
16　蓮常寺北遺跡　17　中筋遺跡　18　地蔵寺遺跡　19　沖代遺跡　20　福地相坂遺跡

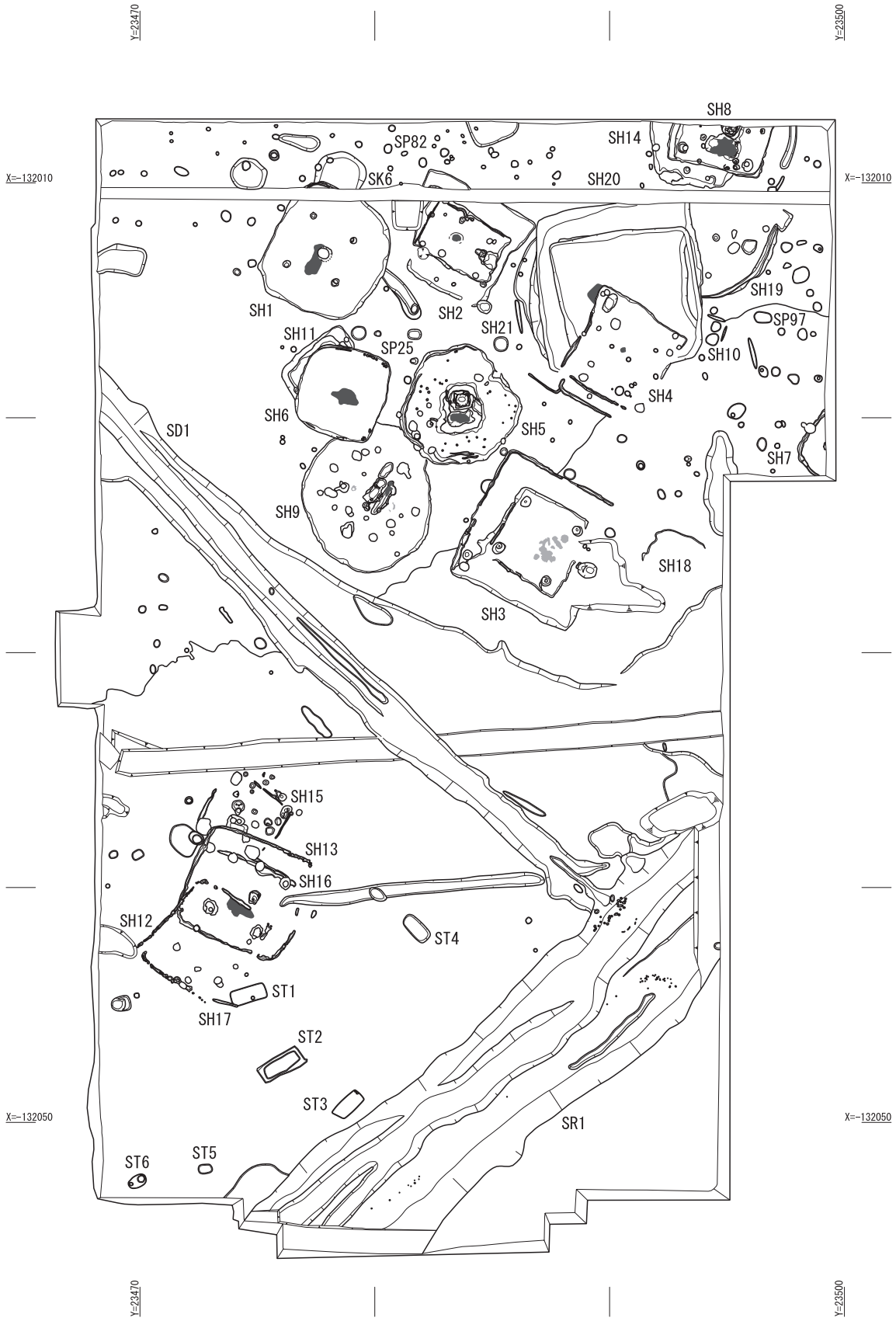
【墳丘墓・前期古墳】

A　黒岡山古墳（墳丘墓）　B　檀特山1号墳　C　檀特山3号墳　D　瓢塚古墳
E　山戸4号墳

関連する周辺の遺跡（S=1:25,000）

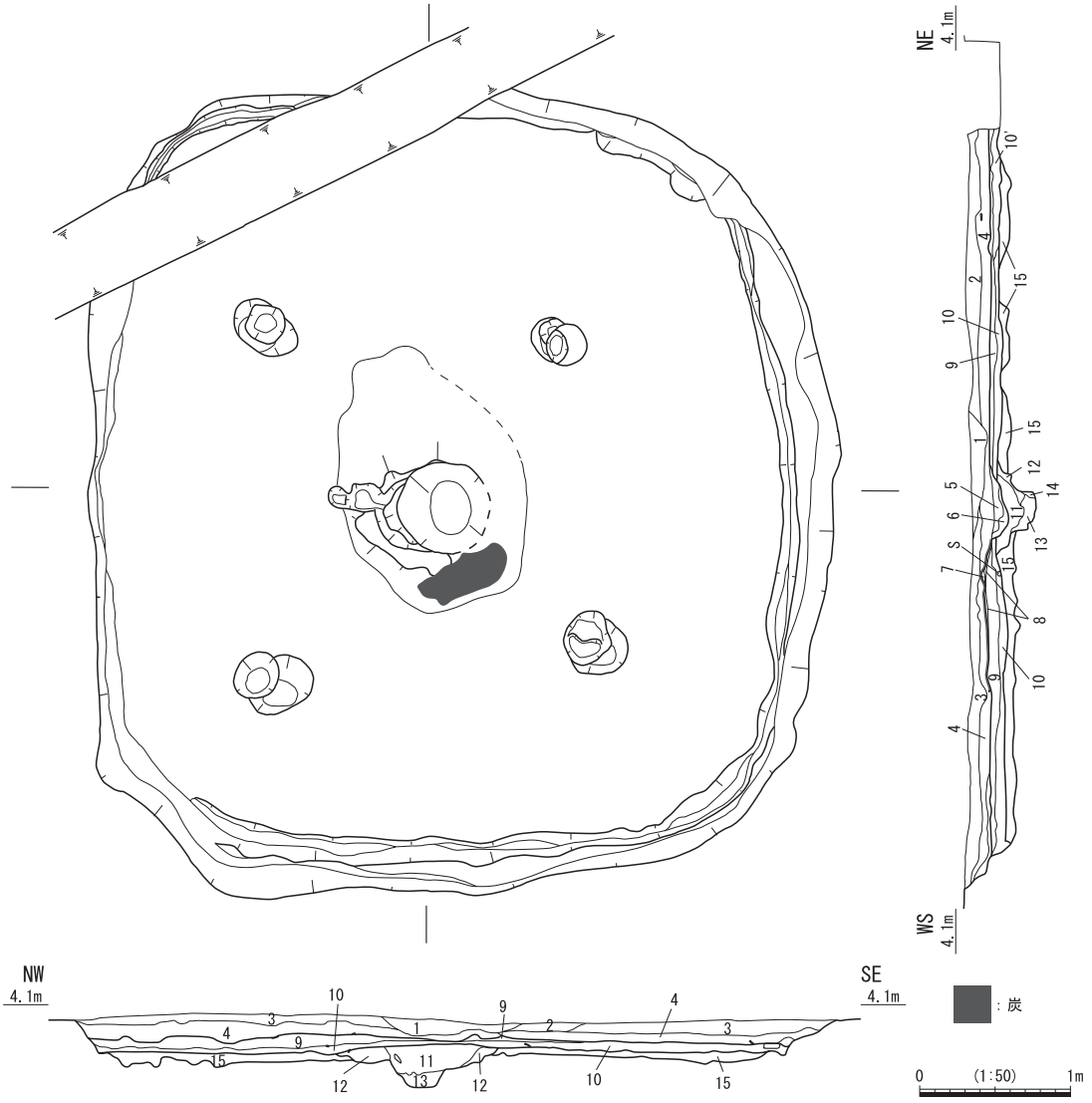
和久遺跡における既往の調査（S=1:3,000）

図版4　遺構



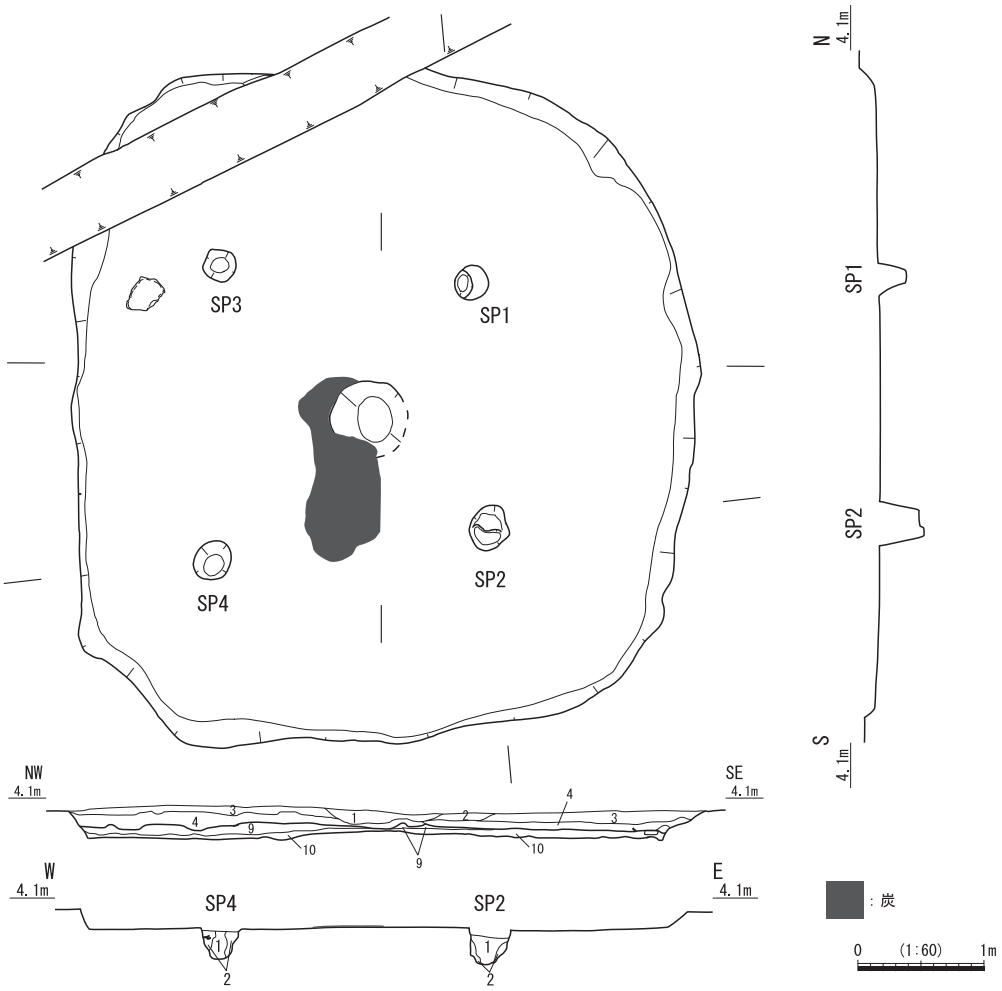
0　(1:250)　5m

調査区全体図（S=1:250）



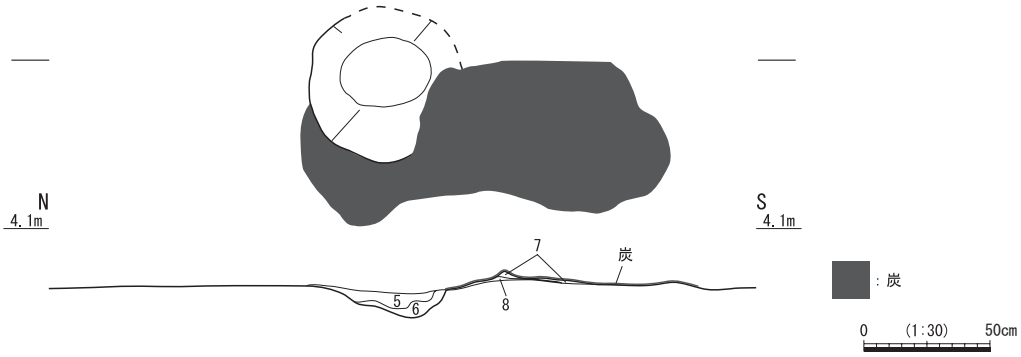
1　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）…粘性・しまりあり。3よりも褐色強い。
2　オリーブ黒色砂混じり粘質土（5Y3/1）…1に近いが細砂混じり。
3　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）…粘性。しまりあり。下面はやや不安定だが、ブロック状の含有物なし。
土器細片やや多く出土。
4　オリーブ黒色砂混じり粘質土（5Y3/1）…3に近いが粗砂混じり。床面中央部分にドーナツ状に炭面が広がる。
5　灰色粘質土（7.5YR4/1）…粘性・しまりあり。
灰・焼土・径～1cm円礫・径～1cmブロック状の地山を少量含む【中央土坑埋土】。
6　緑灰色粘質土（5G2/1）…灰・炭粒を多く含む。下方に炭集中【中央土坑埋土】。
7　暗オリーブ灰色砂混じり粘質土（2.5GY4/1）…しまりあり。径～5cm褐色粘土をブロック状に多く含む。
土器細片少量出土【SH1-1構築時の貼床】。
8　暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）…しまりあり。径～5mm炭化粒多く含む。径～3cm円礫を少量含む。
土器細片少量出土【SH1-1構築時の貼床】。
9　暗灰色砂混じり粘質土（2.5GY3/1）…しまりあり。細砂混じり。径～5cm黄褐色地山をブロック状に多く含む。
径～1cm灰・炭化粒多い。土器片少量出土【中央土坑埋土】。
10　暗緑灰色砂混じり粘質土（5G3/1）…しまりやや強い。白色細砂混じる【中央土坑埋土】。
11　暗緑灰色粘土（5G3/1）…粘性・しまりあり。径～5mm炭化粒・灰を少量含む。土器細片少量出土【中央土坑埋土】。
12　灰層【中央土坑使用時の灰の堆積】
13　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY4/1）…しまりあり。やや微砂混じり。南側ほど径～5mm炭粒多い【中央土坑埋土】。
14　褐灰色粘質土（10YR5/1）…粘性やや弱く、しまり強い。細砂混じり。
黄灰色地山をブロック状に多く含む【SH1-2構築時の貼床】。
15　褐灰色粘質土（10YR5/1）…しまり強い。粘性やや弱い。やや砂質を呈する。黄褐色地山をブロック状に多く含む
【SH1-2構築時の貼床】。

SH1　平・断面図（S=1:50）



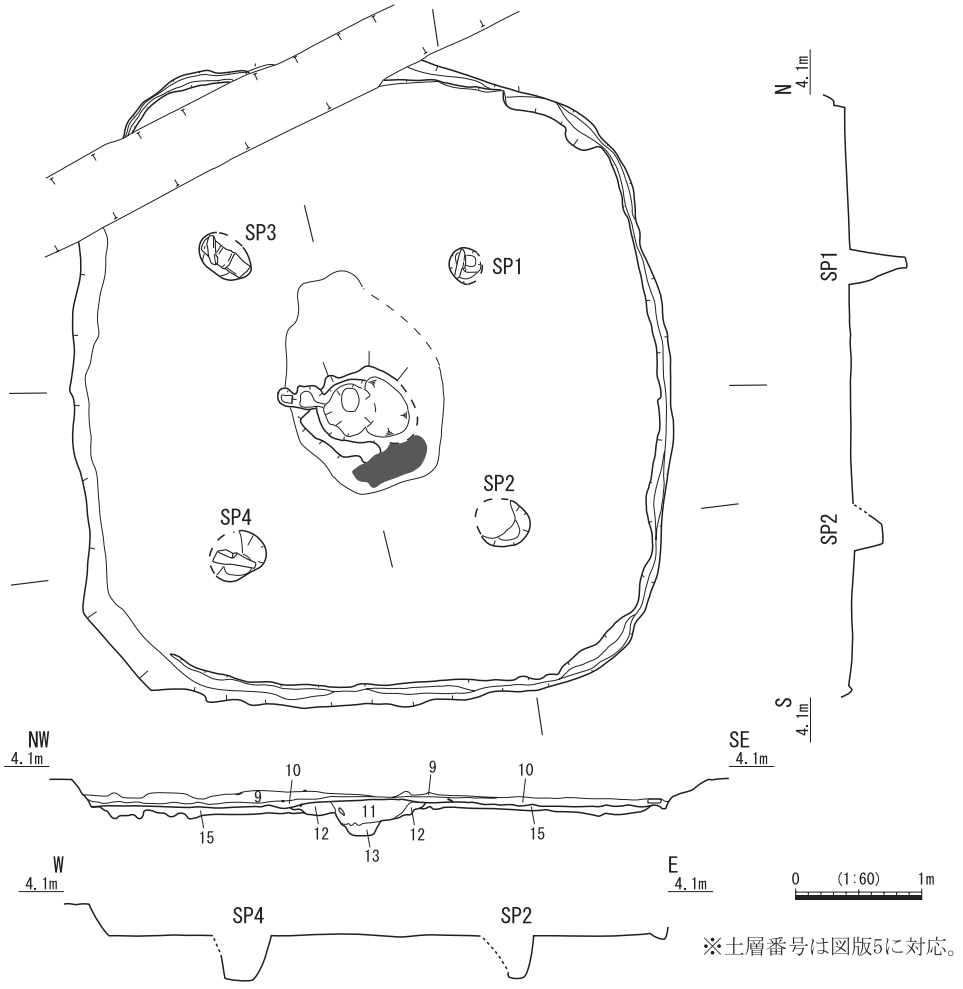
1　灰色粘質土（7.5GY4/1）…しまりややあり。細砂混じり【柱痕】。
2　暗緑灰色粘質土（5GY4/1）…しまりあり。粘性ややあり。径～1cm暗黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
【掘方埋土?】

1　SH1-1　平・断面図（S=1:60）

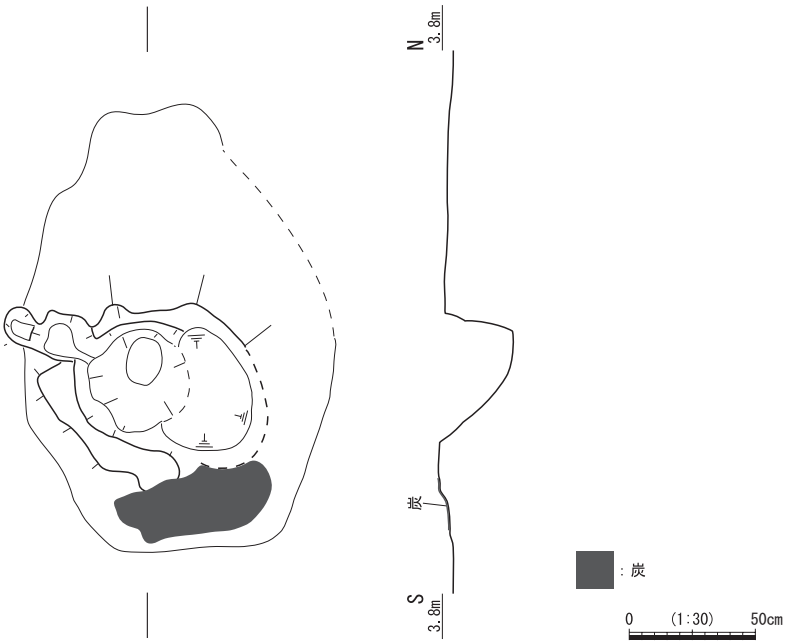


※土層番号は図版5に対応。

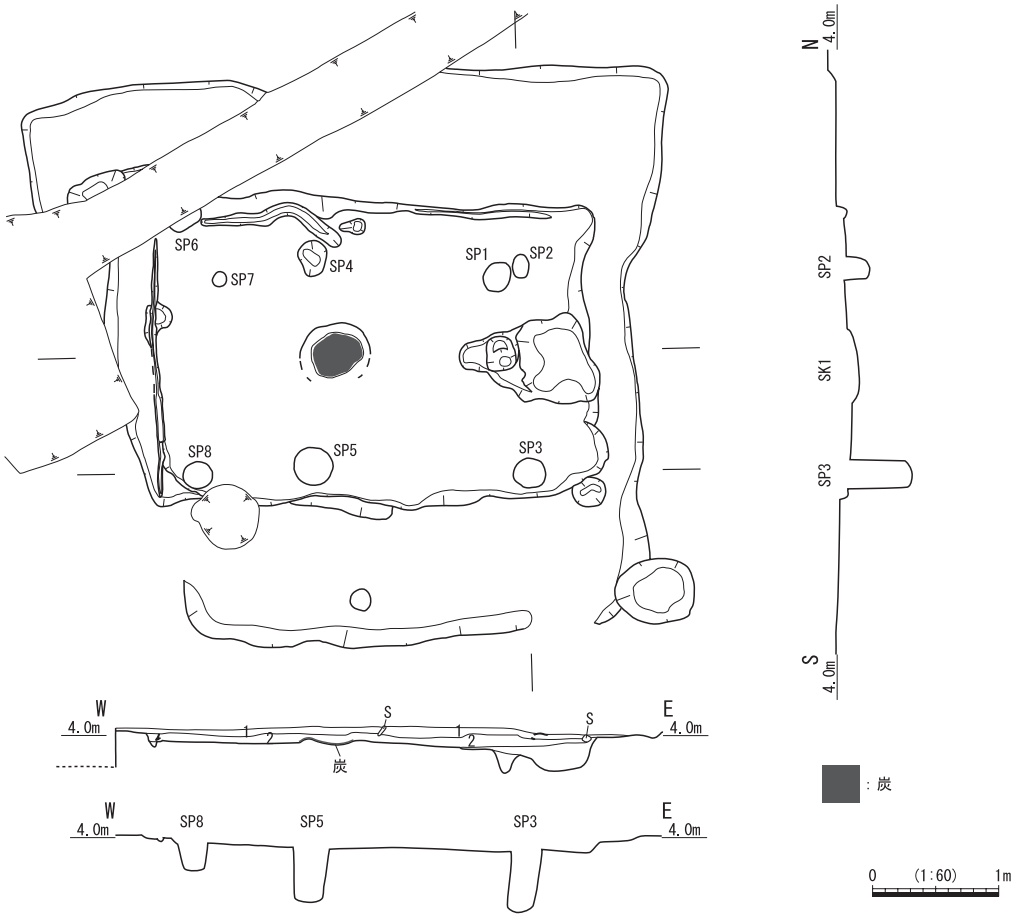
2　SH1-1中央土坑　平・断面図（S=1:30）



1　SH1-2　平・断面図（S=1:60）

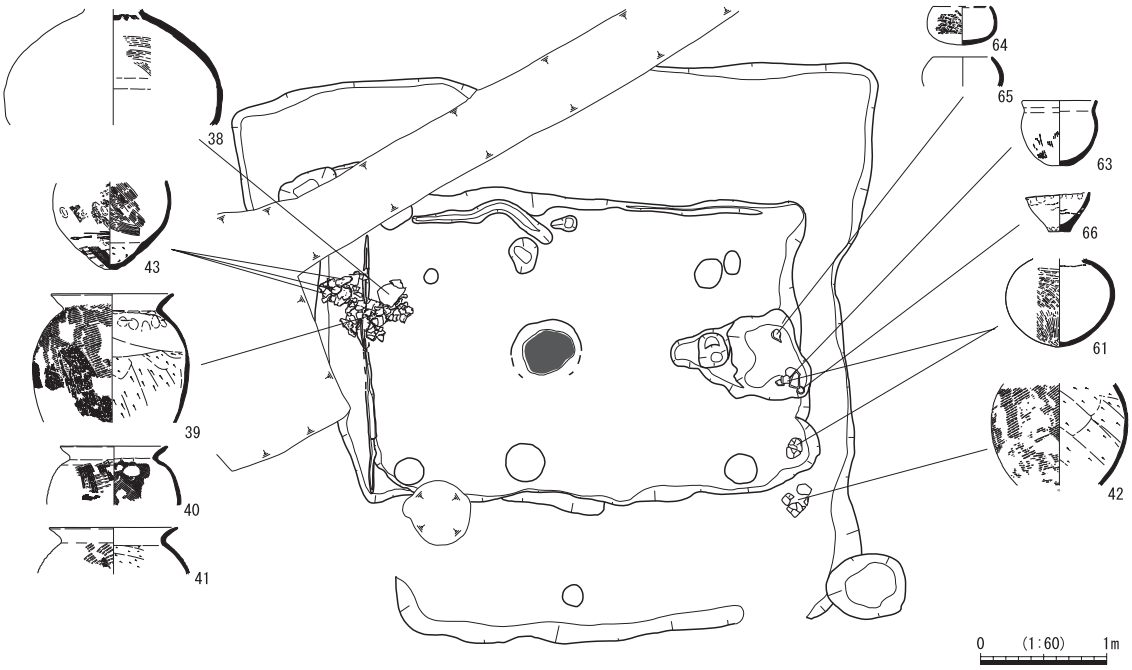


2　SH1-2中央土坑　平・断面図（S=1:30）

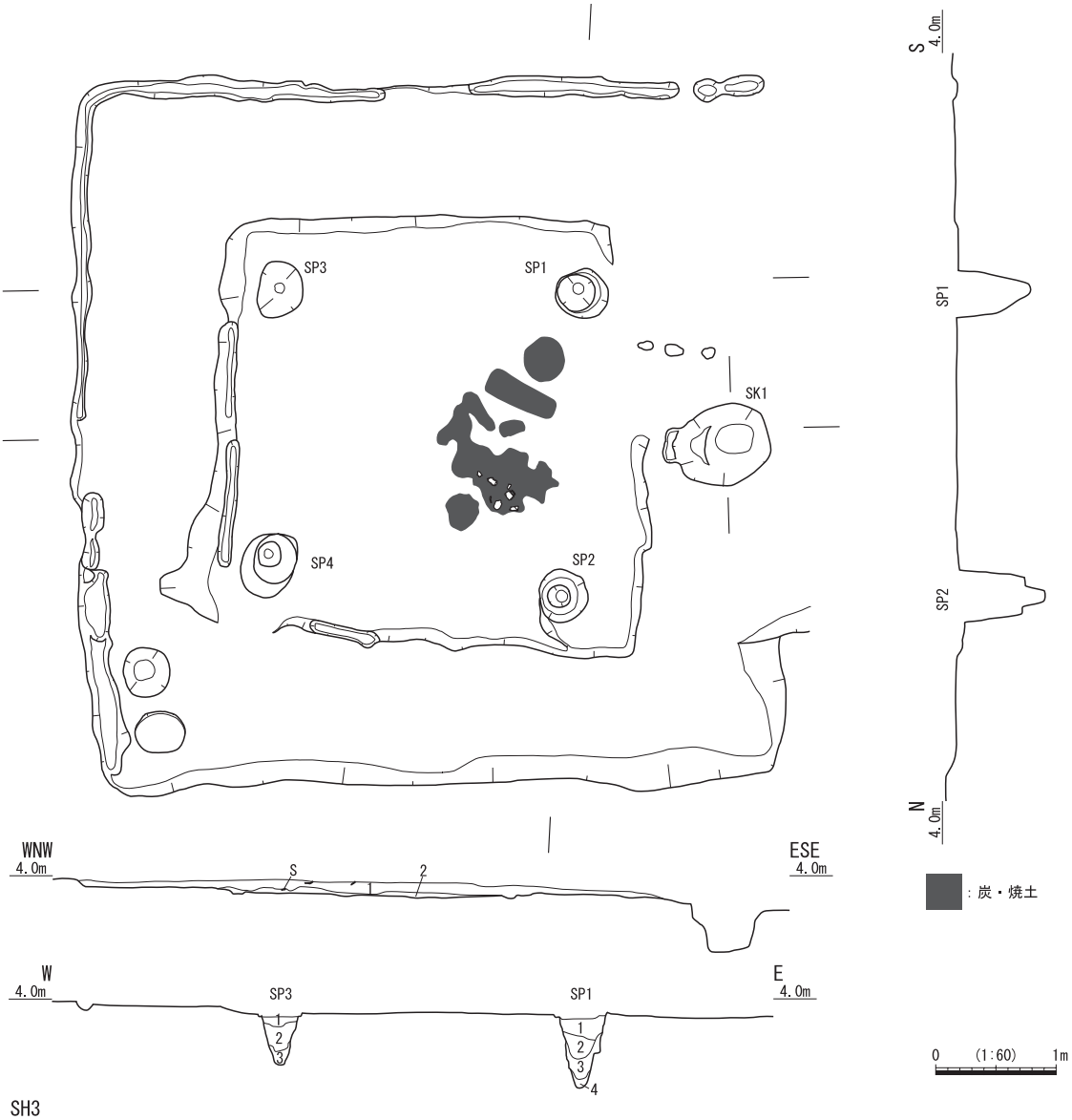


1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…粘性・しまりあり。細砂混じり。径～2cm円礫を少量含む。土器片やや多く出土。
2　暗緑灰色粘質土（5G2/1）…色調以外は1に近い。土器が床面で出土。

1　SH2　平・断面図（S=1:60）



2　SH2床面　土器出土状況図（S=1:60）



SH3

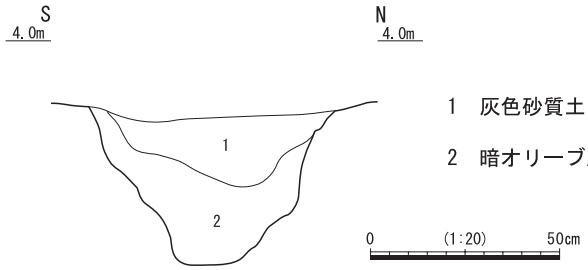
1　暗オリーブ灰色砂質土（2.5GY4/1）…しまりややあり。細砂主体で粗砂混じり。
径～10cm黄褐色地山をブロック状に少量含む。土器細片やや多く出土。

2　緑灰色砂質土（5G5/1）…しまり強い。細砂・粗砂主体。土器片やや多く出土。

SP1・SP3

1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりややあり。粗砂混じり。径～2cm黄褐色地山をブロック状にやや多く含む。
2　灰色粘質土（7.5Y4/1）…1に近いが、色調はやや明るい。
3　灰色粘土（7.5Y4/1）…ややシルト質。径～5cm黄褐色地山をブロック状に少量含む。
4　灰色粘土（N6/）…粘性やや強い。しまりあり。やや細砂混じり。

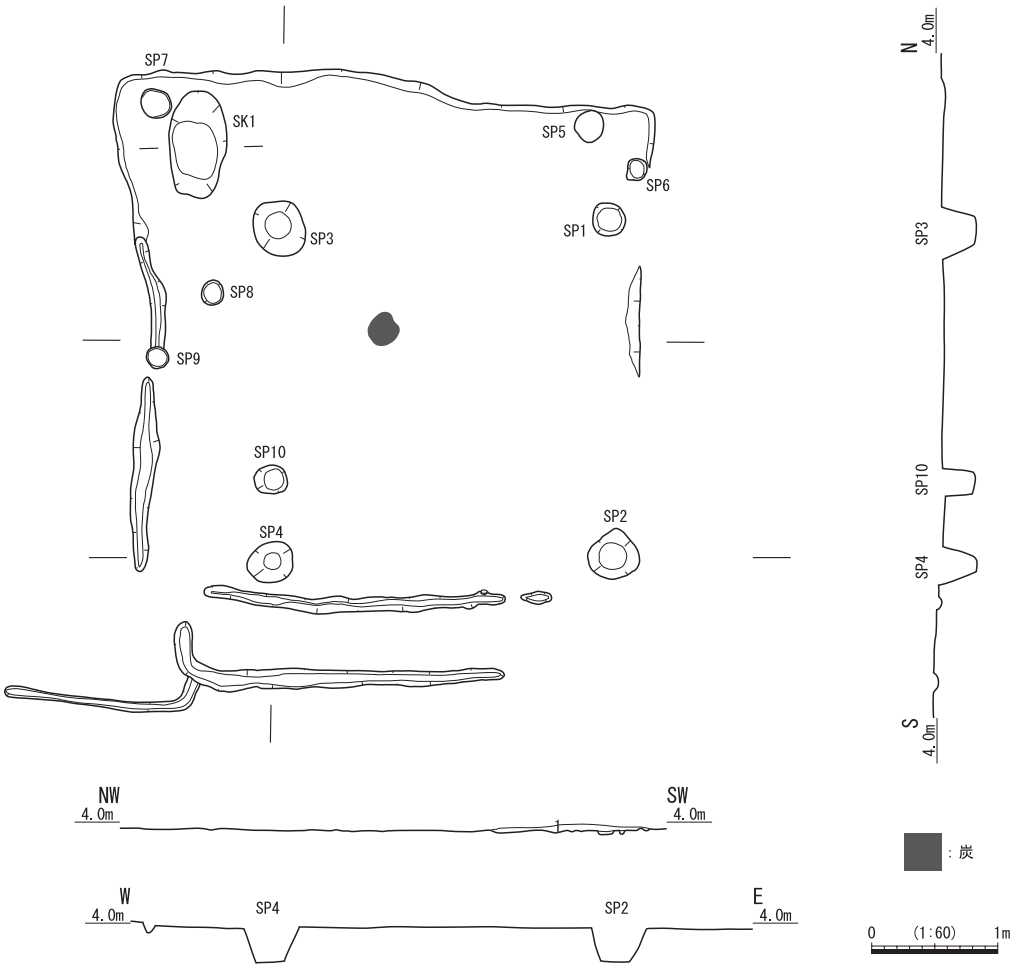
1 SH3　平・断面図（S=1：60）



1　灰色砂質土（7.5Y4/1）…しまりやや弱い。細砂・粗砂主体。
土器片少量出土。

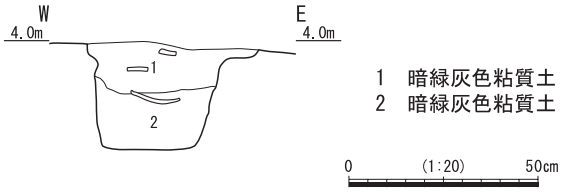
2　暗オリーブ灰色砂質土（2.5GY3/1）…しまりやや弱い。
細砂・粗砂主体。
土器片少量出土。湧水。

2 SH3-SK1　断面図（S=1：20）



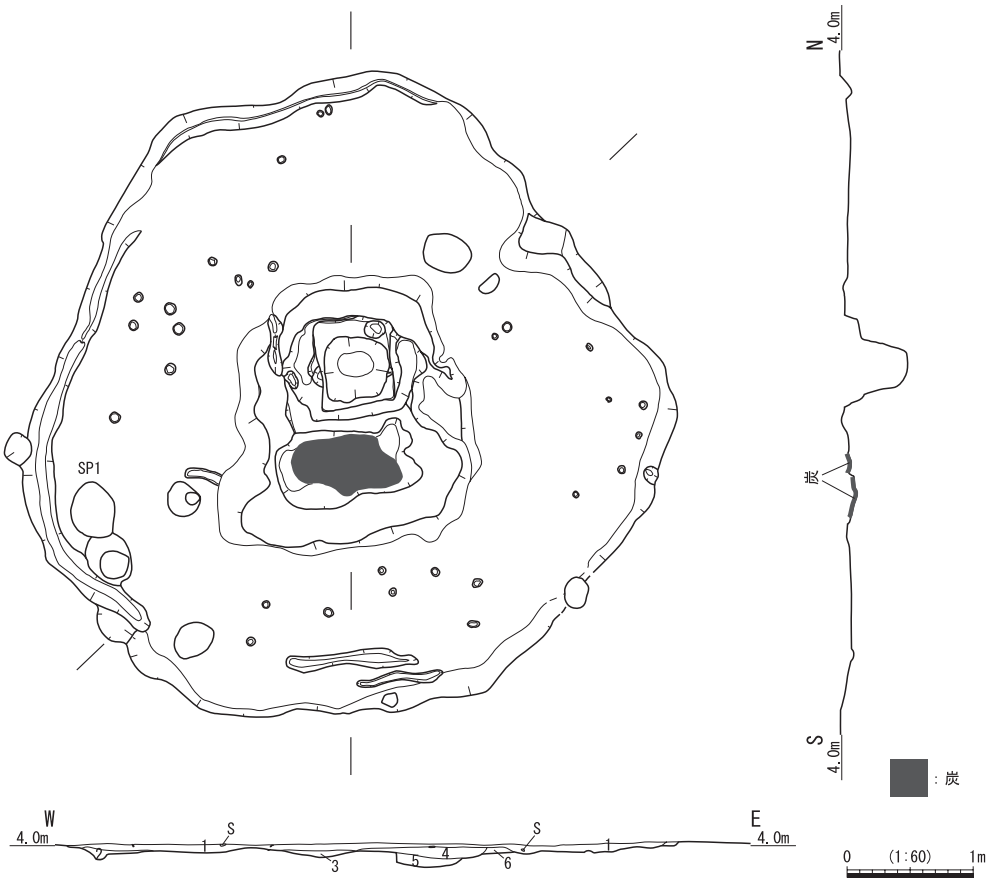
1　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりややあり。細砂・粗砂混じり。
径～2cm円礫をやや多く含む。土器細片少量出土。

1　SH4　平・断面図（S=1：60）

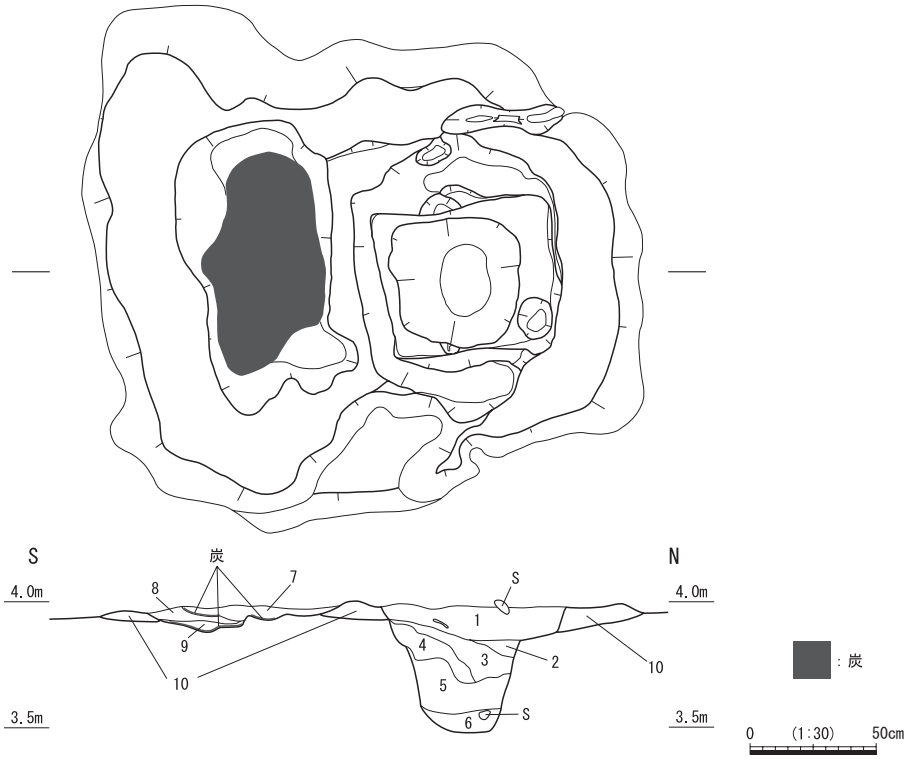


1　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…しまりあり。土器片少量出土。
2　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…色調は1より灰色強い。粗砂混じり。
土器片少量出土。

2　SH4-SK1　断面図（S=1：20）

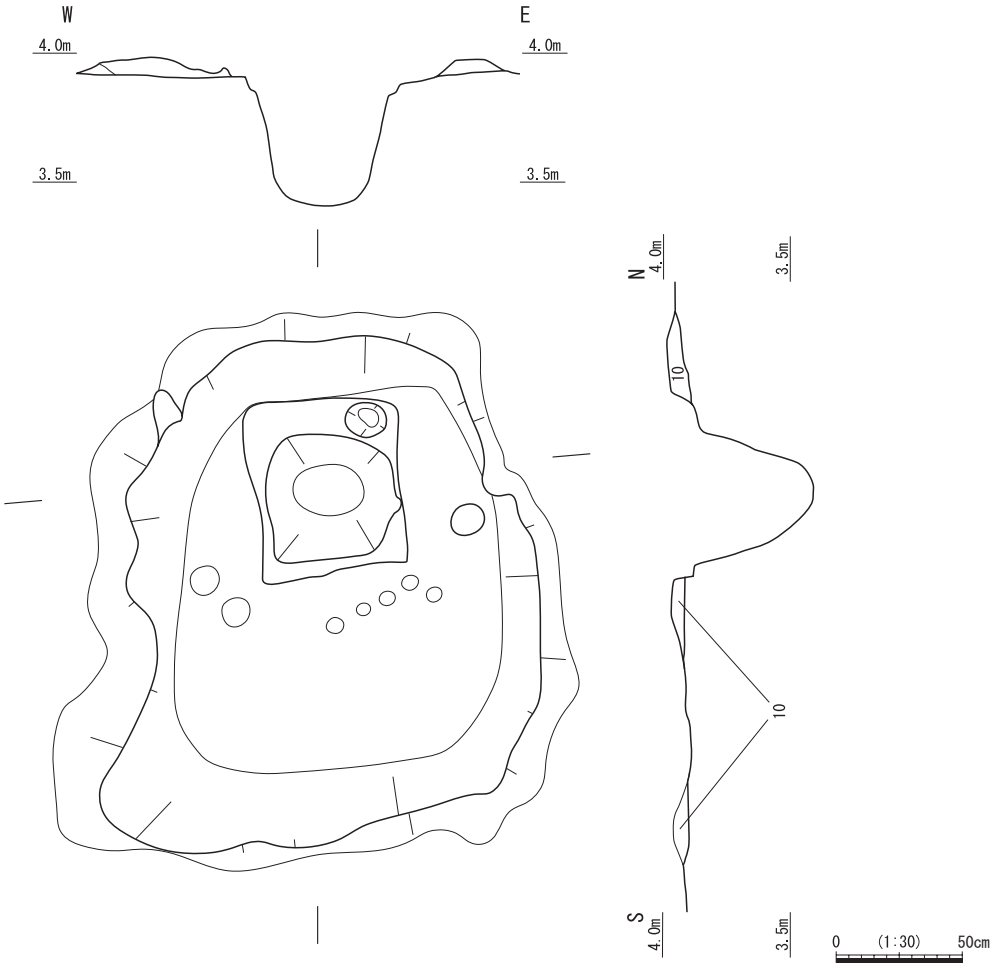


1　SH5　平・断面図（S=1:60）　※土層番号は図版12に対応。



2　SH5イチマル土坑　平・断面図（S=1:30）　※土層番号は図版12に対応。

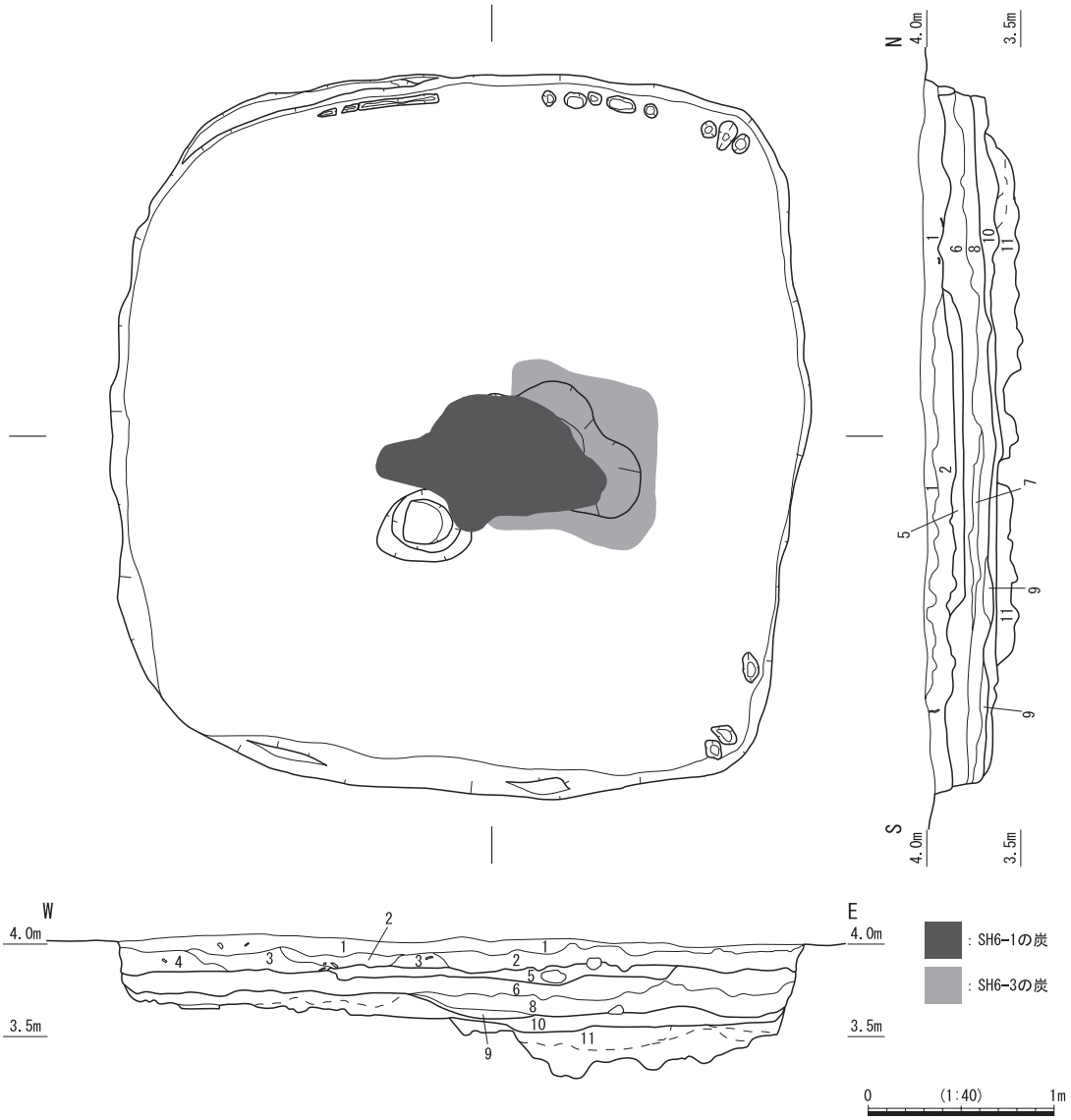
図版12　遺構



SH5イチマル土坑　完掘状況図（S=1：30）

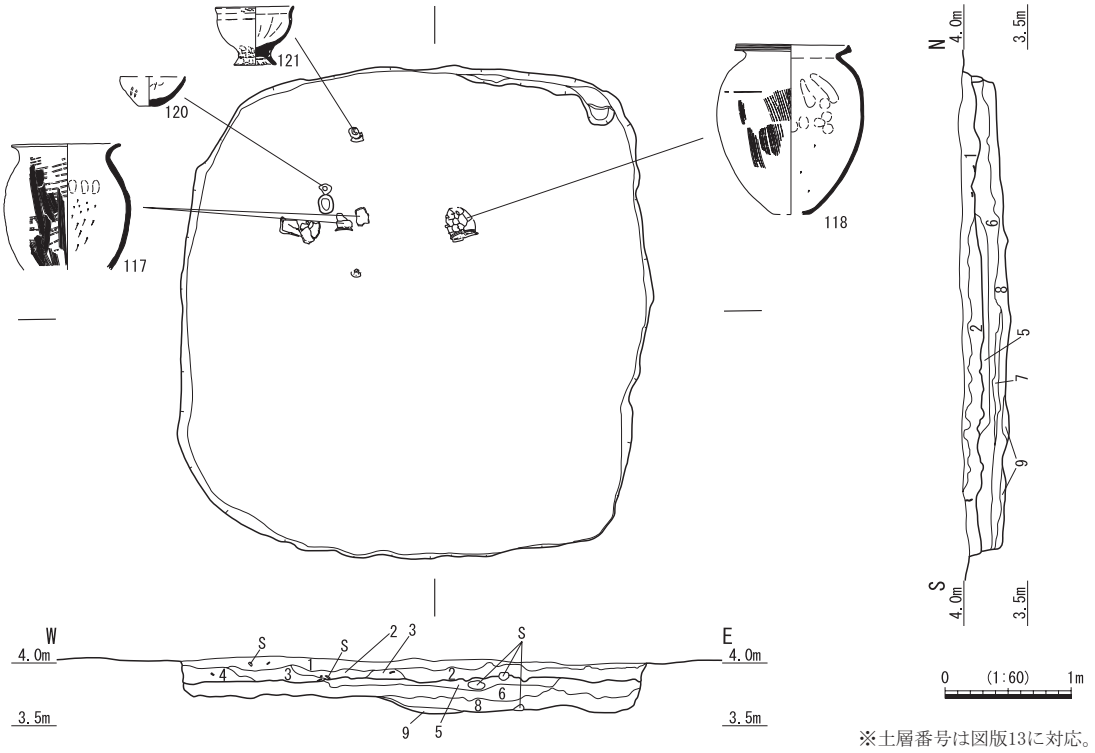
SH5
1　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりややあり。細砂・粗砂混じる。
径～2cm円礫を少量含む。土器片やや多く含む。
2　灰色粘質土（7.5Y4/1）…粗砂をやや多く含む以外は、1に近い。
3　灰色粘質土（7.5Y5/1）…しまりあり。微砂・細砂混じる。
4　マル土坑埋土
5　マル土坑埋土
6　イチマル土坑土手盛土

SH5-イチマル土坑
1　灰色粘質土（7.5Y5/1）…色調やや淡い。しまりあり。径～2cm円礫を少量含む。
土器細片少量含む【マル土坑埋土】。
2　オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）…3の一部と考えられるが、灰をより多く含む【マル土坑埋土】。
3　オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）…粘性・しまりややあり炭化極小粒・灰を多く含む【マル土坑埋土】。
4　オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）…3と同一層であるが、炭化粒が大きく、より多く含む【マル土坑埋土】。
5　灰色粘質土（7.5Y5/1）…粘性ややあり。細砂混じり。比較的均質【マル土坑埋土】。
6　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）…粘性あり。草本類と思われる炭化物多く含む【マル土坑埋土】。
7　灰色粘土（7.5Y5/1）…しまりあり。径～3cm黄褐色地山ブロック・径～2cm円礫を少量含む。
土器細片少量出土【イチ土坑埋土】。
8　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY4/1）…しまりあり。径～3cm黄褐色地山ブロックを少量含む。
上面炭層【イチ土坑新段階の使用面】。
9　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY4/1）…8よりも色調暗く、粘性あり。底面炭層【イチ土坑古段階の使用面】。
10　灰オリーブ色粘質土（5Y5/3）…粘性・しまりあり。やや砂質を呈する。地山起源と思われる
【イチマル土坑土手盛土】。



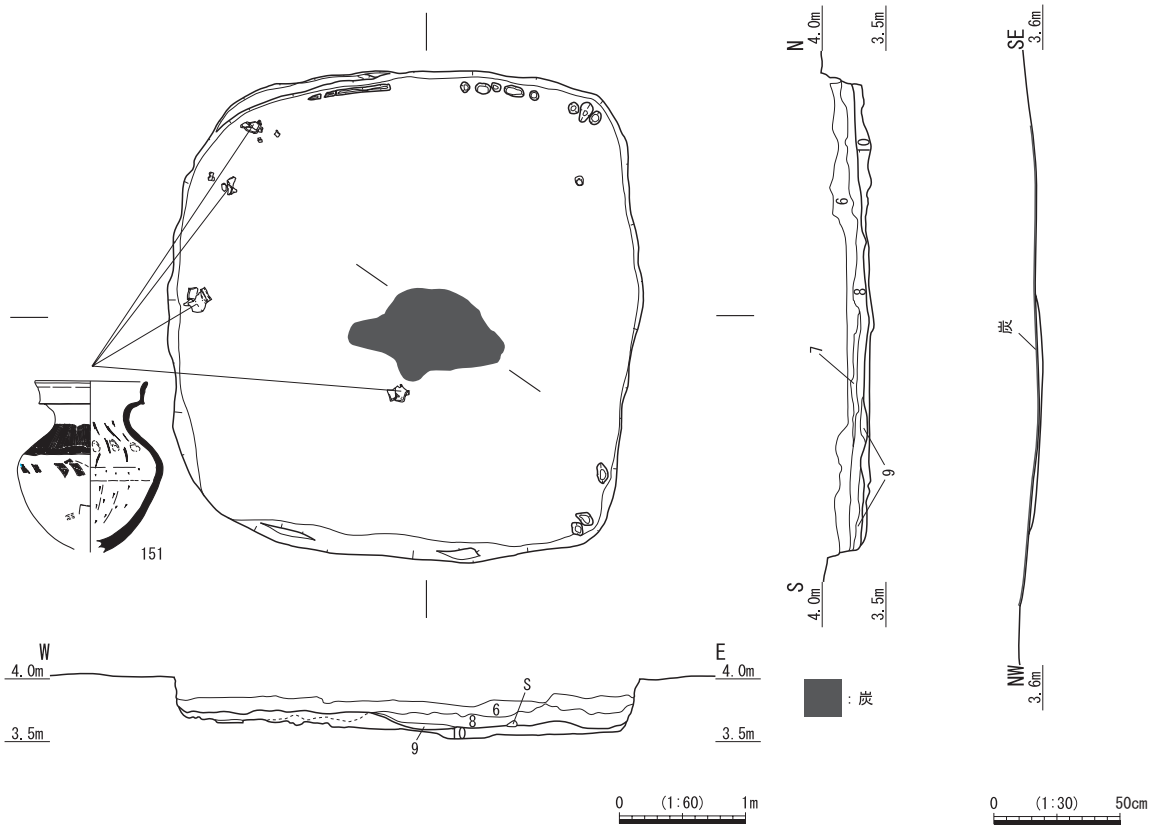
1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりあり。微砂混じり。径～1cm円礫を少量含む。土器片多く含む【SH6-1埋土】。
2　灰色粘質土（7.5Y4/1）…1に近いが、黄褐色地山をブロック状に多く含む。
3　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりあり。1に近いが部分的な堆積にとどまる【SH6-1埋土】。
4　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）…しまりあり。三角錐状堆積の可能性があるが、
あくまで部分的な堆積にとどまる【SH6-1埋土】。
5　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…6に近い。径～5cmの黄褐色地山ブロックを6より多く含む。
6　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりあり。微砂混じり。径～5cm黄褐色地山をブロック状に多く含む。
土器小片少量含む【SH6-1構築時の貼床】。
7　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりあり。6より砂質強い。
8　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりあり。径～5cm黄褐色地山をブロック状に多く含む。
土器小片少量含む【SH6-1構築時の貼床】。
9　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しありあり。粘性やや強い。ほかは8に近い。
10　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…しまりあり。6・8に近いが粘性はやや強い。
径～10cm黄褐色地山をブロック状に多く含む。地山ブロックのうち、層の上方では
平らに堆積していて複数の面を形成する可能性がある【SH6-2構築時の貼床】。
11　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…10に近いが、10よりも地山ブロックが多く、大きい【SH6-3構築時の貼床】。

SH6　平・断面図（S=1：40）



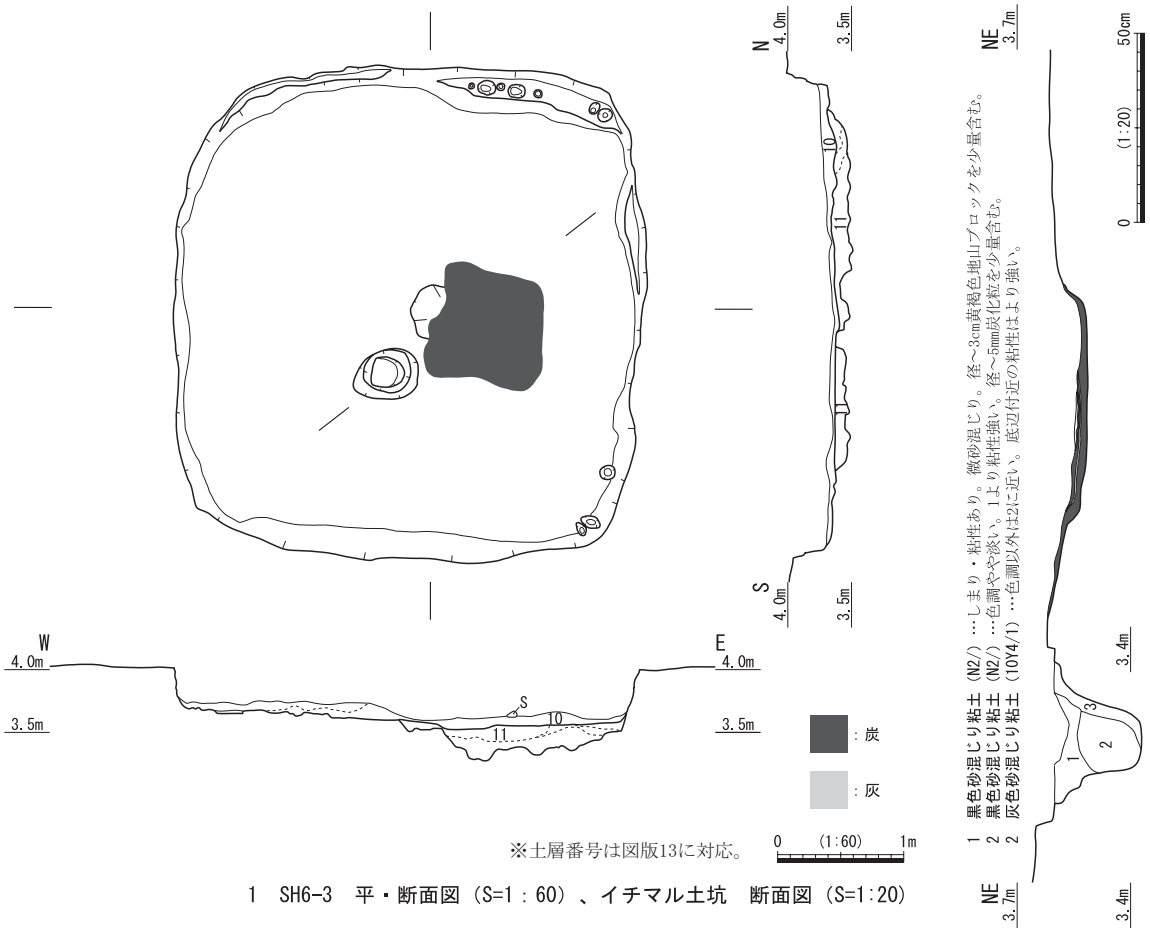
※土層番号は図版13に対応。

1　SH6-1　平・断面図（S=1：60）



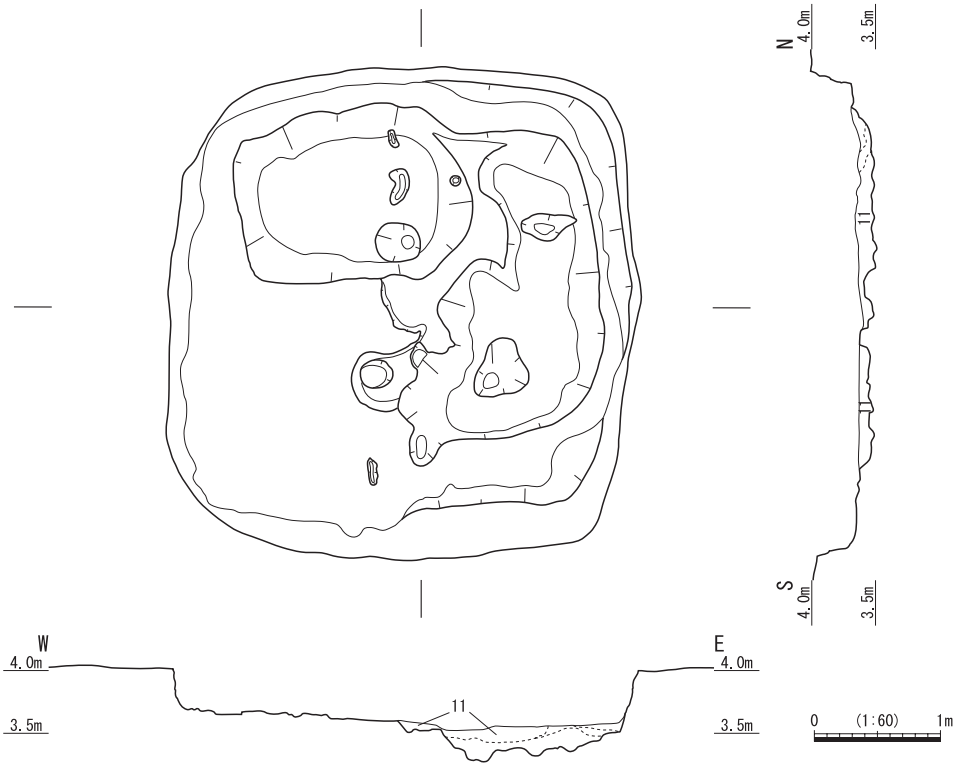
※土層番号は図版13に対応。

2　SH6-2　平・断面図（S=1：60）、炉　断面図（S=1：30）



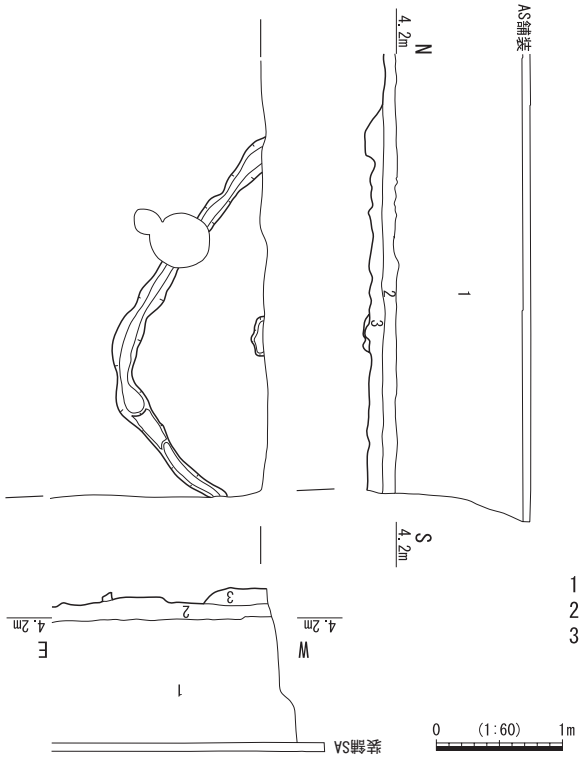
※土層番号は図版13に対応。

1　SH6-3　平・断面図（S=1：60）、イチマル土坑　断面図（S=1:20）



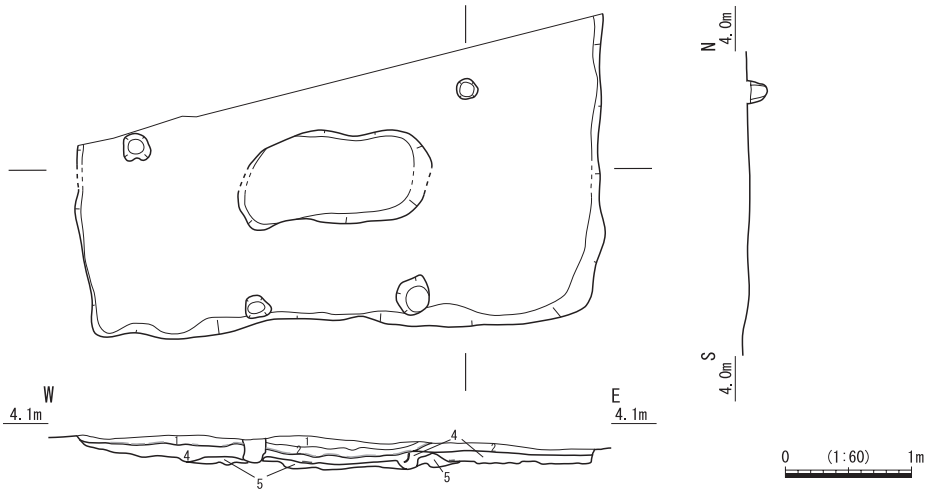
※土層番号は図版13に対応。

2　SH6-3下部構造　平・断面図（S=1：60）



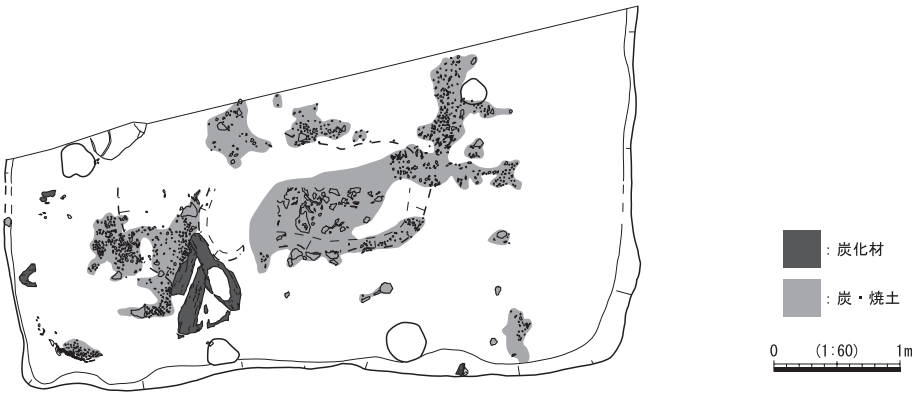
1　造成土
2　耕土
3　褐灰色砂質土（10YR4/1）…しまり弱い。
細砂主体、粗砂混じり。

1　SH7　平・断面図（S=1：60）

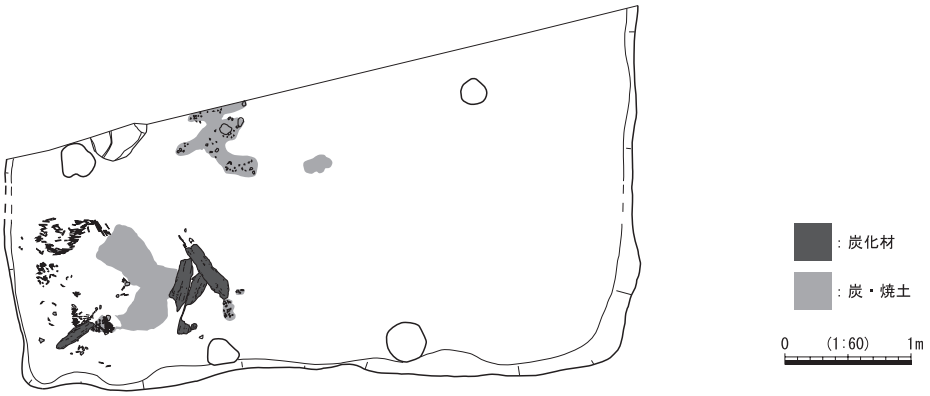


1　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…しまりあり。土器片やや多く出土【SH8-1埋没後のピット】。
2　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…しまりややあり。細砂・粗砂混じり。径～2cm円礫をやや多く含む。
径～1cm焼土・炭化粒をやや多く含む【SH8-1埋土】。
3　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY3/1）…1より色調やや淡い。径～5mm炭化粒・径～1cm焼土塊を極めて多く含む。
下面に炭化粒・焼土が面的に広がる。
下面に炭化材出土【SH8-1焼失時の埋土】。
4　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりややあり。細砂・粗砂混じり。径～2cm円礫やや多く含む。
径～2cm黄褐色地山ブロックを少量含む【SH8-1構築時の貼床】。
5　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）…しまりやや強い。
地山に酷似するが、やや汚れた印象を受ける【SH8-2構築時の貼床】。

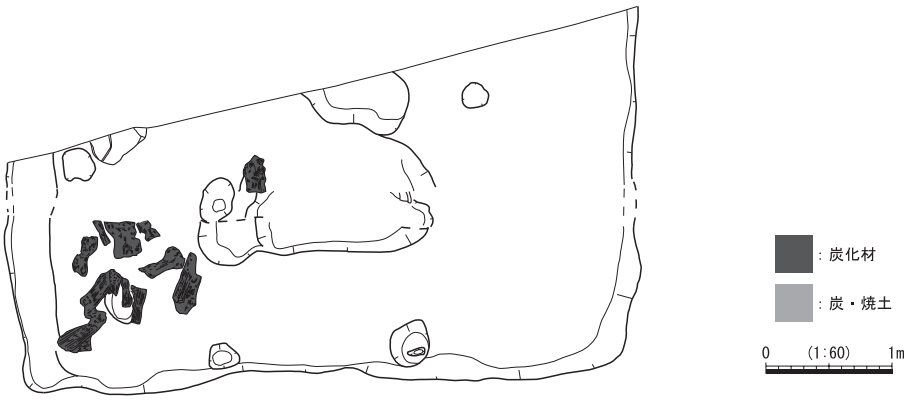
2　SH8-1　平・断面図（S=1：60）



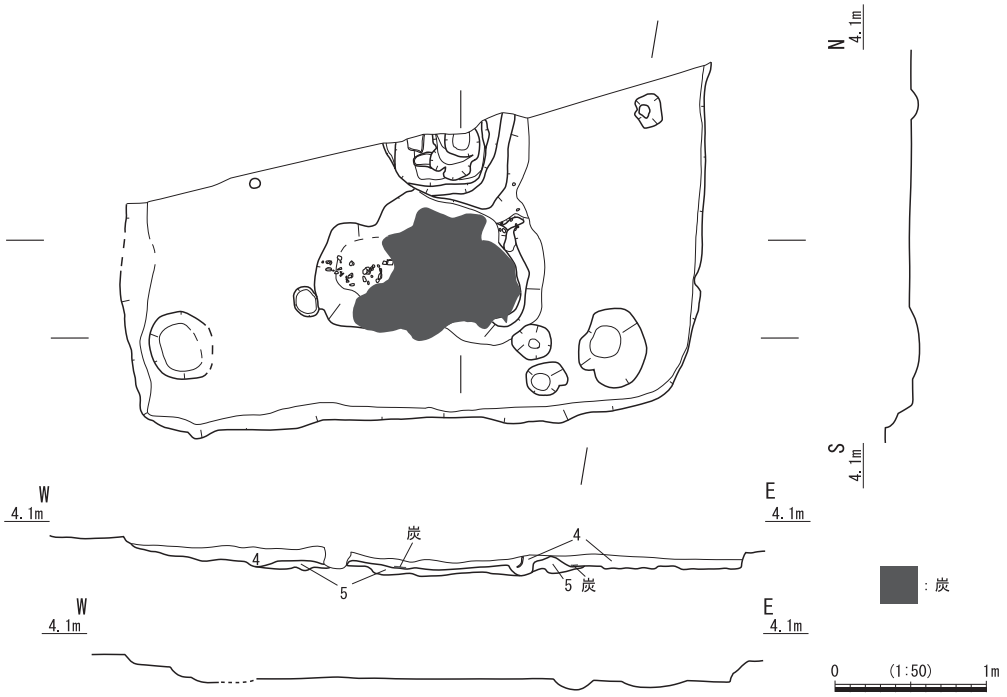
1　SH8-1a面　炭・焼土検出状況図（S=1:60）



2　SH8-1 b面　炭化材・草本類検出状況図（S=1:60）

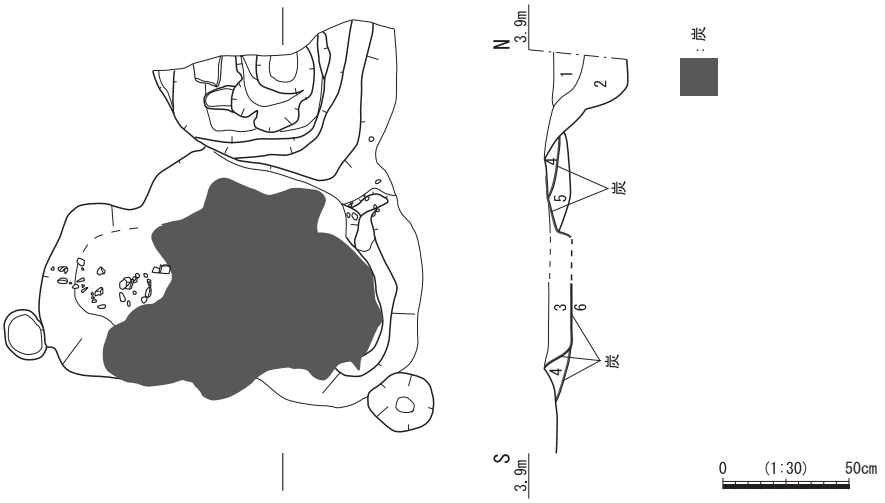


3　SH8-1c面　炭化材検出状況図（S=1:60）



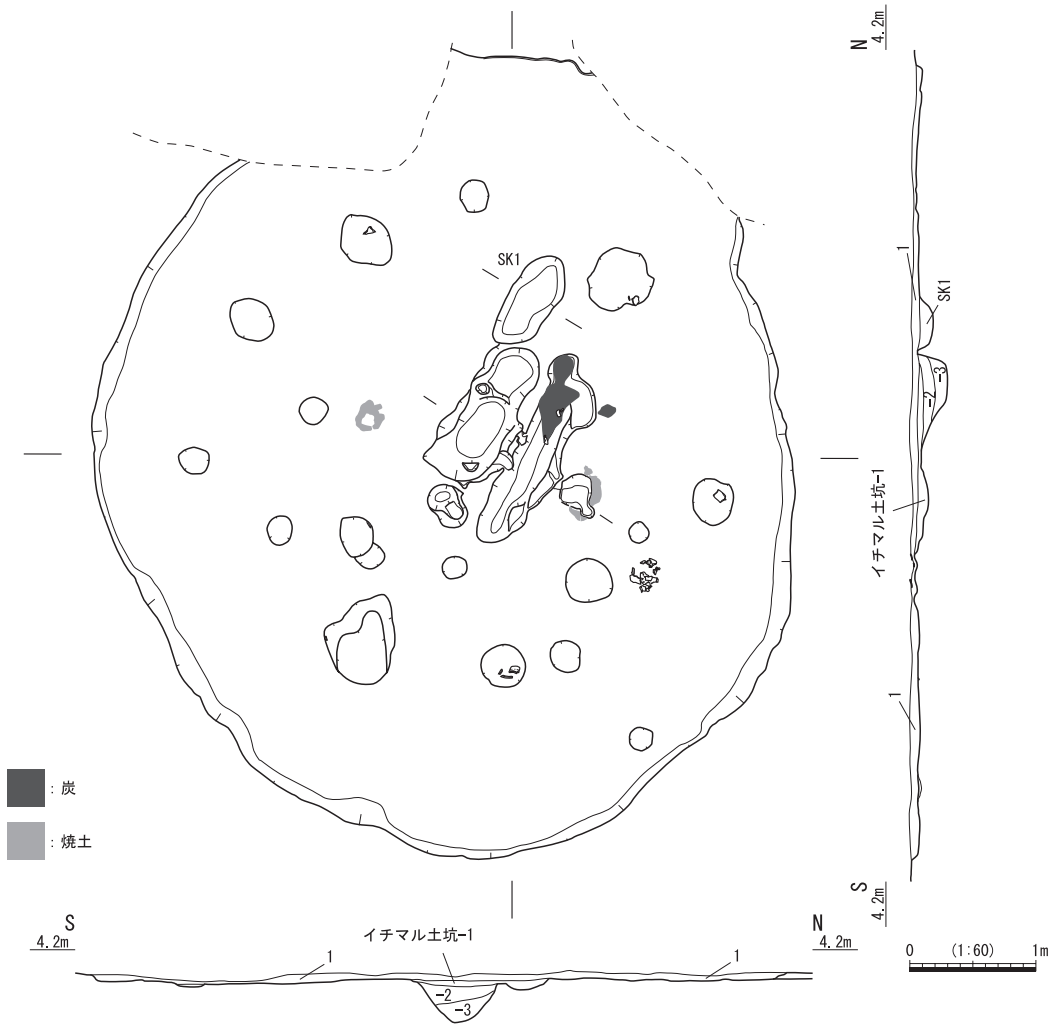
※土層番号は図版16に対応。

1　SH8-2　平・断面図（S=1:50）



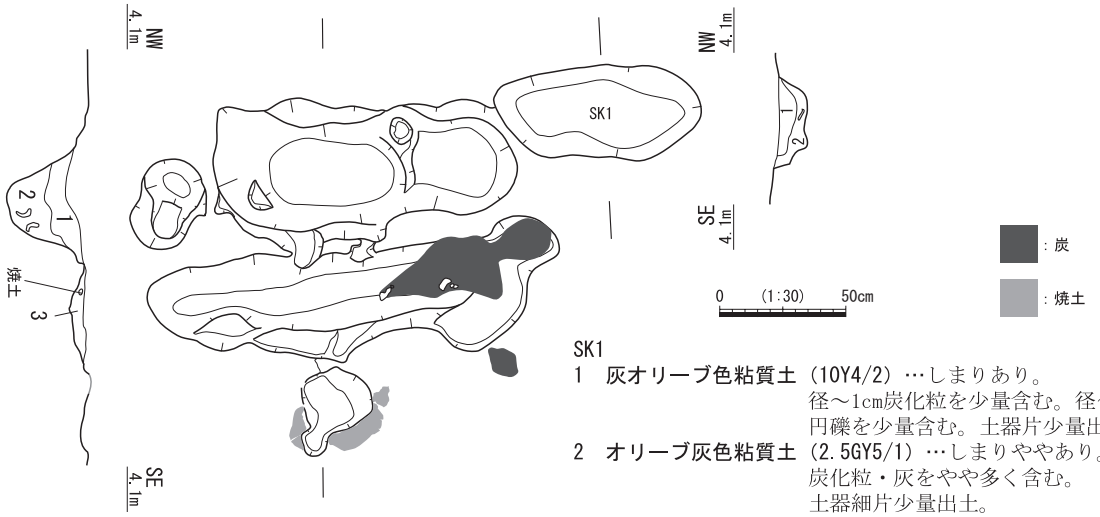
1　灰色粘質土（7.5Y5/1）…しまりややあり。径～3cm焼土塊をやや多く含む。土器細片少量出土【マル土坑埋土】。
2　オリーブ黒色粘質土（7.5Y5/1）…粘性やや強い。しまりあり。径～3cm円礫をやや多く含むが、焼土塊はみられない。
粗砂混じり。土器細片出土【マル土坑埋土】。
3　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY4/1）…しまりあり。径～3cm円礫やや多く含む。土器細片少量出土。
下面に炭層広がる【イチ土坑埋土】。
4　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）…しまり強い。5と同じ地山起源の土層と思われ、下面の薄い炭層がなければ
分層は困難【イチマル土坑土手盛土】。
5　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）…しまり強い。地山に酷似するがやや汚れた印象を受ける
【イチマル土坑土手盛土】。

2　SH8-2イチマル土坑　平・断面図（S=1:30）



1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりあり。細砂混じり。土器片やや多く出土。中央付近では稀に径～1cmの焼土塊を含む。

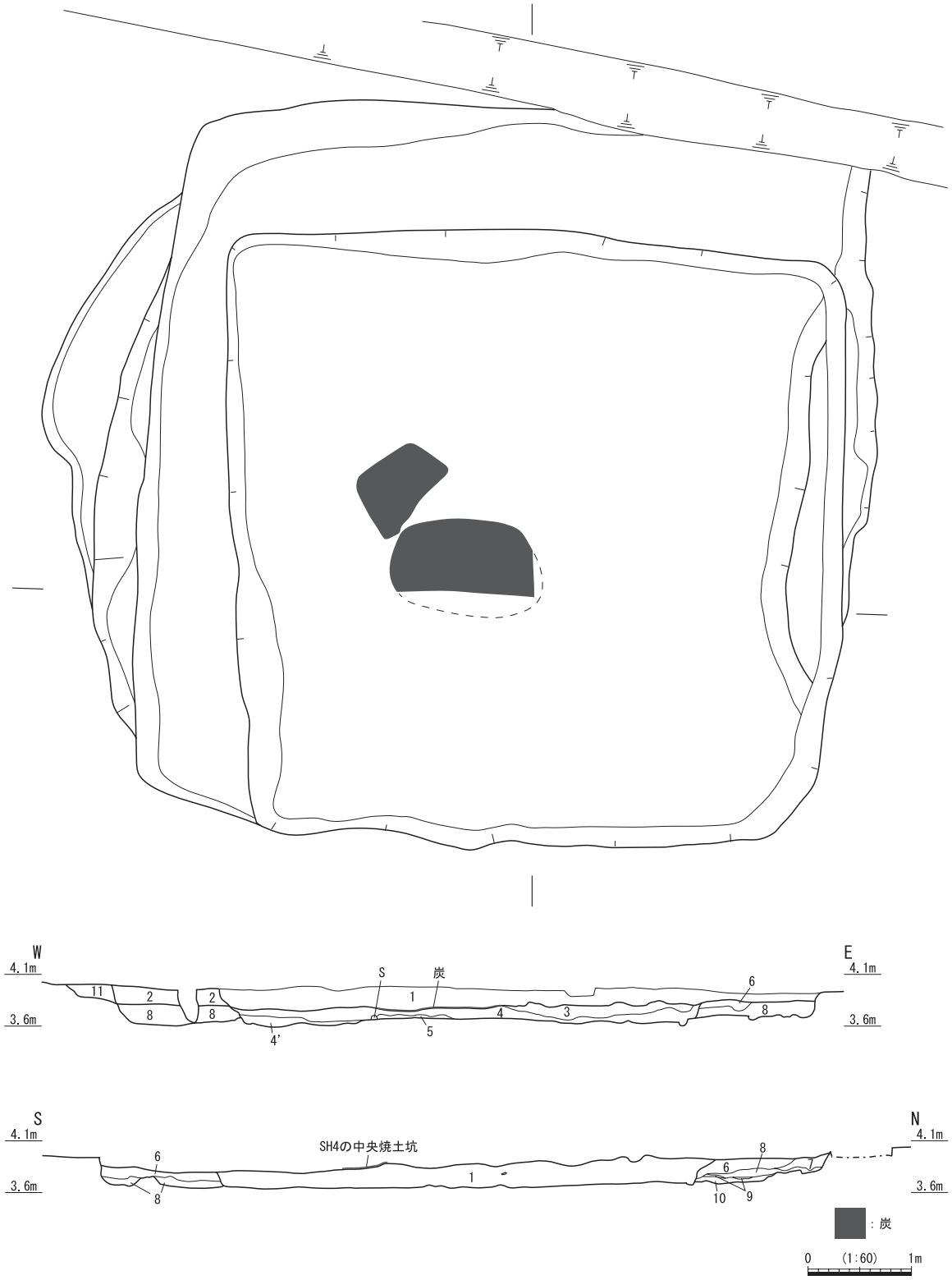
1　SH9　平・断面図（S=1：60）



SK1
1　灰オリーブ色粘質土（10Y4/2）…しまりあり。
径～1cm炭化粒を少量含む。径～2cm円礫を少量含む。土器片少量出土。
2　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）…しまりややあり。
炭化粒・灰をやや多く含む。
土器細片少量出土。

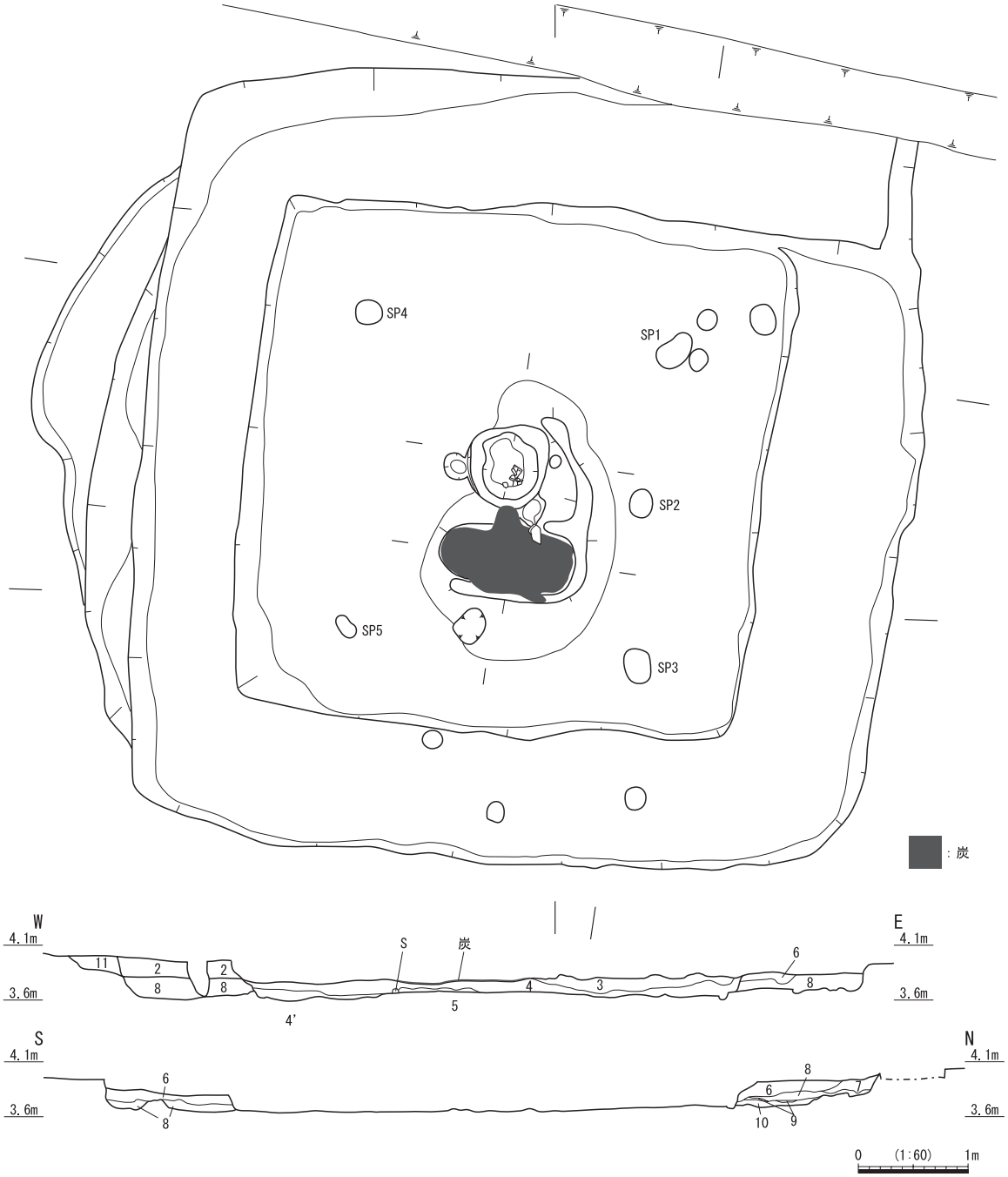
イチマル土坑
1　オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）…しまりややあり。細砂混じり。径～2cm焼土塊を少量含む【マル土坑埋土】。
2　灰オリーブ色粘質土（7.5Y4/2）…しまりややあり。細砂混じり。径～2cm焼土塊・灰をやや多く含む【マル土坑埋土】
3　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）…しまりややあり。炭化粒少量・灰が多く面的に堆積。径～2cm円礫を少量含む
【イチ土坑埋土】

2　SH9イチマル土坑　平・断面図（S=1：30）



※土層番号は図版21・23に対応。

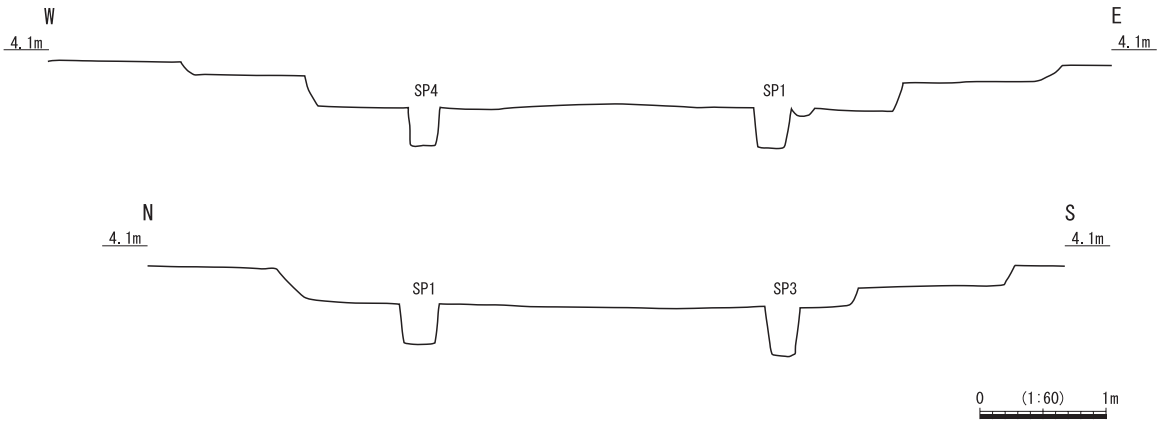
SH10・20　平・断面図（S=1：30）



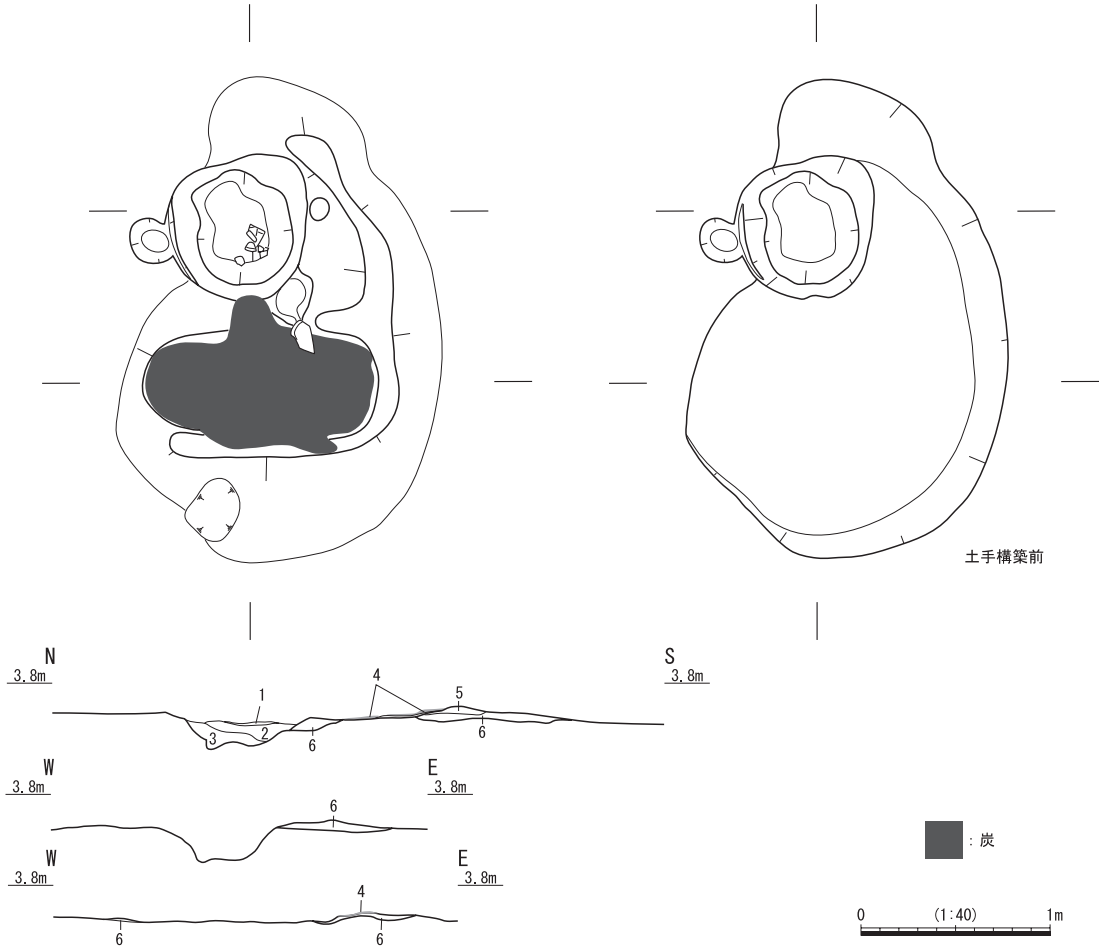
1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりややあり。径～3cm黄褐色地山をブロック状に少量含む
下面で部分的に炭層が広がる【SH10の埋土】。
2　灰色粘質土（7.5Y4/1）…しまりややあり。径～3cm黄褐色地山をブロック状に少量含む
【SH10構築時の貼床の可能性あり】。
3　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/2）…しまりあり。径～5cm円礫を少量含む。土器片少量出土
【SH10構築時の貼床の可能性あり】。
4　暗緑灰色砂礫（5G3/1）…しまりややあり。粗砂・径～1cm円礫主体。比較的均質。土器片やや多く出土
【SH10構築時の貼床の可能性あり】。
4’暗緑灰色砂礫（5G3/1）…しまりややあり。黄褐色地山をブロック状に多く含む。土器片少量出土
【SH10構築時の貼床の可能性あり】。
5　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）…しまり強い。地山に酷似するがやや汚れた感じ【SH20イチマル土坑土手盛土】。

※6～11の土層注記は図版23を参照。

SH20　平・断面図（S=1：60）

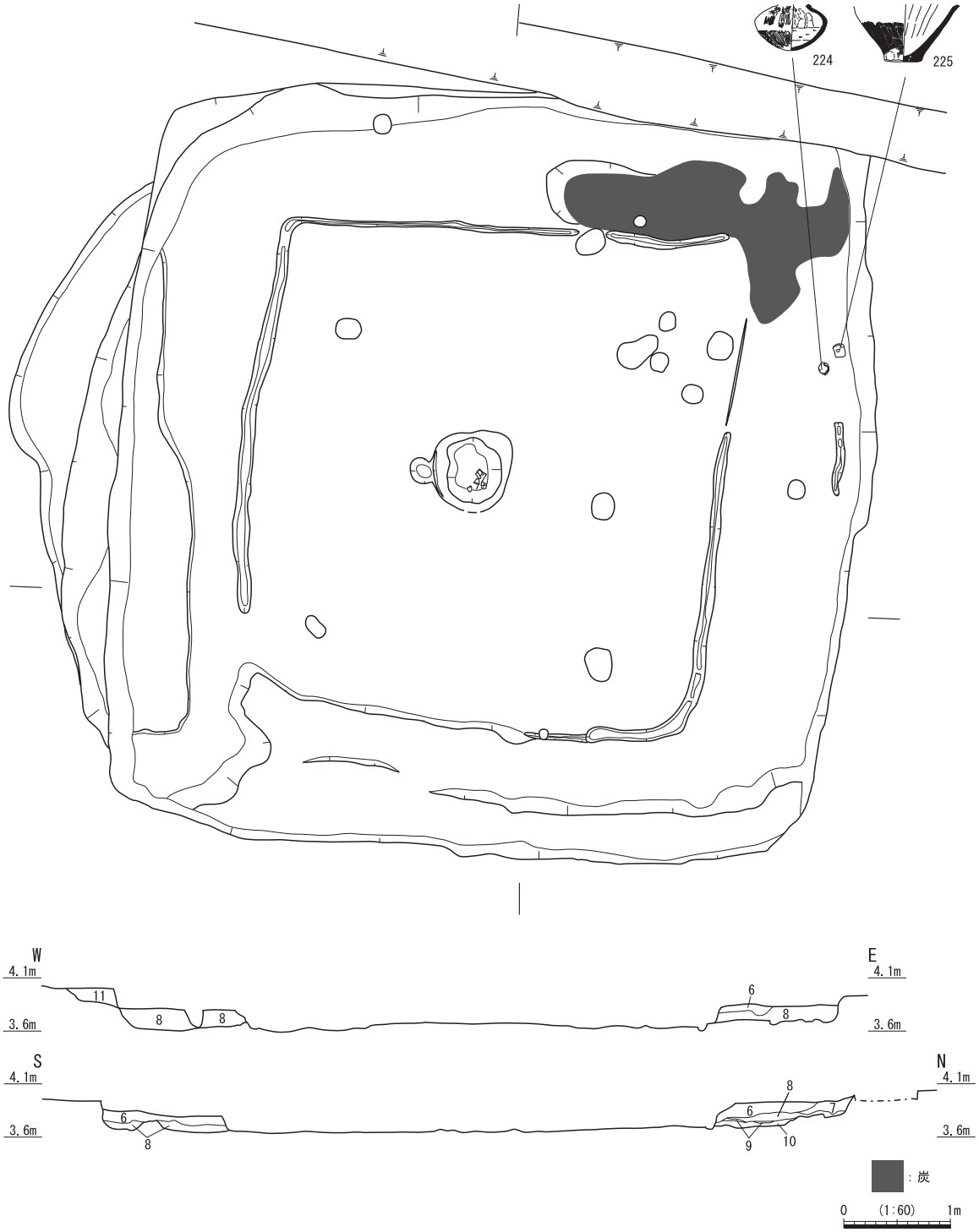


1　SH20床面　断面図（S=1:60）



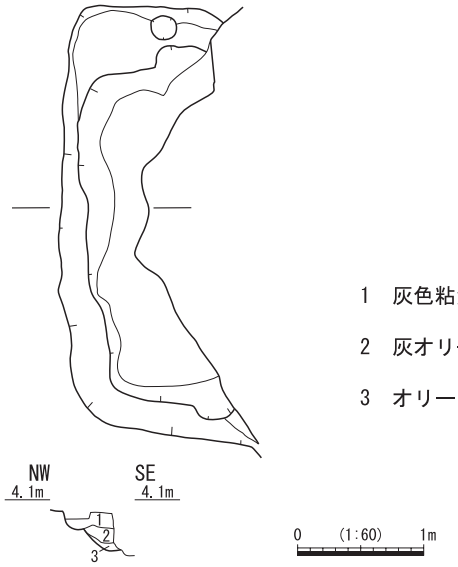
1　緑黒色粘土（5G2/1）…粘性やや強い。炭化粒・灰を多く含む【マル土坑埋土】。
2　暗緑灰色粘土（5G4/1）…粘性やや強い。しまりややあり。径～2cm黄褐色地山をブロック状に少量含む。
　　灰を多く含む。土器片少量出土【マル土坑埋土】。
3　暗緑灰色シルト（5G4/1）…微砂。しまりややあり。炭化粒・灰を多く含む。土器片少量出土【マル土坑埋土】。
4　炭層【イチ土坑の使用面】
5　オリーブ黄色粘質土（5Y6/4）…しまりやや強い。地山と酷似するがやや汚れた感じ。下面に部分的に炭層が広がる
　　【イチマル土坑土手盛土】。
6　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）…しまりあり。粘性やや強い。5よりも地山に近くみえる【イチマル土坑土手盛土】。

2　SH20イチマル土坑　平・断面図（S=1:40）



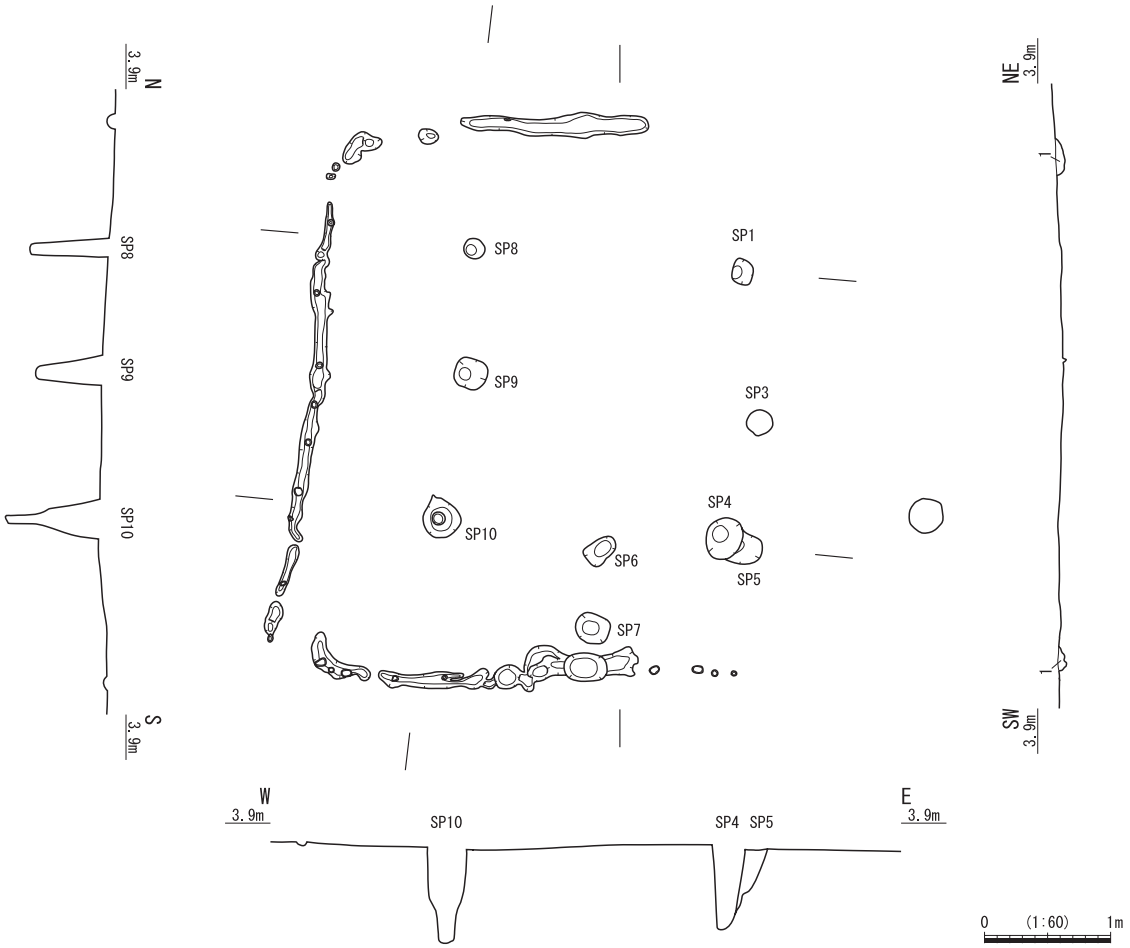
6　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）…しまりあり。径～3cm黄褐色地山をブロック状にやや多く含む。
7　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）…しまりあり。やや砂質を呈する。径～5mm円礫を含む。土器細片出土。
8　オリーブ黄色粘土（5Y6/4）…しまりやや強い。地山に酷似。
　　薄く面をなして堆積していることから作業面の可能性あり。
9　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）…粘性ややあり。しまりやや強い。
10　オリーブ黄色粘土（5Y6/4）…8に近い。

SH20ベッド状遺構構築以前　平・断面図（S=1:60）



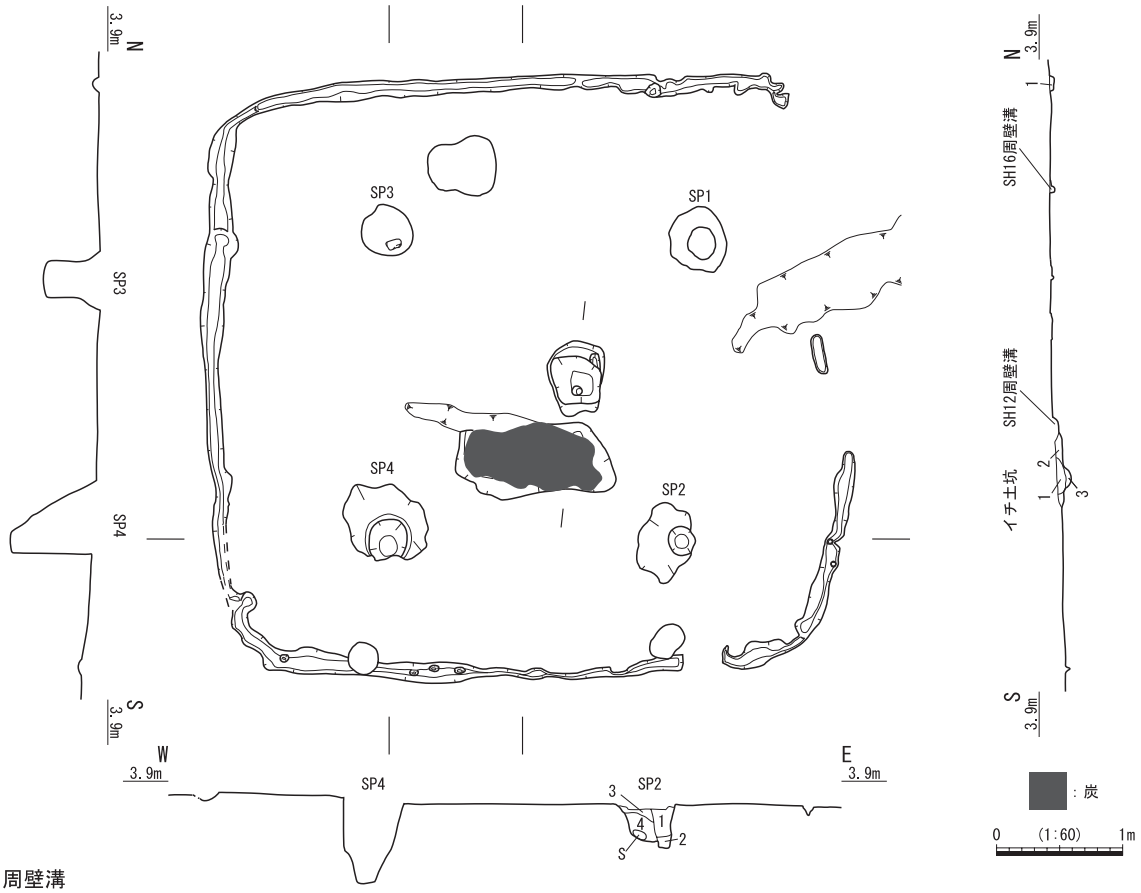
1　**灰色粘質土**（7.5Y5/1）…しまりあり。径～10cm黄褐色地山をブロック状に多く含む。
2　**灰オリーブ色粘質土**（7.5Y5/3）…しまりあり。径～10cm褐色地山をブロック状に多く含む。
3　**オリーブ黒色砂混じり粘質土**（7.5Y3/1）…しまりややあり。細砂混じり。径～1cm円礫を少量含む。

1　SH11　平・断面図（S=1：60）



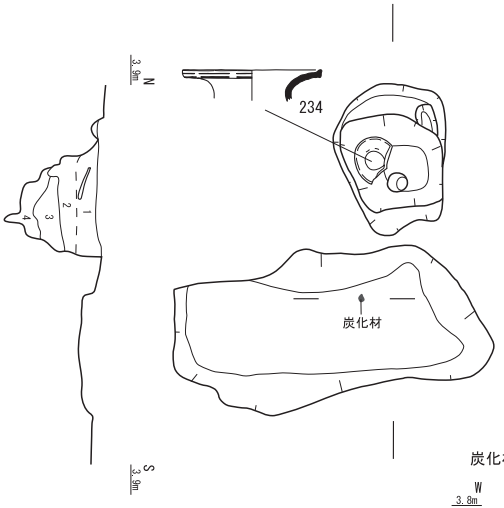
1　**灰色粘質土**（5Y4/1）…しまり・粘性やや弱い。やや砂質を呈する。黄褐色地山をブロック状に含む。炭粒を含む。

2　SH12　平・断面図（S=1：60）

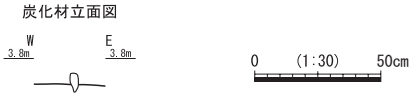


周壁溝
1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）…粘性・しまりやや弱い。黄褐色地山をブロック状に多く含む。
SP2
1　褐灰色粘質土（10YR4/1）…粘性やや強い。しまりやや弱い。やや細砂混じり【柱痕】。
2　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）…粘性やや強い。しまりやや弱い。上半程粘性強い【柱痕】。
3　褐灰色粘質土（10YR5/1）…粘性やや強い。しまりやや弱い。やや砂質を呈する。
　　黄褐色地山をブロック状に含む【掘方埋土】。
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）…粘性やや強い。しまりやや弱い。やや砂質を呈する。
　　黄灰色・褐色地山を互層状に含み、東側へ傾斜して堆積。炭化粒を稀に含む【掘方埋土】

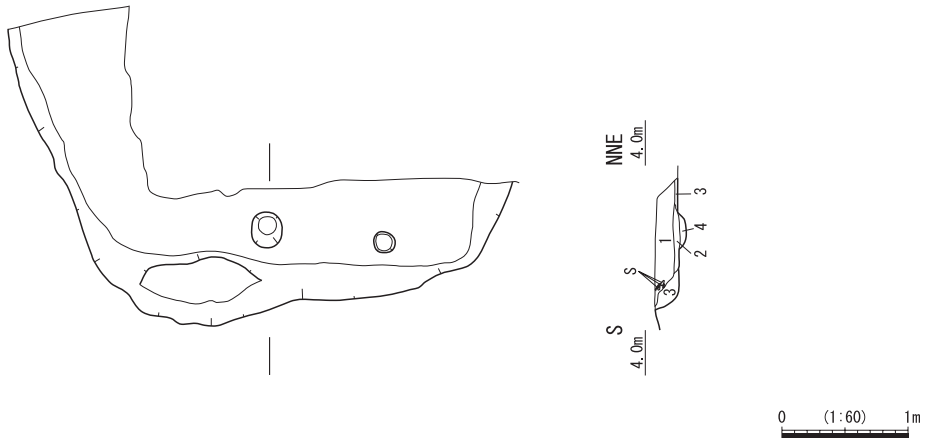
1　SH13　平・断面図（S=1：60）



イチマル土坑
1　褐灰色粘質土（10YR5/1）
　…粘性やや強い。しまりやや弱い。
　　黄褐色地山をブロック状にごく少量含む【マル土坑埋土】。
2　灰色粘質土（5Y4/1）
　…粘性やや強い。しまりやや弱い。やや砂質を呈する。
　　黄褐色地山をブロック状に多く含む。
　　炭化粒をやや多く含む【マル土坑埋土】。
3　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
　…粘性強い。しまり強い。炭化粒を含む。
　　焼土塊を稀に含む【マル土坑埋土】。
4　褐灰色粘質土（10YR5/1）
　…粘性やや強い。しまりやや弱い。
　　黄褐色地山をブロック状に多く含む。
　　炭化粒を含む【マル土坑埋土】。



2　SH13イチマル土坑　平・断面図（S=1：30）

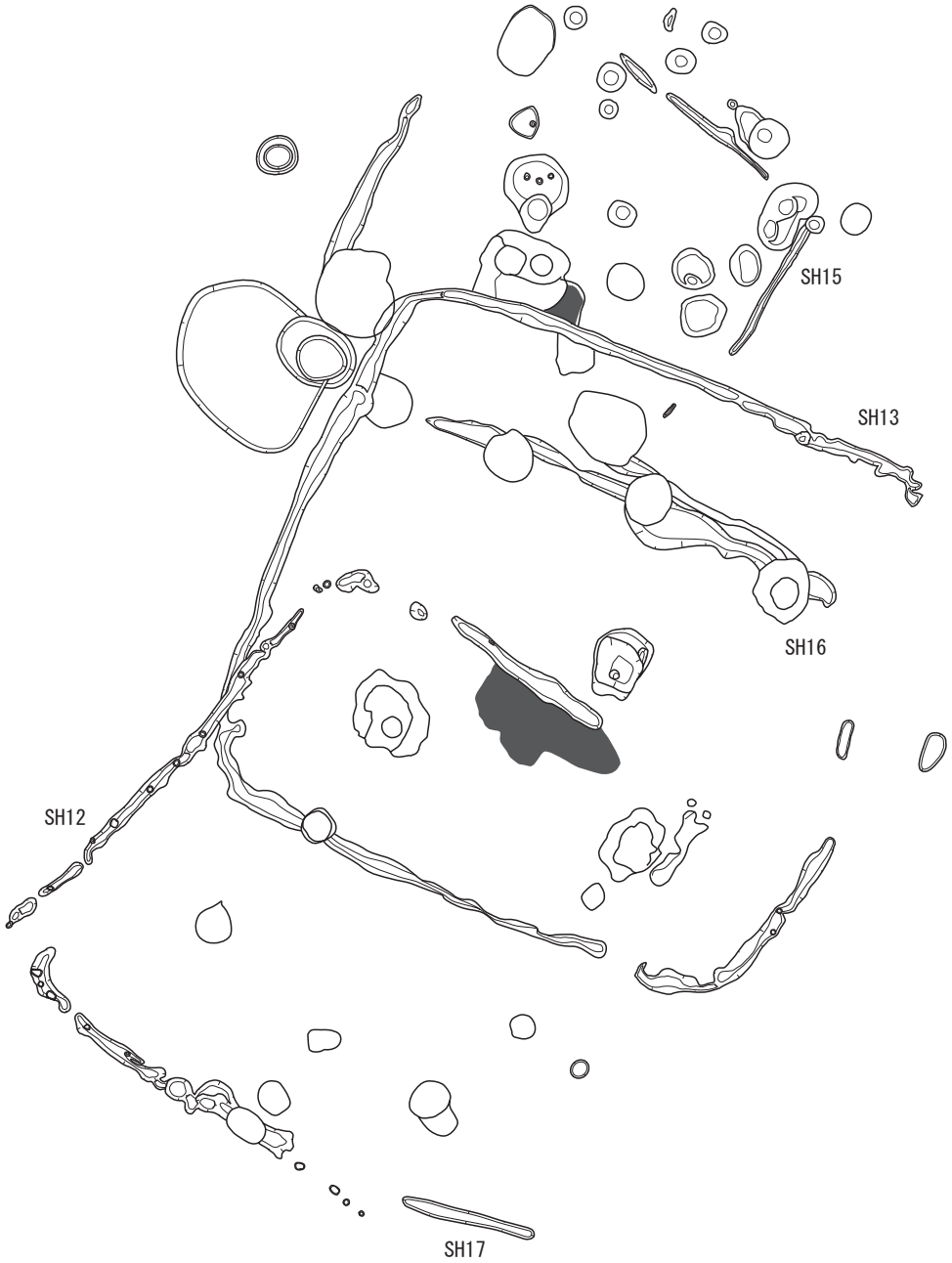


1　灰オリーブ粘質土（7.5Y4/2）…しまりあり。径～5cm円礫を少量含む。
2　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…しまりややあり。径～2cm円礫を少量含む。
3　暗緑灰色粘質土（5G3/1）…しまり強い。褐色・黄褐色地山をブロック状に多く含む
【貼床の可能性あり】。
4　暗オリーブ色粘質土（5Y5/2）…粘性ややあり。しまりあり。

1　SH14　平・断面図（S=1：60）

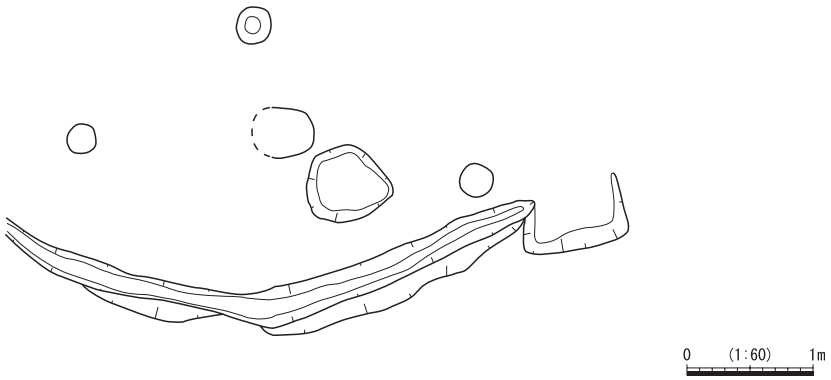
1　灰色砂質土（N5/）…しまり弱い。粗砂主体。径～2cm炭化粒をやや含む。下面に炭化材残存。

2　SH18　平・断面図（S=1：60）

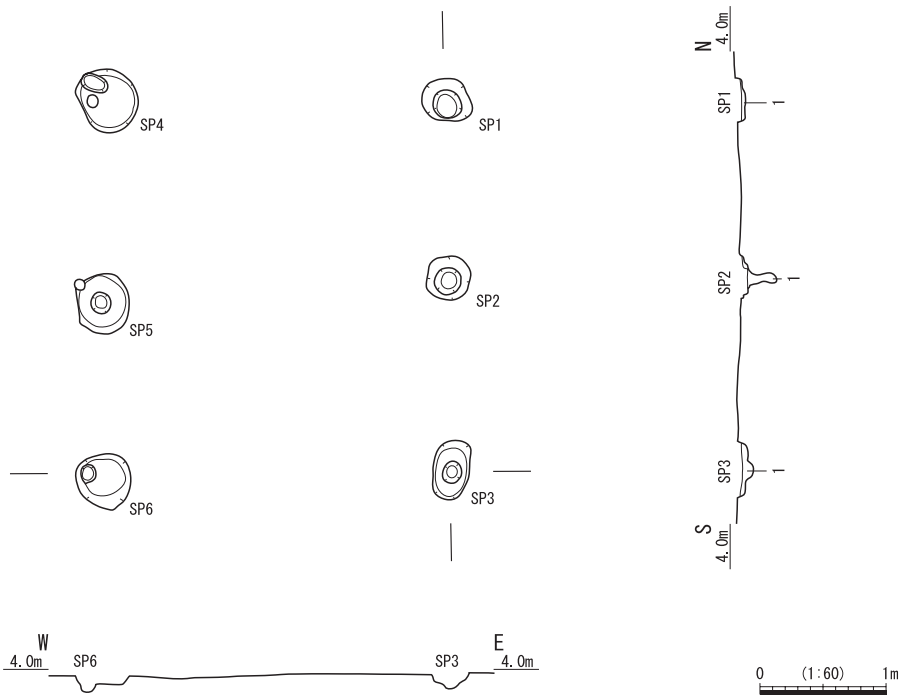


0　(1:60)　1m

SH12・13・15・16・17　平面図（S=1:60）

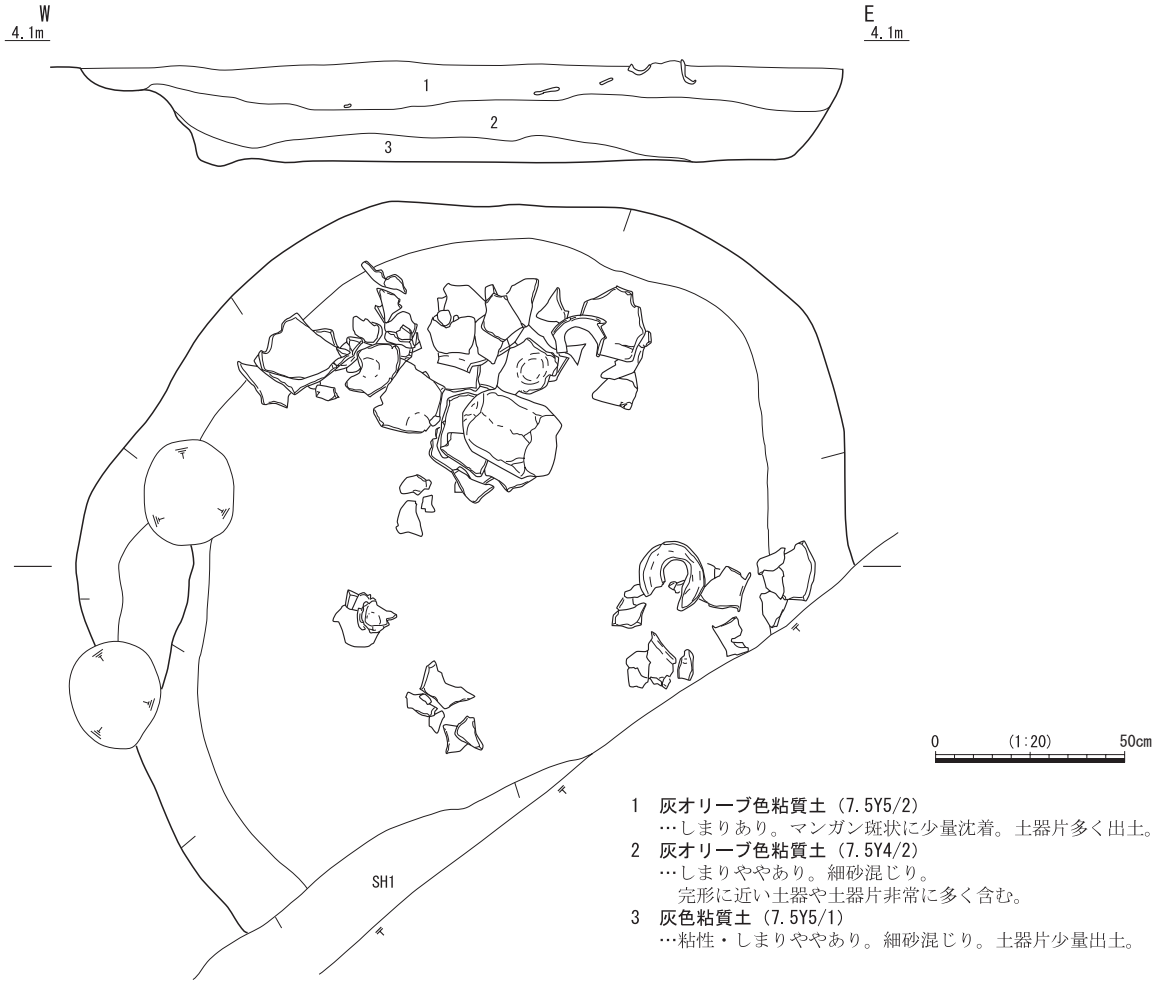


1　SH19　平面図（S=1：60）

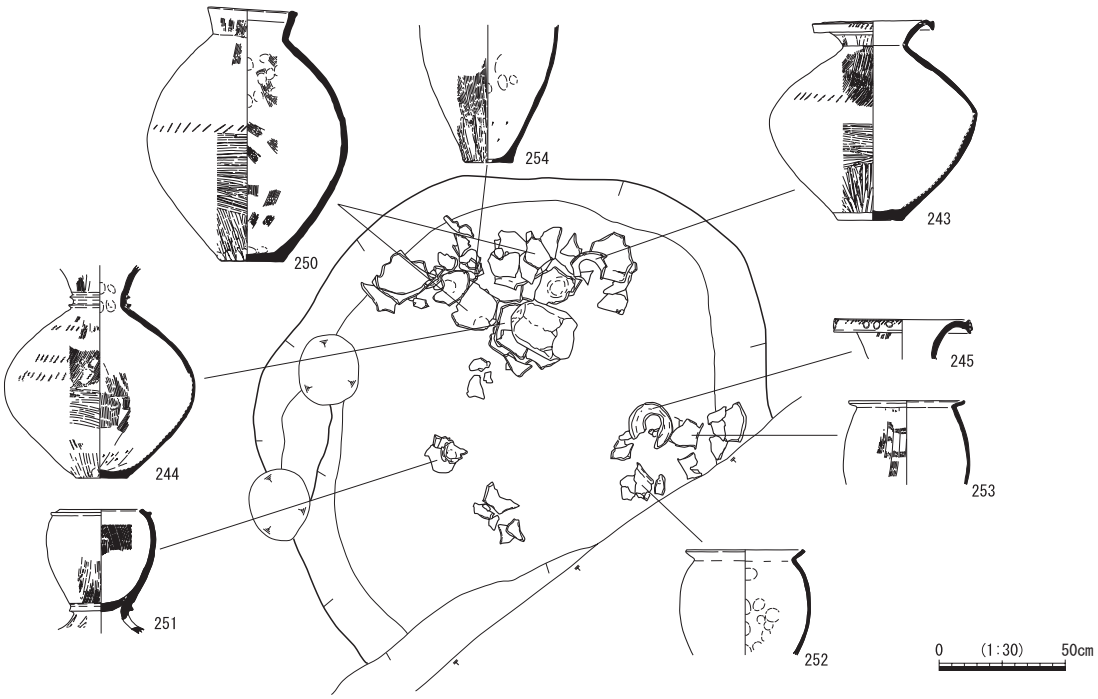


1　灰色砂質土（7.5Y4/1）…しまり弱い。粗砂主体。比較的均質。

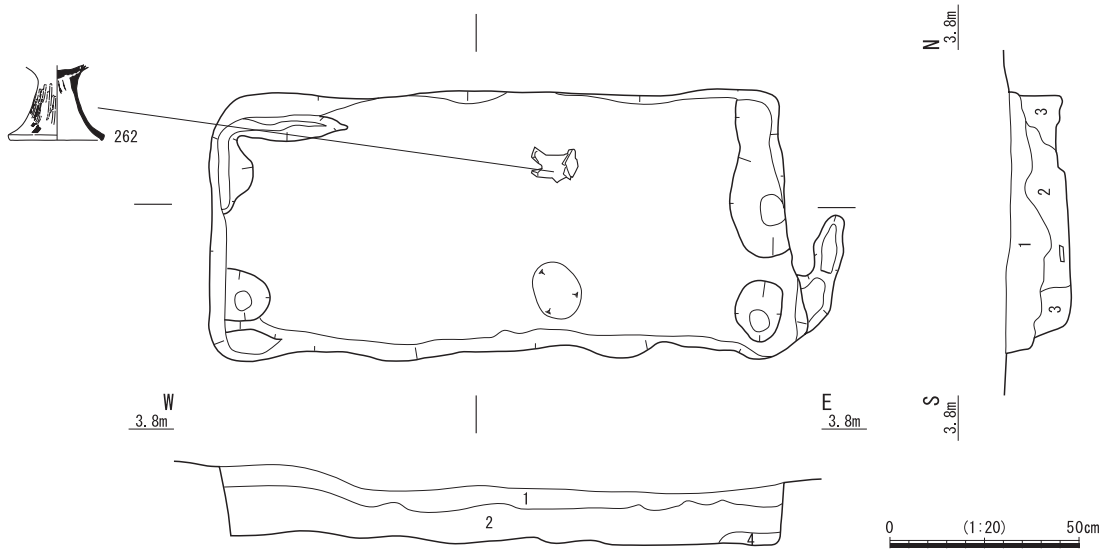
2　SB1　平・断面図（S=1：60）



1　SK6　平・断面図（S=1：20）

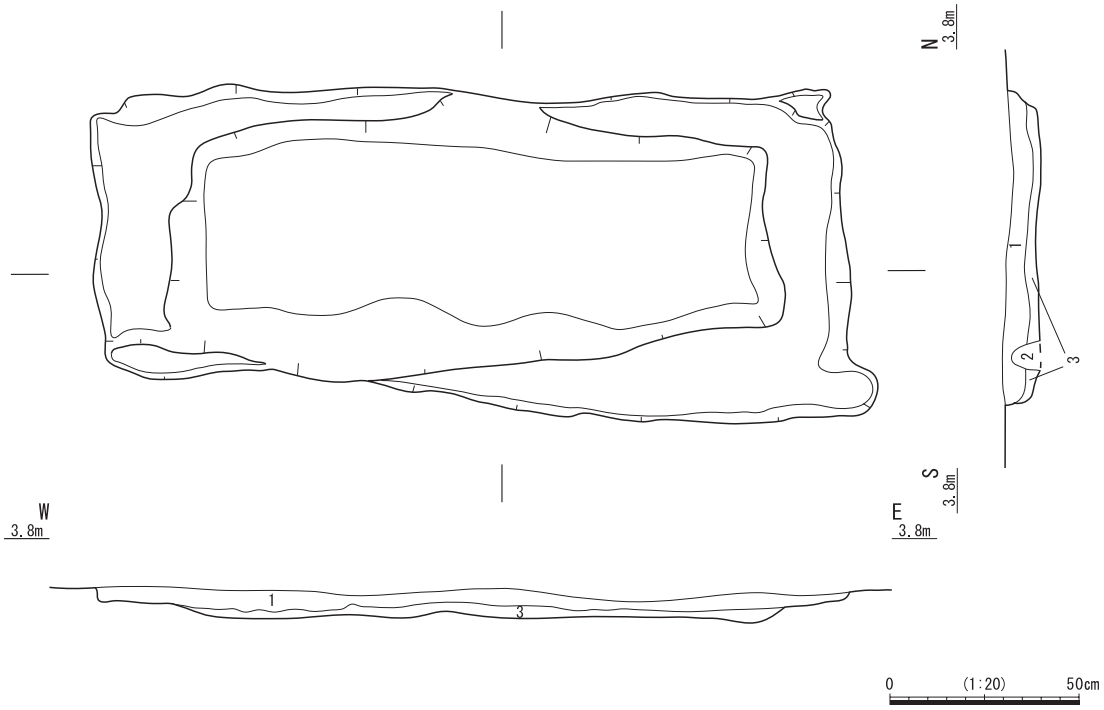


2　SK6　土器出土状況図（S=1：30）



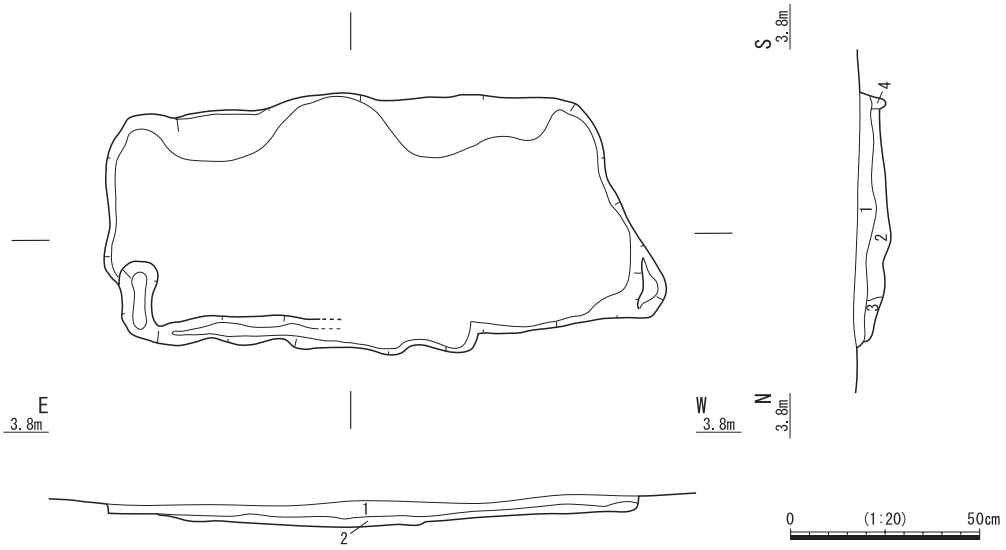
1　灰白色砂質土（10YR7/1）…粗砂主体。褐色・黄褐色地山をブロック状に稀に含む。
2　灰色砂質土（5Y6/1）…粗砂主体。褐色・黄褐色地山をブロック状に含む。
3　灰色砂質土（7.5Y6/1）…粗砂主体。径～5㎜黄褐色地山をブロック状に含む【埋戻し土の可能性あり】。
4　灰色砂質土（7.5Y6/1）…3に近いが、ブロック状の地山を含まない。

1　ST1　平・断面図（S=1：20）



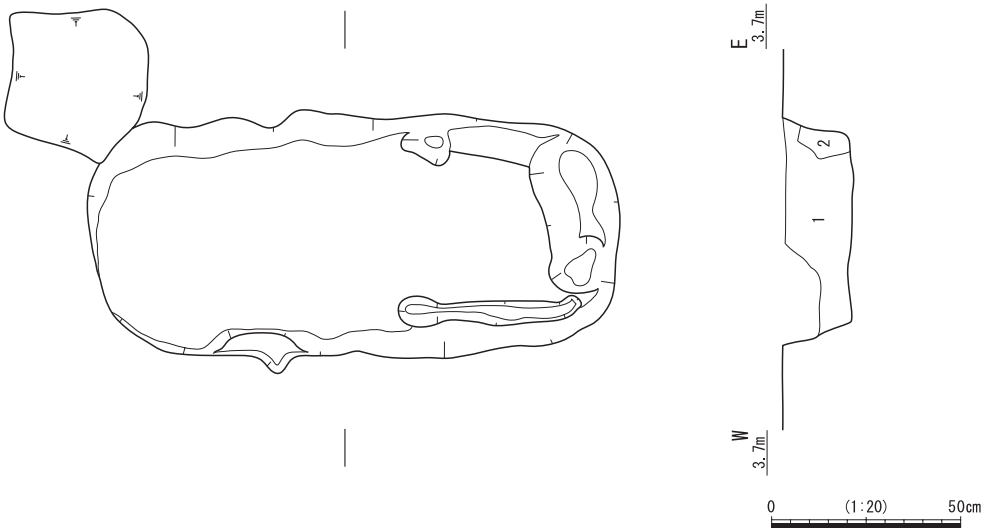
1　灰白色砂質土（7.5YR7/1）…粗砂主体。褐色地山をブロック状に稀に含む。
2　褐灰色砂質土（10YR6/1）…粗砂主体。下方ほど灰色強い。
3　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）…粗砂主体。地山ブロックを含まない。

2　ST2　平・断面図（S=1：20）



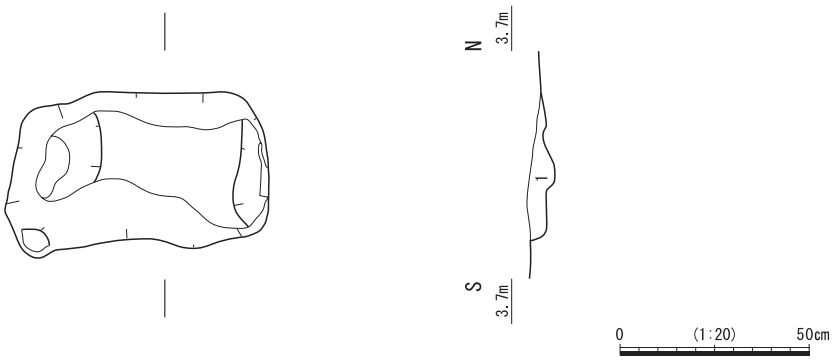
1　灰白色砂質土（10YR7/1）…粗砂主体。径1cm大円礫を稀に、褐色地山をブロック状に極稀に含む。
2　褐灰色砂質土（7.5Y6/1）…褐色地山をブロック状に多く含む。
3　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）…黄褐色地山をブロック状に含む。
4　灰色砂質土（5Y5/1）…地山ブロックを含まない。

1　ST3　平・断面図（S=1：20）



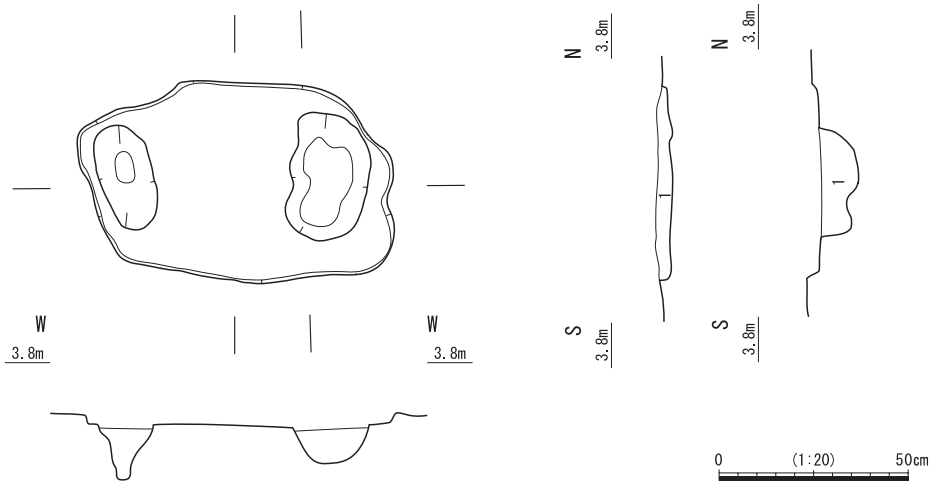
1　灰白色砂質土（5Y7/1）…粗砂主体。比較的均質ではあるが、径～5mm黄褐色地山をブロック状に極稀に含む。
2　灰色砂質土（5Y6/1）…砂粒は2よりもやや細粒。層の上方で黄褐色地山ブロックをやや集中して含む。

2　ST4　平・断面図（S=1：20）



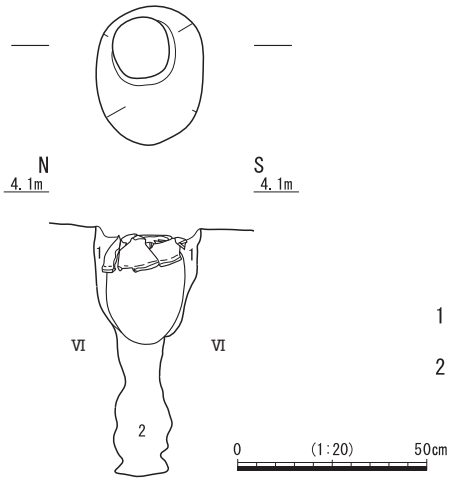
1　灰白色砂質土（7.5YR7/1）…粗砂主体。褐色地山をブロック状に稀に含む。

1　ST5　平・断面図（S=1：20）



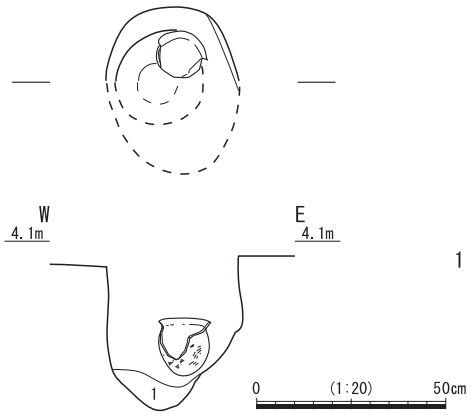
1　灰白色砂質土（7.5YR7/1）…粗砂主体。褐色地山をブロック状に稀に含む。
2　灰白色砂質土（7.5YR7/1）…1に近いが、地山ブロックを含む。

2　ST6　平・断面図（S=1：20）



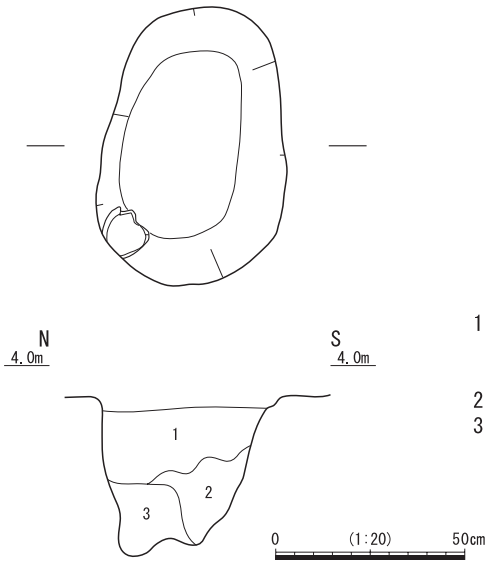
1　灰色粘質土（7.5Y4/1）…粘性・しまりあり。径～3cm黄褐色地山をブロック状に少量含む。256・257の埋土。
2　オリーブ黒色粘質土（10Y3/2）…粘性・しまりあり。比較的均質。ややシルト質。

1　SP25　平・断面図（S=1：20）



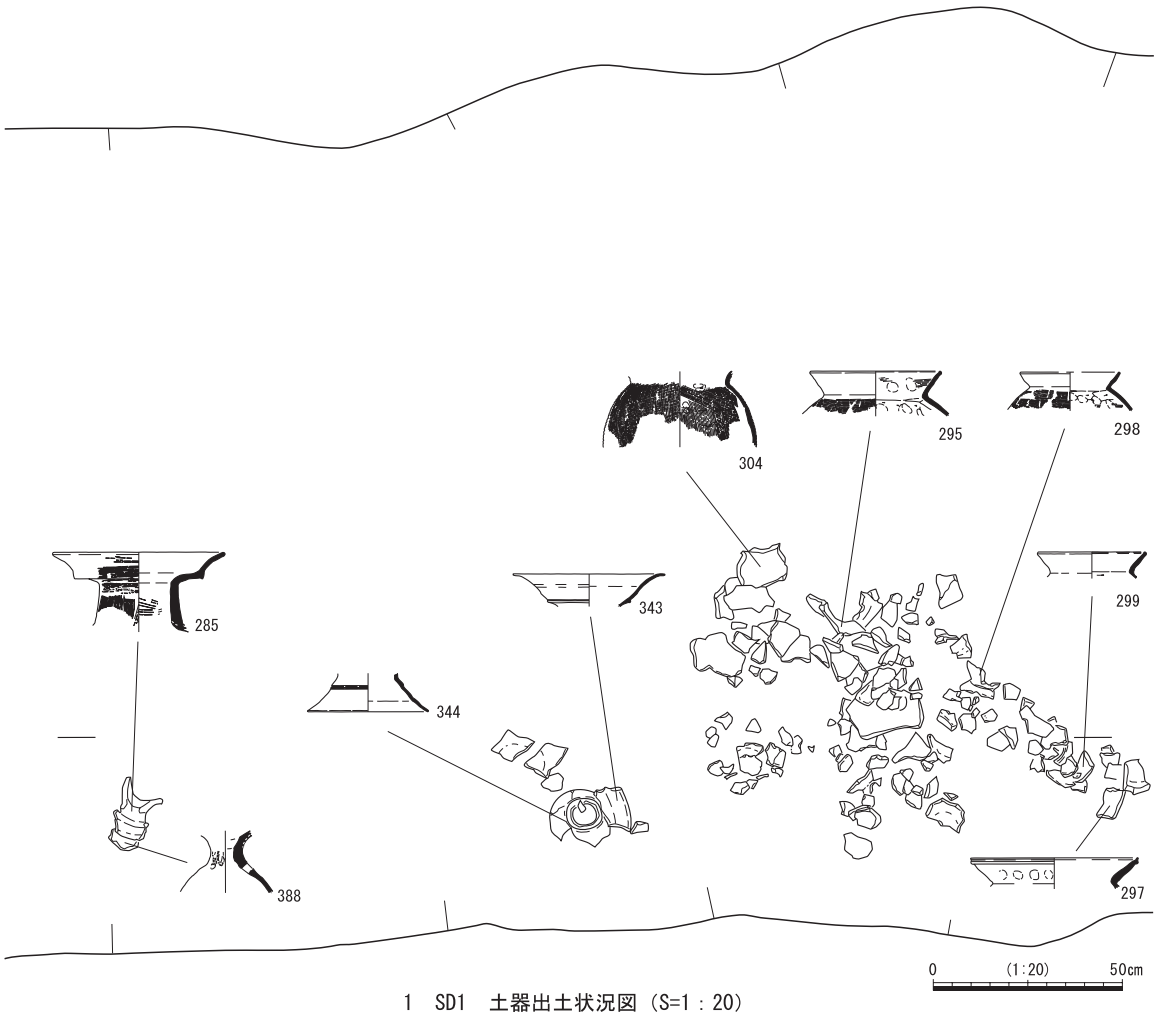
1　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）…粘性やや強い。しまりやや弱い。上半に黄褐色地山をブロック状に多く含む。炭化粒を極稀に含む。

2　SP82　平・断面図（S=1：20）

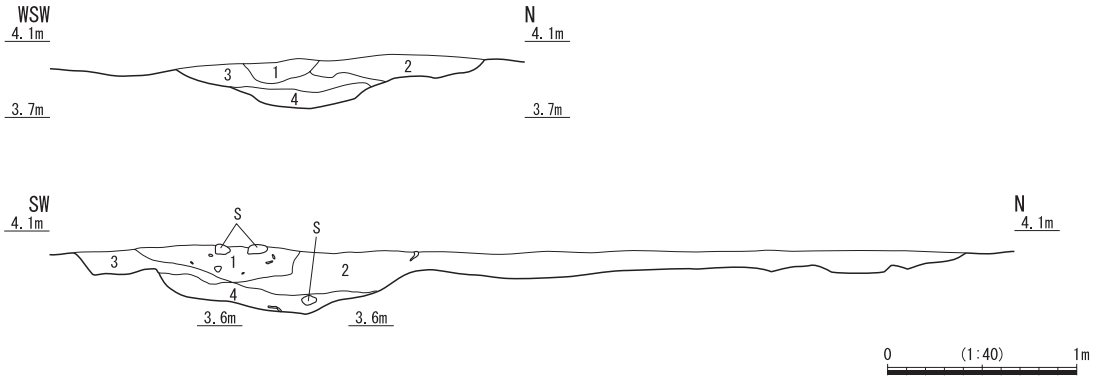


1　暗オリーブ色粘質土（7.5Y4/3）…しまりあり。鉄分沈着。径～10cm黄褐色地山をブロック状に少量含む。
2　暗緑灰色砂質土（5G4/1）…しまり弱い。粗砂主体。
3　にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）…粘性・しまりあり。1よりもやや大きい地山ブロックを極めて多く含む。

3　SP97　平・断面図（S=1：20）

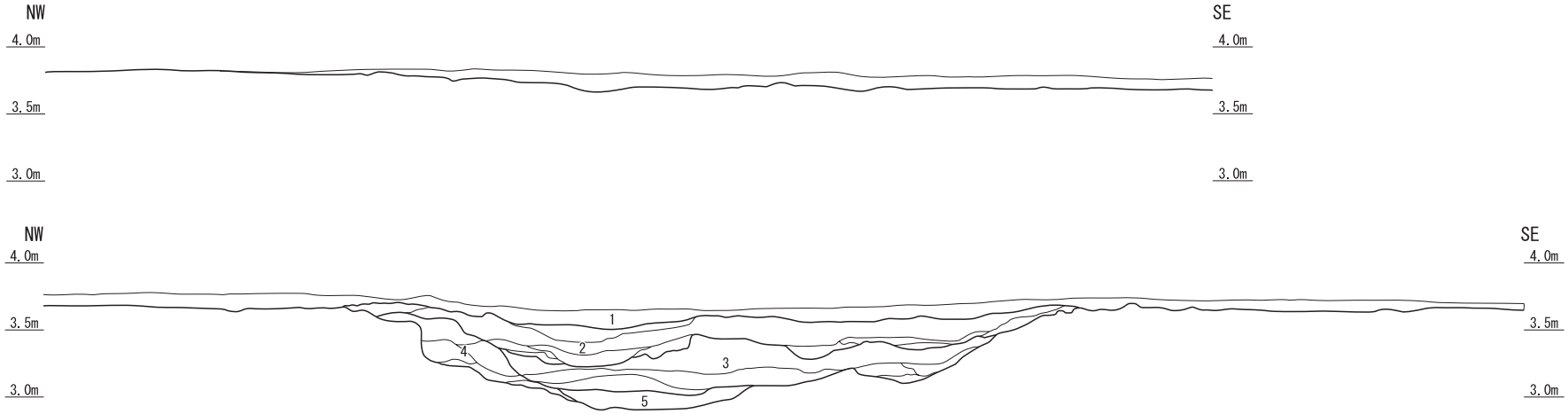


1　SD1　土器出土状況図（S=1：20）

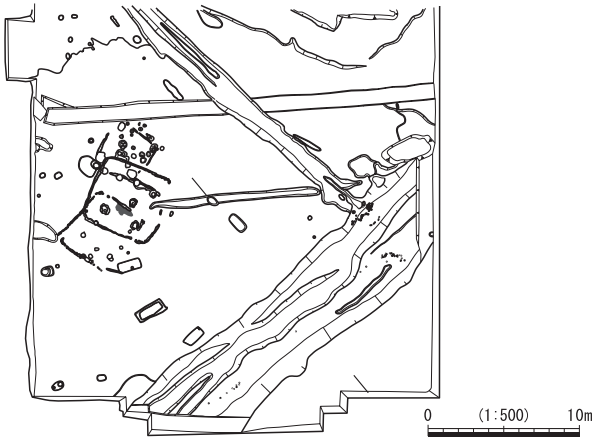


1　青灰色砂礫（5B5/1）…粗砂、径～1cm円礫主体。しまりあり。土器片多く出土。
2　オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）…粘性・しまりあり。径～2cm円礫を少量含む。土器片多く出土。
3　灰色粘質土（10Y4/1）…粘性・しまりあり。土器片多く出土（土器溜まりあり）。
4　緑灰色砂礫（5G6/1）…粗砂・径～2cm円礫主体。上面土壌化。土器片やや多く出土。

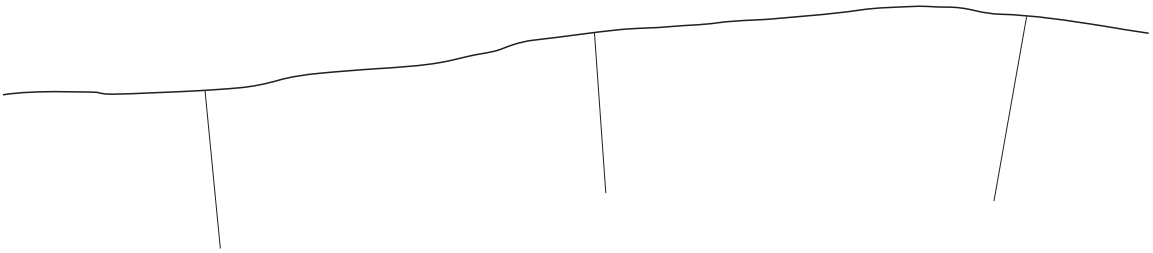
2　SD1　断面図（S=1：40）

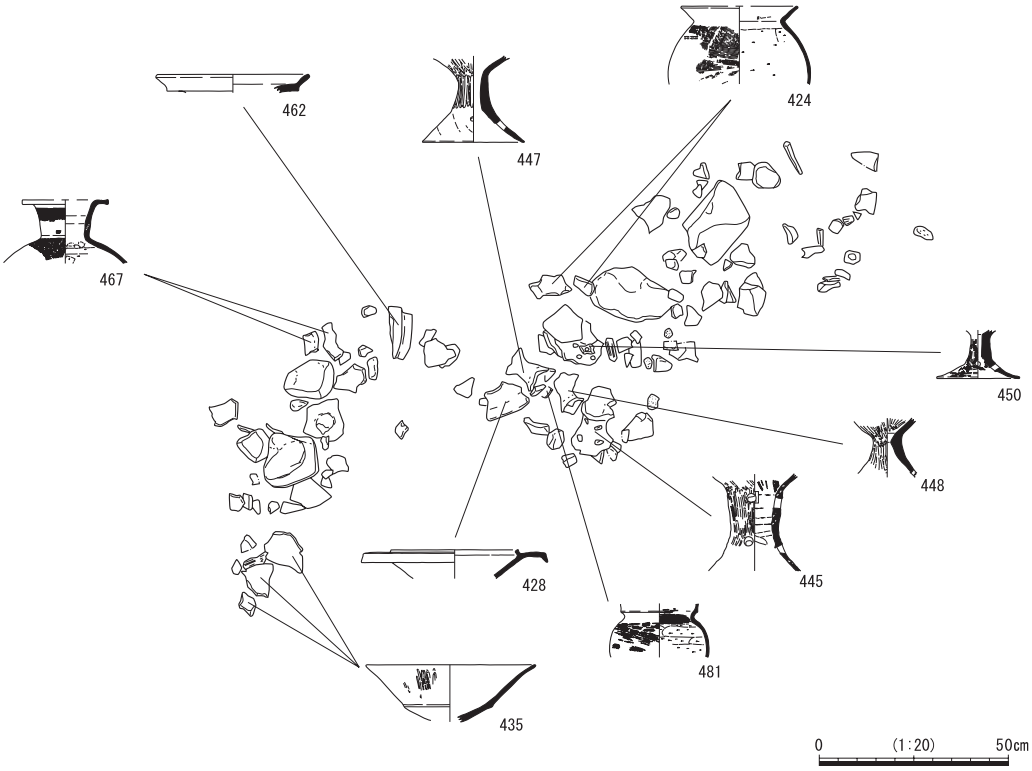


SR1 断面図（S=1：50）



1　緑灰色粘土（5G5/1）…粘性・しまりやや強い。径～5mm円礫を少量含む。均質。
　　土器細片少量出土【湿地状堆積】。
2　黒色粘土（2.5GY2/1）…粘性・しまりかなり強い。均質。土器片多く出土【湿地状堆積】。
3　暗オリーブ灰色砂礫（2.5GY4/1）…粗砂・径～2cm円礫主体。しまりややあり。
　　部分的に径～3cm黄褐色地山をブロック状に巻き上げ【洪水砂】。
4　灰色シルト（7.5Y5/1）…しまり強い。径～2cm円礫を少量含む。均質。
5　灰色砂質土（7.5Y6/1）…しまり弱い。粗砂主体。径～5cm円礫を多く含む。
　　灰白色（7.5Y7/1）粘土がレンズ状に堆積。

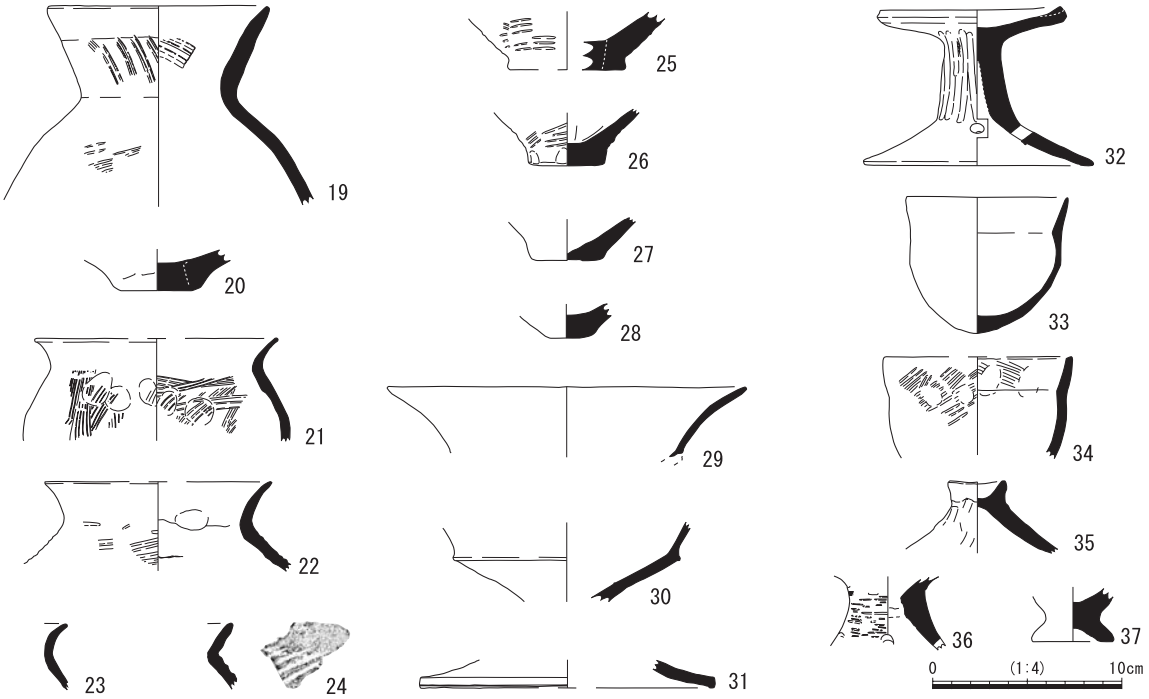




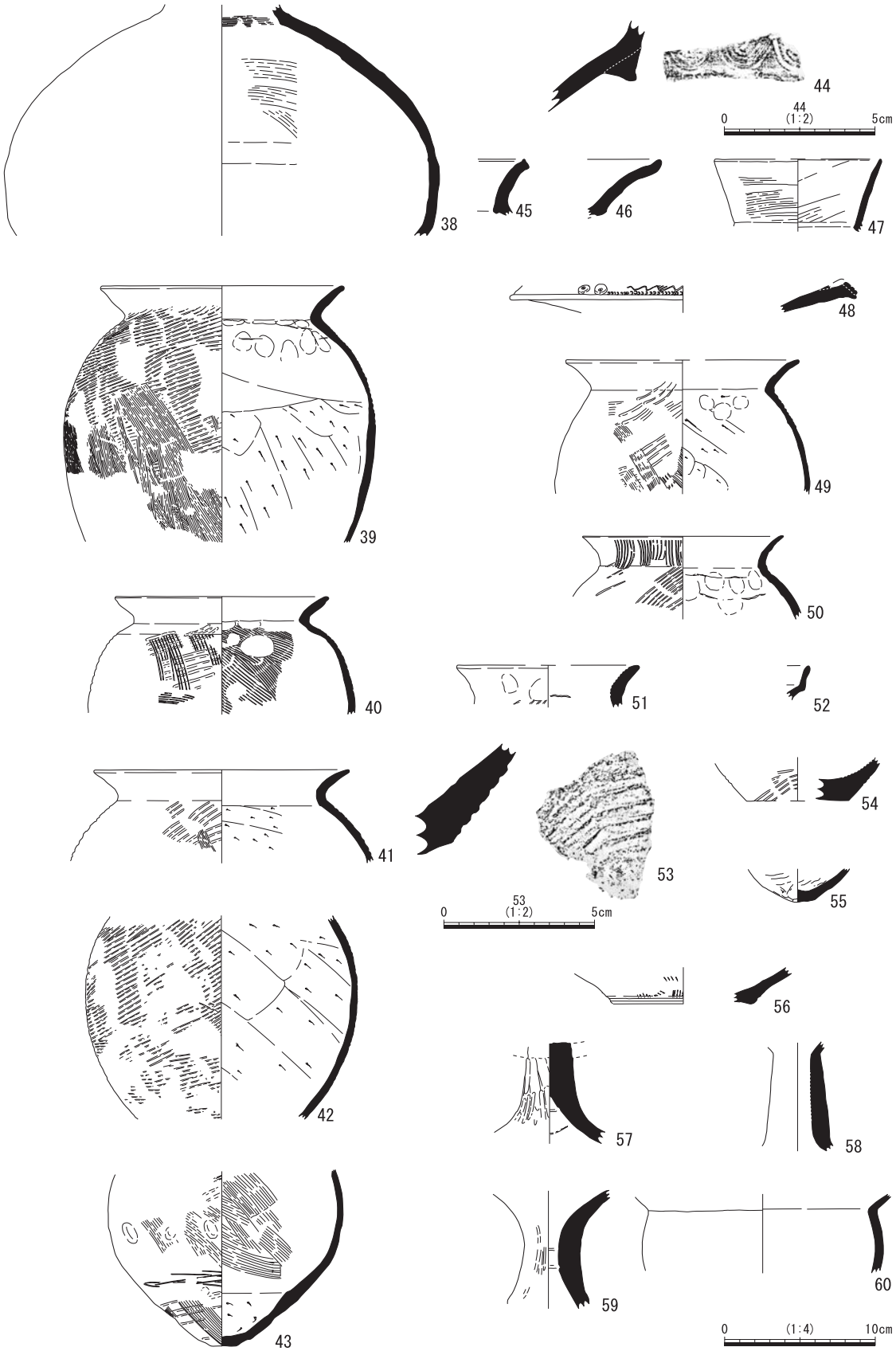
SR1　土器出土状況図（S=1：20）

SR1・SD1取り付き付近平面図（S=1：40）

1　SH1-1出土土器（1～18）

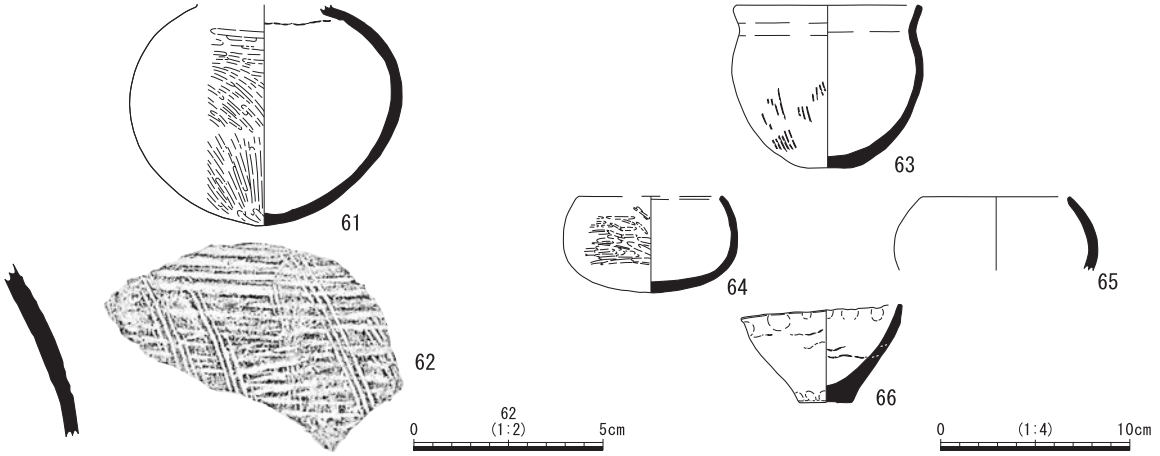


2　SH1-2出土土器（19～37）



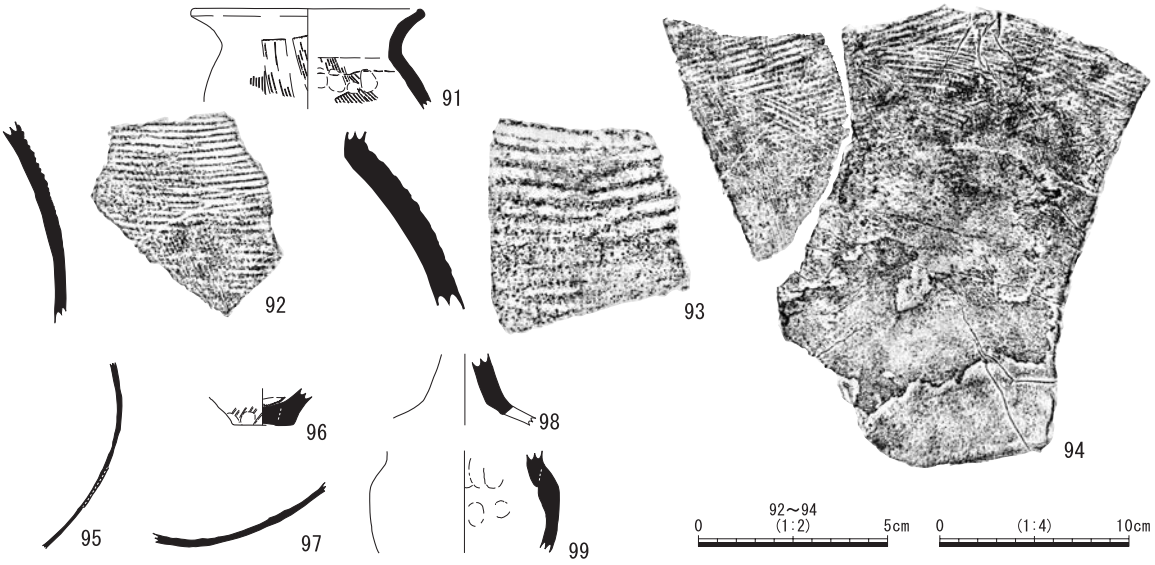
SH2出土土器①（38～60）

図版40　遺物

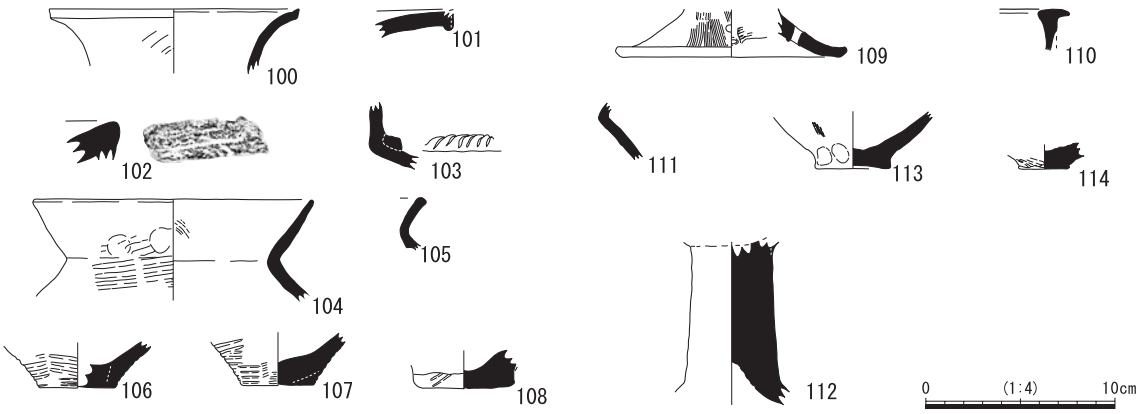


1　SH2出土土器②（61～66）

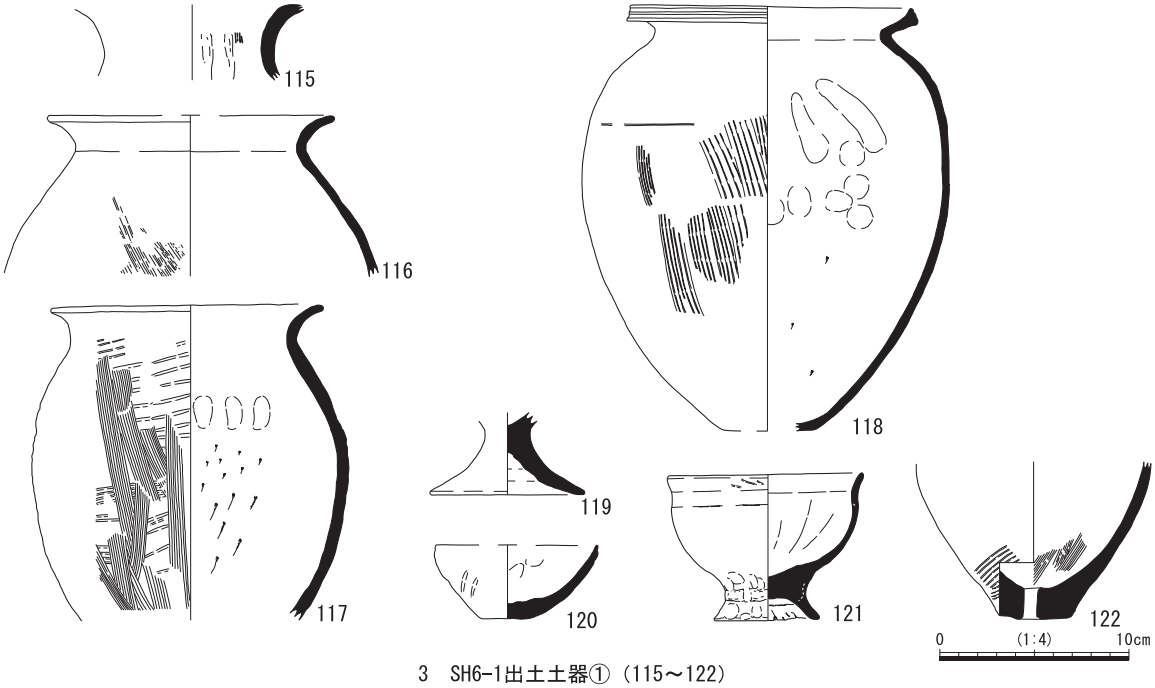
2　SH3出土土器①（67～90）



1　SH3出土土器②（91～99）

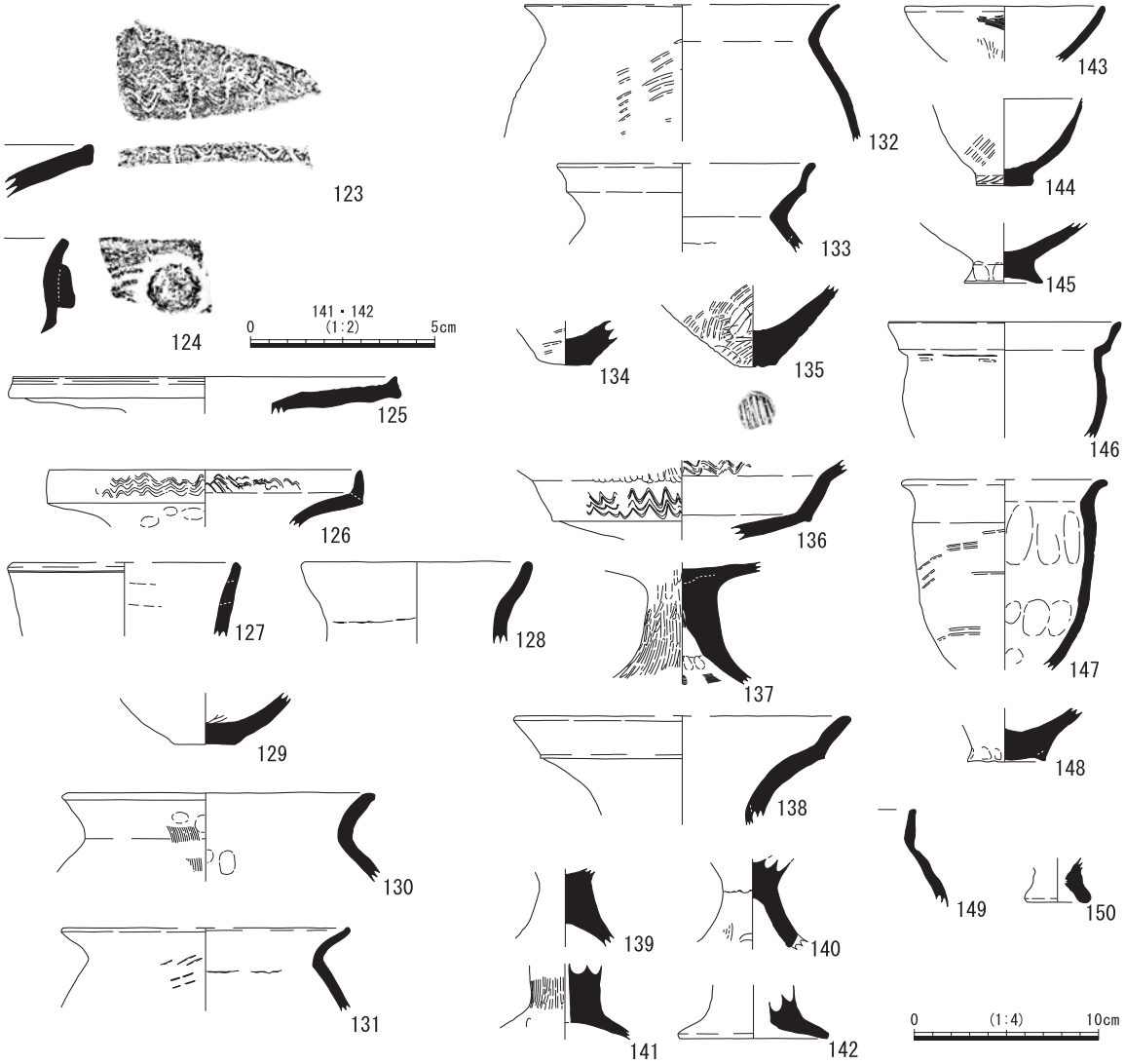


2　SH5出土土器（100～114）

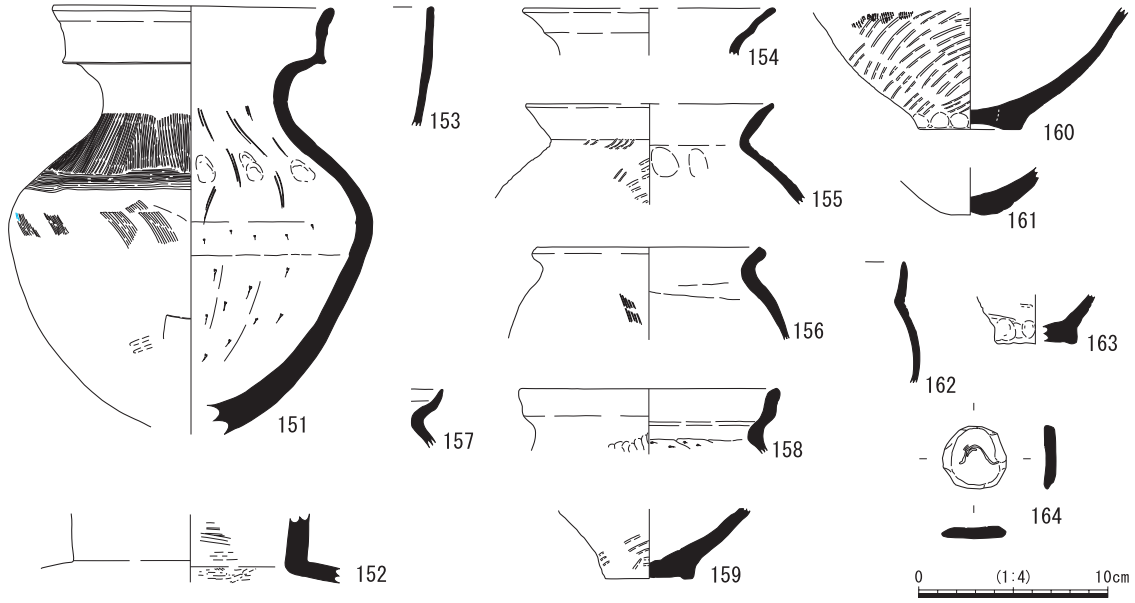


3　SH6-1出土土器①（115～122）

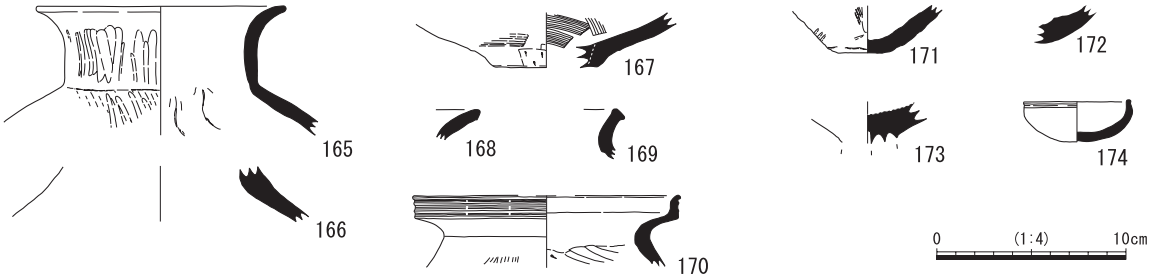
図版42　遺物



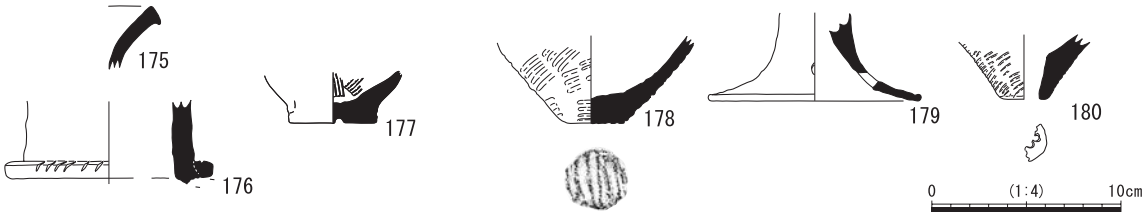
1　SH6-1出土土器②（123～150）



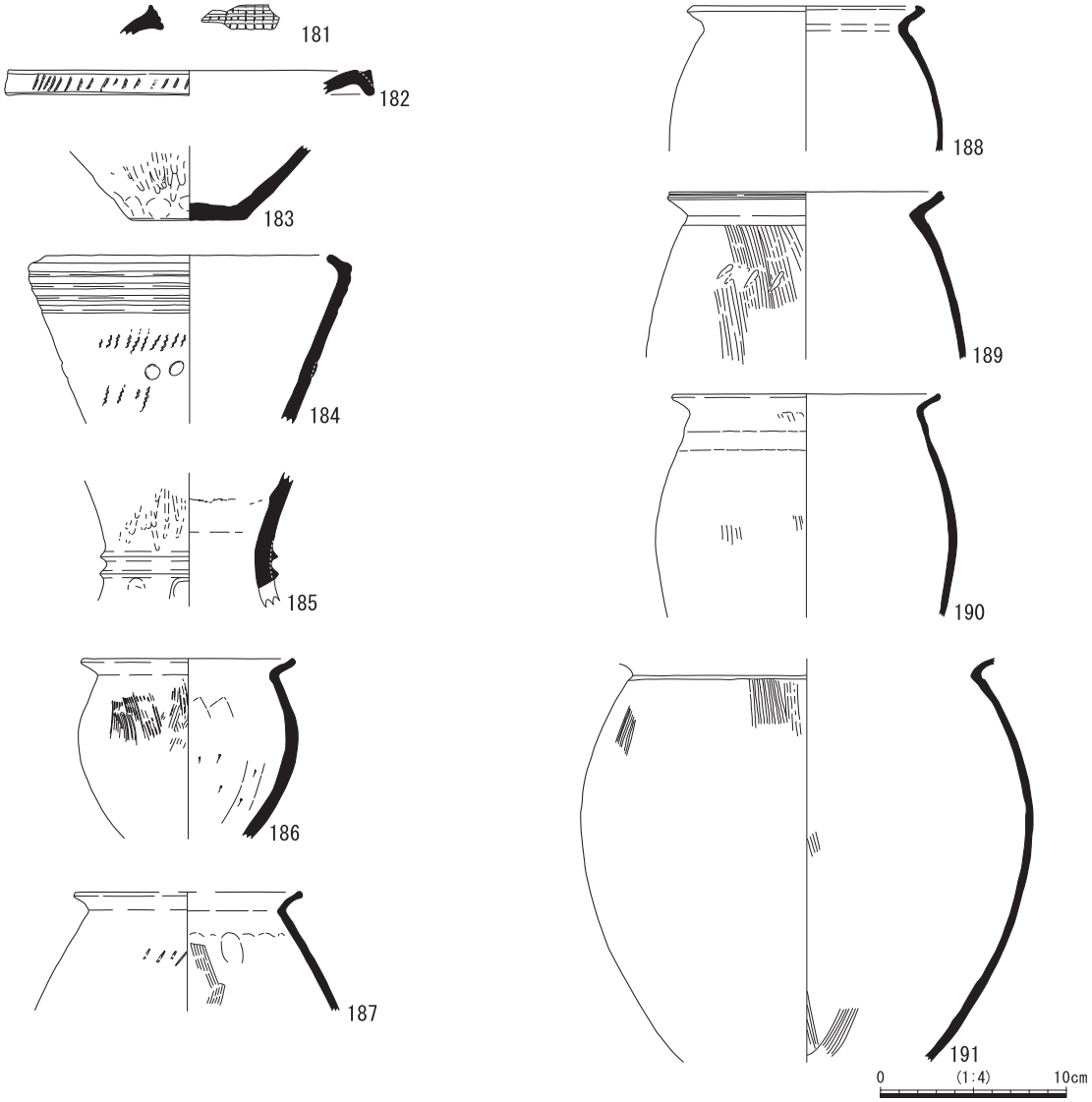
2　SH6-2出土土器（151～164）



1　SH8-1出土土器（165～174）

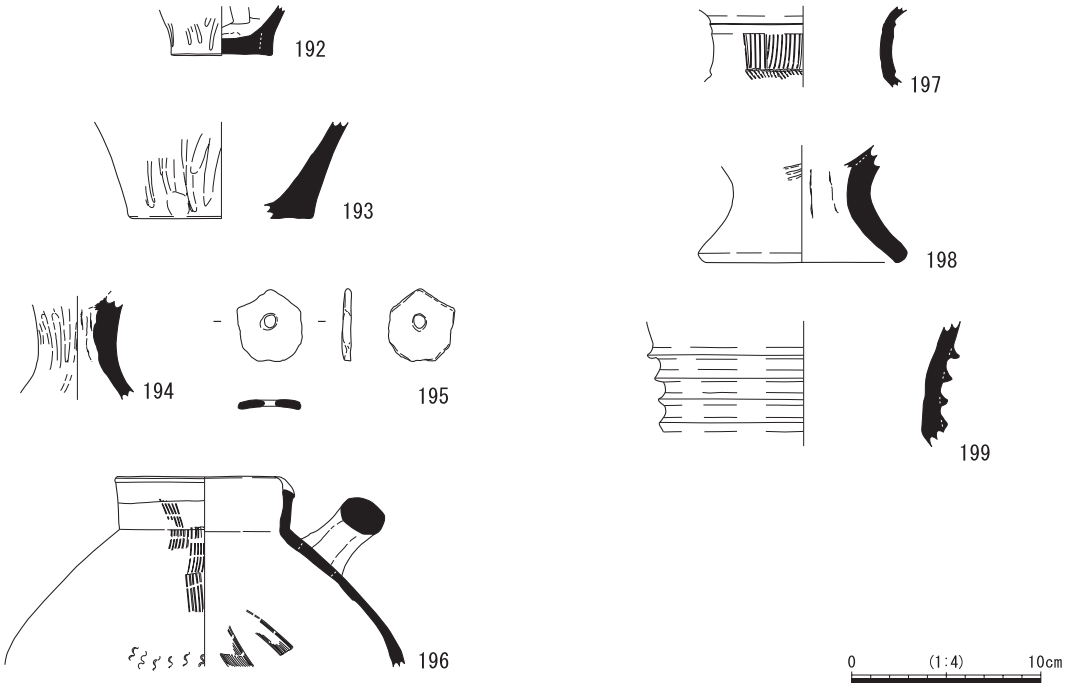


2　SH8-2出土土器（175～180）

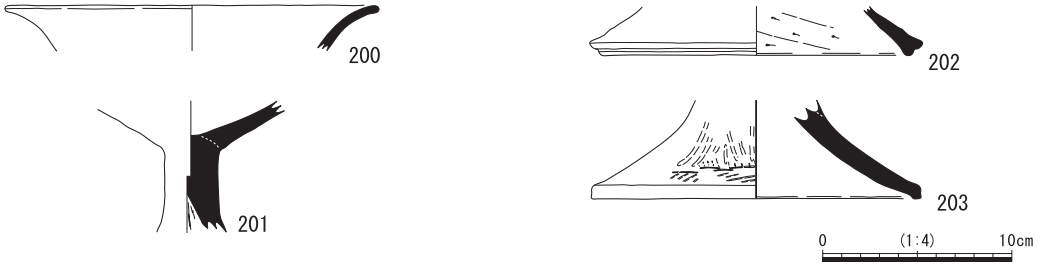


3　SH9出土土器①（181～191）

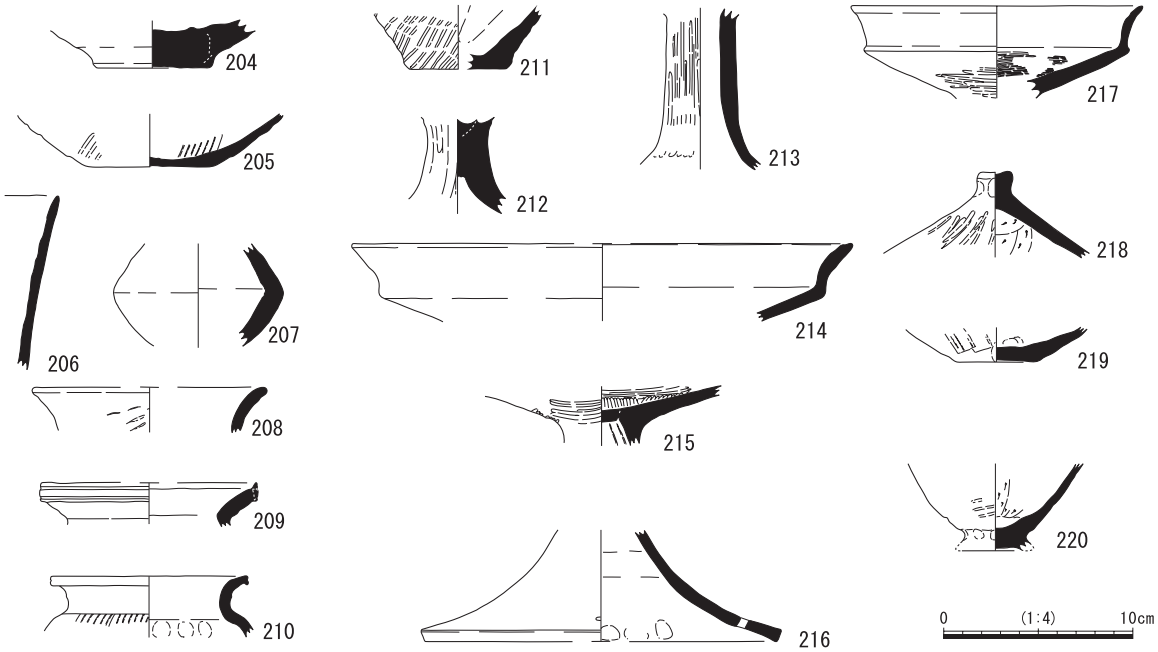
図版44　遺物



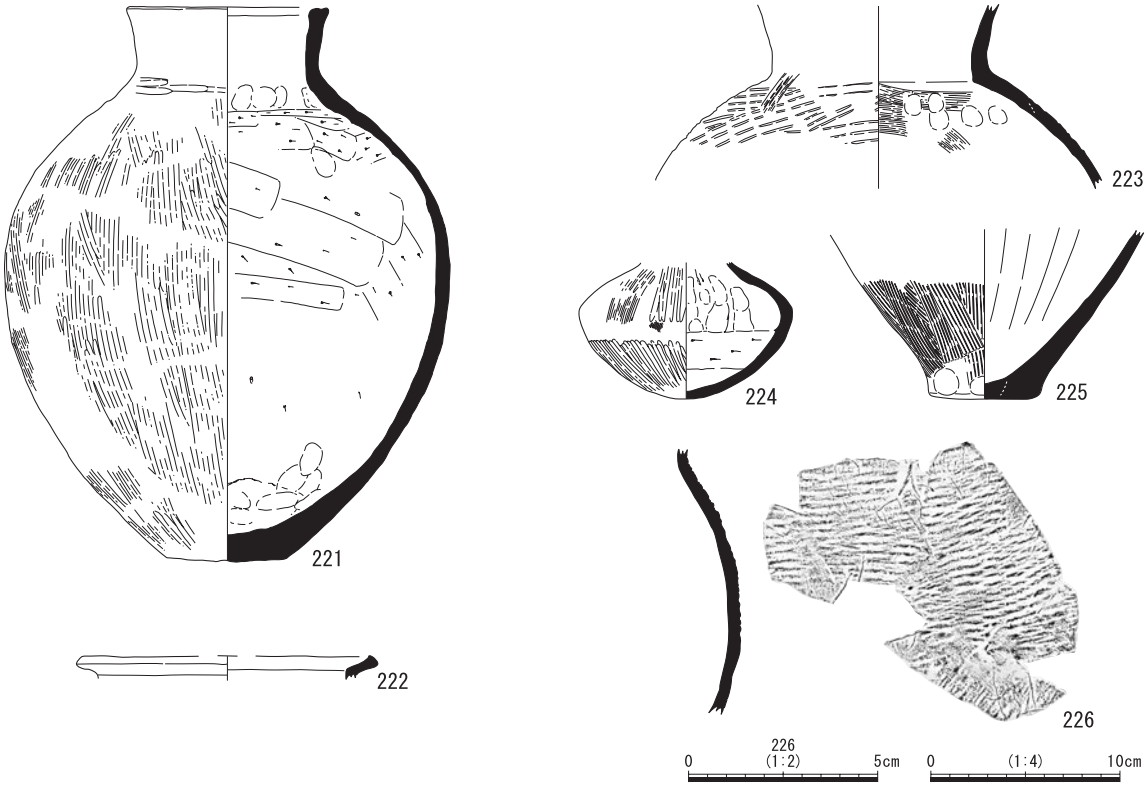
1　SH9出土土器②（192～199）



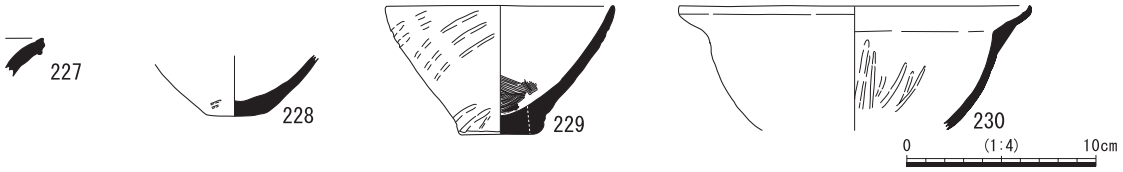
2　SH10出土土器（200～203）



3　SH20出土土器（204～220）

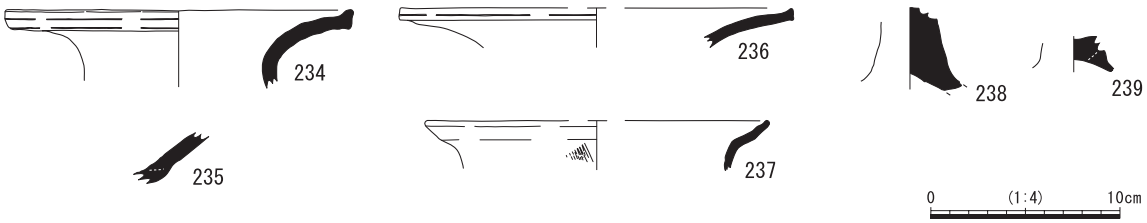


1　SH20出土土器（221～226）

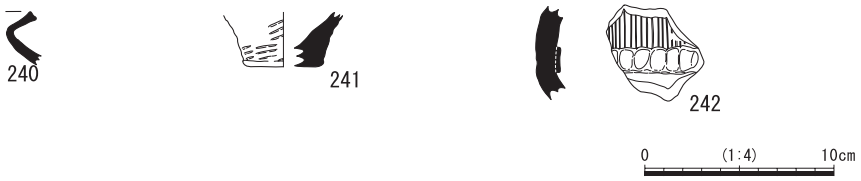


2　SH11出土土器（227～230）

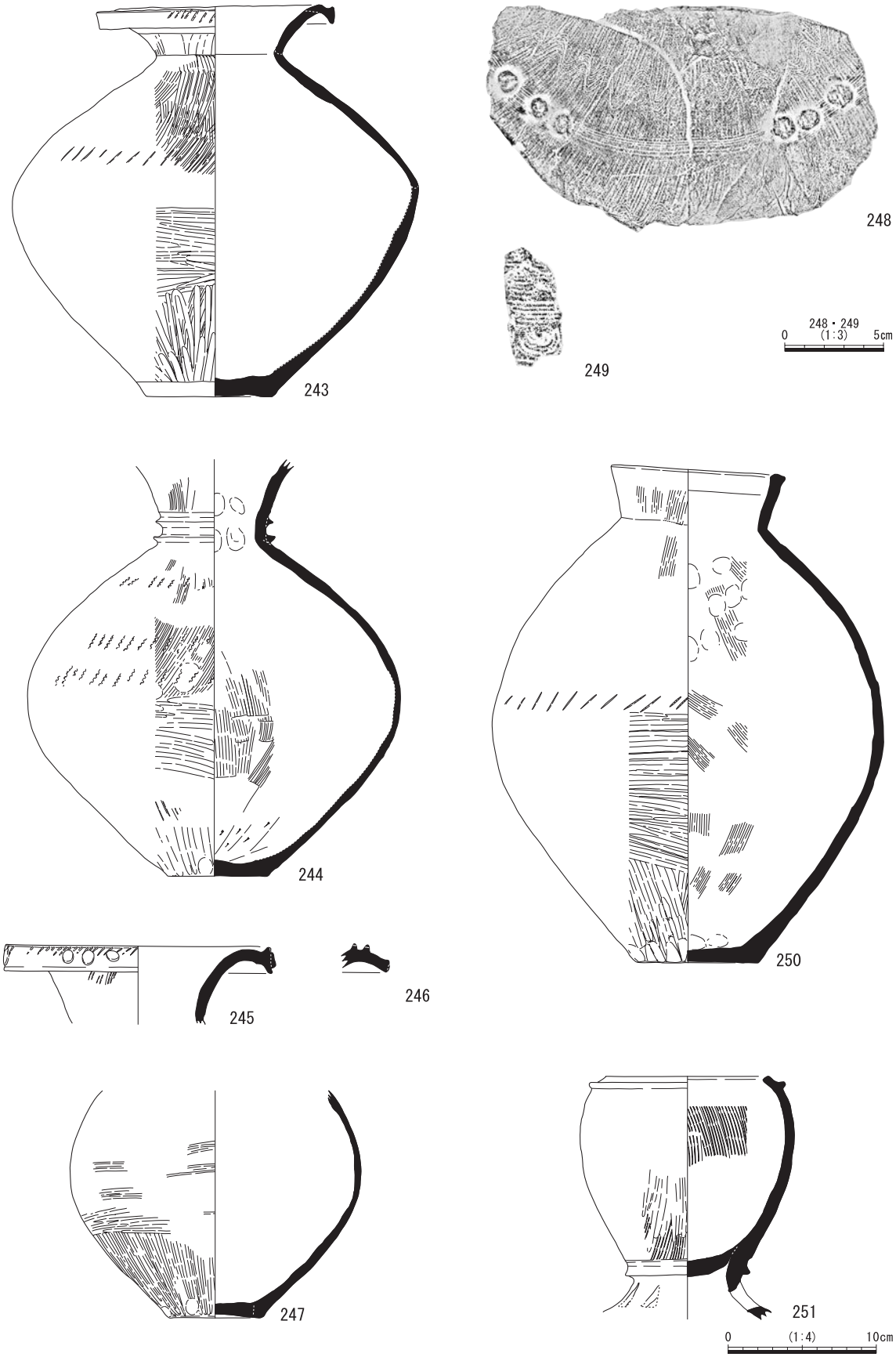
3　SH12出土土器（231～233）



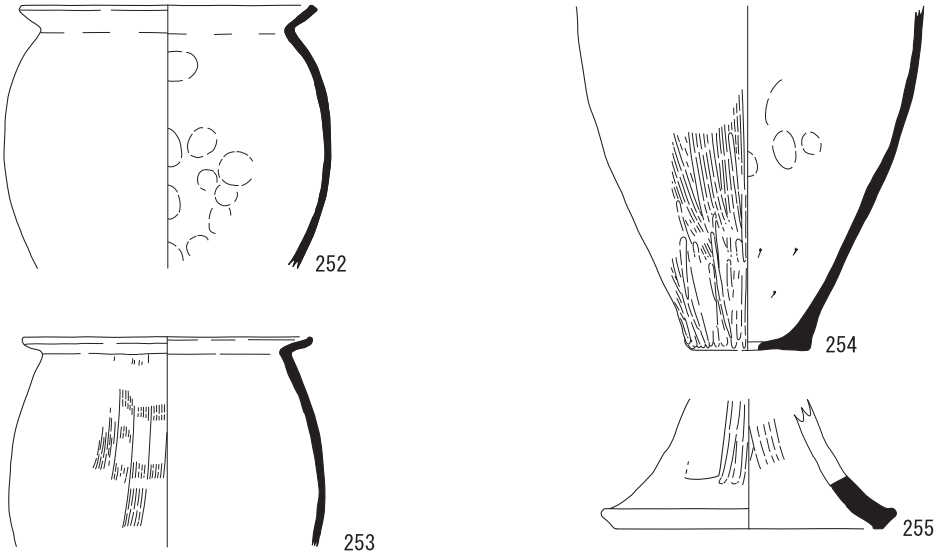
4　SH13出土土器（234～239）



5　SH14出土土器（240～242）

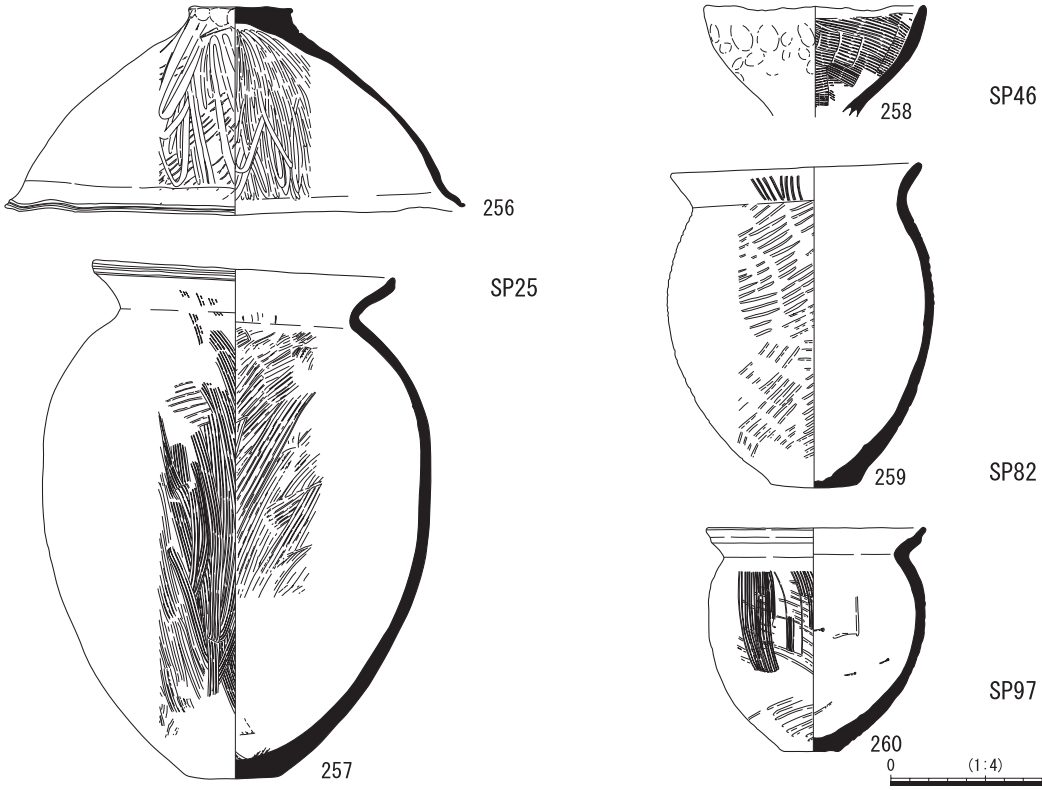


SK6出土土器①（243～251）



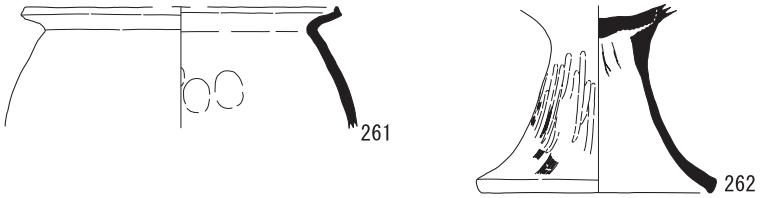
1　SK6出土土器②（252～255）

0　(1:4)　10cm



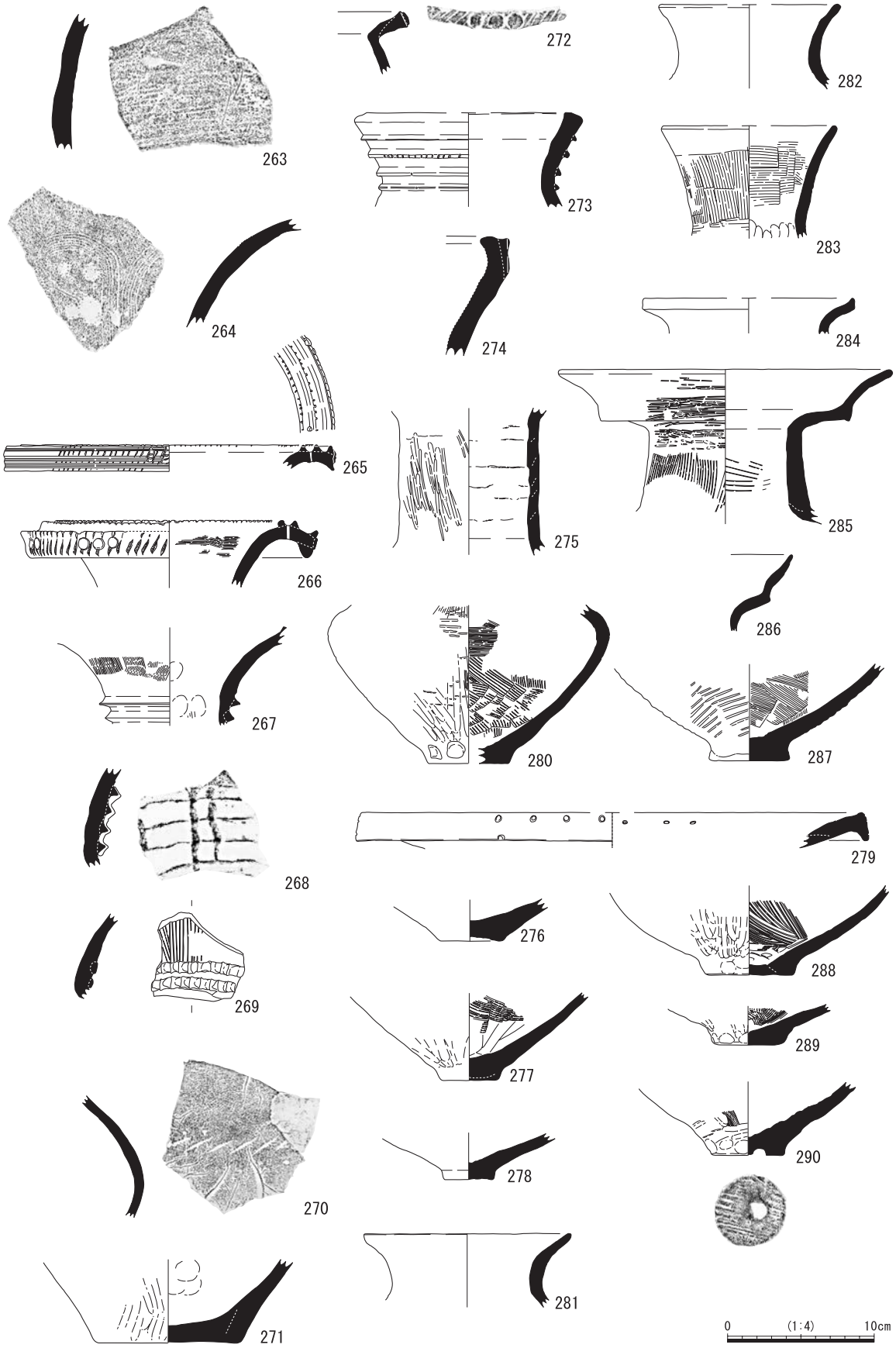
2　ピット出土土器（256～260）

0　(1:4)　10cm

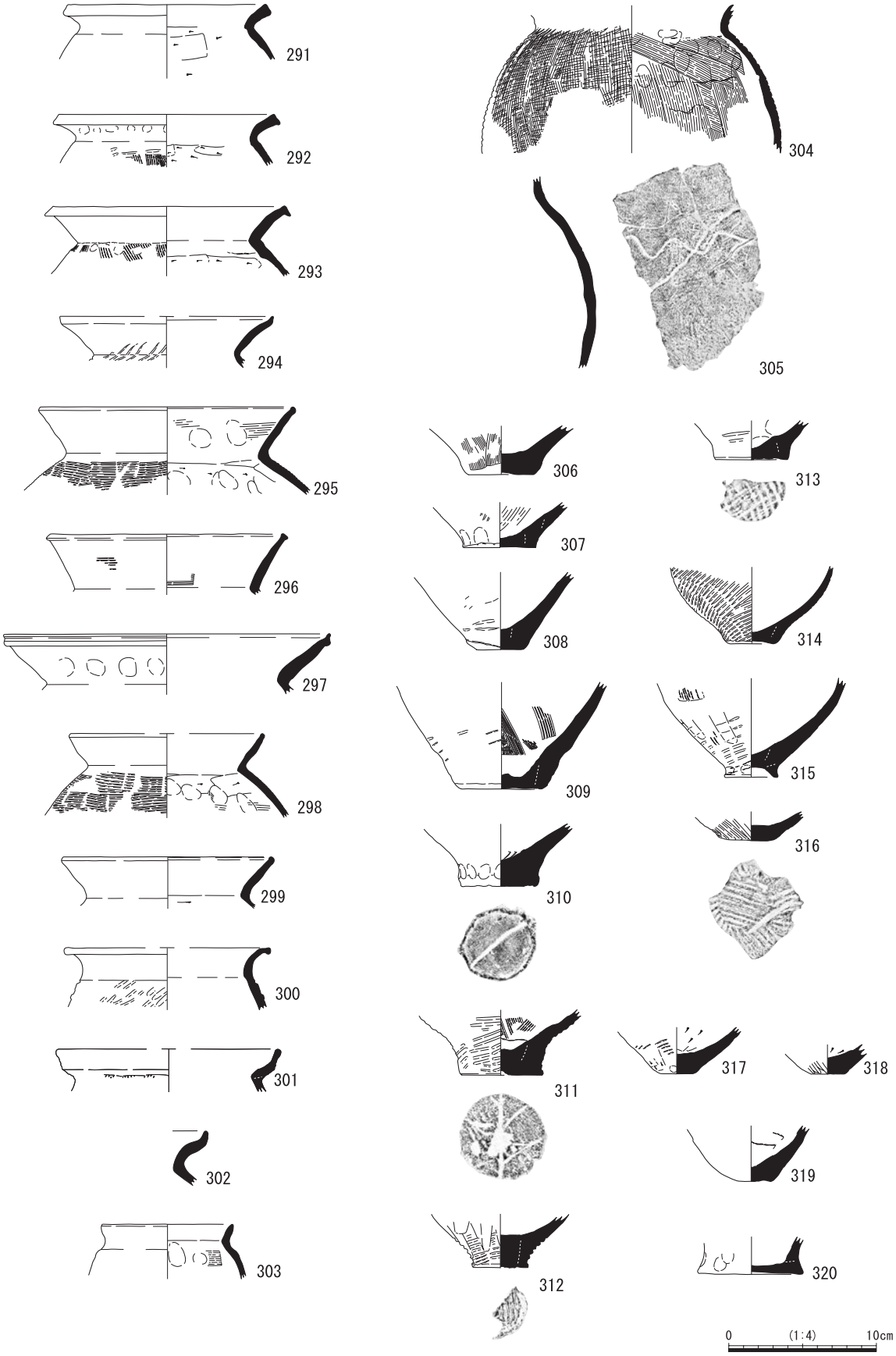


0　(1:4)　10cm

3　ST1出土土器（261・262）

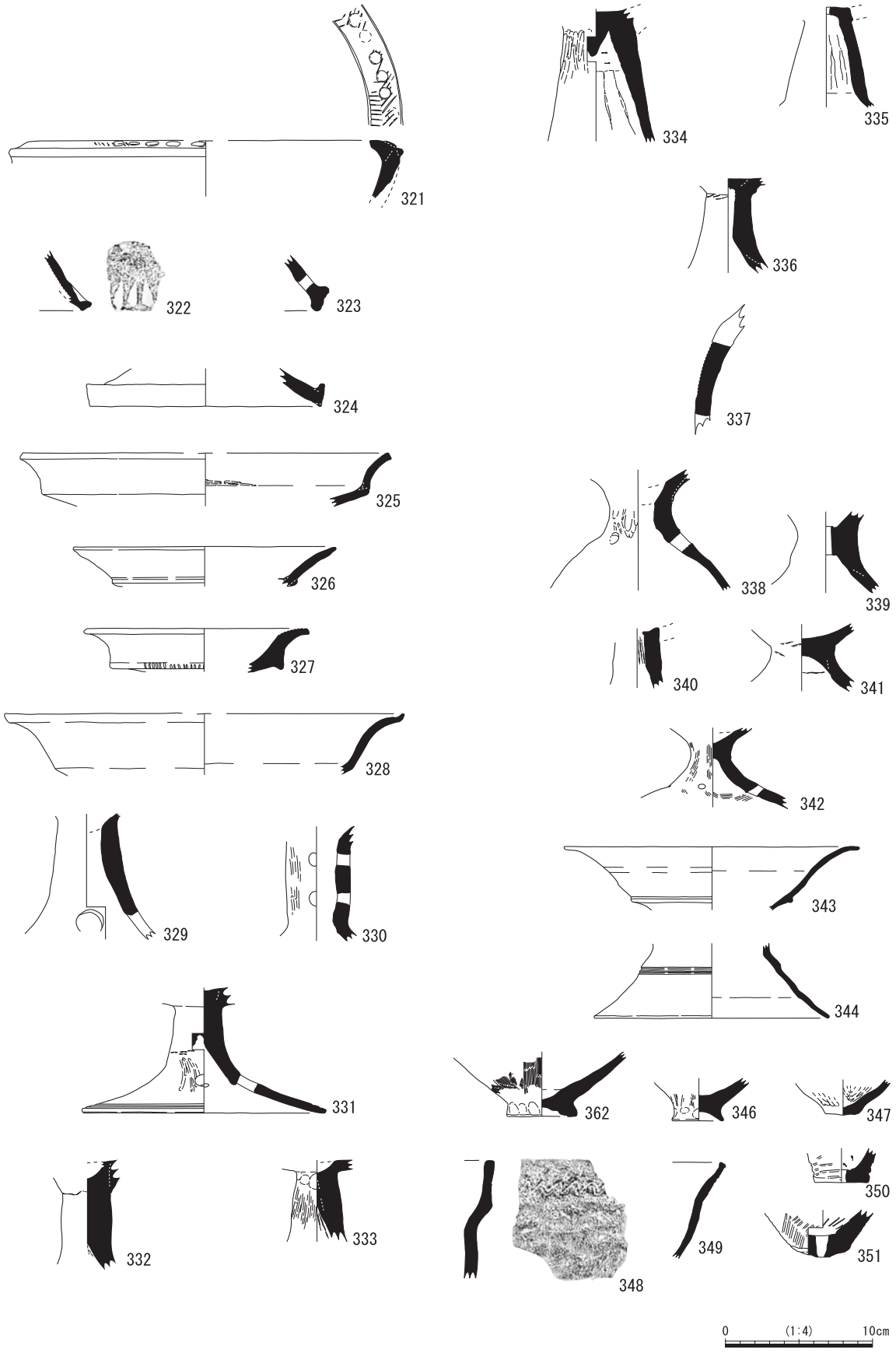


SD1出土土器①（263～290）

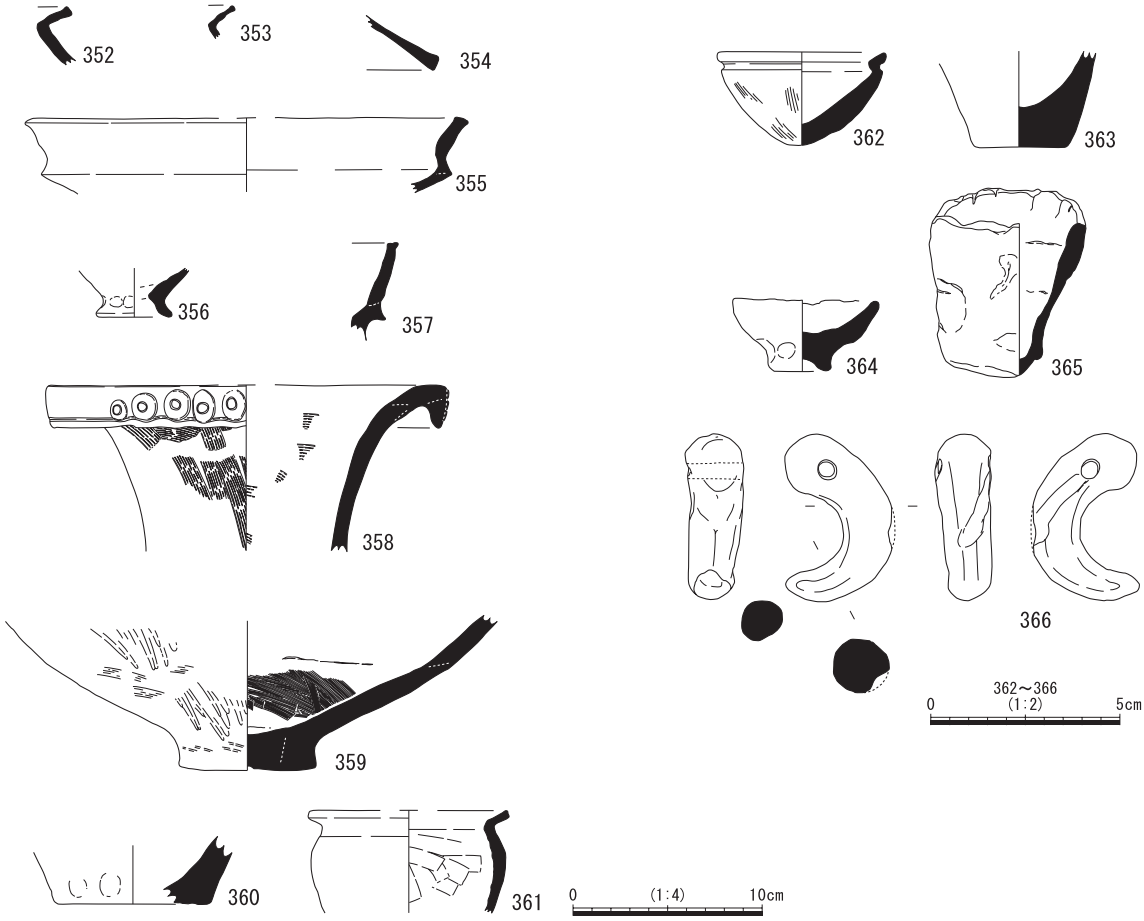


SD1出土土器②（291～320）

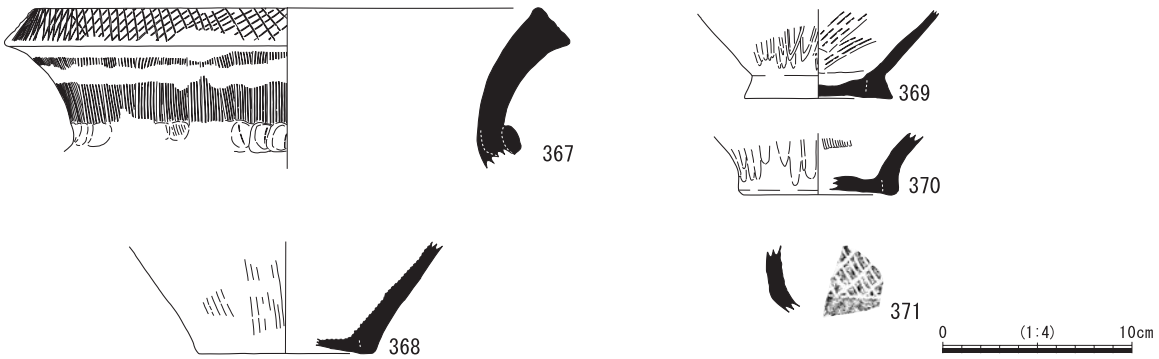
図版50　遺物



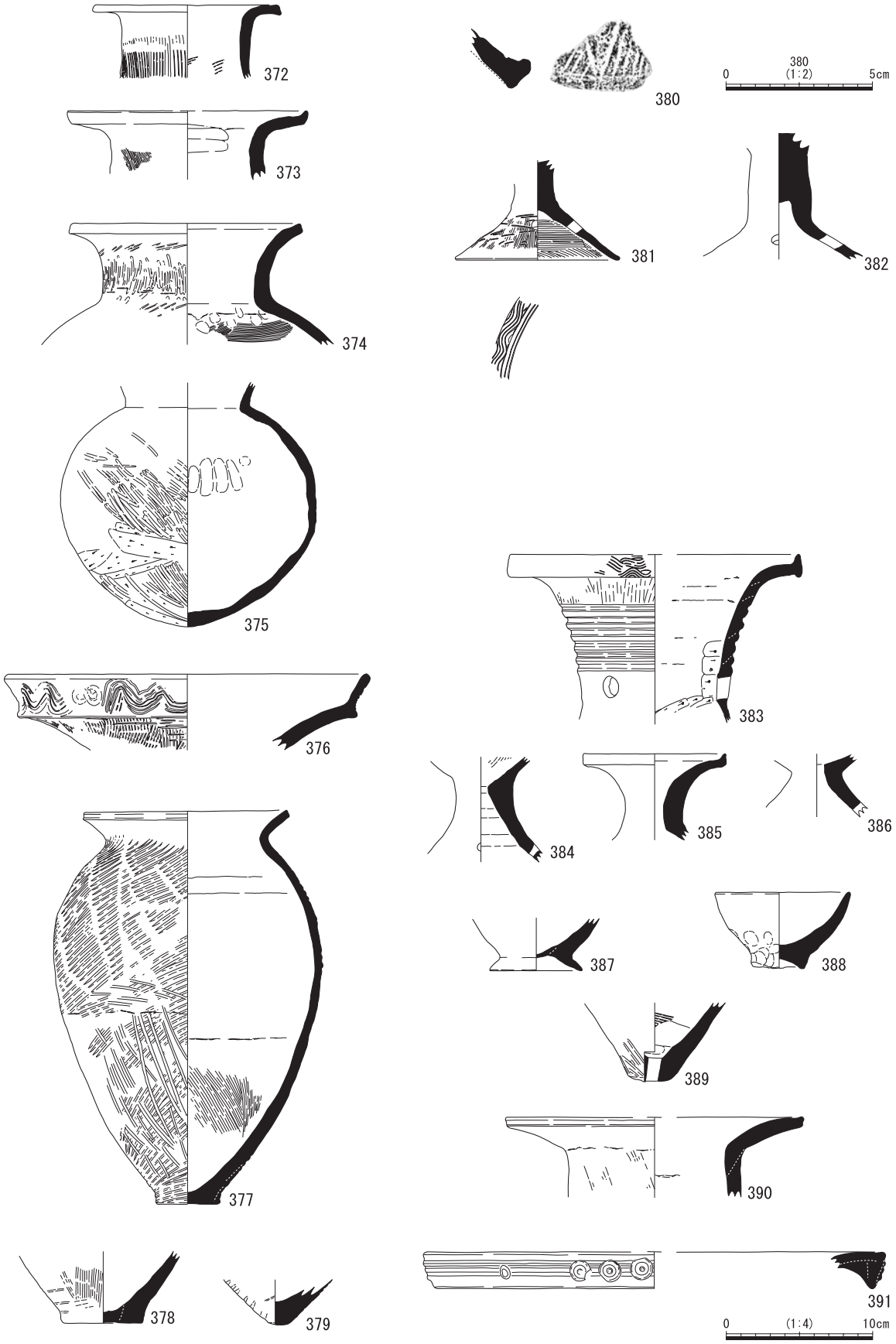
SD1出土土器③（321～351）



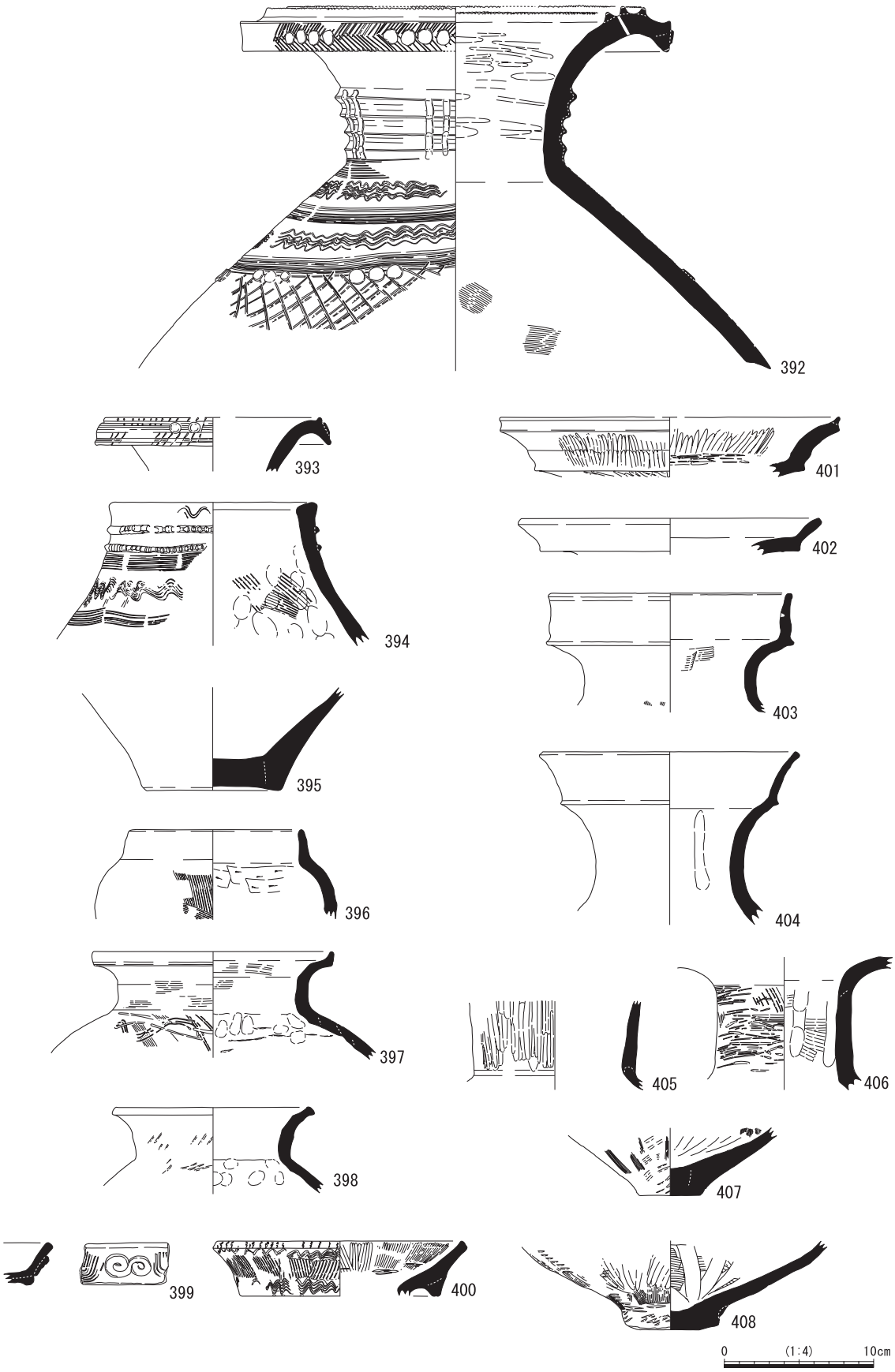
1　SD1出土土器④（352～366）



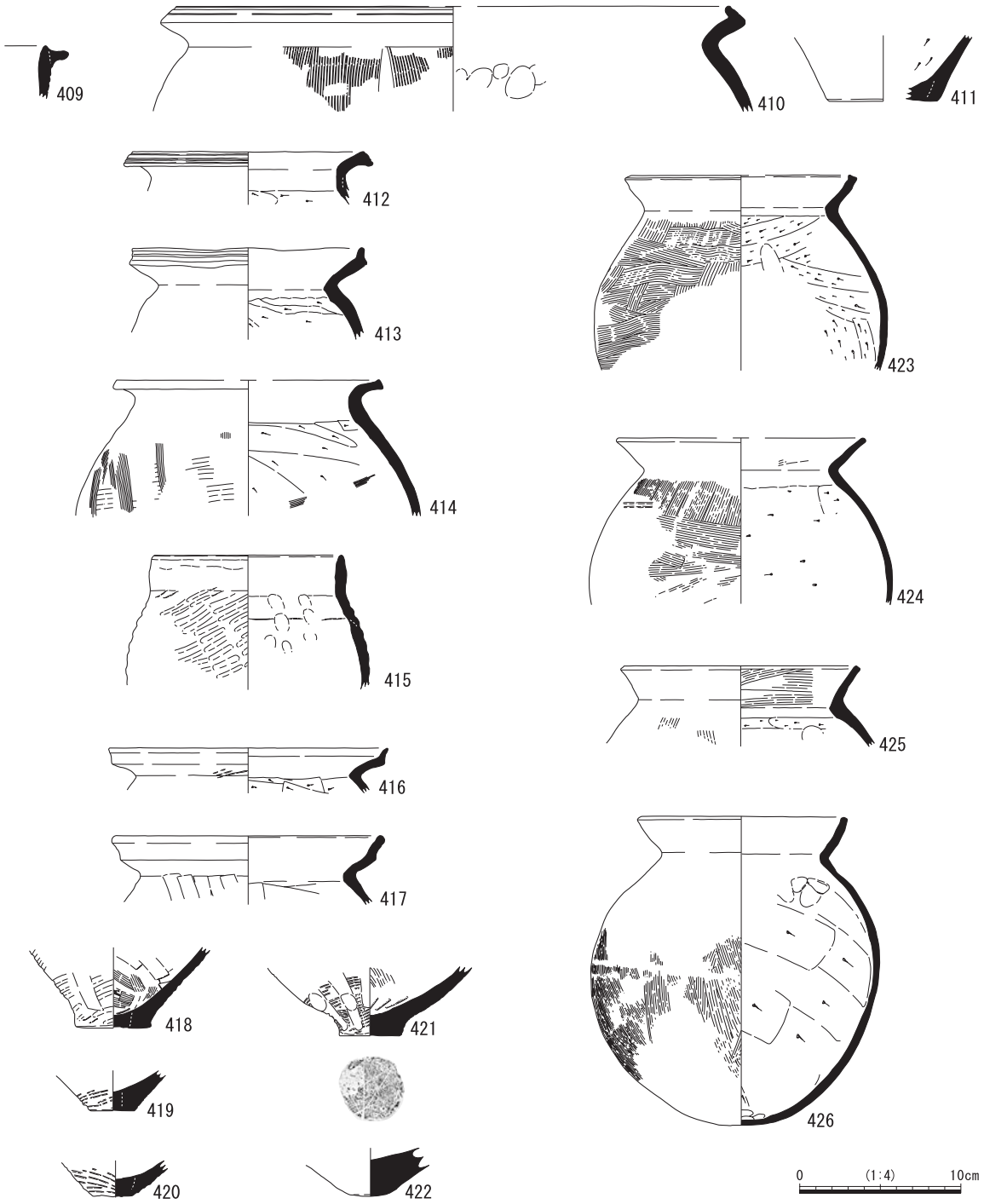
2　Ⅴ層出土土器（367～371）



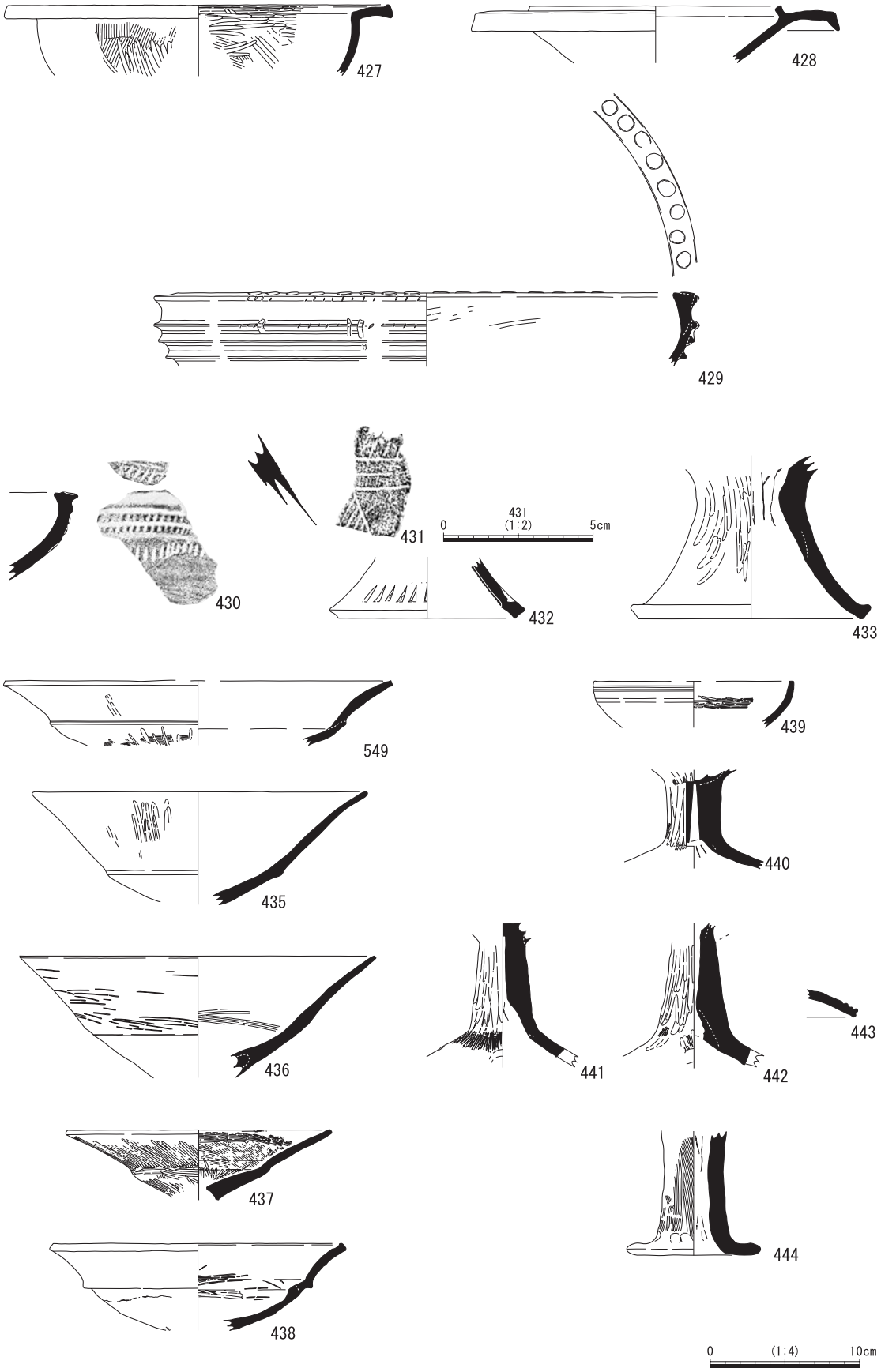
SR1　2層出土土器（372～391）



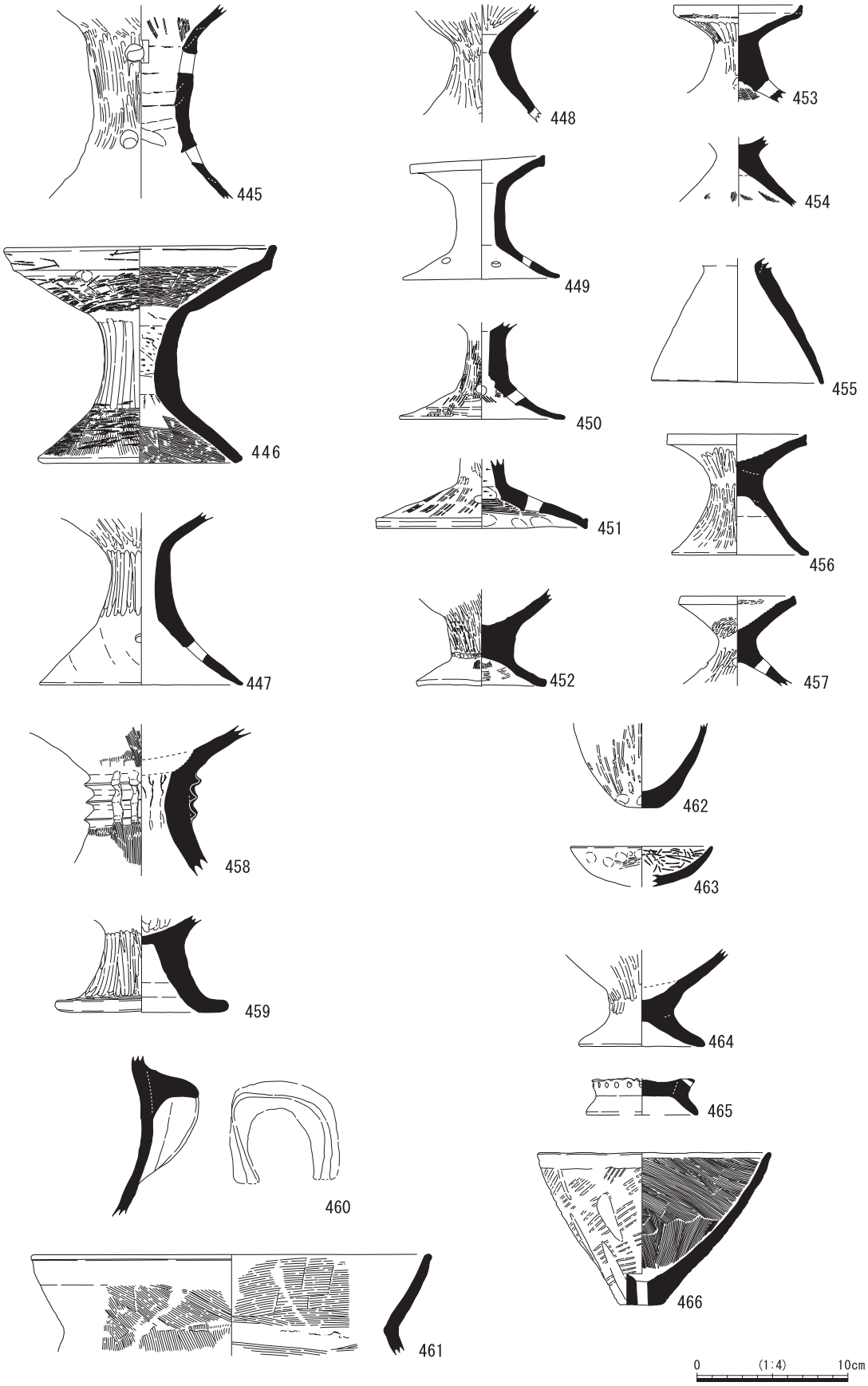
SR1　3層出土土器①（392～408）



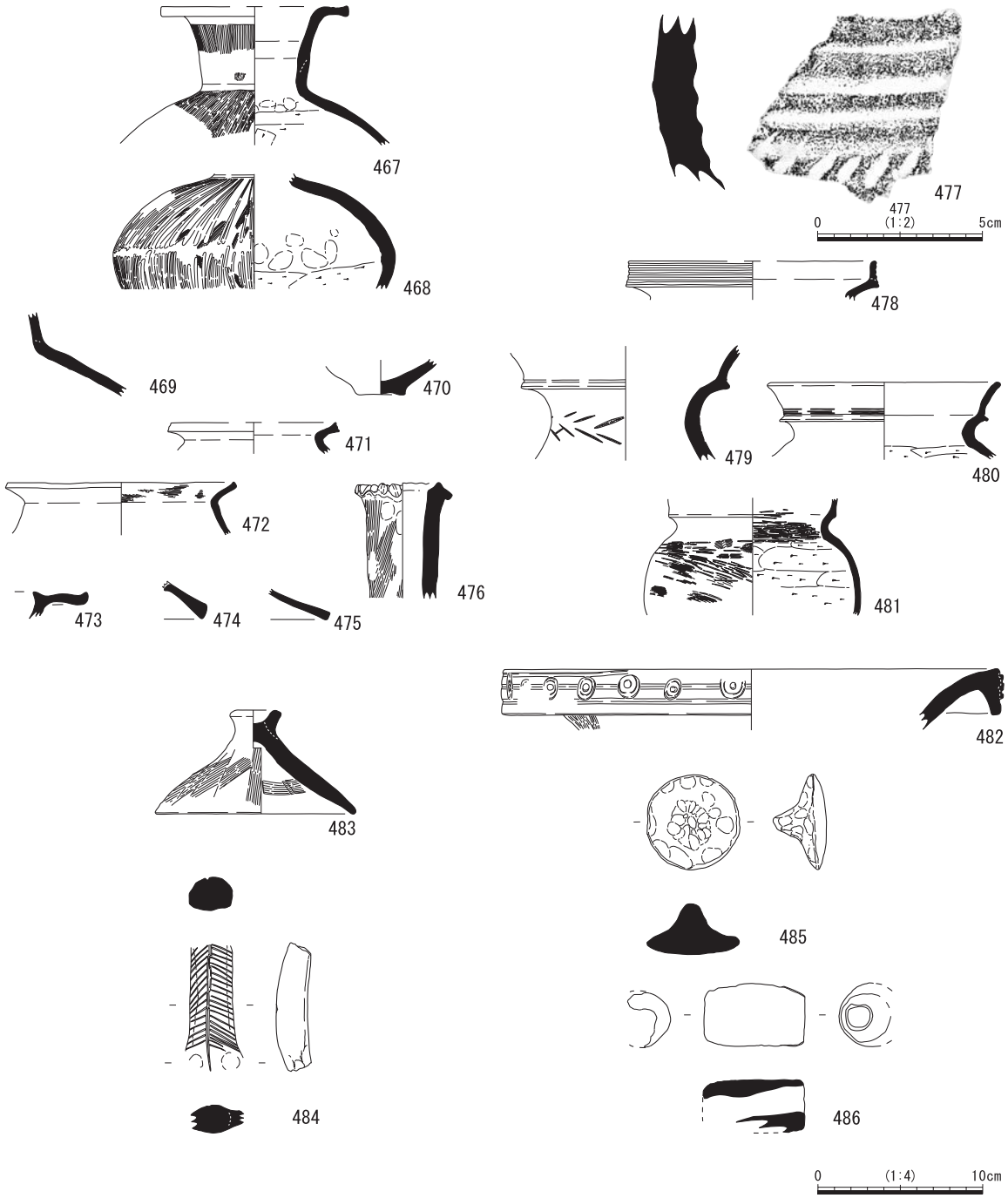
SR1　3層出土土器②（409～426）



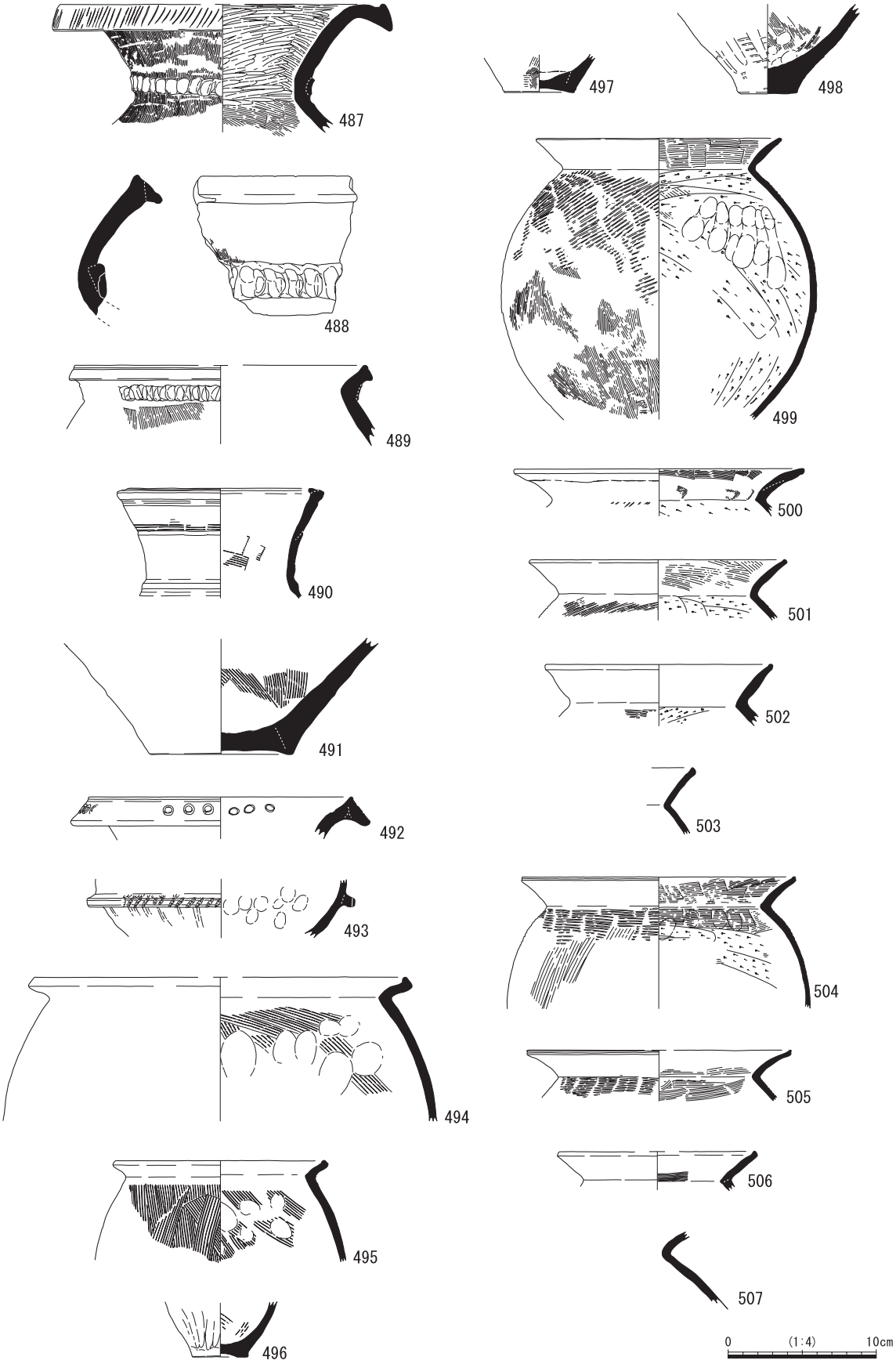
SR1　3層出土土器③（427～444）



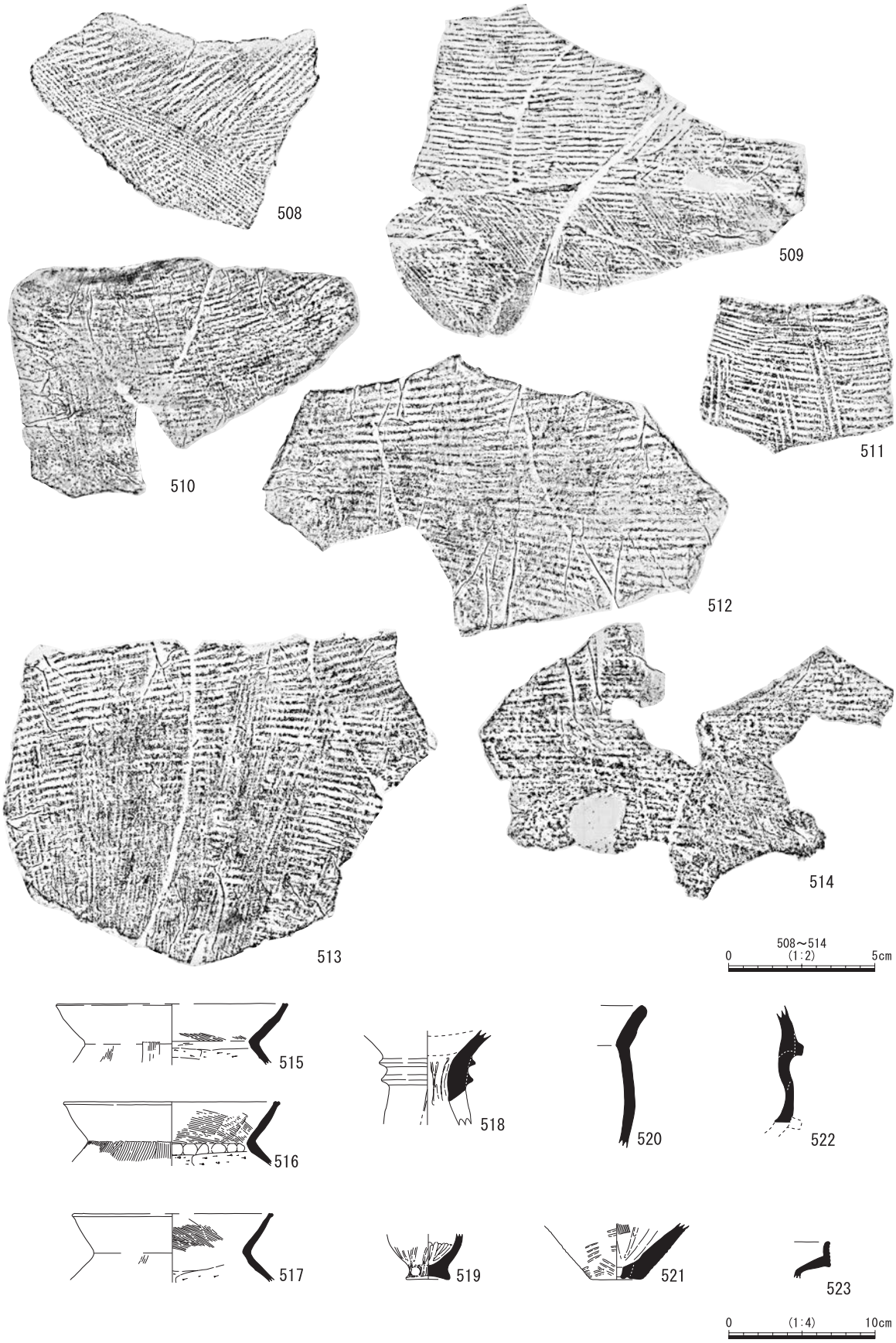
SR1　3層出土土器④（445～466）



SR1　3層出土土器⑤（467～486）

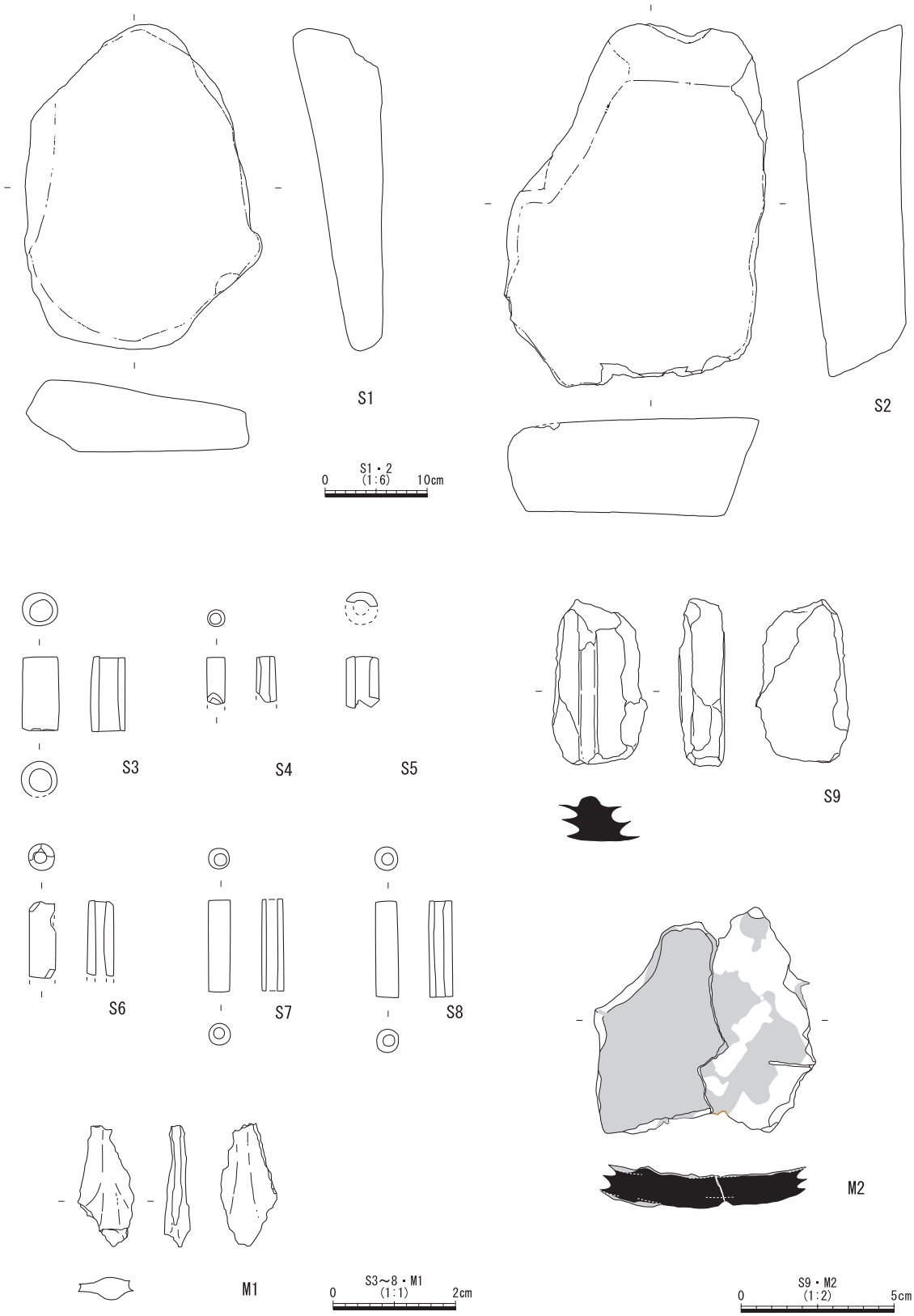


SR1　5層出土土器①（487～507）



SR1　5層出土土器②（508～523）

図版60　遺物



その他の遺物

写 真 図 版

写真図版データ

遺構　6×7判のモノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルムでの撮影を基本とし、35mm判のカラーリバーサルフィルム、およびデジタル1眼レフカメラで補足している。なお、全景写真や特に重要と判断したものについては、4×5判も使用した。

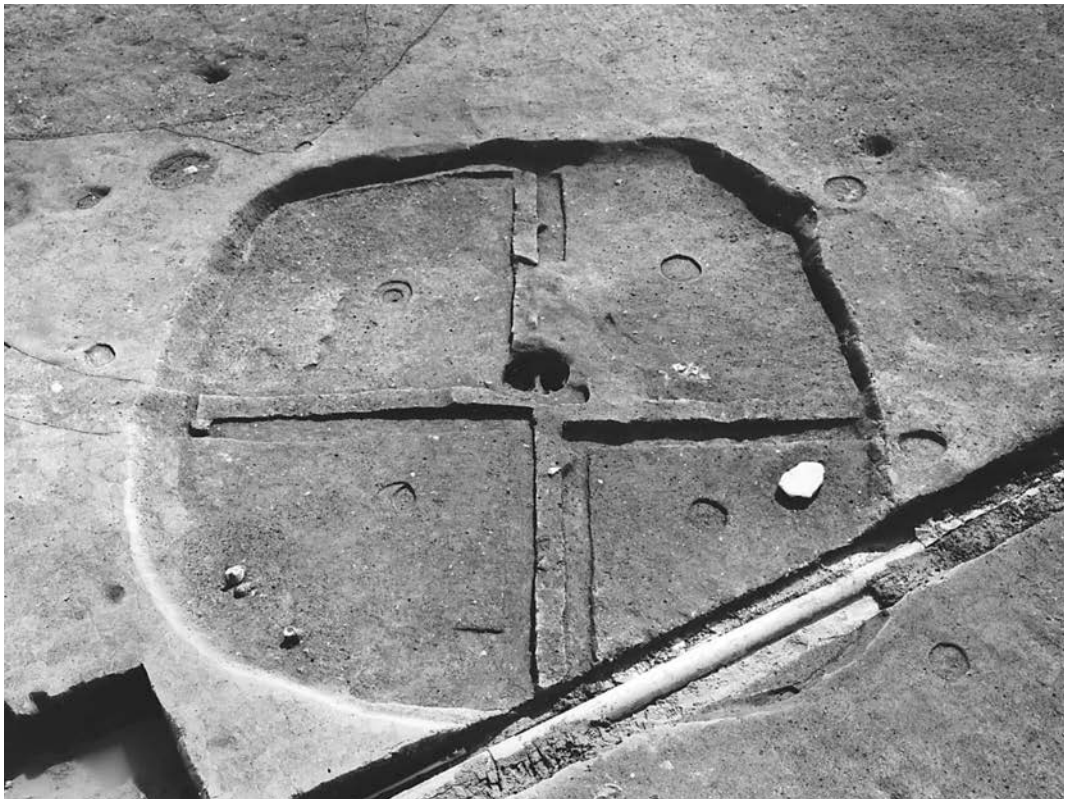
使用機材

カ　メ　ラ	トヨフィールド45A	レ　ン　ズ	フジノンSW90mm　F8
	マミヤRB67PRO		マミヤセコール50mm　F4.5
	ニコンFM3		ニッコール28－70mm
	ニコンD70		AF-Sニッコール18－70mm
フィルム	ネオパンアクロス、プロビア、ベルビア		

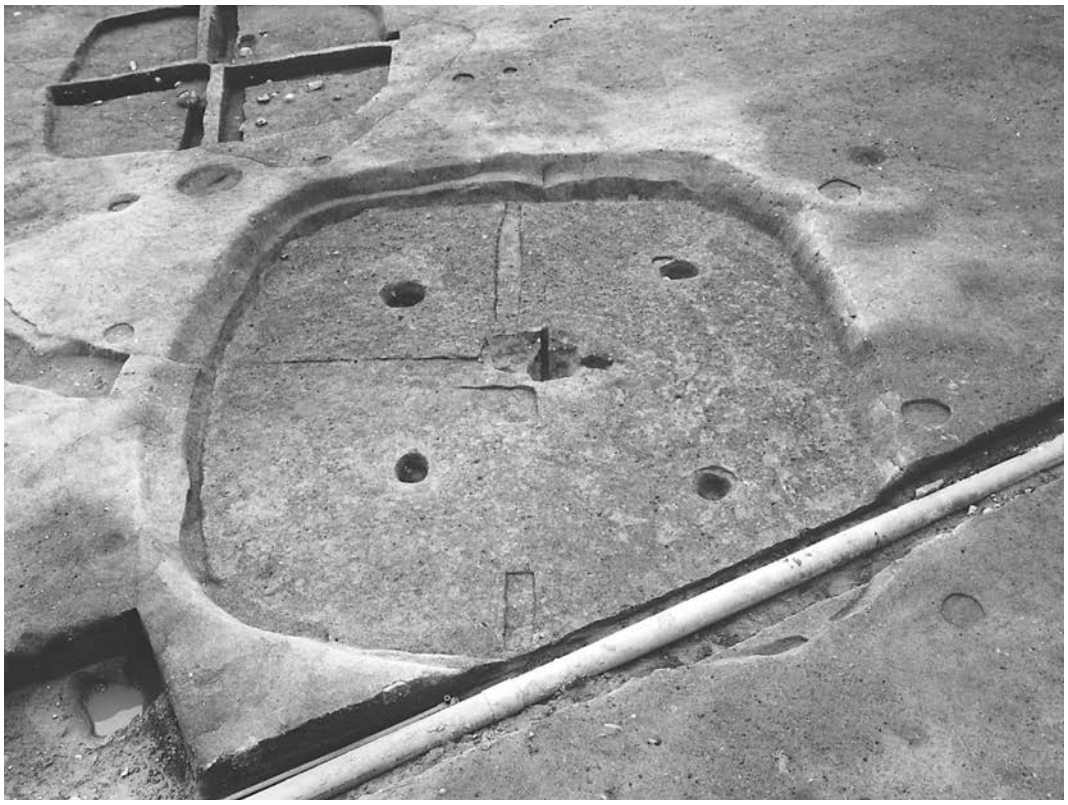
遺物　35mmデジタルカメラでの撮影を基本とし、一部については4×5判も併用した。

使用機材

カ　メ　ラ	トヨビュー45GX	レ　ン　ズ	ニッコールW210mm　F5.6
	ニコンD70		
フィルム	ネオパンアクロス、プロビア		
ストロボ	ブロンカラーグラフィットA4		
背　景　紙	スーペリア　No.28　スノー		



1　SH1-1　全景（北から）



2　SH1-2　全景（北から）

写真図版２　遺構

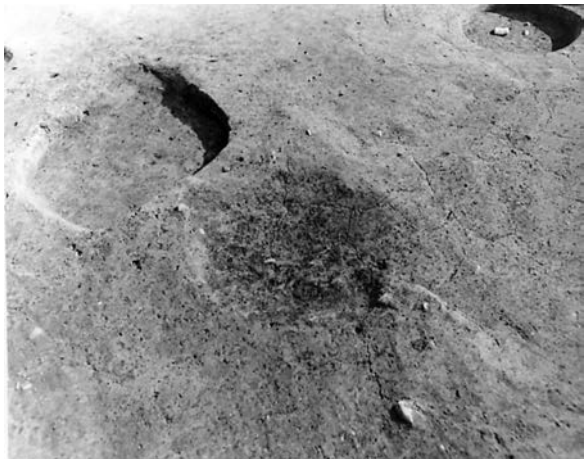
1　SH1-2　燃焼施設（南から）

2　SH1-2　埋土内粘土塊検出状況（北から）

3　SH1-2-SP3　礎板検出土状況（南東から）

4　SH1-2-SP4　礎板検出土状況（西から）

1　SH2　全景（北から）



2　SH2　中央焼土坑検出状況（北西から）

3　SH2　床面土器（38～41･43）出土状況（南東から）

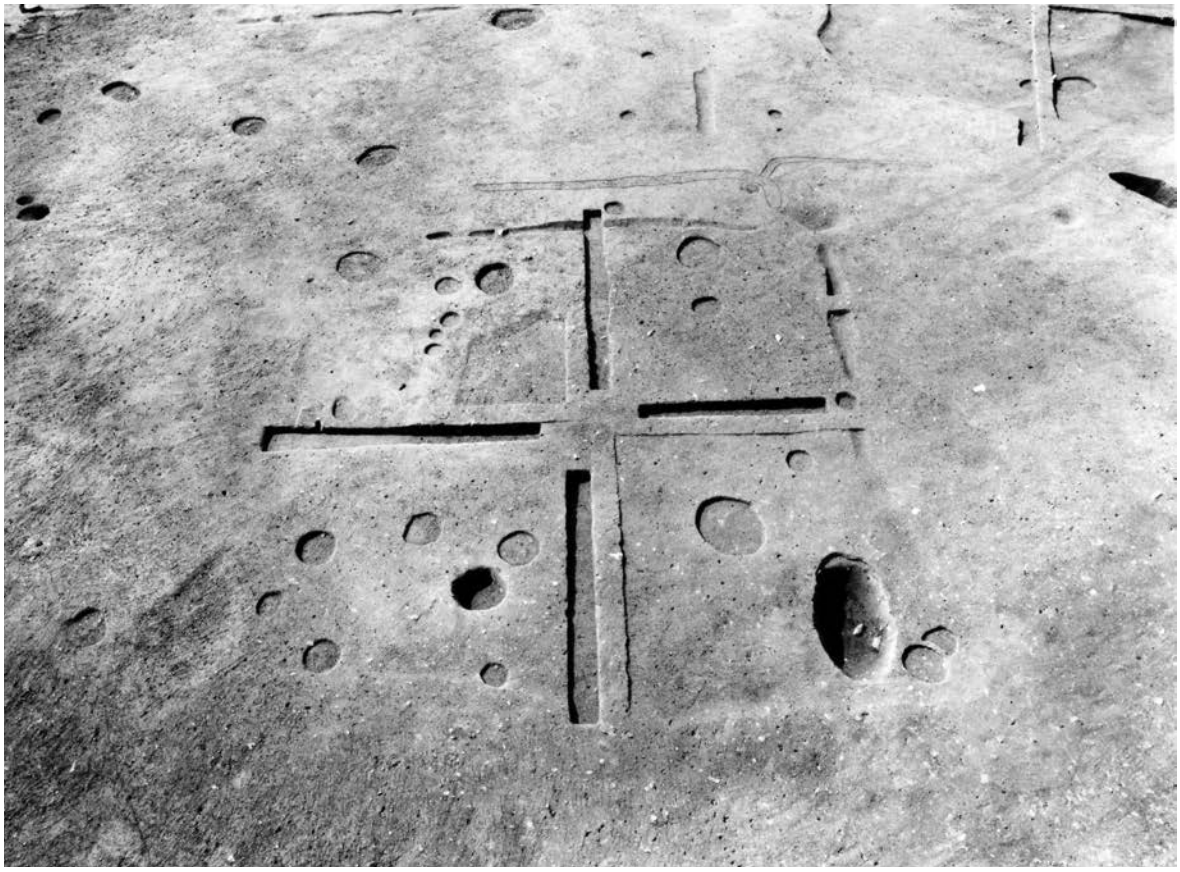
1　SH3　全景（北から）

2　SH3　床面被熱状況（北西から）

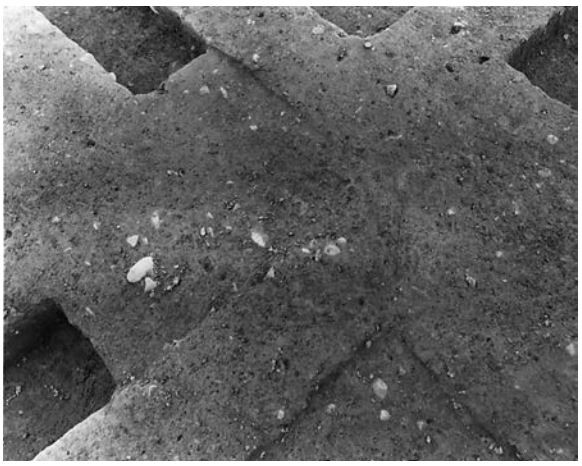
3　SH3-SP3　土層断面

4　SH3-SK1　土層断面

5　SH3-SK1土器（92～95・97）出土状況（南西から）



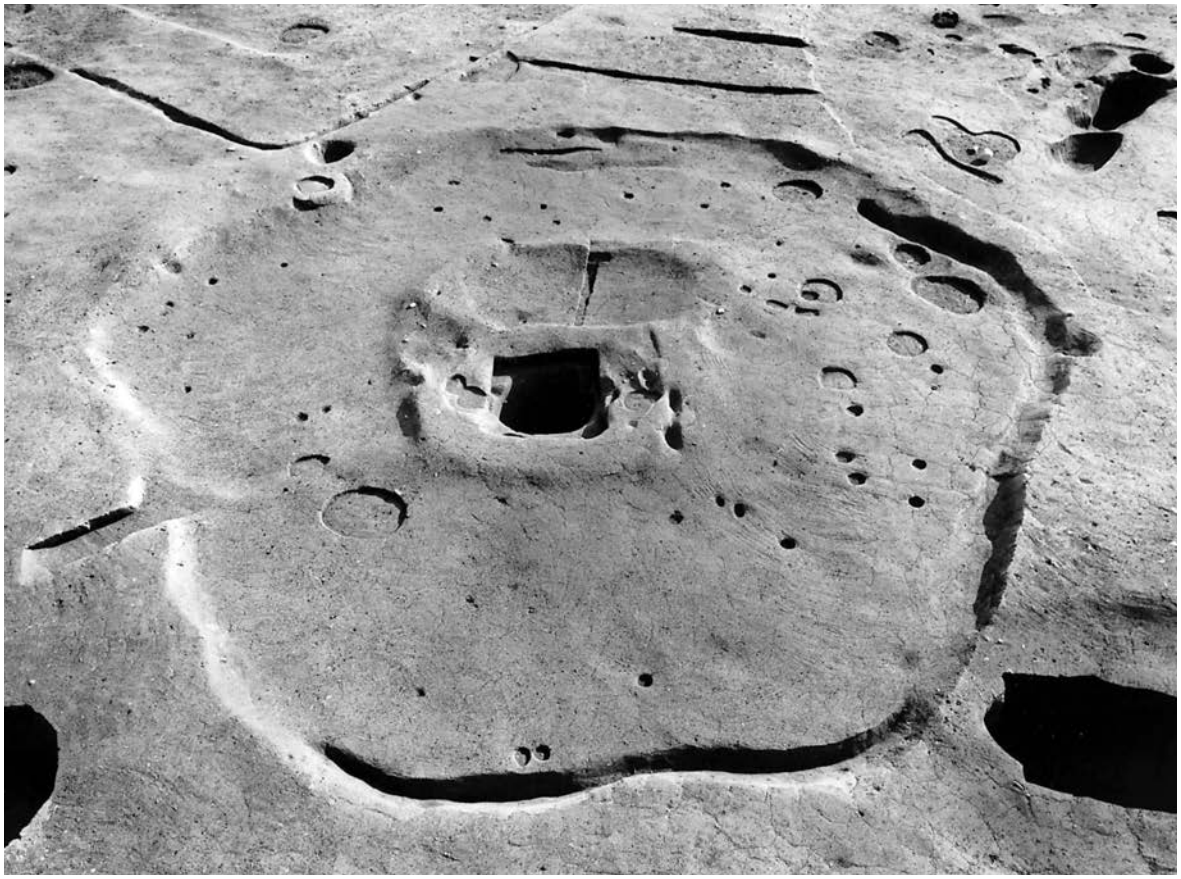
1　SH4　全景（北から）



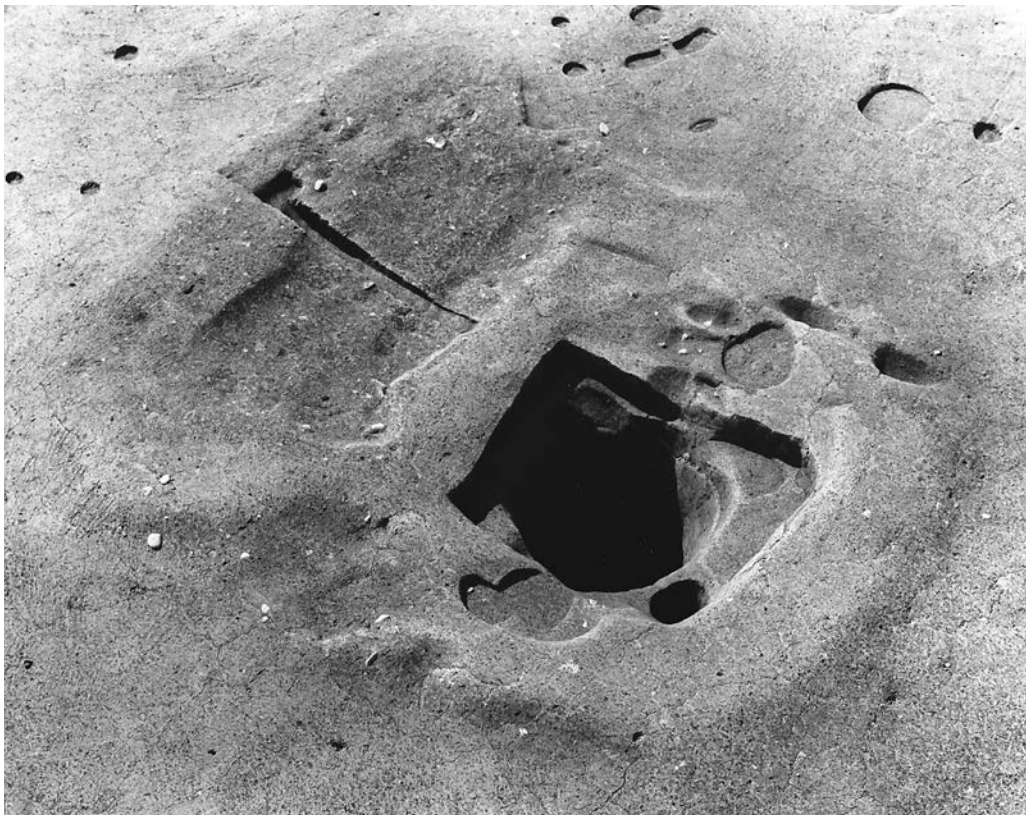
2　SH4中央焼土坑検出状況（南東から）

3　SH4-SK1　土層断面

4　SH4-SK1　（北西から）



1　SH5　全景（北から）

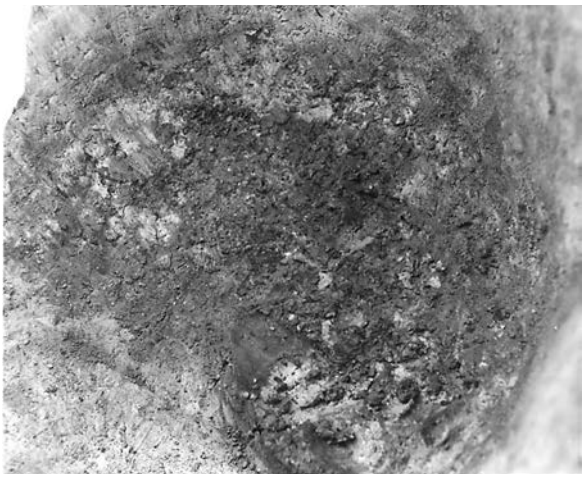


2　SH5イチマル土坑（北東から）

1　SH5　イチマル土坑（北から）

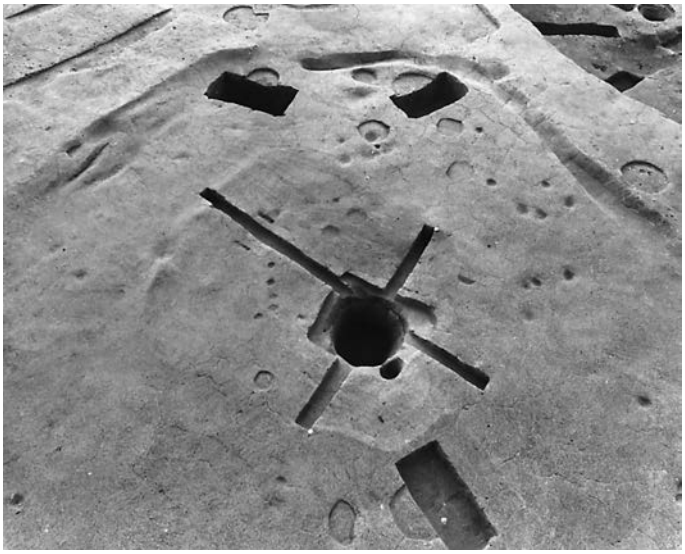
2　SH5　マル土坑　南北土層断面

3　同（部分）

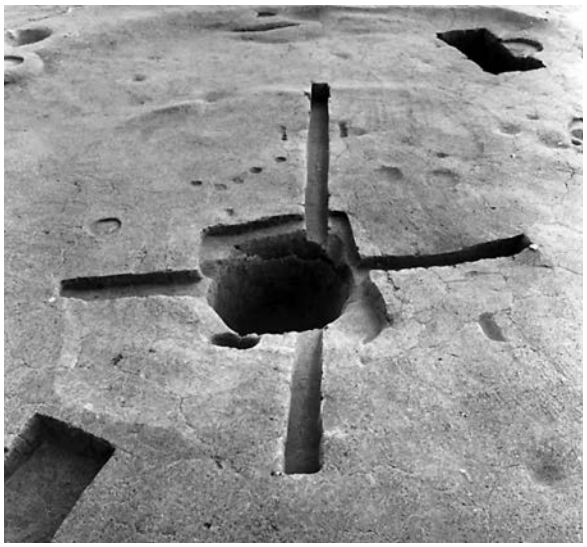


4　SH5　マル土坑底付近堆積状況（西から）

5　SH5-SP1　土層断面

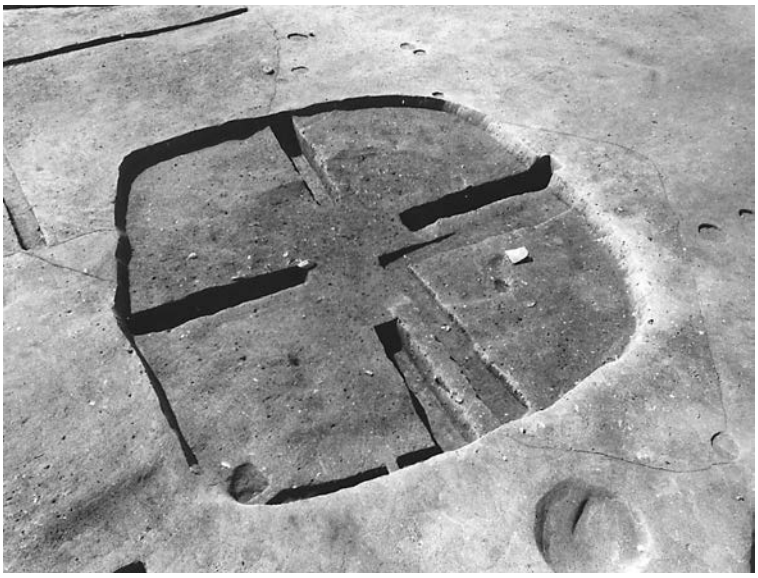


1　SH5　イチマル土坑土手除去後全景（北東から）



2　SH5　イチマル土坑土手除去後全景（北から）

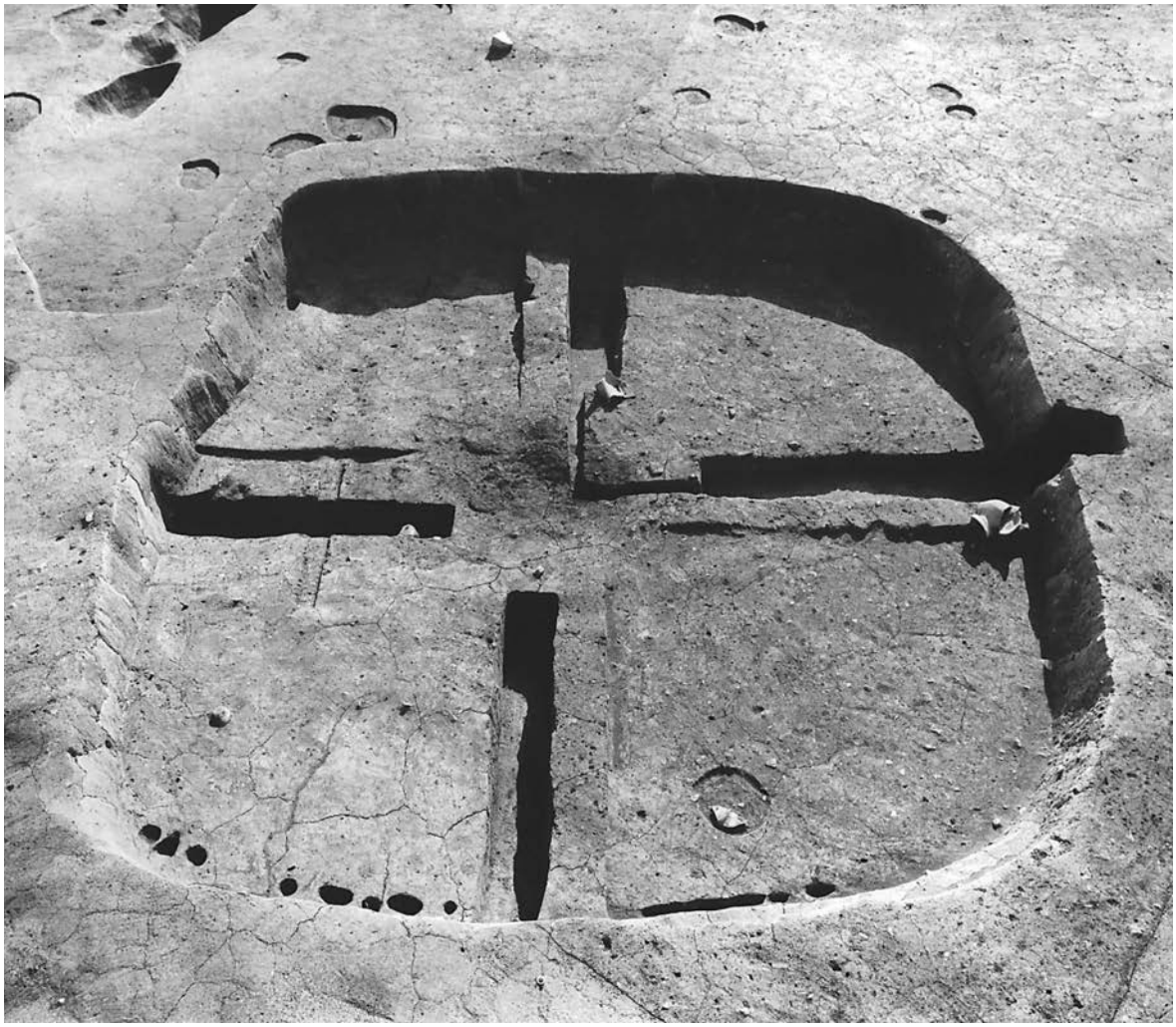
3　SH5　イチマル土坑土手土層断面



4　SH6-1　全景（北東から）

1　SH6-1土器（118）出土状況（東から）

2　SH6-1土器（121）出土状況（西から）



3　SH6-2　全景（北から）

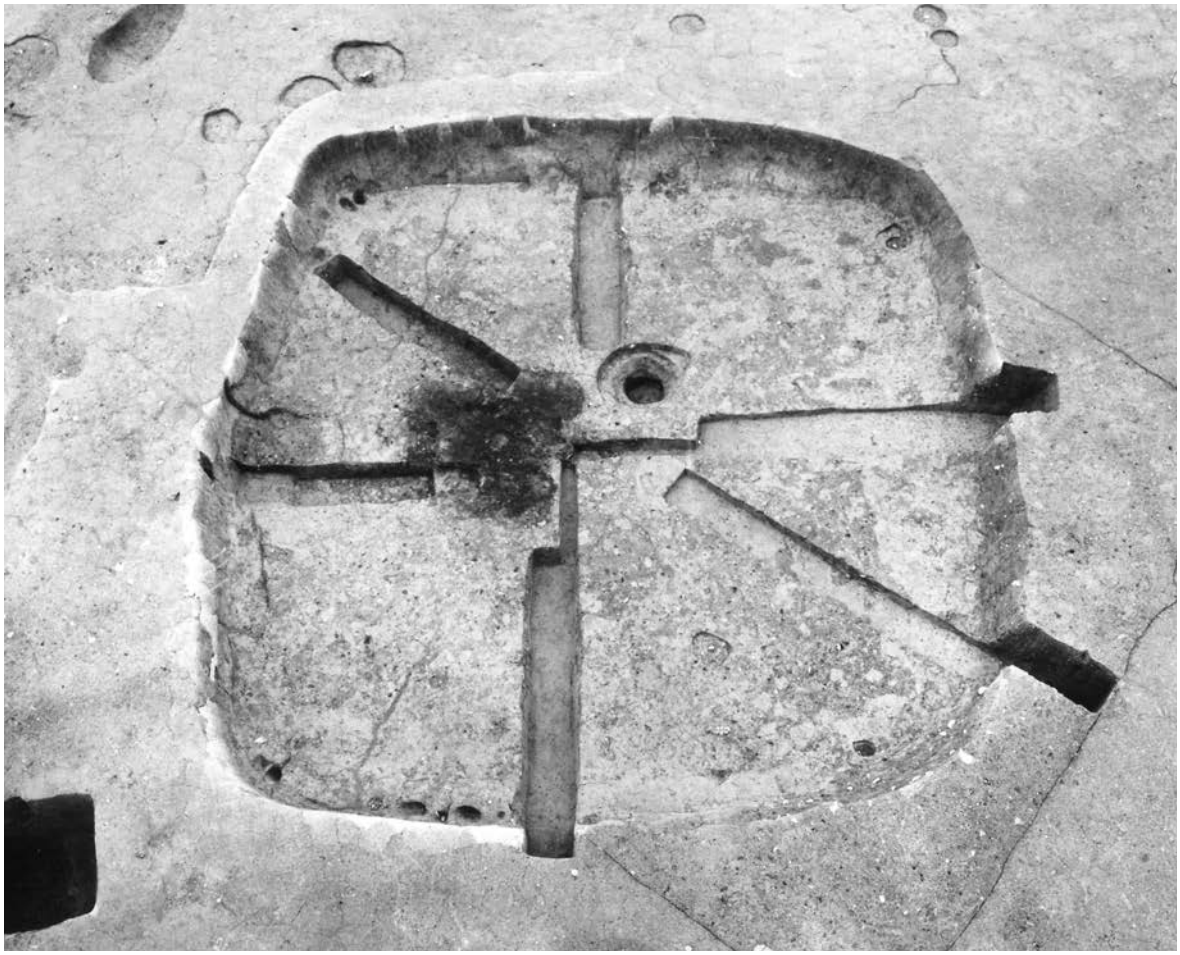
写真図版10　遺構

1　SH6-2・3　東西土層断面（東半）

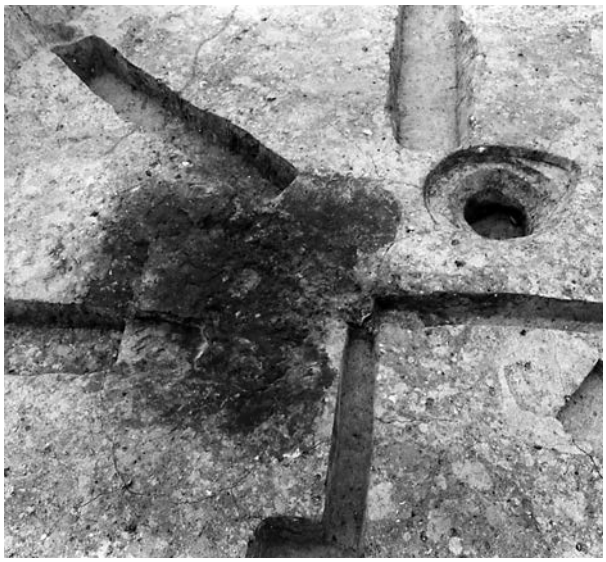
2　同（部分）

3　SH6-2　土器（115の一部）出土状況（西から）

4　SH6-2　中央焼土坑検出状況（北東から）



1　SH6-3　全景（北から）

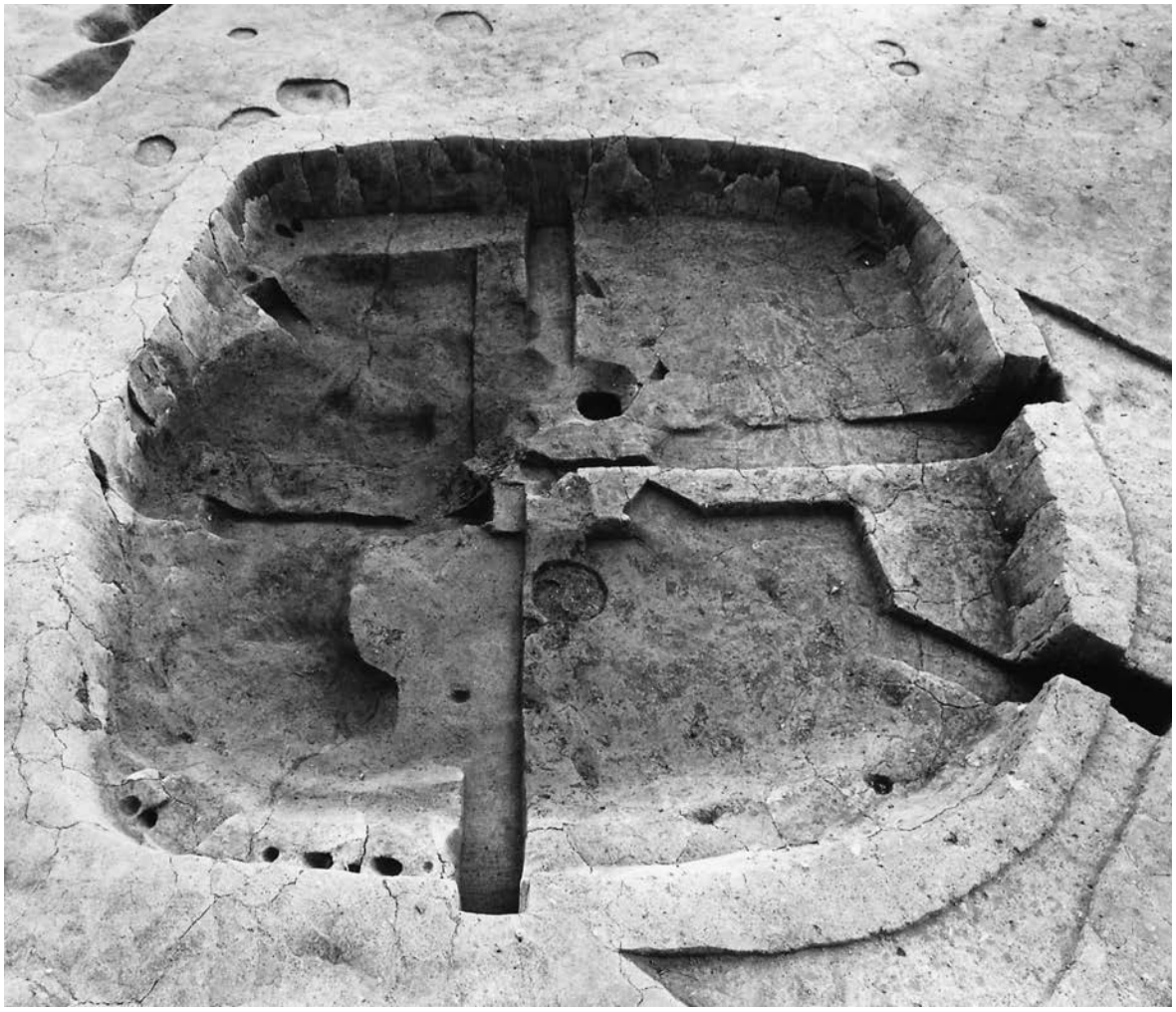


3　SH6-3　イチマル土坑全景（北から）

2　SH6-3　マル土坑土層断面

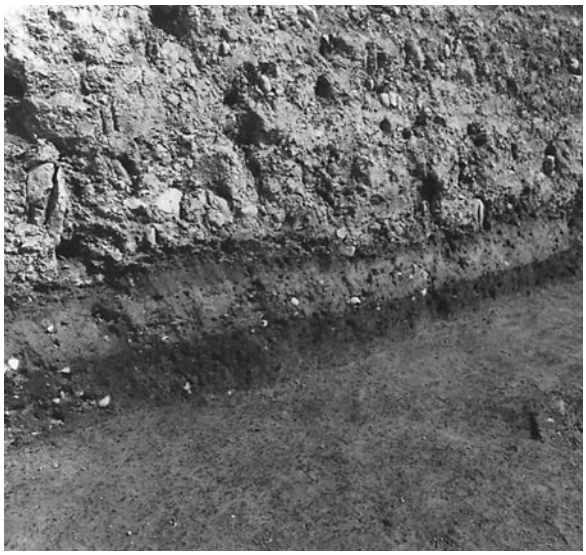
1　SH6-3　イチ土坑土層断面

2　SH6-3　イチ土坑検出状況（南から）



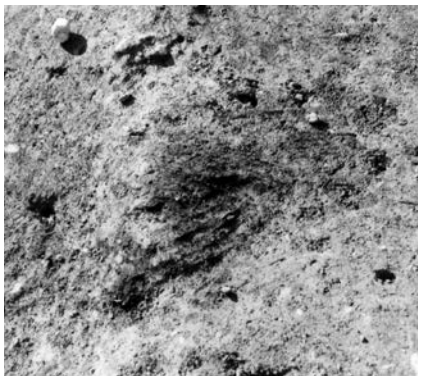
3　SH6-3　下部構造全景（北から）

1　SH7　全景（北西から）



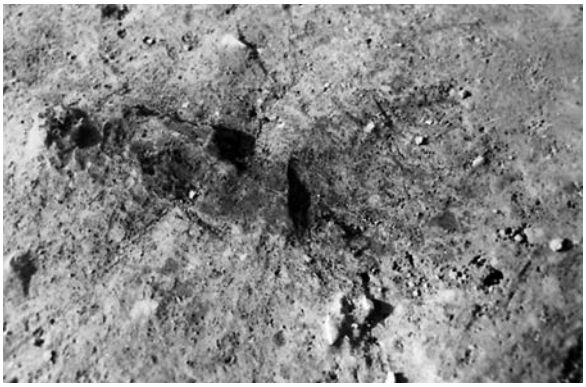
2　SH7　土層断面

1　SH8-1　炭・焼土検出状況（西から）



3　イネ科の可能性がある繊維材（東から）

2　同詳細（南東から）



4　板状の炭化材とイネ科の可能性がある繊維材（東から）

1　SH8-1　炭化材出土状況（西から）

2　SH8-1　炭化材出土状況（南東から）

3　同詳細（南東から）

1　SH8-1　全景（西から）

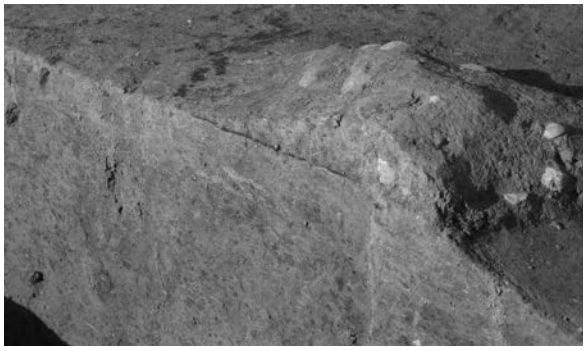
3　SH8-1-SP１　土層断面

2　SH8-1　西半土層断面

4　SH8-1　台石（S２）出土状況（南東から）

1　SH8-2　全景（東から）

2　SH8-2　イチマル土坑全景（南東から）



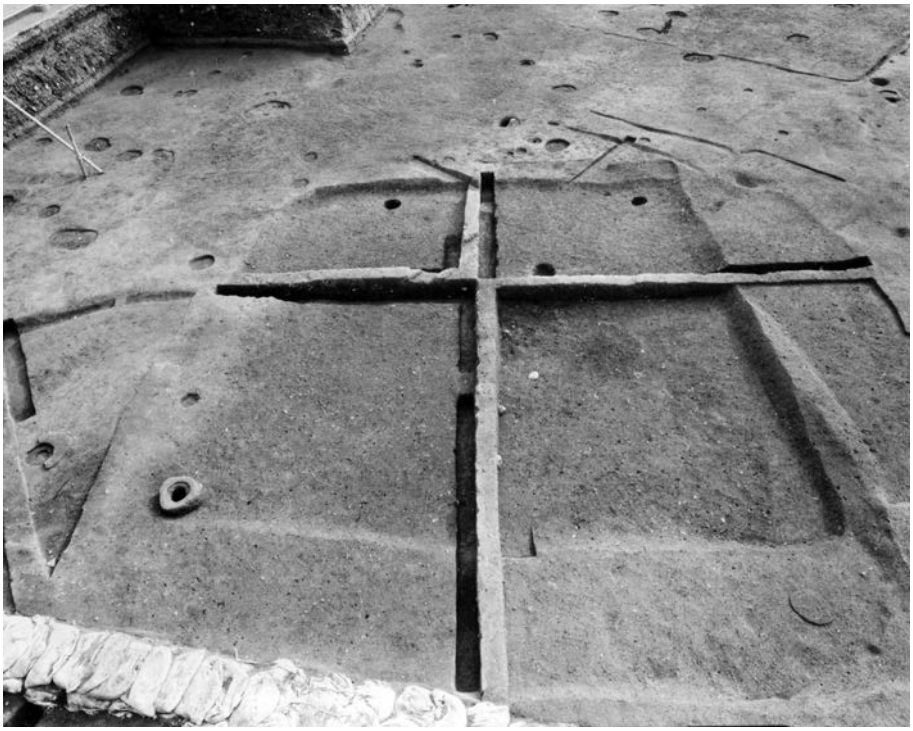
1　SH8-2　イチマル土坑土手盛土と貼床土層断面

2　SH9　全景（北から）

3　SH9　イチマル土坑全景（北から）

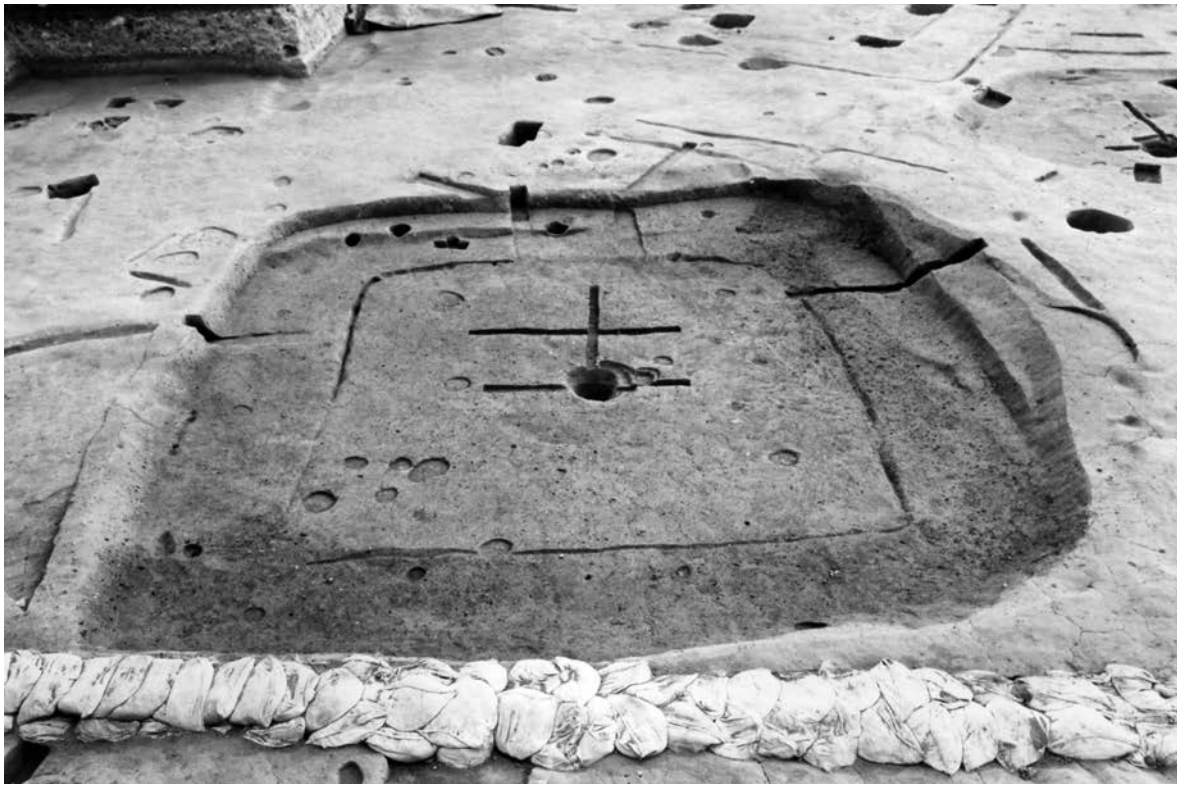
1　SH9　イチマル土坑　土層断面

2　SH9　床面　被熱状況（南西から）



3　SH10　全景（北から）

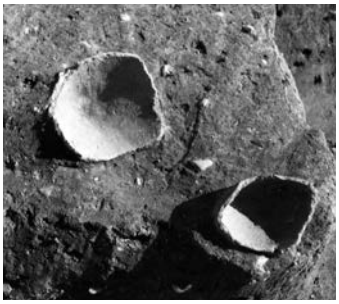
4　SH10・20土層断面（部分）



1　SH20　全景（北から）

2　SH20　イチマル土坑（北東から）

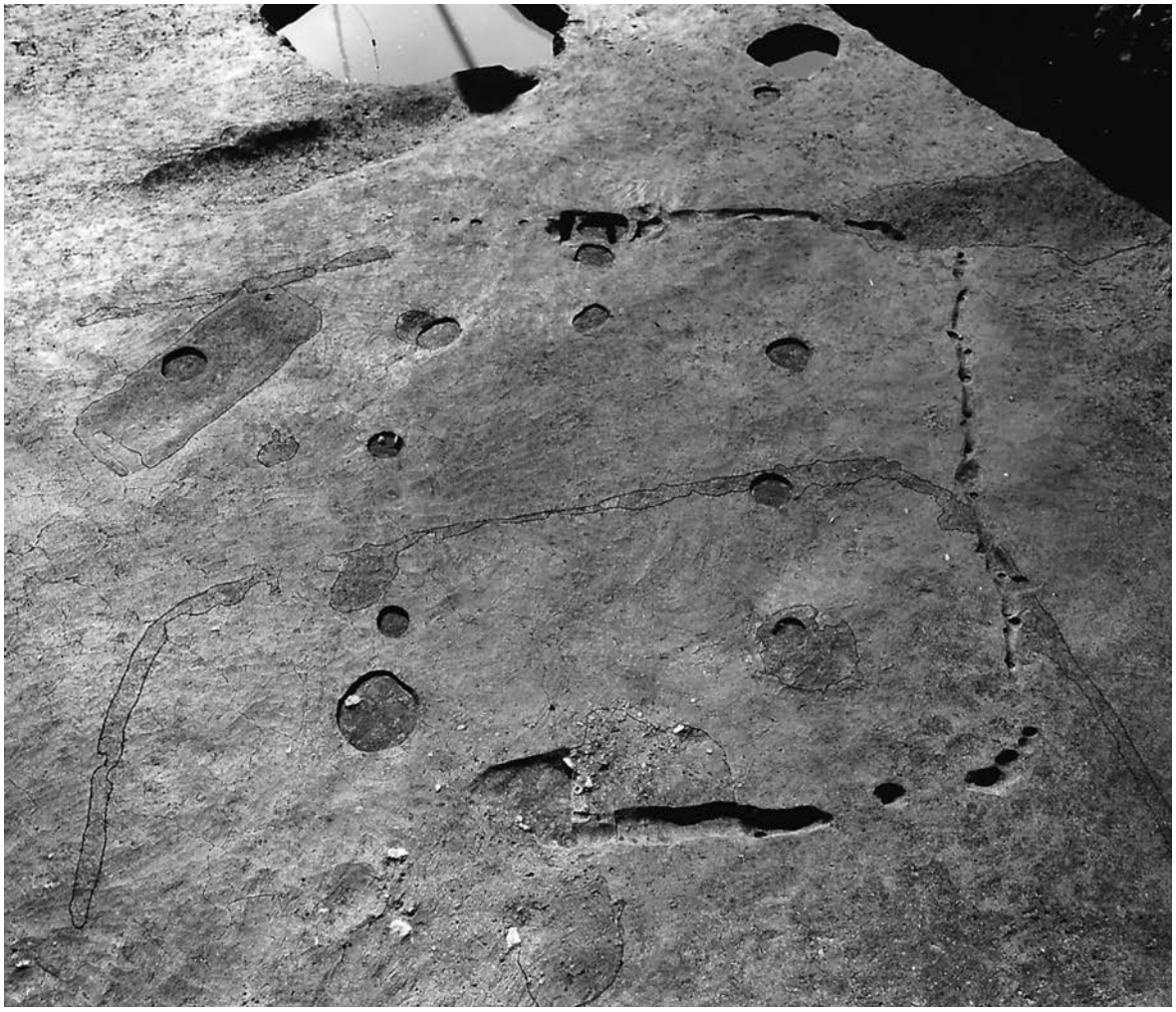
1　SH20　ベッド状遺構北辺土層断面



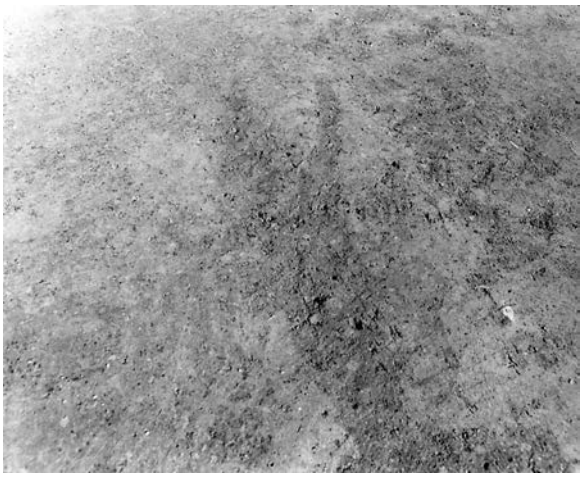
2　SH20　ベッド状遺構盛土内土器(224･225)出土状況(西から)

3　SH11　全景（北東から）

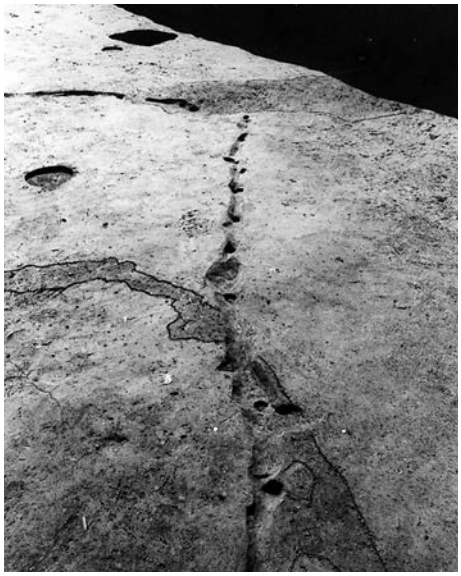
4　SH11　土層断面



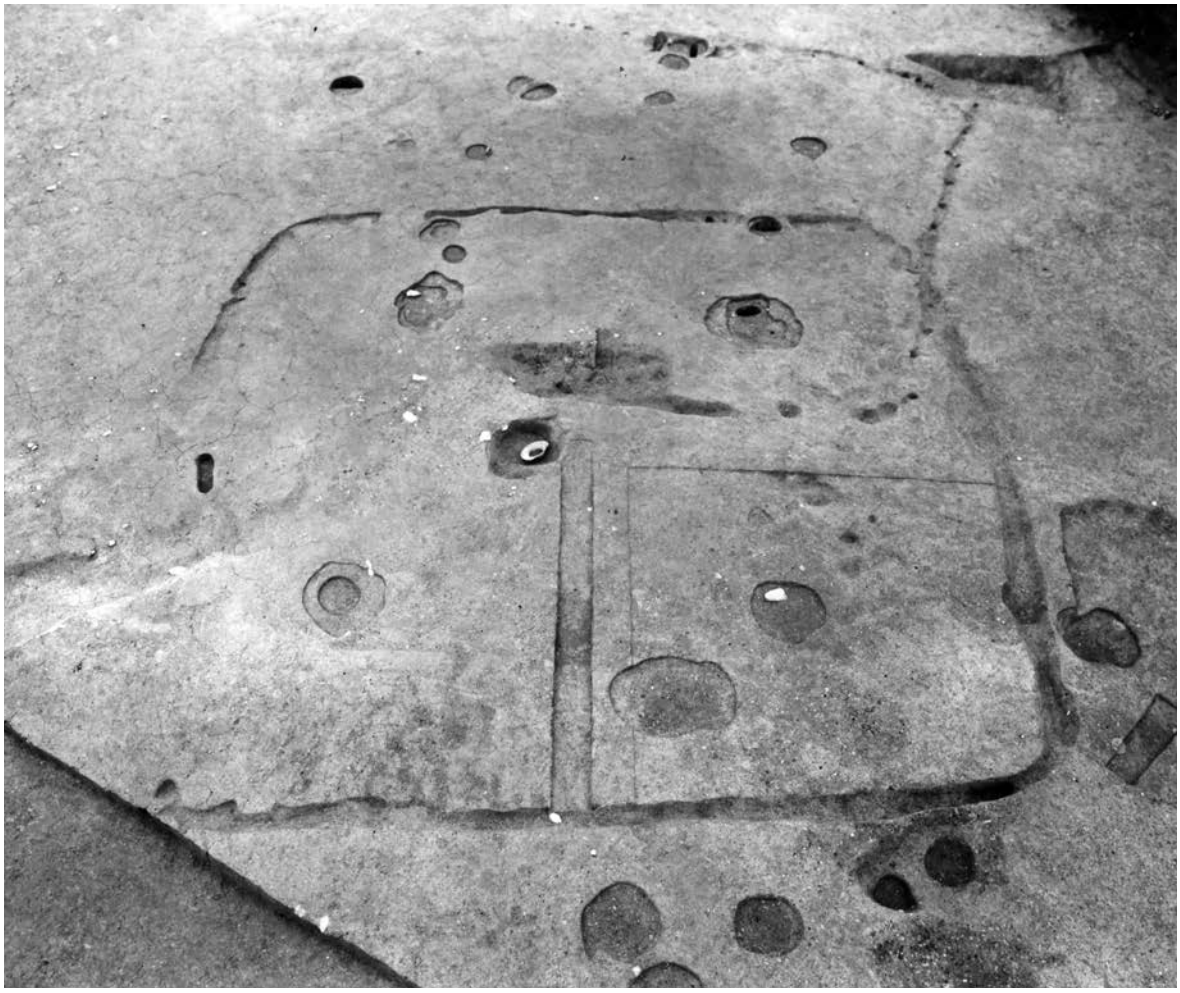
1　SH12　全景（北から）



2　SH12・13　周壁溝検出状況（南から）

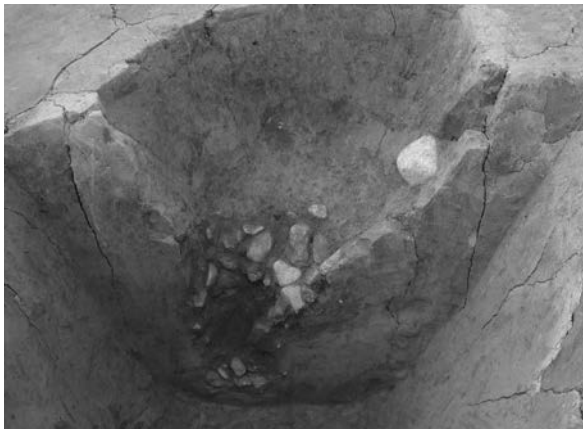


3　SH12　周壁溝西辺（北から）



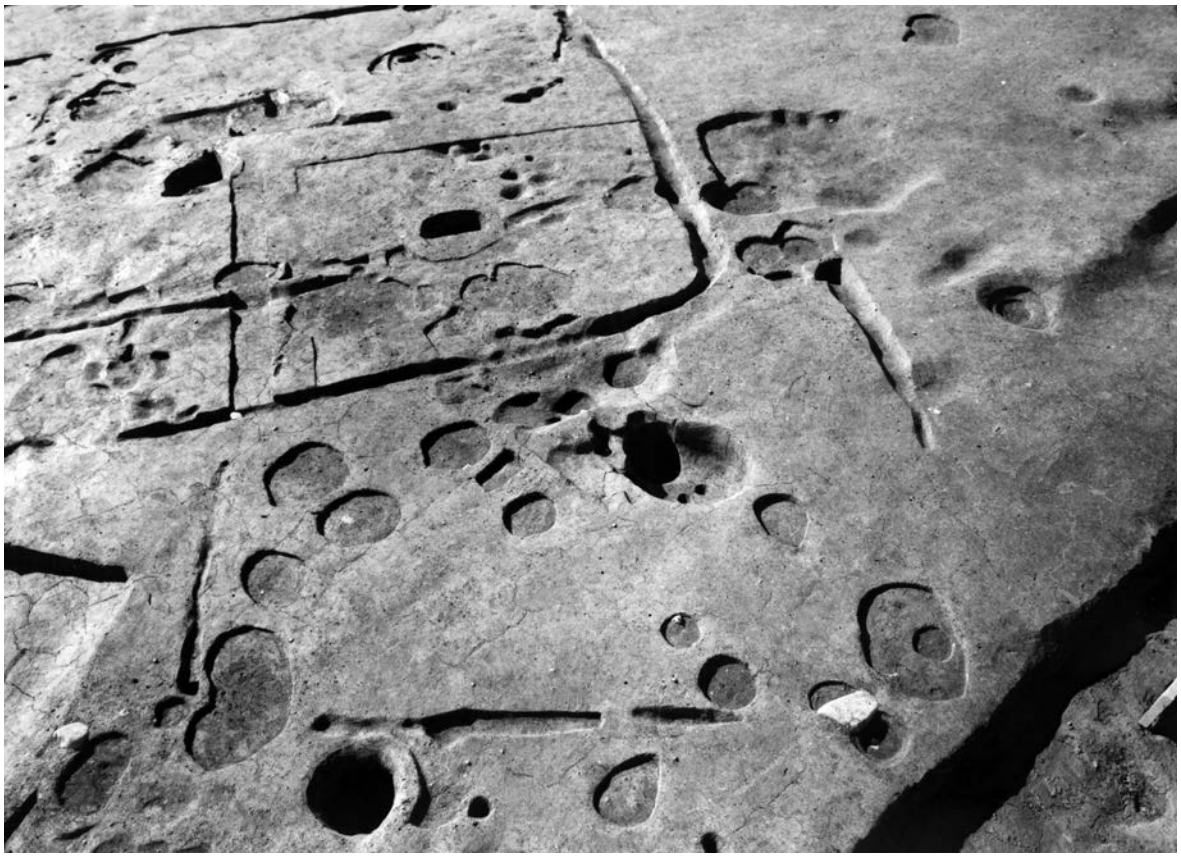
1　SH13　全景（北から）

2　SH13　イチマル土坑全景（北西から）



3　SH13-SP4　土層断面

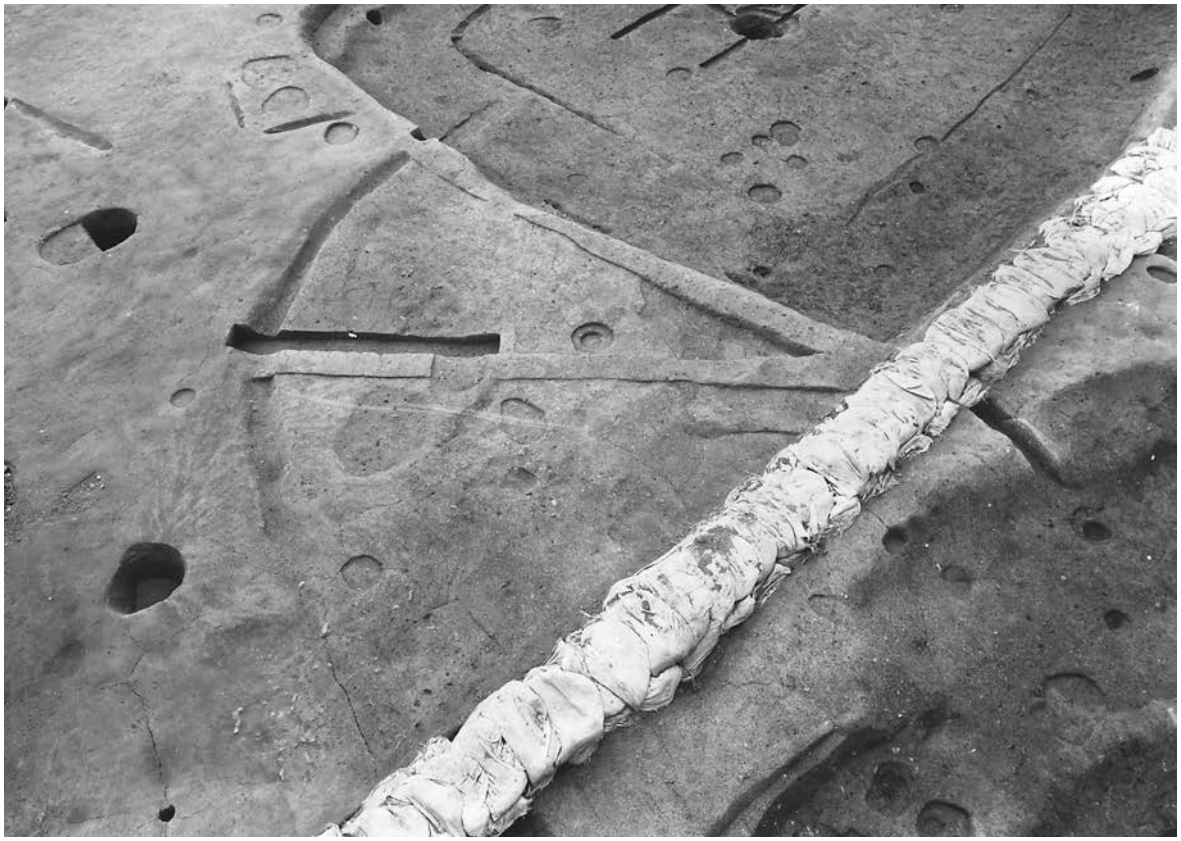
1　SH14　全景（北東から）



2　SH15　全景（北から）

1　SH16　全景（北から）

2　SH18　全景（北東から）

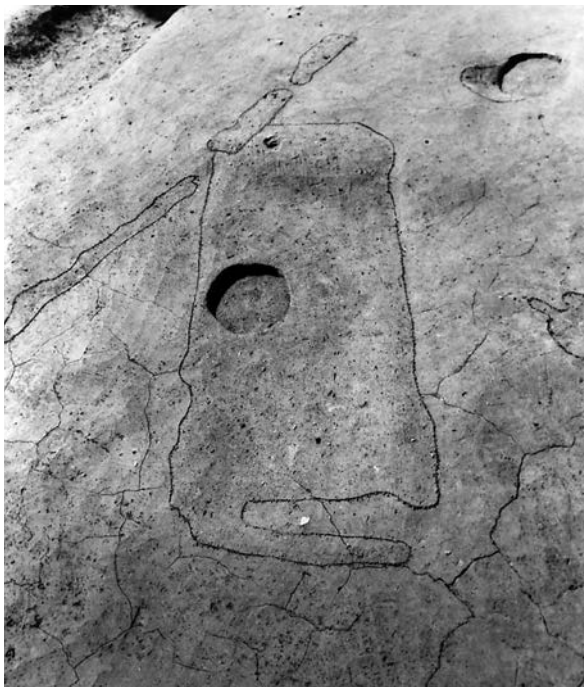


1　SH19　全景（北東から）

2　SB1　全景（北西から）

1　SK6　土器（243-255）出土状況（南から）

2　同　部分（北から）



3　ST1　検出状況（東から）

4　ST1　全景（北東から）

1　ST2　全景（東から）

2　ST3　全景（東から）

3　ST4　小口溝　検出状況（北から）

4　ST4　全景（北から）

5　ST5　全景（東から）

6　ST6　全景（東から）

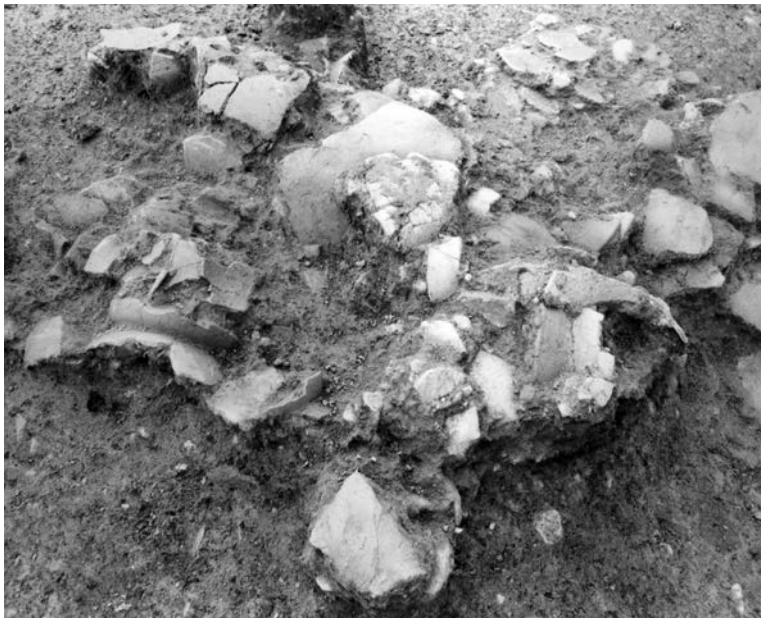
1　SP25土器（256・257）出土状況（西から）

2　SP82土器（259）出土状況（南東から）

3　SD1土器出土状況（南東から）

1　SD1　土器（285・338）出土状況（北から）

2　SD1　土器（343･344）出土状況（北から）



3　SD1　土器(295･297～299
出土状況(北から)

4　SD1　全景（北西から）

1　SD1のSR1への取り付き部分(南東から)

2　同　部分（南東から）

3　同　部分（東から）

1　SR1　全景（北東から）

2　SR1　土層断面

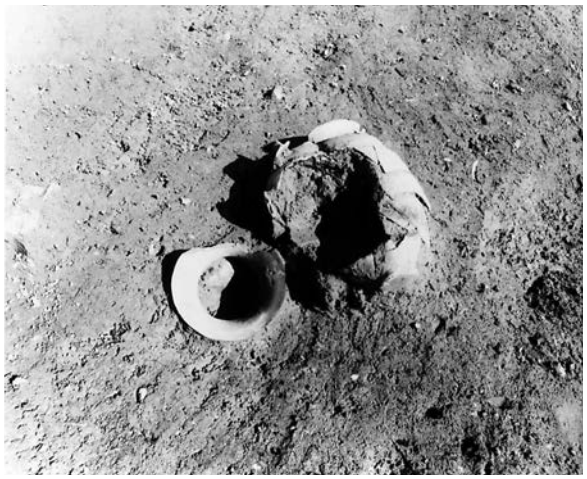
1　SR1　杭郡　検出状況（北西から）

2　SR1　杭・矢板　検出状況（南西から）

4　SR1　矢板2打ち込み状況（南西から）

3　SR1　矢板1・2・3打ち込み状況（南西から）

1　SR1　7～12土層　土器溜まり検出状況（東から）



2　SR1　土器（374・377）出土状況

4　SR1　土器（388）出土状況

3　SR1　土器（375）出土状況

5　SR1　土器（426）出土状況

1　調査区西壁土層断面（北から約４ｍの地点）

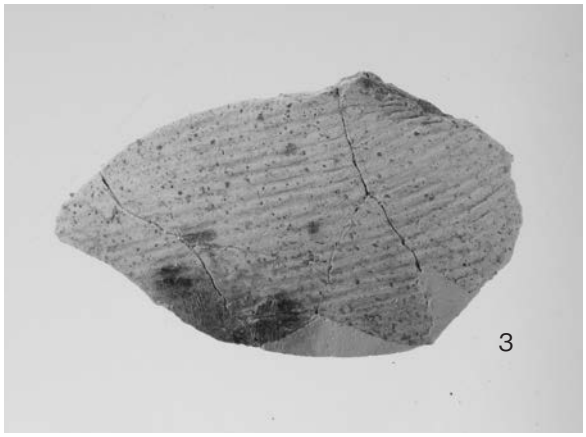
4　調査区断割り土層断面（西半）

2　調査区断割り土層断面（東端）

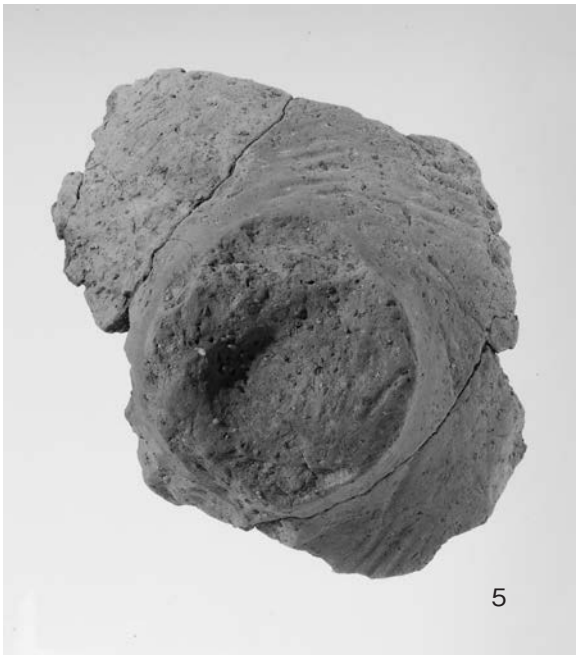
5　現地指導状況（立命館大学　青木哲也先生）

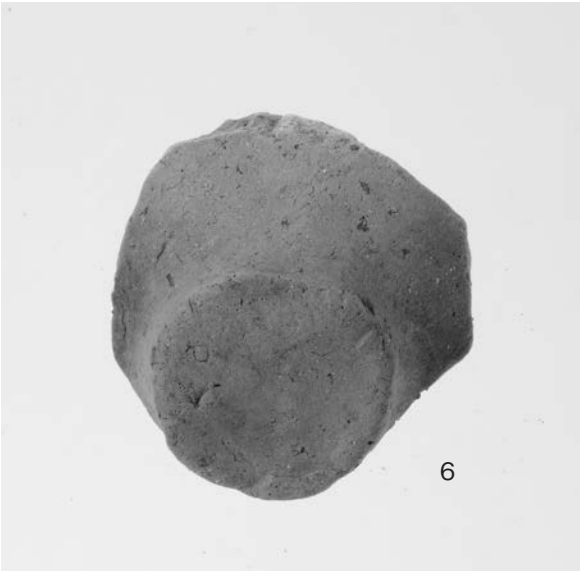
3　調査区断割り土層断面（東半）

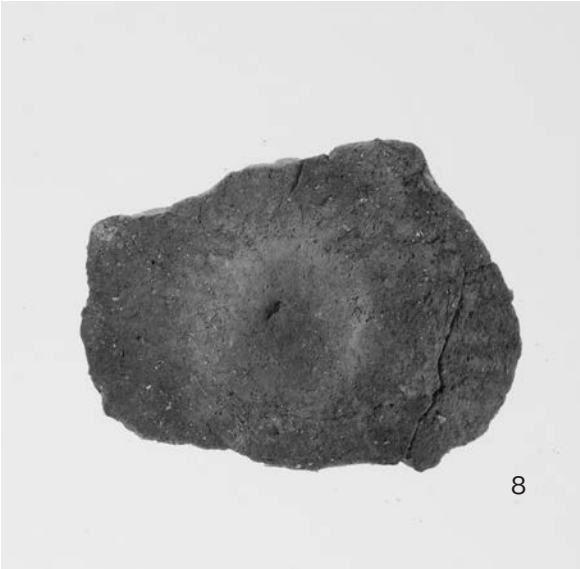
6　現地説明会状況（平成23年12月10日開催）

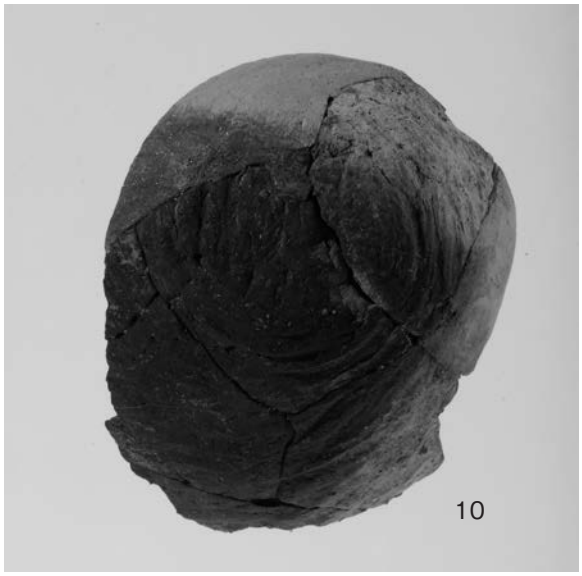

3

4

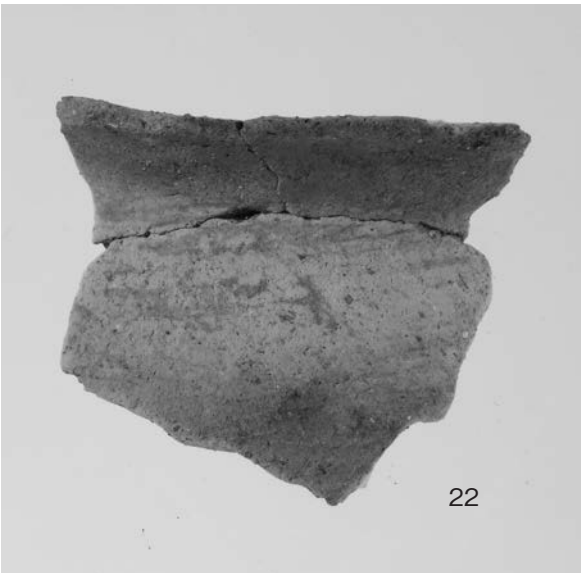

5


6

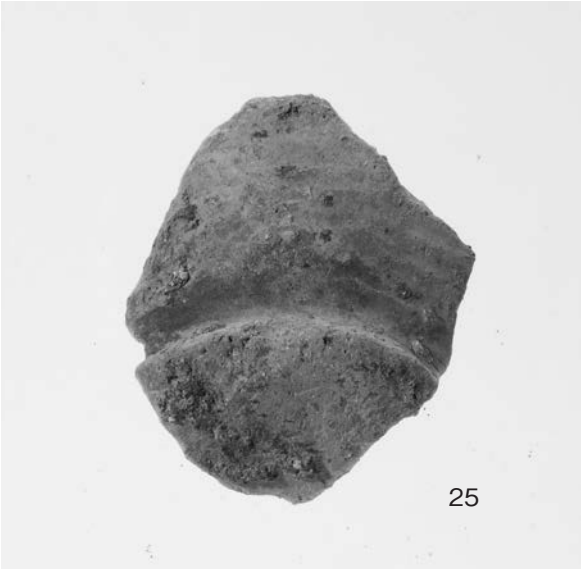

8


10

19

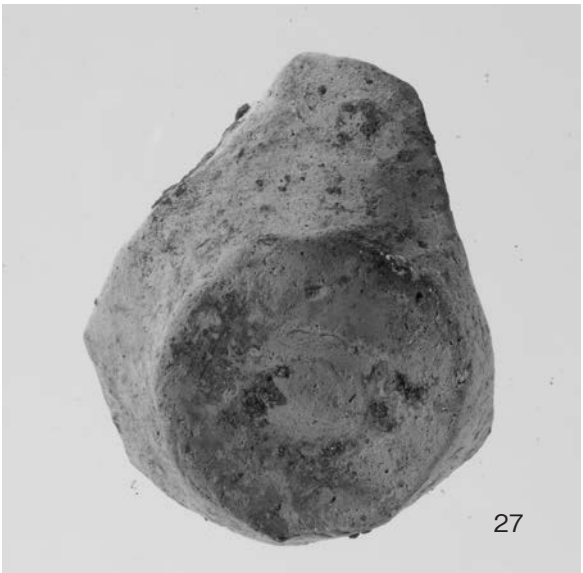

22

20


25

21

26


27

37

36

32

34

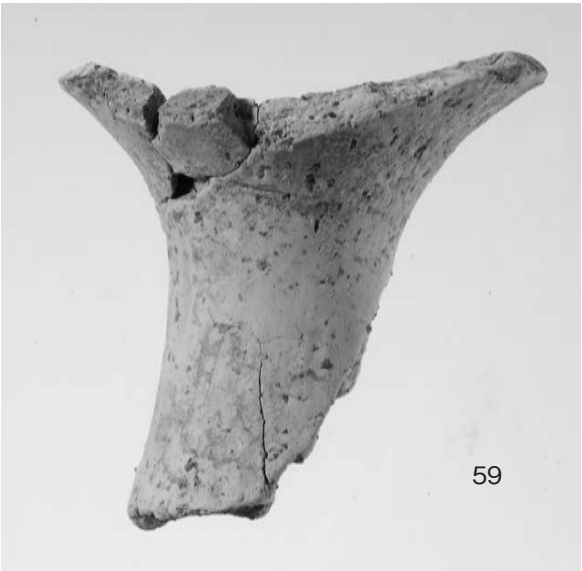
33

35

39

55

43


59

48

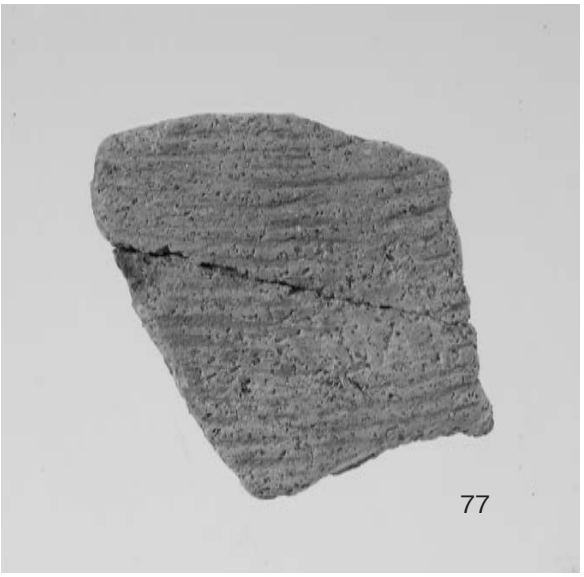
61

63

66

70

71


77

78

80

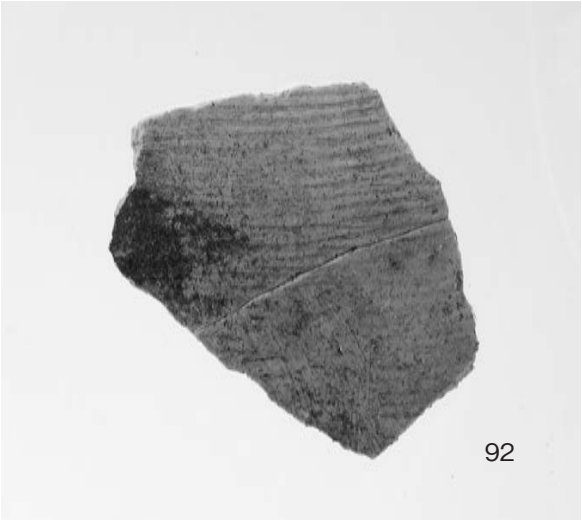
79

86

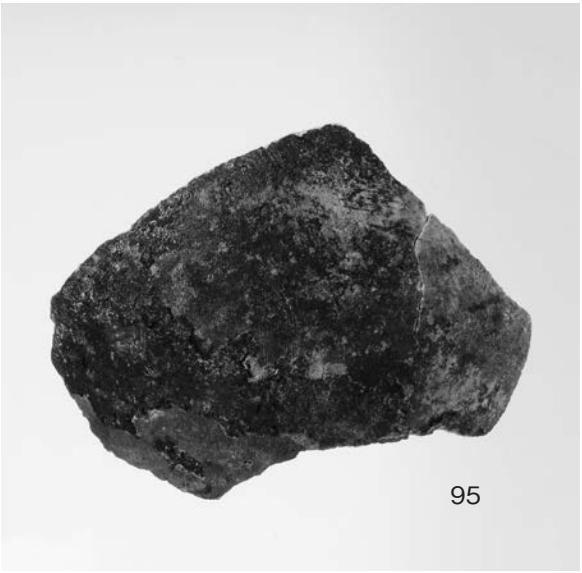
82（外面）

90

82（内面）


92

94


95

100

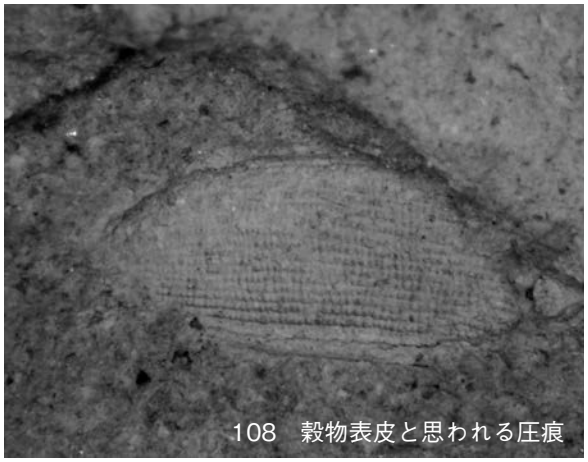
103

112（外面）

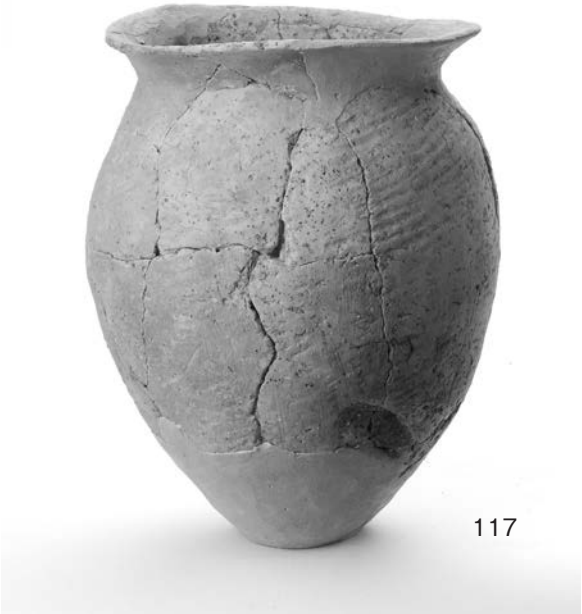
112（内面）

108

118


108　穀物表皮と思われる圧痕

119

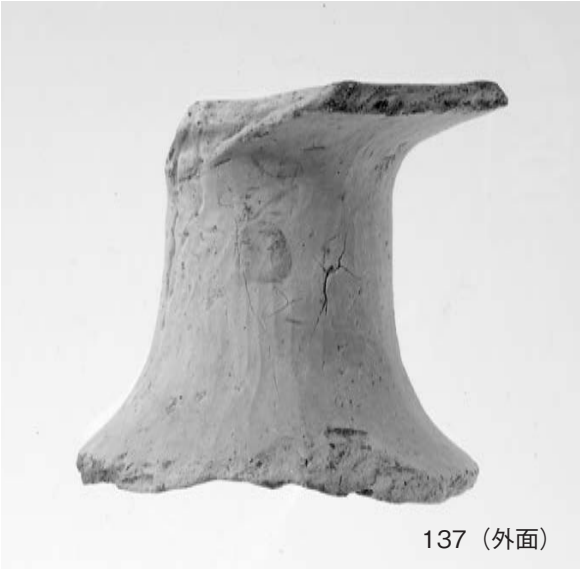

117

121

122

135

123


137（外面）

134

137（内面）

136

146

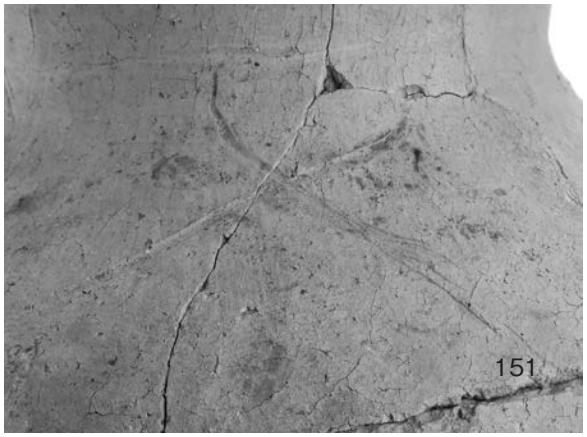
138

147

144

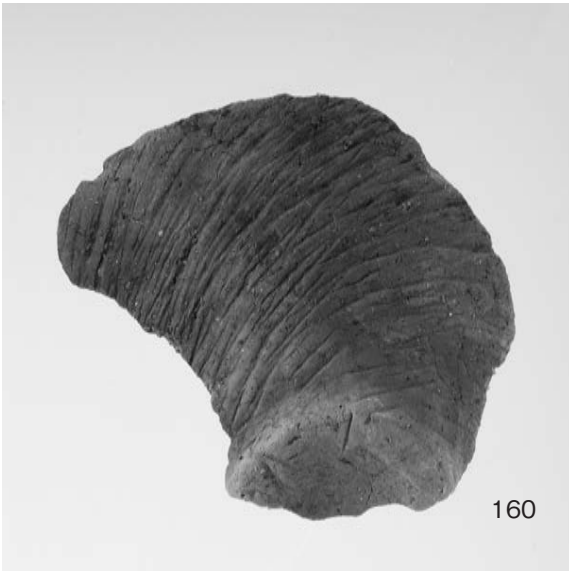
151

150

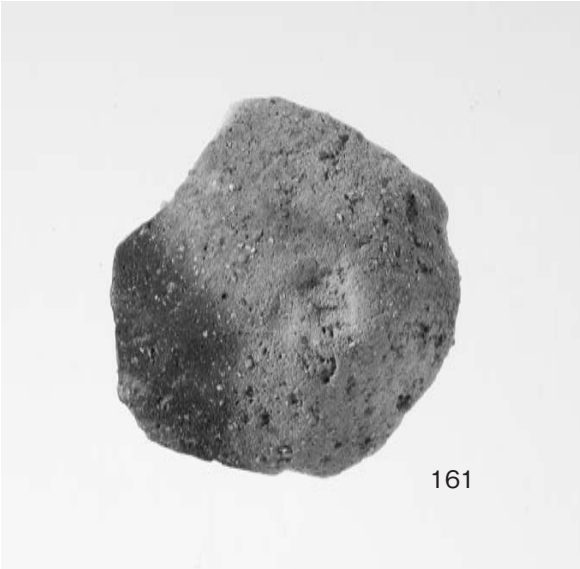

151

159

155


160

156


161

158

170

174

176

177

179

178

180

184

185

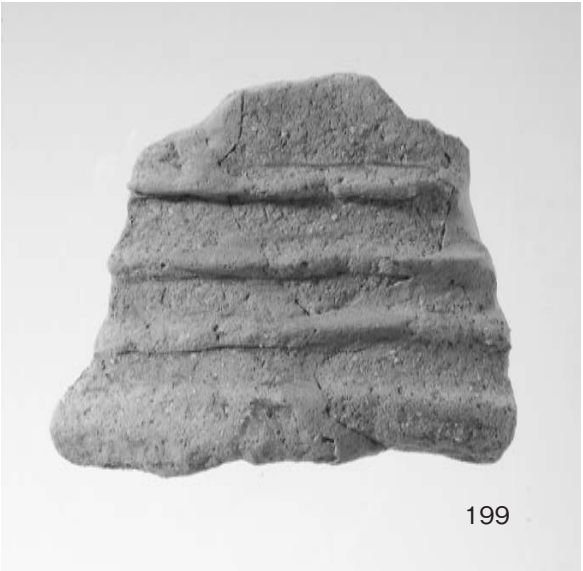
186

187

189

190

193

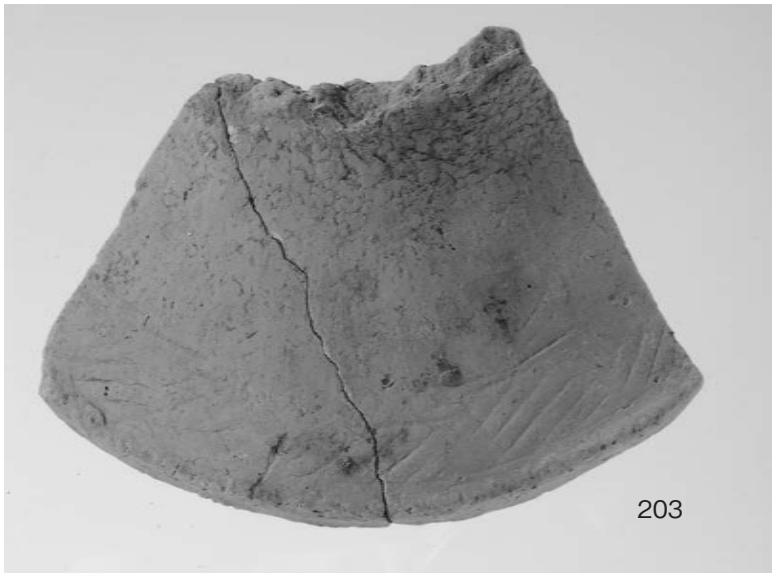

199

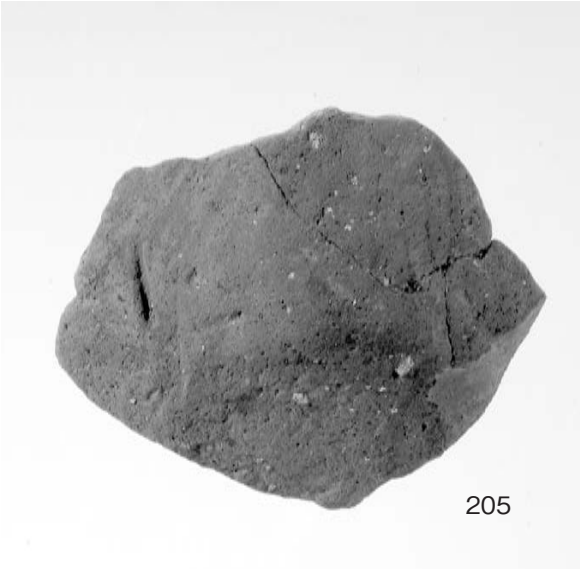
196

201

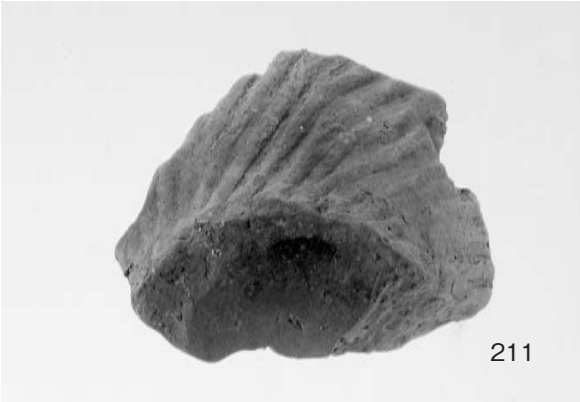
198

204

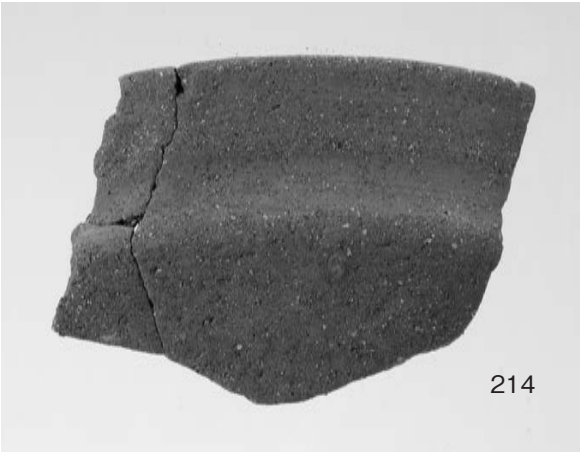

203


205

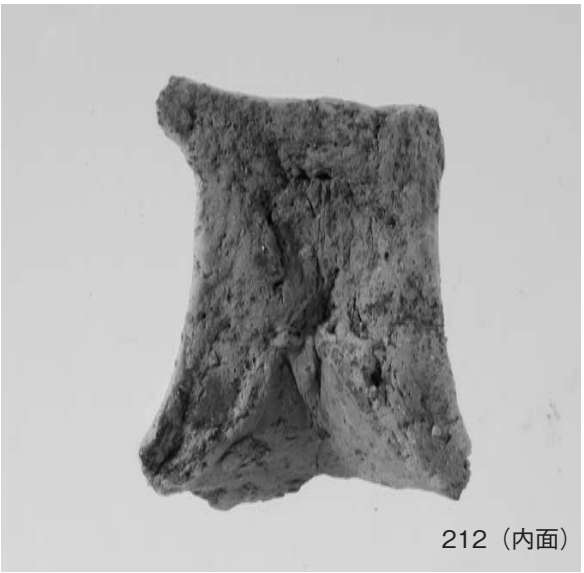
209


211

207


214

212（外面）


212（内面）

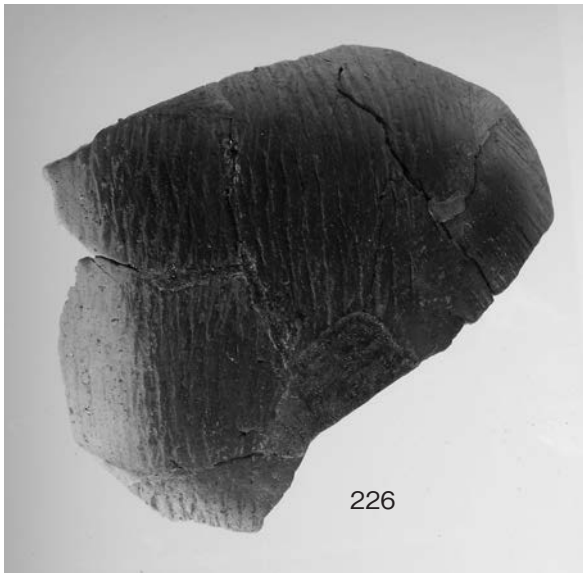
217

218

225

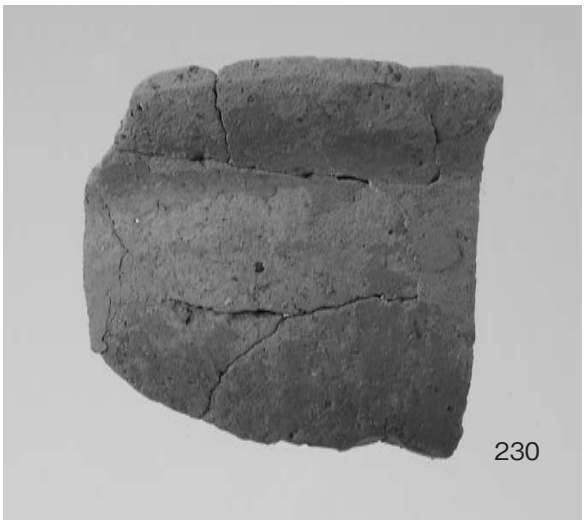
223

224


226

229

228


230

231

234

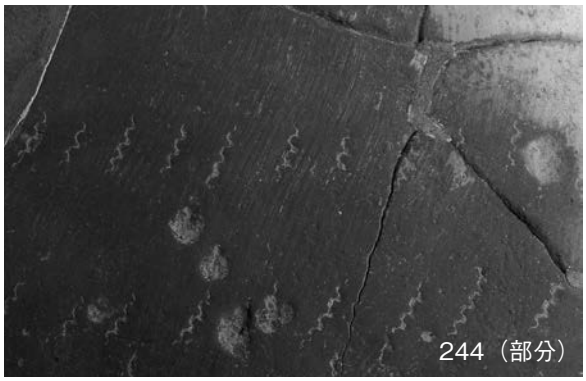
245

251

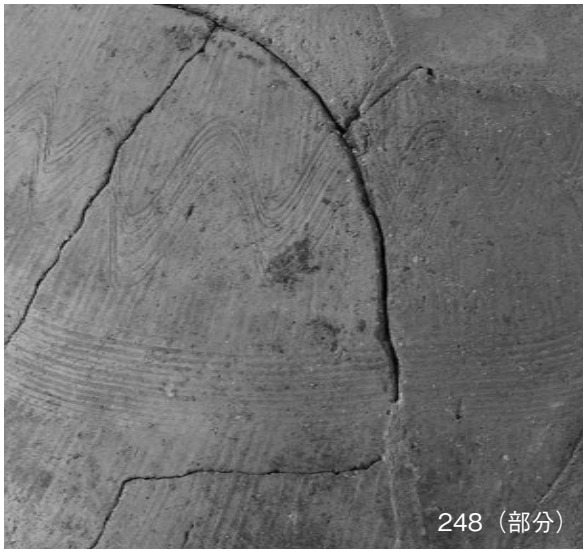
243

251

244


244（部分）

248

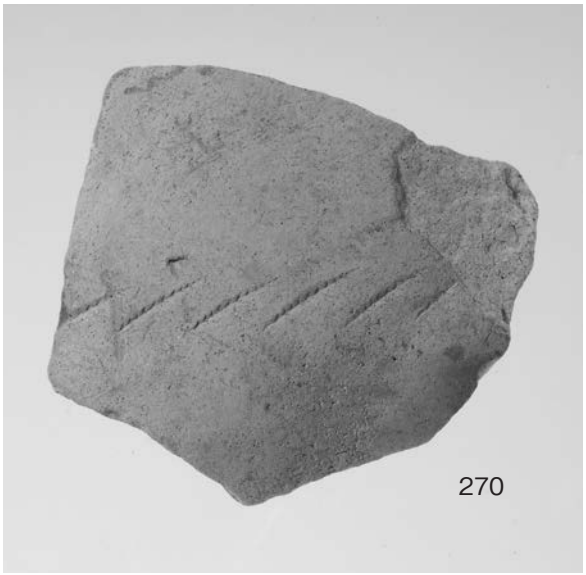

248（部分）

256

250

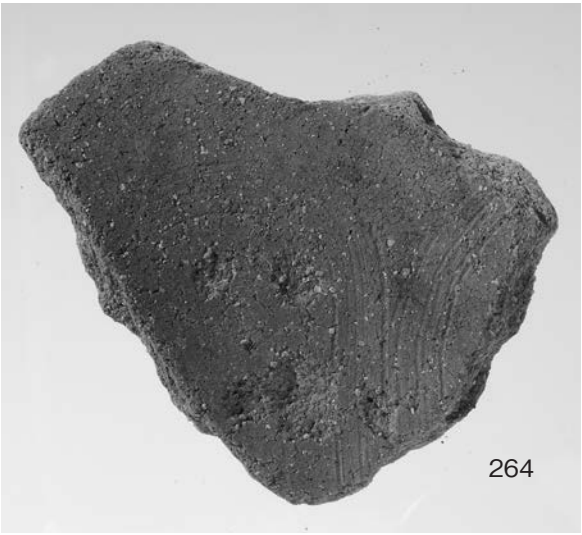
257

259

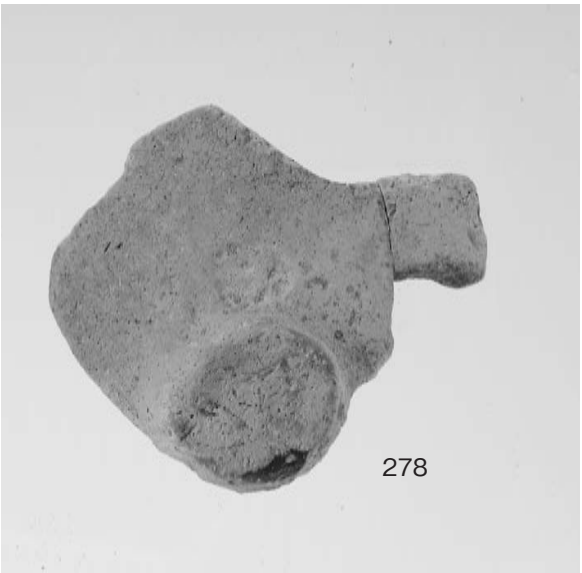

270

260

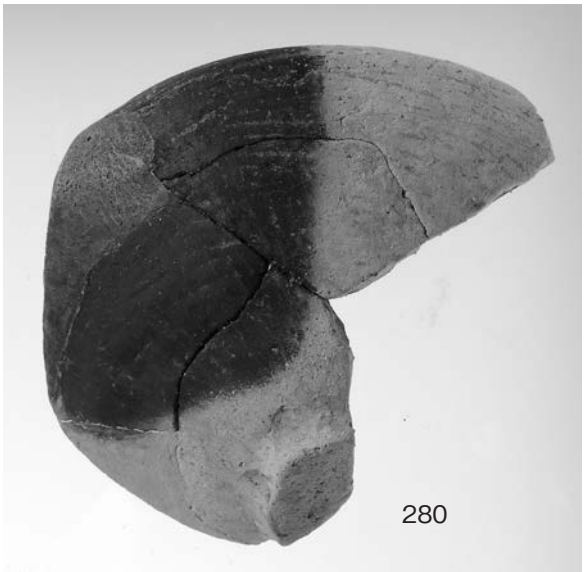
276


264

277


278

279


280

284

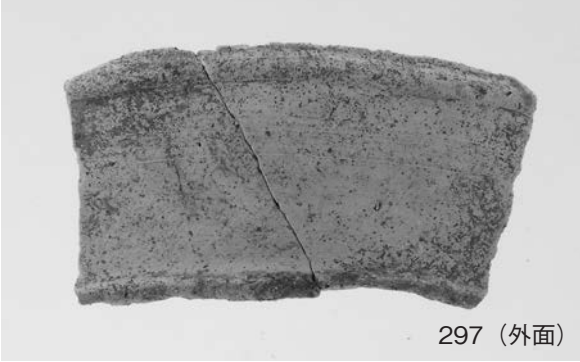
285

287

288

290

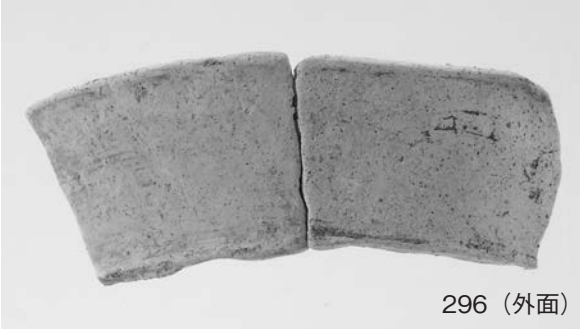
293

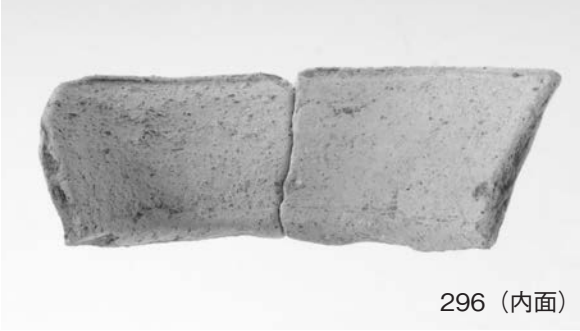

297（外面）

294

297（内面）

295


296（外面）


296（内面）

298

299

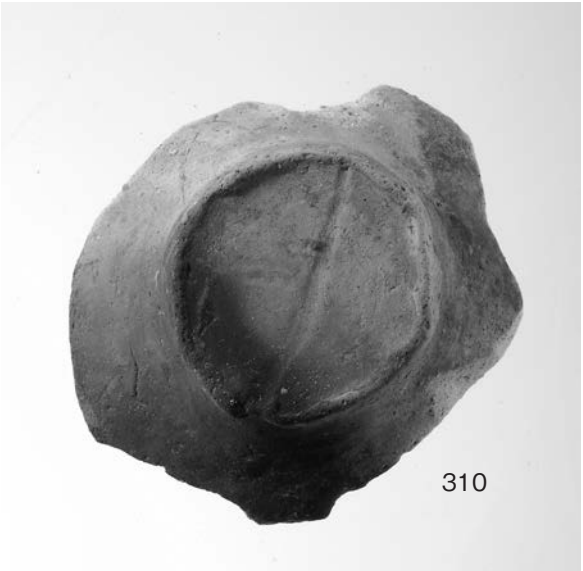
300

301

304

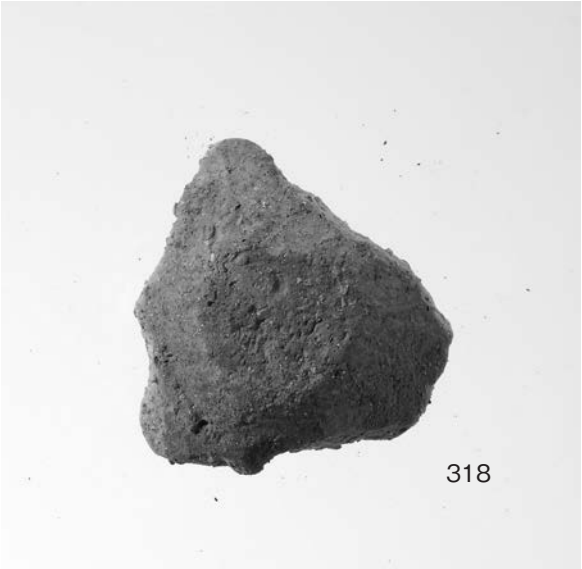
305

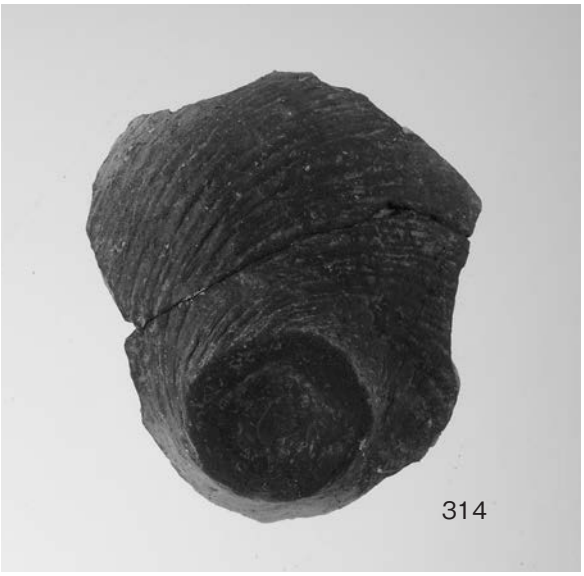
316


310

317

311


318


314

327

330

331

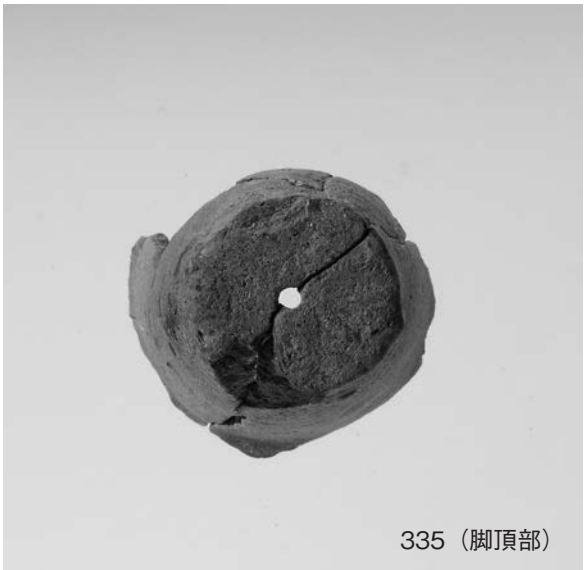
332（外面）

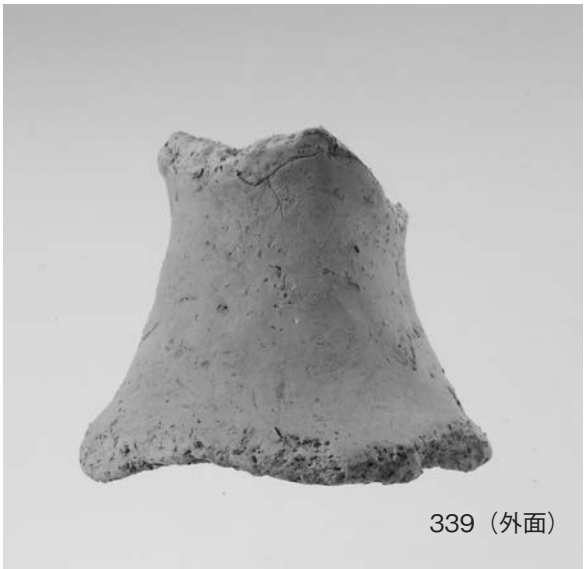
332（内面）

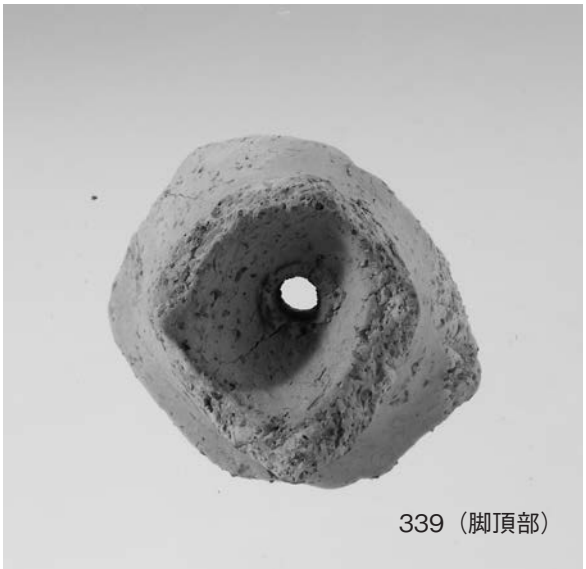
333（外面）

333（内面）

335（外面）


335（脚頂部）


339（外面）

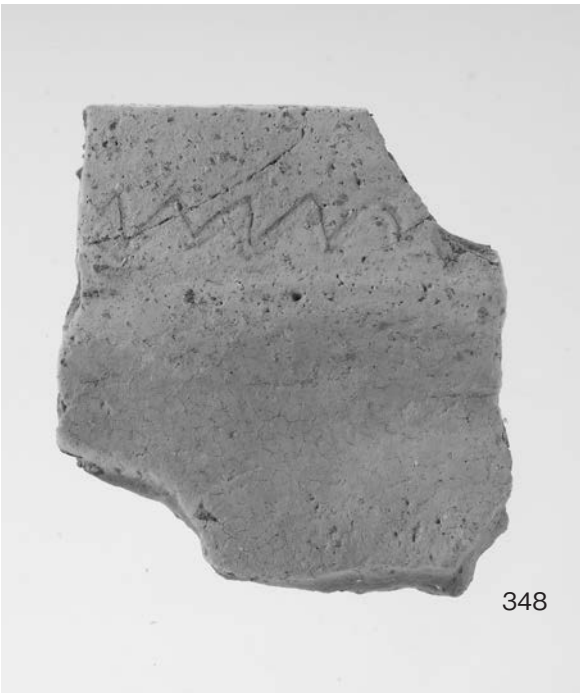

339（脚頂部）

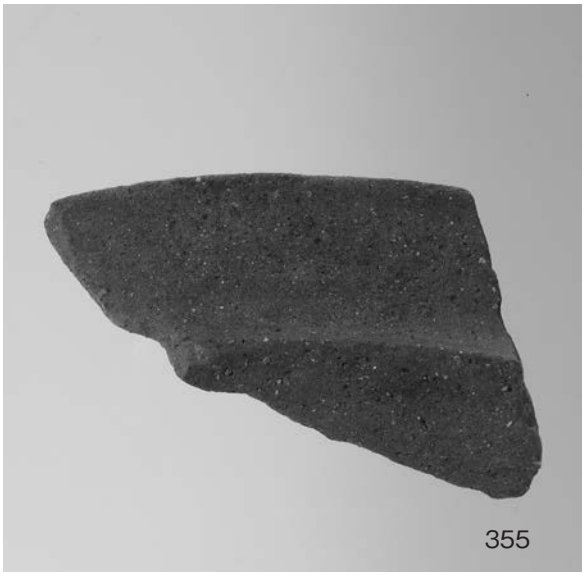
343

349

344

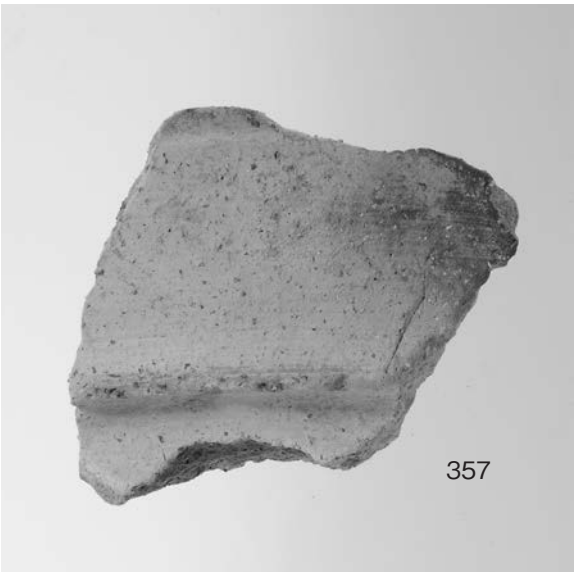
351


348


355

356

361


357

363

365

358

364

366

376

367

376（部分）

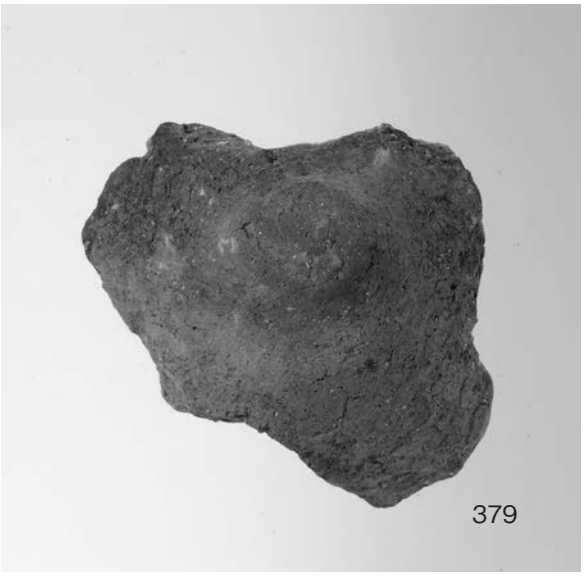
374

377

375

378

385


379

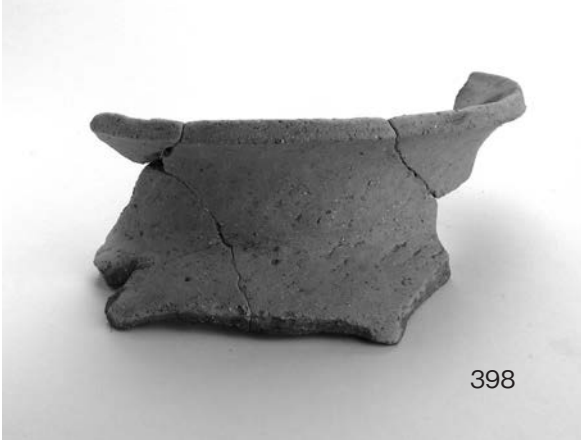
388

390

380

391

397


398

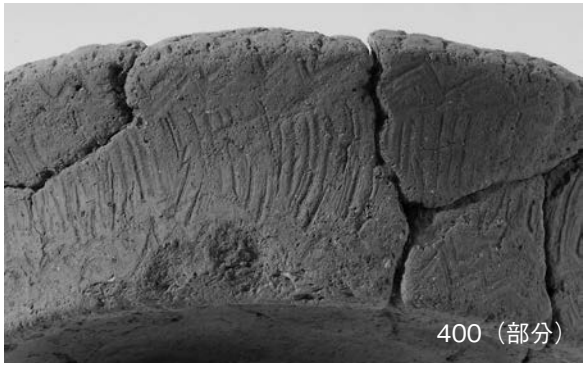
397（部分）

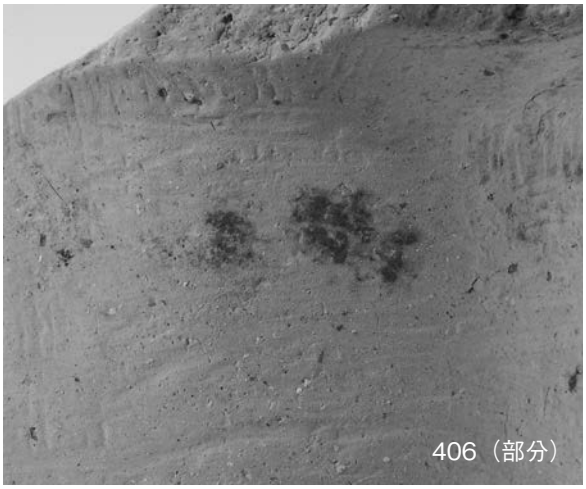
399

392

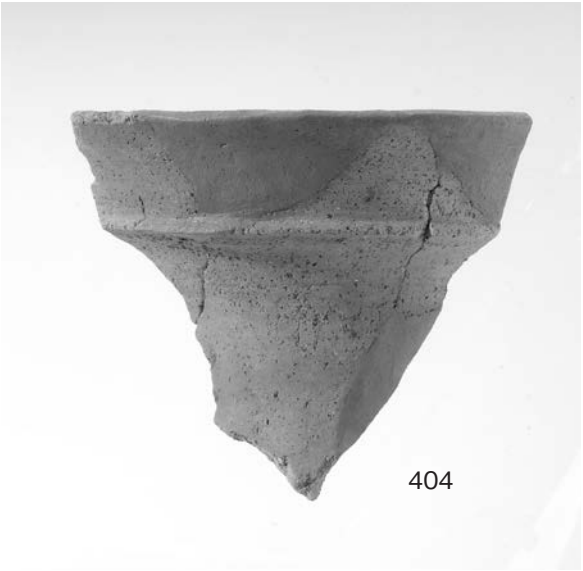
400

406

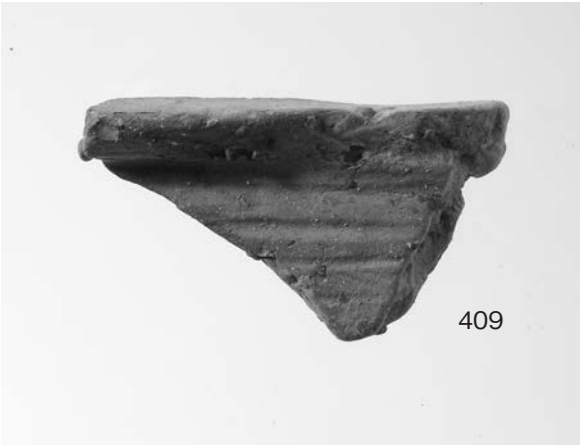

400（部分）


406（部分）

403


404

408


409

414

411

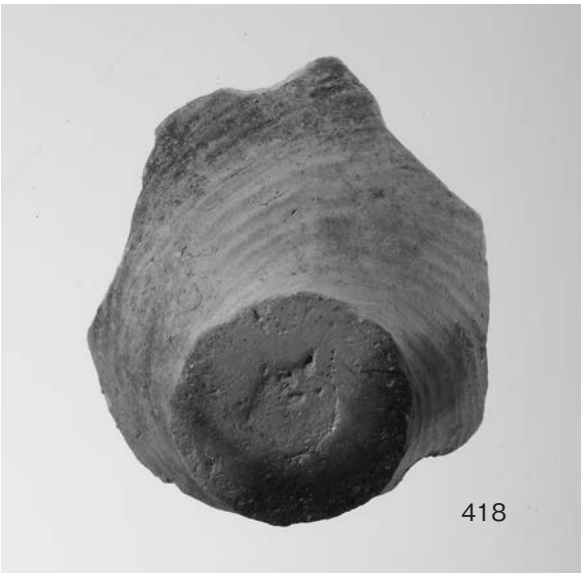
415

412

417

413

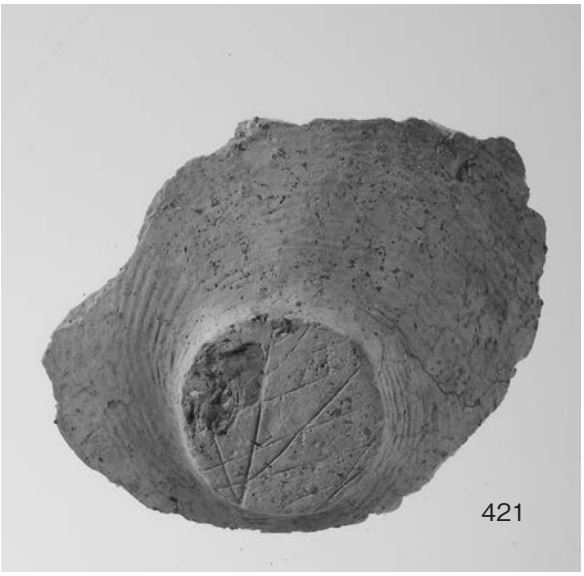
419


418

422

420

423


421

424

426

442（外面）

437

442（内面）

439

443

440

446

444

447

450

455

451

452

453

463

456

457

466

464

470

467

476

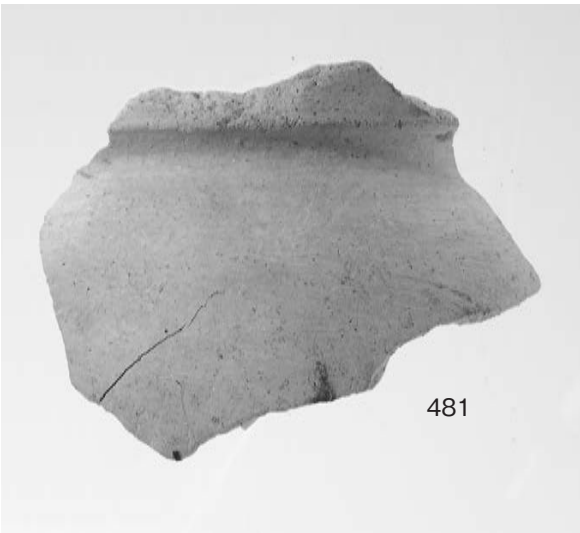
468

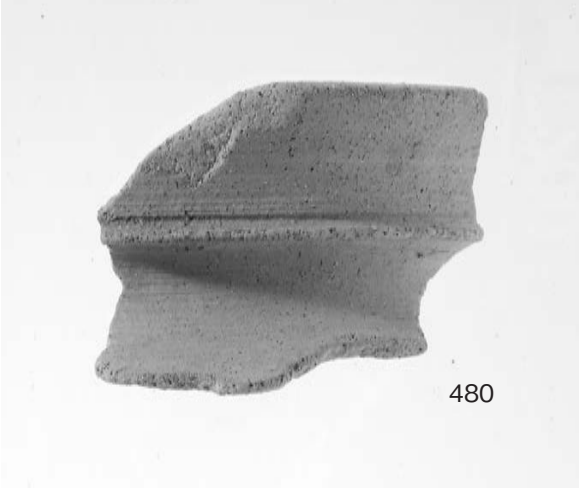
477

472

478

479


481


480

482

484

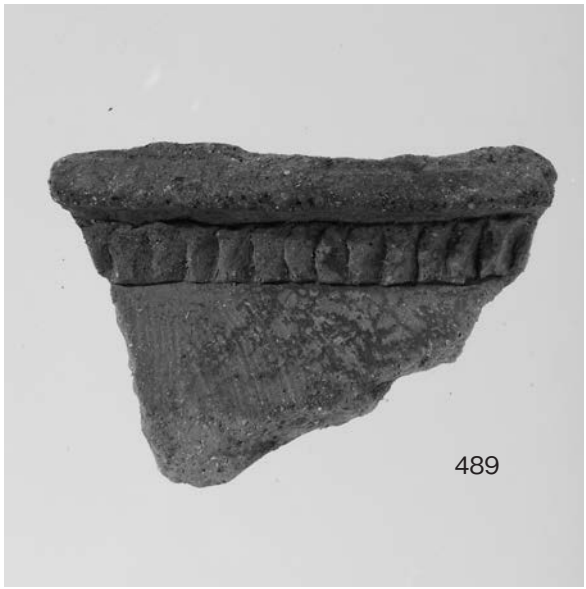
487

483

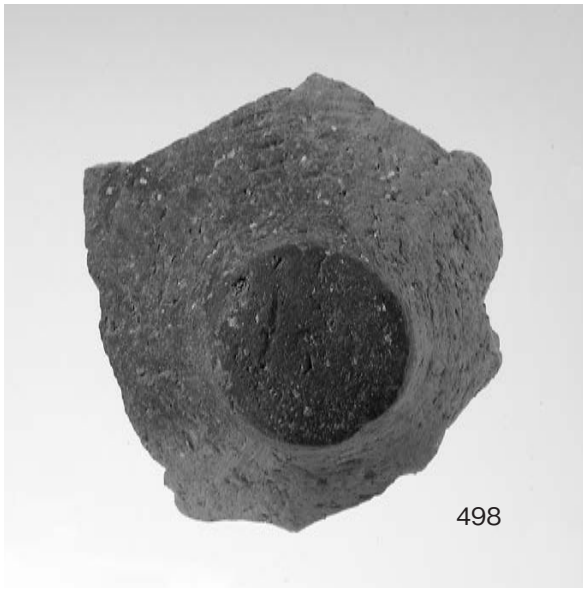
488

485

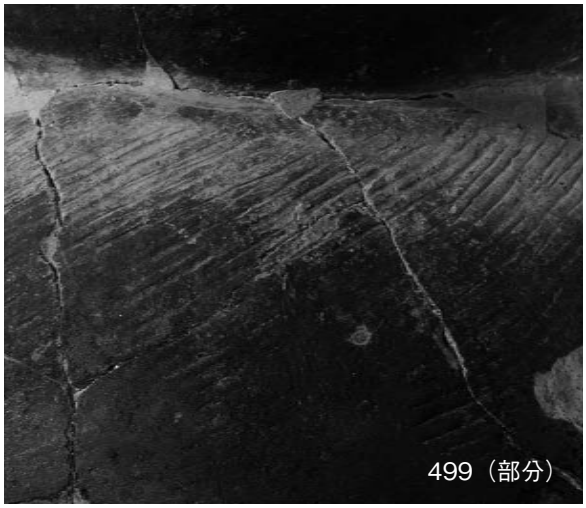
486


489

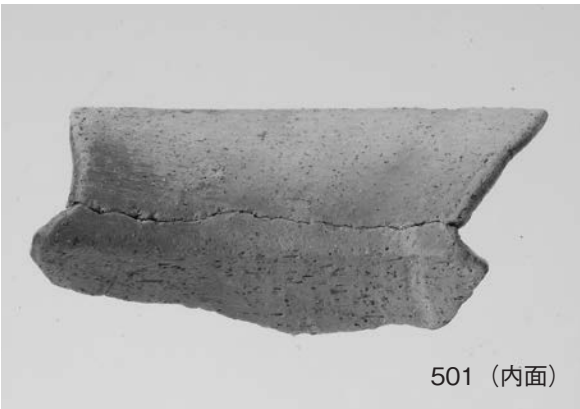
492


498

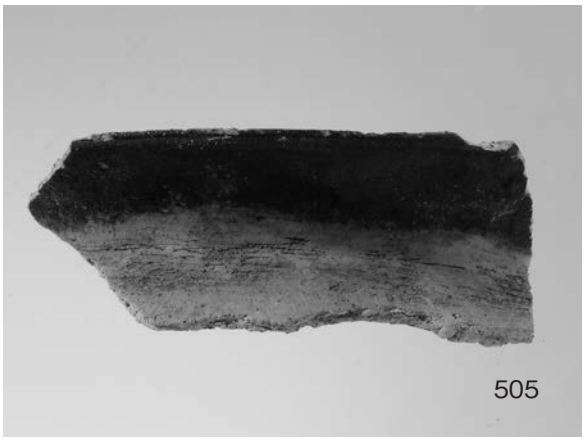
499


499（部分）

501（外面）

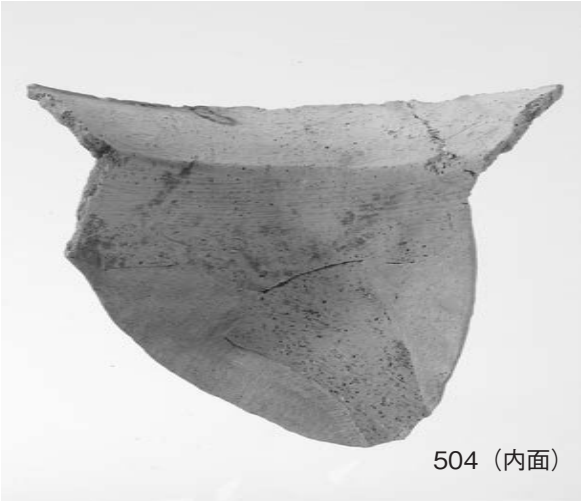

501（内面）

502


505

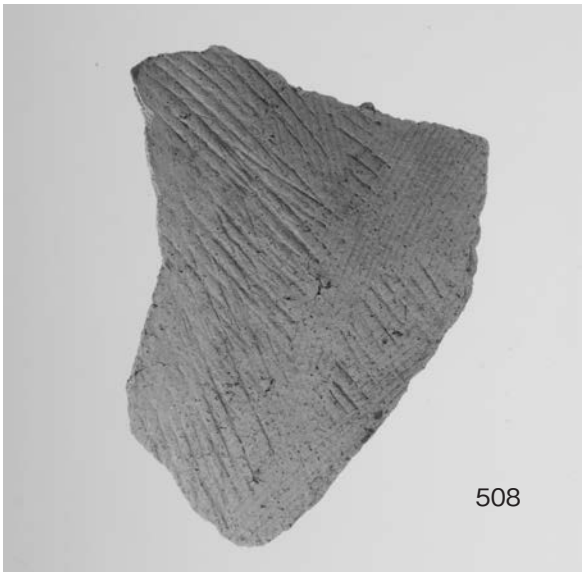
504（外面）

507（外面）


504（内面）

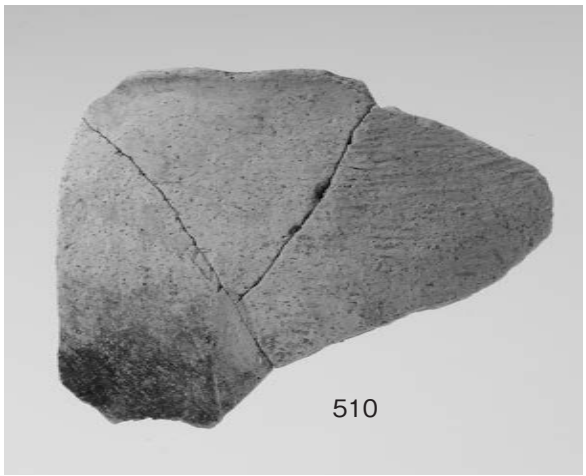
507（内面）

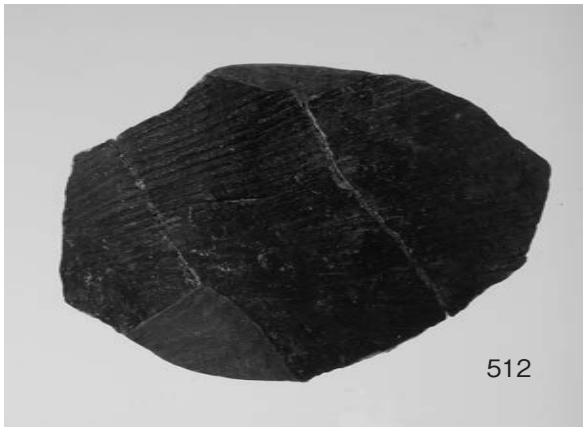
506（外面）


508

506（内面）

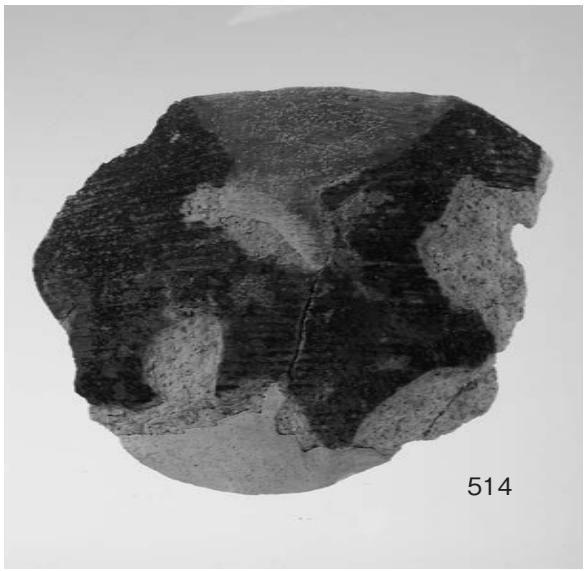
509

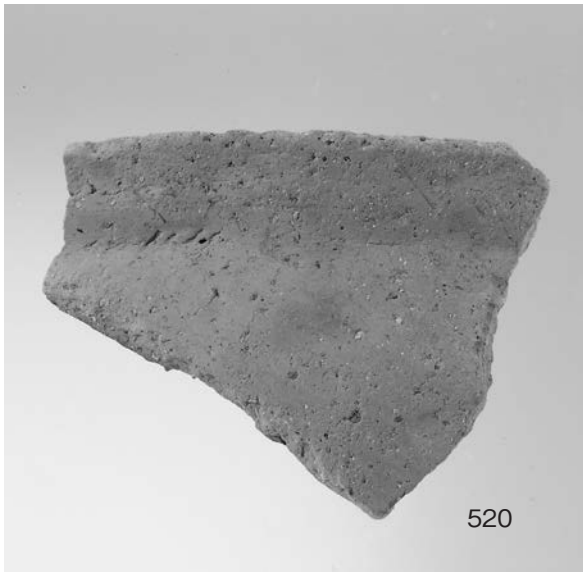

510


512

515

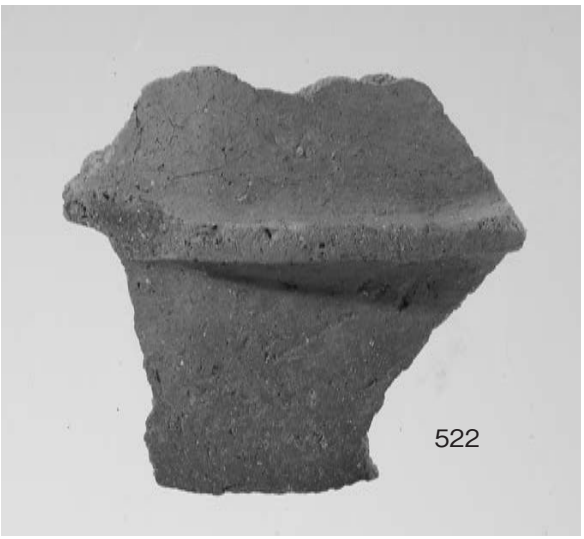
513


514

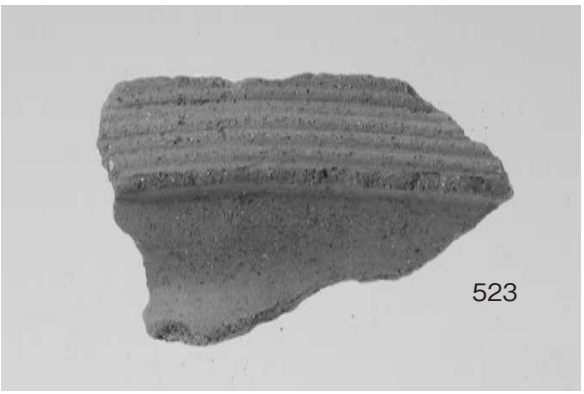

520

519

S1

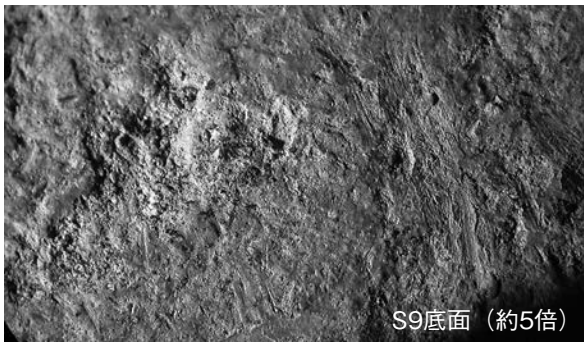

522

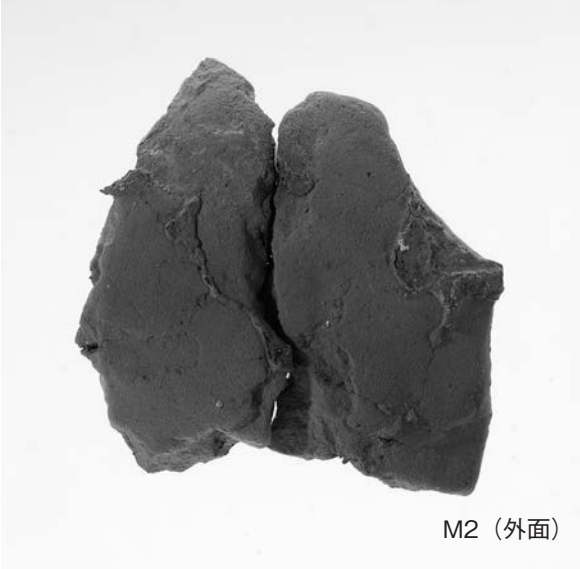
S2


523

S5
S6
S8
S3
S7
S4

S9


S9底面（約5倍）



M2（外面）

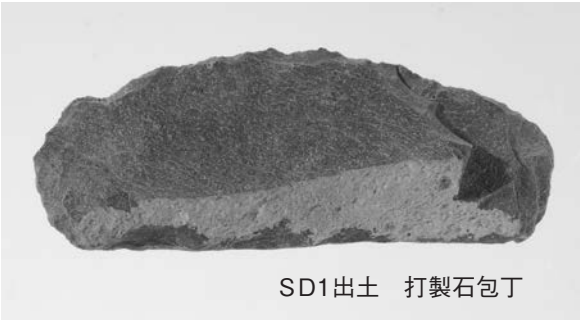
M2（内面）

SHI-2　SP4出土　砥石

M1

SH14出土　磨製石包丁

SH14出土　磨製石包丁



SD1出土　打製石包丁

SD1出土　打製石包丁

報 告 書 抄 録

ふ り が な	わくいせき　だい９じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	和久遺跡　第９次発掘調査報告書
副　書　名	ツカザキ病院新館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第10集
編 著 者 名	福井 優（編）・黒田祐介・青木哲也・岡本一秀・森永速男・構井未来・井口博夫
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地１　　ＴＥＬ（079）252-3950
発行年月日	2013年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わくいせき 和久遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 あぼしくわく 網干区和久	280201	202338	34° 48′ 34″	134° 35′ 24″	2013. 7.12 ～ 2013.12.24	1,347㎡	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和 久 遺 跡	集落跡	弥生時代～古墳時代初頭	竪穴住居跡 土坑、柱穴 溝跡、旧河道	弥生土器 古式土師器 石器 青銅器（銅鏃）	青銅器製作関連遺物 （坩堝）

要　　約	和久遺跡は、揖保川東岸に広がる完新世段丘に立地する集落遺跡である。今回の調査では、竪穴住居跡と土坑、木棺墓の可能性がある土坑、ピット、溝、旧河道を検出した。住居跡は互いに近接、もしくは切り合うものが多く、なかには、ほぼ同位置で建て替えが行われているものもあった。今回、弥生時代中期後半の住居を確認できたことで、集落の形成時期がこれまで考えられていたよりも一段階古くなることが確実になった。また、初めて木棺墓の可能性がある土坑を数基検出したことで、集落の景観が一段と具体的に復元できるようになった。 出土遺物の大半は土器で、弥生時代中期後半、同後期後半、庄内式併行期の三時期に大別できる。SR1から出土した中期の資料は、比較的大型で、摩滅の少ない破片が多いことから、中期の集落域は今回の調査区のやや北西側に位置すると推定される。最も多いのは、庄内式併行期のものであり、地元産と思われる庄内式甕の出土が特徴的である。また、山陰・吉備・讃岐・阿波・河内といった遠隔地からもたらされた搬入土器も比較的よくみられた。土器以外には、管玉や銅鏃、坩堝が挙げられる。坩堝は初めての出土で、小規模ながら青銅器生産が行われていた可能性を示唆するものである。

印刷の仕様

書　　体　リュウミンL
製　　版　カラー、およびモノクロ図版はすべて175線
用　　紙　表　　紙　レザック66（うす鼠）四六175K
　　巻頭図版　アート紙　　A本　70.5K
　　本　　文　ニューエイジ　A本　57.5K
　　写真図版　ニューエイジ　A本　70.5K

和 久 遺 跡

第９次発掘調査報告書

ツカザキ病院新館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成25（2013）年 3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
　　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地１
発　　行　姫路市教育委員会
　　兵庫県姫路市安田四丁目１番地
印　　刷　小野高速印刷株式会社
　　兵庫県姫路市平野町62